
おばあちゃんの魔法のゆびわ

亜矢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おばあちゃんの魔法のゆびわ

【Nコード】

N4832Q

【作者名】

亜矢

【あらすじ】

物心がつく前に母が亡くなり、おばあちゃんが兄と雛の母親代わりだった。おばあちゃんが幼い2人に聞かせてくれたのは、シンデレラでも桃太郎でもなく、誰も知らない異世界のお話だった。

そのおばあちゃんも去年永眠。雛は形見の「おばあちゃんのゆびわ」をはめ、兄と墓参りに。兄と離れて散歩をしていると迷子・・・？ え、ちがう？ トリップ？ 墓掃除を手伝わなかったから？！

幼いころおばあちゃんが語っていた物語の世界へと迷い込んだ少女の異世界恋愛ファンタジー。

日常（前書き）

初めて小説を書きます。
自分自身、楽しんで書きたいと思っています。
よろしくお願いします。

日常

『おばーちゃん、今日は何のお話してくれるのー?』

『ぼくは騎士さまの話がいい!』

『ひなはおひめさまのー!』

『はいはい、そんなにたくさんお話したら眠れなくなるから。お話は1つだけね』

『えー、かいぶつをやっつける騎士さまのお話はー?』

『それは明日、おやつを食べるときね。今日は魔法のゆびわのお話をしようかしら』

『まほうのゆびわ?』

きれいなきれいなまほうのゆびわ。願いを叶えるまほうのゆびわ。

ゆびわのなかには小さな妖精。さまざまな力を持った妖精たち。

彼らは人に力をあたえ、人は彼らに魔力をあたえた。

彼らと人は自然を愛し、自然は大地をうるおした……

+ + + +

「……なっ、……ひ……」

うるさいなー。今、おばあちゃんのお話聞いてるんだよ。

「……ひな……、おき……ひな！」

今日は魔法のゆびわの話なんだよ。いちばんおもしろい話なんだよ。

ん？ 今日？ 今日っていつだっけ。今日……

「バカひな！ 起きろ！」

バコッ！

「いったー！ なに!?!」

今までおばあちゃんに寝る前の読み聞かせを兄してもらってたはずなのに、何でいきなり叩かれるの？

それよりも、叩いたの誰よ！ すっごい痛い。たんこぶできたらどうすんのよー！

「やーっと目え覚めた、雛ちゃん!?!」

どうやら目の前の人物が私の後頭部を叩いたらしい。

まったく、かわいい乙女の頭を叩くなんてひどいやつだ！

「なによ。なんか文句あるわけ？ 6限、とっくに終わってるのに起きないから起こしてあげたんじゃない」

ぎろっ！と目の前の彼女は私を睨む。

そんな彼女を無視した私は「ううー！んっ！」と両手をあげ背伸びをして、

「それにしたって、教科書丸めて叩かなくてもよくない？ 結構くるよ、たんこぶできるよー。教科書をそんな風に使うなんて、ばち

あたりもんだよー」

ふわああっ、とあくびをしながら彼女に文句を言う。

若いうちからそんなに眉間にしわ寄せたらいけないよーっていったら今度は、

「授業中ずっーと寝てた雛に言われたくありません!」

と言って、彼女は私のほつぺたを「ぎゅっ!」と、つねった。

「いつっ! ごめんなさいー!」

私は彼女にほつぺたをつねられながらあやまる。だから本当に痛いんだってー

「分かればいいのよ」

まったく、という感じで彼女は手をはなし、席へ戻っていく。

私に暴力をふるっていた彼女の名前は涼。中学に入学してから3年間同じクラスで、今ではいわゆる親友、というやつだ。

今までのやりとりでわかるように、彼女、涼はきち……、いや、愛情表現が激しい。

まあ、よく授業が終わっても寝続けているらしい私を涼はいつも起こしてくれる。

涼に言わせるとほっとけないらしい。姉御肌気質、とでもいうのだろうか。

なににせよ、もう少し優しく起こしてくれるとありがたいんだけどなー。

そんな感じでぼーっとしてると、

「もうHRも終わったわよ! なにしてんの!」

涼はそう言うと、手のひらで私の頭のとっぺんをぺちっというふうにまたぶった。

私はぶたれた頭を触りながら、あらためて周りをみわたす。
HRが終わっていくらかたまったからだろうか、すでにほとんどの人が帰っているようだ。

うちの学校は中高一貫なので、中3の3学期の今でも部活をしている人も多い。いくらが残っている人たちはその人達だと思う。

高校受験をする人が少ないからか、あの受験シーズン特有のピリピリした空気はない。

たぶん、部活動をしていない人は友達とプリクラとったり、カフェに行ったりしてるだろう。

私の席は出入り口のドアと正反対の、外側に面した窓際一番後ろの席だ。だからか、クラスみんなが出て行くのがわからなかった。……決してぼーっとしていたからではない、はず。

「まったく、帰る準備もできてないの!? 4月から高校生なんだからもっとしつかりしたらどうなのよ!」

そういいながら涼はせつせと私のバッグに荷物を詰めていく。

本当に世話好きなんだなーと思いつつながら見ている私。私はそんな彼女が大好きなのだけれど。

そういうことを言うと言われるんだよね、涼って。

大好きな親友が私の帰る準備をしているのを見ながら思う。

「さ、帰るわよ! 明日は学校休むんでしょ? 今日早く帰って明日の準備をしたら?」

教科書やらなんやら入ったバッグを渡しながら涼が言う。

そう、涼が言うように明日は命日なのだ。

さっきまで私が見ていた夢にでてきていた、私と兄のおばあちゃん命日。

大好きだったおばあちゃん。おばあちゃんが元気なころは兄と2人で、おばあちゃんの話す物語をよく聞いた。

明日が命日だからなのか、おばあちゃんの夢を見たのは。

「魔法のゆびわ」のお話はとても面白くて私も兄も好きだったな。

そう思いながら私は首に下げているおばあちゃんのゆびわを制服の上から握りしめる。

このゆびわはおばあちゃんの形見として私が貰ったもの。お守りのようにいつも首に下げ、今日ももちろん持っている。

懐かしい夢を見たからか、私は制服の上からゆびわを握りしめたまま教室を後にした。

そしてそのとき、服の中でゆびわが鈍く光っていたのに気付くはずもなく……。

「うわっ寒い！」

先に靴をはいた涼はそう言って、校舎から外に出ようとしている。

私たちの住んでいる町は雪こそあまり降らないものの、3学期のこの時期はかなり寒い。

それに今日は曇りで太陽もでていないし、海が近いからか風も強い。

涼はそんな寒さにぶつぶつ文句を言いながら、靴を履き替えている私のところに来た。

「そんなに寒い？」

「朝よりはだいぶましだけどね。それよりも雖、ちゃんとマフラーと手袋しないと寒いわよ。」

そう言いながら涼は勝手に私のバッグからマフラーと手袋をとりだし、私に手渡す。

「いやー、ホントにいい涼は嫁になると思うよ。」

私がかちんと防寒したのを見て満足したのか、涼は冷たい風が吹いている外へ出た。

「もー、涼ってなんかうちの兄ちゃんみたい。本当に2人って似てる。世話好きなところが！」

前に行く涼を追いかけながら言った。

「私にあんたのお兄さんが不憫でならないわ。一先輩いちちって、毎朝家族のお弁当作って、家事もすべてこなしてるんでしょ。それだけで

大変なのに優しくてかつこよくて、武道もできて成績もいいなんて
素敵すぎる！ 雛にはもつたいないわー」

ため息つきながら言い出したと思ったら、うつとりしながら兄を
褒めはじめた。

なんか私はいつもぼーっとしているとか、兄はそんな私の世話を
してかわいそうだとか、兄の爪を煎じて飲んだら、とか言ってきた。

ねえ、私たちって親友だね。そんなにけなさなくても……。
それにうちの兄って見たから見たらそんなキラキラしてる人なの？

確かに顔はかつこよくて、文武両道だと思う。こつ言つと癪だが。
兄は、妹の私が言うのもあれなんだけど、少し猫毛の黒髪にワッ
クスで遊ばせてる風の髪形にすつと少し上向きの男子にしては大き
めの目、ついでに鼻もこれまたすつとしてて、唇は薄くも厚くもな
いきれいな形をしているし、顔の骨格なんてマンガみたいにシャ
プな形をしている。

今は高2だから、美少年って感じ。

ちょうど成長期だから、よきによきと背も高くなってるし。
ほどほどにモテてるみたい。

でも、涼が言った優しいは絶対違う！ 涼と一緒に世話好きと
はいえるけど。

兄は涼みたいに暴力的じゃないけど、心配性？ なんだよ。私と
父に対して、うん。

涼は兄のことをあーだこーだ言い、私はそんな涼の言葉を心の中
で批判しながら校門まで歩いた。

兄を褒めちぎっていたら今度は「寒い」と連呼しだした。
寒いといいながらすごい元気だ。

「じゃ、私も今日はこのまま家に帰るから。雛もまっすぐ帰るのよ。寄り道なんてしたらだめよ!」

小さな子に言うように、涼が言う。

性格で言ったら涼と兄が兄妹みたいだ。

適当にはーい、と返事したら、

「顔はあなたのお兄さんに似て、結構かわいいから変な人について行ったらだめだからね!」

結構は余計だ!

むっつ、とほっぺを膨らませて涼を見ると、彼女はにいつと口角を上げていた。

「ま、かわいいっていうのは本当よ。いつも言ってるけど。特にその瞳が好きだわ」

じゃーねっ、と言って私とは逆方向に歩いていく。

……ッ、ツンデレだ。めったに見られないデレの部分だ!

そう思いながら私は涼とは逆方向の自宅へと歩いて行った。

+ + + +

「遅い! もう18時じゃないか! あと10分遅かったら探しに行ってたぞ!」

私がただいまー、とリビングのドアを開けながら言ったら兄がいきなり怒鳴ってきた。

「えー。まだ18時だよ。別に遅くないじゃん」
私は兄の言葉をかえしながらTVをつける。
いつものことなので私は兄の言葉を軽く流し、鞆を床に置いた。

「えー、じゃない。今日は6限が終わってまっすぐ家に帰るはずだ
ろう。17時前には帰りついてるはずだ」

兄は私を叱りながらも、料理をする手を止めない。んー、今日は
ハンバーグか。

「父さんも17時には帰ってこれるっていつてたのに……」
ぶつぶつ文句を言っているけど無視無視。ほんと涼とそっくりさ
んだ。

明日の天気予報を見ていると、兄が話しかけてきた。
「帰りが遅くなったのは、寄り道でもしてたからか？」

「えっ?! 違うよ! 近所のタロウの奥さんがもうすぐ子供が生
まれるからって話してて……!」
今まで、少し帰りの遅い父のことについて独り言言ってたんじゃ
ないの? って思いながらあわてて言う。

兄の目がキラッと光った気がした……。

「タロウってうちの5軒隣の犬だよな。まさか話しこんでたのか？」

「あっ! ……え、や。まあ、うん」

「うあー、まさか怒られる? いきなりで思わず嘘もつけなかった
……。」

「……はあー。別に話してもいいんだけど、人には見られるなよ」
兄はため息をつきながら、お皿にハンバーグを盛り付けていく。

あ、あれ？ 怒られなかった？ 珍しー

「もう父さんも帰ってくるみたいだから、雛も部屋に荷物おいてきな」

そう言っつて、兄は左手を軽くかざした。

すると、ハンバーグが入っているお皿がすいーっとキッチンからテーブルに移動した。

私はそれを横目で見ながらリビングを出ていく。

玄関横にある2階への階段を上がろうとしていたら、父さんが帰ってきた。

「ああ、雛。ただいま」にっこりと笑顔の父。

「おかえり、お父さん。お兄ちゃん怒ってるよー」階段を上がりながら言っつ。

え、なんでだ？ と言いながら、父はリビングに入って行った。

階段を上つてすぐ横にある自室に入ると私は電気もつけずにベッドに腰掛ける。

そして、「おねがいね」とつぶやくと、勝手に電気がつき、カーテンがしまり、ベッドの下に置いたバッグが机に移動した。腕を広げると、制服のブレザーが脱げ、ふわふわと浮かびハンガーに掛かる。

私はそれらが終わると目をつむり「ありがと」と誰もいないはずの空間に向かってキスをした。

2 (後書き)

読んでいただきありがとうございます。

うーん、やっぱりお兄ちゃんって料理上手だー。

そう思いながら、今私が食べているのは兄特製の手作りプリン。さっき夕食のハンバーグを食べ終わったばかりなんだけど、女の子にとってデザートは別腹よね！

兄の作るプリンは市販のものよりも甘さ控えめで上品な感じ。

お兄ちゃんの作る料理を食べていると、お兄ちゃんの妹でよかつたって思う！

その兄も今、居間にあるこたつに私と向かい合ってプリンを食べている。

お父さんはお風呂に入っている。

明日はおばあちゃんの1回忌だが、父さんは仕事の都合で参加できないらしい。

明日の朝は早めに出勤しないといけないみたいで、今夜はもう寝るみたいだ。

そういえば明日は何時に出発するんだっけ？

「ねえ、明日って朝から行くの？」

「んー、墓参りだけだから、昼から行くこうと思ってる。天気予報だと明日の昼から晴れるって言ってたし。それに1回忌だからって、特になにもしないしな」

兄は私たちが食べ終わったプリンの容器を持ちながら立ち上がる。

「昼前に家を出て、墓に着いたら掃除して、墓参りしても夕方には

帰ってこれると思う。朝から軽く弁当でも作っていくのもいいな」
思いついたって感じで兄はキッチンへ行く。

さっそく明日のお弁当で何を作るか、材料を見ながら考えるのだ
ろう。

「でもさあ、普通1回忌とかつてもつと格式ばったことするんじゃないの？ 私たち以外だれもこないし」

私も兄の後ろについて、キッチンへ行きながら言った。

「もともとばあちゃんがそういつたのしなくていいって言ってたんだよ。葬式の時もそうだったろ？ 家族と近所の人くらいしか参加しなかったし。それにばあちゃんの家族ってここでは俺らだけじゃん？」

兄は冷蔵庫のなかを見ながらそう言つと、やっぱりサンドウィッチか？ おにぎりでもいいしなー、とさっそく明日のお弁当についてぶつぶつと独り言を始めた。

……兄の言っていたようにおばあちゃんには私たちがしか家族はいない。いや、正確に言つと日本、地球にはいない、だ。

驚くことに私たちのおばあちゃんは若いころ、異世界から日本にトリップしてきたらしい。

トリップしてきて右も左もわからないおばあちゃんに一目惚れして助けてあげたのが今は亡きおじいちゃんらしいのだ。

おばあちゃんの見た目は西洋人のようで、髪色は金で巻いてもな
いのにきれいにカールしていた。肌の色も日本人のような黄みつぽ
いのじゃなくて、日焼けしなさそうな白い肌だった。

特におじいちゃんの目を引いたのはおばあちゃんの瞳だって言っ
てた。

私たちがいる世界ではないような、深い深い紫色。

おばあちゃんがトリップしてきた当時はまだ戦後直後で、白人の見た目をしたおばあちゃんはまだあまりいい思いをしなかったらしい。

そんなおばあちゃんをほっとけなくて、猛烈にアタックして結婚したっていわれてる。

親に反対されたりもしただろうに、じーちゃんナイスファイト！

普通は自分のおばあちゃんが「私は異世界からきたのよ」って言うっても信じないだろう。

ただの嘘か、おもしろがって言っているとしたかおもえないから。

でもうちの家族、父も兄も私もそれが本当だと知っている。

おばあちゃんが毎夜聞かせてくれたお話が本当にどこかにある世界のものだと知っている。

キッチンで明日の下ごしらえをしながら私に「弁当なにがいい？」と聞いてくる兄の瞳は紫色。

「おにぎりがいい！」そう答える私の瞳も紫色。

明日はおばあちゃんが亡くなってちょうど1年。

日本にいる私たち家族はおばあちゃんが亡くなったことを知っている。

でも異世界にいるおばあちゃんの家族は？ 友達は？ おばあちゃんが幸せだったということをしているのだろうか。

おばあちゃんはおばあちゃんに愛されて幸せだったよ、と伝えられたらいいのに。

そう思いながら私はおばあちゃんと同じ紫の目で首にかけている

ゆびわを見つめた。

3 (後書き)

ありがとうございました。

迷子???

「やあつとついたー」

はーっ、とため息をつき、私は舗装をされていない地面にしゃがみこむ。

「しゃがむと余計きついぞ。まだもう少し歩くんだから置いて行くぞーと言いながら兄は私の前を歩いていく。

それにしてもお兄ちゃんはお弁当やらお花やら線香やらといった荷物を持っているはずなのに、全然疲れてないみたいだ。私なんて携帯や財布、飲み物とちょっとしたお菓子を入れている小さめのバッグしかもっていないのに。2〜30分歩いたせいか、冬ははずなのに少し汗っぽい。

よいつしょ、と言って立ち上がる。先に行った兄をみると、もうお墓のあるお寺の奥へ行っているようだ。

しゃがんで中途半端に休んだせいか、それとも舗装されていないでこぼことした山道を歩いてきたせいか、少し足が筋肉痛になったみたいだ。

「こりゃ、明日は本格的に筋肉痛になるかも」

私は独り言を言いながら、お寺の入り口から境内に歩いていく。

ここはあまり大きくはないお寺で、お墓の数も少ない。私たちはバスに1時間程度乗って、途中から徒歩できた。私たちの住んでいる町もそこまで都会ではなくて、近くに大きなショッピングセンターがあるくらいなんだけど、ここは降りたバス停の目の前にコンビニが1軒だけしかないようなところだ。

簡単に言つと、田舎つてつと。

でも、空気は澄んでるし、森の中は鳥や虫、そのほかの動物たちの鳴き声が聞こえ、私は思わず足を止めてしまひそうになる。森と反対に位置するところには海がある。バスで海沿いの道を進み、停留所で降りた。そこから海に沿つて少し歩き森に入り、車一台分くらい幅の道を寺まで歩いてきた。

私たちは鳥たちのさえずりをきき、町中よりも自然の中に多くいる彼らの声を聞きながらお寺まで行ったのだ。

+ + +

じじじじじじじじじじじじじじじじじじじじじ

それくらいの効果音が出そうな勢いで掃除する兄。いやー着てそうすごいよお兄ちゃん！

私がお墓に着いた時にはいつの間にかお寺から掃除道具を借りてきたみたいで、すでにお墓掃除を始めていた。

「ばーつとしてないで、なんか手伝えよ！」

「だって、足痛いんだもん」

その勢いだつたら手伝ふ必要ないんじゃないや、と思ひながら言つ。て言つか、なんでそんなに体力あるわけ？

「私はもう足が痛いのに、お兄ちゃんは疲れないわけ？ その体力少し分けてよ」

男女の差があるにしても、まったく疲れをみせない兄に向かつて言う。私だってほかの人よりは体力ある方なんだけどなー。

「雛と違って鍛えてるからなー、俺は。それと、こういうときは頭を使わないとなー!」

まだごしごしとお墓の汚れをとっている。この分だとあと少しで休憩、お弁当をたべれるかもしれない。

「あたま? 頭を使うって?? ……あー! お兄ちゃん魔法使ってる!」

「俺だって魔法使わなきゃ、もうへとへとになってるよ」

今まで気づかなかったのか? って感じていじわるな笑顔を見せる。その兄の手元には一生懸命お墓をきれいにしようとする小さな妖精たちがいた。はつきりとした姿は見えないが、兄を手伝おうとする彼らの気配を感じることができる。

「もしかして、ここに来るまでも魔法使ってたの?」

「ま、要は人にばれないように要領よく使えばいいんだよ」

「いつもは家以外で使うなって言うくせにー!」

私は唇を尖らせ文句を言う。だって、私だけ疲れるなんてむかつくじゃない!

兄を手伝っていた妖精たちの中の何匹かが、「どうしたの?」っていうように、私たちの間をふよふよと浮かんでいる。もうっ、かわいいなー!

まだにやにやしている兄がむかついたので、ここから見える海まで行ってお昼を食べる時まで遊んでようと思ひ、お寺を出ていく。

ぜえったい手伝わないんだから！

「おいっ！ どこ行くんだー？ 心配だからあんまり遠くへ行くなよー」

もう歩き始めていたからか、最後の方はあまり聞こえなかった。

お墓からもすぐ近くに見えるように、このお寺は海のすぐ横にあるのだ。しかも、人気の少ない田舎のせいか、夏でもプライベートビーチみたいらしい。今年の夏は家から少し遠いけど、涼と来てみようかな。

私が今歩いているのはそこまで広くはないけれど、ゴミなどがまったくないきれいな浜辺。一人で歩いてるって思ったら、兄を手伝っていた妖精の何匹かがついてきていた。彼らは、珍しくおばあちゃんゆびわをしている私の右手人差し指あたりを飛んでついて来ている。

私たちが言う魔法とは、妖精たちの力をかりて行うもの。たとえば、さつき兄がお墓掃除で使っていた魔法は水の妖精たちの力だ。今私の周りにいる彼らも水の力をもっている。そして兄が寺まで歩くときに使った魔法は風の力をもった妖精たちのものだろう。

そうやって私と兄は妖精の力を借りて、魔法を使うことができる。でも一方的に彼らの力を使うことをしたりはしない。私たちは力を借りる代わりに、魔力を与えるのだ。彼らは力を使うために魔力を必要とし、私たちのその魔力は食べ物、野菜や肉といった大地が私たちに与えるものに含まれている。そして妖精たちが魔力を得ることで水や風といった自然の源である彼らの力が増し、自然が潤っていく。

そうやって力はめぐりめぐっていくのだ。決して一方的ではない。

もし、どこかが止まったりしたら力の均衡がとれなくなり、妖精たちは消え、私たちは力を使えなくなり、大地は枯渇してしまうだろう。

だからこそ、私たちは彼らに力を借りたらお礼に魔力を与えるのだ。

これらのことを教えてくれたのは私たちのおばあちゃんだ。

おばあちゃんは私たちに物語を語りながら、魔法の使い方を教えてくれた。

生まれたときたら妖精を見ることができて、それを言うと友達に変に思われたり、瞳の色のことでいじめを受けたこともあるけど、おばあちゃんはいつも笑って受け止めてくれた。

おばあちゃんがいなかったら、人の目を気にして外に出られなかっただろうし、一方的に奪うだけの魔法を使っていたかもしれない。いじめを受けても頑張って学校に行ったから、涼という親友にも出会えたのだ。彼女は初対面の私に向かって「きれいな瞳ね」と笑ってくれた。

今頃おばあちゃんは天国でおじいちゃんとお母さんといえるのかな、と考えながら歩いていた足をとめる。もうお兄ちゃん掃除おわったかとも思い、お寺に戻るため来た道を戻ろうと振り向こうとした。

「えっ!?!」

そのとき、右手にはめているおばあちゃんのゆびわが私を包むように光を放った。

ゆびわの周りにいた妖精たちは驚いたのだろうか、すでにどこかへ行ったようだ。

「な、なに！？ お兄ちゃん！」

そして、浜辺には私の姿はなく、声だけが残った。

迷子???(後書き)

やっと物語が進んでいきそうです。
説明ばかりで申し訳ないです…;

トリップ???

「な、なに!?! お兄ちゃん!」
ゆびわからあふれ出す光に驚いた私はぎゅっと目をつぶり、無意識に兄に助けを求める。

とそのあとすぐにまるでジェットコースターの頂上から下に落下するときに感じるような、ふわっとする感覚、体が重力に逆らうような感覚がした。

それは一瞬の出来事なのだろうが、その感覚に背筋がぞくっとし、実際よりも長く感じた。

その感覚が消えると、私はそーっと目をあける。

目の前には海、さっきまでと同じように海があった。

「え? 今のつてなに?」

きよろきよろとあたりを見渡すが、特に変わってないと思う。見渡すといっても海と砂浜、森しかないのだけれども。

「もしかして、妖精たちのいたずら? 光と風の子たちとかかも。」
私がそう思うのは、たまに彼らは人々にいたずらをするのを知っているから。俗に言う、カマイタチや火の玉、なんていうのも実は彼ら、妖精たちの仕業。

妖精の存在を知らない人達にはねない程度で彼らはいたずらをすることがある。

「だから今回もそうだと思ったんだけど……」

隠れていたずらしたとしても、いつもなら誰がしたのか気づくのだが。

「おつかしいなー。おーい、出ておいでー、怒らないからー」
周りに聞こえるように声をだす。……が、反応はない。

あの時、光に包まれて浮遊感を感じた時、確かに妖精の気配がした。

そういえば普段感じる妖精たちの感じとは少し違っていたような？
もう少し力が強い、とでもいうのだろうか、そんな感じがした。

とりあえずお兄ちゃんのとこへ戻ろうと思い、さっきのように来た道を戻ろうと振り向いた。

振り向いた、と同時に固まった。

振り向いたら、本来は200mほど先にお寺が木に隠れて見えるはずだった。

しかし、あるはずのお寺がなく、あるのは砂浜と海と森のみ。しかも今までいた砂浜はそんなに広くないのに、目の前にあるのは何？かはありそうな砂浜。さっきまで前を向いていた方向は砂浜の端のようだ。

「どづいうことよ、これ……」

お寺を出てあまり歩いてないけど、実はものすごく遠くへ来ちゃったとか、迷子になったのかなどと乾いた笑いとともを考えるが、頭の中では1つの可能性に行きついていった。

「まさかのトリップってこと？」

私は突如見に降りかかった非現実的な出来事に「は、ははっ」と面白くないのに笑うしかなかった。

トシシブ... (後書き)

おつかくトシシブできました！笑

おばあちゃんの故郷

砂浜に15歳の女の子が一人、口をあけてぼかーんと固まったまま立っている。

ここにお兄ちゃんがいたなら、確実にバカにされそうだ。涼だつたらあまりにもまぬけな顔をしている私を見て変な人を見るような目で、もしかしたら声もかけてもらえないかもしれない。

今の自分はそれくらい残念な顔だっと思う。
でもそんなこと関係ないよ！

だって……、だってさ！

「ありえないでしょーっ!？」

その場につつ立つたまま、今までの驚きをすべてを絞り出すかのように思い切り叫ぶ。

誰もいない砂浜に私の声だけが響いた。

+ + + +

「本当についてない……!」

今、私がいるのは森の中。右を見ても、左を見ても、もちろん後ろも前も森だ。この森の木は私が日本で見たことのある、どの木よりも大きく枝や幹も太い。だからか、もちろん元々道自体ないものもあるが、ある程度歩きやすい日本の森のよりもかなり歩みにくい。地面いっぱいに木の根っこが飛び出していて、大きいものになると階段5段分くらいのももある。

すでに今日は朝から移動しっぱなしで筋肉痛なのに……と思いつつも、ここで止まるわけにも引き返すわけにもいかないのでもく

もくと歩く。

なぜ私が森の中を歩いているのかというと、単にあの何？あるか分からないような浜を歩きたくないと思ったから。それに森の方が妖精に会えて、人がいるところまで案内してくれるかなって思ったからなんだけど……。

「全然妖精がない。それに森が静かすぎる……」

森には普通、樹や風、土や水といった豊富な種類の妖精たちがいるはずなのだ。

風自体は感じることはできるのだが、そのなかにはいるはずの風の妖精がない。ありえない、と思い私はその場に立ち止まり、神経を研ぎ澄ませてみる。

するとわずかにだが、小さな本当に薄い気配を感じることができた。

同じように近くにある巨木に手を当て目をとじる。……うん、やっぱり本当に小さいけど妖精がいる。

「でもどうしてこんなに弱弱いんだろう？」

彼らは私の近くに来ることも出来ないくらい弱っているようだ。今までこんな妖精たちみたことないよ。

そんなことを考えていると後ろの方でいきなり、がさがさつ、と音が聞こえた。その音は草または木の葉を揺らすような音だ。

あまりにもいきなりだったので、振り向くこともできずに顔だけ後ろを向く。

かなり深い森だから、もしかしたら熊とか？ 犬とか猫くらいだ

「だったら、はつきりと会話することまではできないが互いに意思の疎通はできる。」

でもさすがにこんなことに犬や猫はいないでしょー。いるとしたらやっぱ、熊とかだよつ。

「異世界だからもつと凶暴な奴だったらどうしよう。せめて猿とかにしてー！」

そう思いながら後ろを見るといたのは、

小さな仔犬だった。

「かわいいー！もしかして君も迷子？お母さんとはくれたのかなー」

後ろにいたのは、大きさは小型犬くらいで、黒い毛で全身を覆われた仔犬だった。

「やわらかそうな毛で見た目は柴犬っぽい。耳や顔つき？とか柴犬に似ているけど、毛の色が違って、毛も柴犬よりは長めで尻尾も長い。」

その仔犬は私をみて、立ち止まっているようだ。

「こっちにおいでー、という感じに私はしゃがんで手招きをする。」

「迷子なのはお前だろう、ヒナ」

私は仔犬に手を伸ばしたまま今の声を聞き、「えっ？」と周りを見る。

でも、もちろん誰もいるはずがない。

「どこをみておる。馬鹿者め」

また周囲を確認するが誰もいない。

……だって、信じられるわけないよ。この仔犬がしゃべってるなんて。

しかし、次の仔犬の行動で、しゃべっているのが本当にこの犬というの分かった。

「まったく、ヒナはいつみても成長せんな！」

そういつて仔犬はとことごと、私のところまできて左前足をぽんと膝の上に乗つけたのだ。

普通の人間ならここで逃げ出すか、騒ぎ出すか、まあ取り乱すのだが、

「仔犬がしゃべってるー！ もふもふしてて、かわいー！」
あいにく、私は普通の人間ではないらしい。自ら仔犬がやってきたのをいいことに、上から思いきりぎゅっと抱きしめる。

仔犬にとって予想外だったのだろう、「ツキヤン」とかわいらしく鳴き、じたばたと暴れる。

「離せ……、離さんかー！」

私は仔犬ではなく、狼だ！ と言いながらなんとか腕の中から抜け出そうともがいている。

そんな声もお構いなしよ、だってしゃべるんだよ。

今までの犬や猫たちは意思は通じても話すことはできなかった。もしかしたらこの仔は妖精の類かもしれぬ。

ぎゅーって抱きしめ続けるからなんだか、くたっ、てしてきち

「やったみたい。ごめんね!」

地面に離してやると、とたんに私と距離をはなす。ちよつとーあやまるから離れないでよう。

「まったく、お前は私が誰だか気づかんのか?」

「えっ? うん。だって犬の友達は何匹かいるけど、君の話は聞いたことないよ」

そもそも、ここって異世界のはずだから日本の仔犬がいるわけがない。

「馬鹿もん! 私は常に雛と行動していたではないか」

「常につて? 全然わからないよ。もつと分かりやすく言つてー」

「ハア……、菊も結構な馬鹿だったが、孫まで馬鹿とは……」
仔犬はしゅーんと、耳としっぽを下げうなだれる。

いや、本当に分からないから。

「菊? 孫つて、……私のおばあちゃんのことよね。でも常に行動してる??」

私の言葉を聞いて、仔犬は顔を上げる。

「学校でも家でも、外でも、もちろん風呂とトイレも一緒だったではないか!」

これでわかるだろう、というように私の顔を見る。

「まさか、……おばあちゃんのゆびわ?」

嘘だと思いつながらおそろのおそろ聞くが、

「やっと気づいたか! 雛も兄の一と一緒に幼いころ菊から聞いたことがあるだろう? 『魔法のゆびわ』の話だ。私は元は菊のもの、今はヒナが持っているゆびわに宿っている。そして私は狼だ!」

ふんっ！ と、狼らしいこの仔はどうやら、おばあちゃんの形見であるゆびわの妖精？ ということらしい。なんか、最初よりも最後の言葉の方が強調されていたような気がするんだけど……

でも、常に一緒？ 学校や家はともかく、お風呂とトイレも？！

「うそーっ!?!?」

今度は砂浜ではなく、静かな森の中で私の声が響いたのだった。

おばあちゃんの故郷（後書き）

ありがとうございました。

「うう、寒いよ。お腹すいたよーっ」

そうやって今、私と仔犬……じゃなくて仔狼がいるのは、先ほど私たちが出会った場所から少し離れたところにあっただひときわ大きな木の根元の部分。

今日のお昼にトリップしてきて、森の中でこの仔狼と初めて会ったのがたぶん17時くらい。たぶんっていうのは私の携帯が、どうやら電源が落ちているみたいで時間を確認することができないから。

夜中に森を移動するのは危ないだろうと、狼ロウがいったので私たちは今いるこの木で休むことにした。

「バッグの中に入ってたチョコはもう全部食べてしまったし、お茶もあと少ししかないよ……」

ひもじいよーっ と筋肉痛の足をもみながらつぶやく。

「食べ物はなくともいくらかは大丈夫だが、水分の補給は必要だな」
私にロウと名付けられたおばあちゃんのゆびわの妖精である、この仔狼は私の横に丸まって座っている。

ロウはおばあちゃんに付けられた名があつたらしいが、名付けた本人が亡くなった時に一緒に無くなつたらしい。他になんか難しい説明もしていたようだが、いかんせん、私はお腹がすいて話を聞くところではなかったのだ。

腹が減ってはなんとやら！ それにこんな誰もいないようなところで餓死したくない。

周りを見ても、森の中には食べられそうな果物もないようだし、こんなところに長くいたら本気でやばいよ。

それに、昼間は春のような暖かさであったが、夜の今は冷たい風も吹き少し凍える。風をよける建物はもちろん、洞穴も見つけることができず冷たい風に当たりながら私はぶるぶると震える。救いなのは私が蛇や虫が不得意ではなかったことくらいか……

改めて、今日の自分に降りかかったことを思いかえす。こんなサバイバルは生まれてこのかた経験したことないのに、いきなり富士の樹海に迷い込んでしまったかのようだ。

そうこう考えていると、朝からの移動の疲れといきなりトリップしてしまった精神的な疲労で私は木にもたれかかりいつの間にか眠ってしまったっていた。

+ + +

「離せ、離さんか！」

ふわふわとしたものが私の胸の中でじたばたと暴れている。

いやー、寒いのよーと私はその小さくて暖かいものを離すもんかと抱きしめる。

あれ？ このやり取り昨日もあったような……と思いつながら目をあけると、そこには私に抱きしめられているロウがなんとか腕から抜け出そうともがいていた。

私は知らない間に眠っていたようだ。

ロウを離してやり、横になっていた体を起こす。冷たく硬い地面に寝ていたからか、体がいくぶんこつたみたい。

座ったまま私は体をほぐしていく。寝る前にしっかりと揉んだからだろうか、思ったよりは筋肉痛になってない。

「あー、でも服は汚れちゃったか」

今の私の服装は紺のジャケットの中には襟のついたシャツにかからセーターといった重ね着。下はスキニーデニムとスニーカー。それらの洋服は土汚れや汗で汚れてしまっている。鏡がないので確かめられないが、顔や髪も汚れているだろう。

「なんとか人の住んでいるところまでいければいいけど」

私は手で服についた泥などを払いながら、ぼさぼさ姿のロウをみる。

「ああ、私とはかく、ヒナは人里に行った方がいいだろうな。夜間に、風のやつらに聞いたのだが、ここからそう遠くないところに小さな村があるそうぞ」

ロウは毛が乱れたままの姿でこちらにくる。と、とりあえずその風のやつらに村のふもとまで案内させると言ってきた。

「案内させるって力を借りることだね、ロウが彼らに魔力を与えたってこと？ でも昨日は私にむやみに妖精たちに魔力を与えるなって言わなかった？」

「って、そもそも妖精が妖精に魔力を与えることなんてできるの？ とロウの毛並みを整えながら聞く。

「確かに人であるヒナが今のやつらに魔力を与えることはいいいことではないな。そんなことをしたら、他の奴らもヒナに群がり、魔力を根こそぎ取られるぞ。」

ロウは気持ちよさそうになでられながら続ける。

「それに、私は妖精ではあるが、妖精ではないと昨日言わなかったか？」

「そうだったけ？ 昨日はいろいろあったせいかもしれないっばいっばいだつたから覚えてないや」

「……ハア、まあ時が来ればそのうち分かる時が来るだろう」
では行くぞ、と私の手から離れ立ち上がる。

「体は痛いし、お腹もすいてるんだけど近くに村があるならこんなところで休んでるばあじゃないよね！」

私も立ち上がり、ロウの後ろをついていく。

+ + + +

「ねえ、近くって言わなかったっけ……」

私は前を歩くロウと風の妖精を見ながら話しかける。

私たちが出発したのは朝起きてすぐ。日本時間だったら9時とかそれくらい。

そして今は、太陽が西を向き始めている時間、つまり夕方だ。

途中、湧水などで口を潤したりはしたけど、食糧がないので空腹のまま歩き続けている。

「ねえーまだ着かないのー？」

お昼ごろから何度この言葉を言ったんだろうか。

「ねえー足痛いよー、座りたいよー」

朝起きた時にはあまり感じなかった筋肉痛が今はかなりの痛みを伴って私を襲っている。

くっそーっ 痩せるのはいいけど、まっちょにはなりたくない。

「あーだこーだとうるさいやつだな。あと少しだと何度いったら分かるんだ」

「あと少しなら、今ここでちょっと休んでもいいでしょ？ もうすぐ着くんだし！」

疲れすぎて自分が何を言っているかわかんなくなってきた……。10分、いや5分でいいから休ませて……。

私はロウの意見を無視してその場に座り込む。地べたでも、全然気にしません！

「はーっ、きついー、ロウたちはいいよね。こんなに歩いても疲れないなんて」

確か妖精は人間のように体力的に「疲れ」を感じないはずだ。その代わり、魔力が薄くなったら力が弱くなって、人間で言う「疲れ」の状態になる。

「なら少し休んだら、村に着くまで歩き続けるからな。あと2メートルくらいだからな」

「メーテって？」

「kmのことだ」

ロウも私の横に座り込む。「お座り」状態だ。ちなみに風の妖精は私たちの周りをくるくると回るように飛んでいる。それが軽く扇風機のように涼しい。

「ねえ、そういえば色々ありすぎて聞く機会がなかったんだけど、ここっておばあちゃんの故郷だよな？」

休むついでに昨日聞けなかったことを聞く。……休む時間を伸ば

したいからじゃないよ！

「そつだ。ここは雛の祖母である菊の故郷、オイリスだ。オイリスのどこの国にいるかはわからんが、たぶん菊がいたロータス王国の中ではあると思う。はつきりは分からんがな」

「やっぱり！ でも、なんで急にトリップしてきちゃったんだろ。あの時ゆびわが光ってたからロウがなにかしたの？」

「いや、私はヒナのいた地球ではほとんど力を使うことはできなかったし、姿もあらわすこともできなかった。ただ、あの時はこのオイリスの気配を含んだ空気を感じていたな。もしかしたら、菊が亡くなって丁度1年というのと、菊の血を継ぐヒナがゆびわをしていたことに関係しているのかもしれない」

ロウもなぜ私やおばあちゃんがトリップしたのかわかんないみたい。うーん、これがなんかの召喚とかだったら面白かったのに。

私は幼いころからおばあちゃんの話す物語を聞いていたせいか、中学に入るころから様々なファンタジーものの小説や映画を見てきた。加えて私は異世界の存在も知っていたし、妖精を感じることも魔法を使うこともできた。そのせいか、このようなトリップにある種の憧れがあったのだ。

でも、空想と現実とは違うよね……。なによりこの空腹と筋肉痛が証拠だわ。

「ただ、ゆびわが何らかの作用を働かせたのは確実だな。いつまた作用するかわからんから、はめたままにしておけ」

ロウは可能性はかなり低いとは思うが、と付け足し、もう休憩は終わりだというように立ち上がる。

「今夜も野宿をしたくなければ、早く村に行くことだな」
そう言うと、さっさと歩き始める。ちょ、ちよっと待ってーっ

+ + + +

「あ、あれが村かな？」

目の前にはキャンプ場などにありそうな感じのロツジ風の家々。ちよっと古びた感じと、村の人々の中世風の服装が異世界を感じさせる。もう夕方過ぎだからか、人々の姿は少なく、家の窓からは温かい光が漏れ、煙突からあふれ出す煙が今晚の夕食を想像させている。

この異世界、オイリスはおばあちゃんの故郷である。私は疲れ切った体に鞭を打ち、なんとか歩きつづける。

そしてこの世界には誰も頼れる人がいないという大きな不安と、幼いころからあこがれ続けた異世界への少しの希望を持って村の中へと入っていく。

最後に見たのは太陽が沈んでいく姿。

ここでも太陽は同じだったんだと改めて感じながら、空腹と疲労により疲れ切っていた私は村に着いた途端その場に倒れ意識を失った。

2 (後書き)

ひなちゃんは今回のことで何日間かは筋肉痛に悩まされると
思います！笑

『ねえ、おばあちゃんのいた世界はみんな魔法が使えるの？』

ランドセルの男の子がおばあちゃんに聞いている。

あ、これってお兄ちゃんかな、多分10歳くらいなの。

『そうねえ、力が強い人と弱い人はいるけれど、ほとんどの人が使えるわよ。』

すげー！！　と言いながら家のリビングで2人は話している。

『お外でもまほう使ってもいいの？』

小さな女の子がお菓子を食べながら2人の近くにとことこやってきた。

男の子がお兄ちゃんだから女の子は私だな。小学校に入学したころかな。そう思いながら懐かしい風景を見ていると話が進んでいく。

『そうね、みんな魔法を使ったり、妖精たちと遊んだりもできるわね』

『いいなあーひなもお外でみんなと遊びたいー』

そんなことしたら、みんなにまたいじめられるぞ。と兄が幼い私に言っている。ふふっそんなこともあったなー

『ねえ、おばあちゃんは元の世界に帰らないの？』

兄はふと、そんなことを聞いていた。

『そうね、1度は帰りたいかしらね』

ああー！　雖、お菓子こぼしてるぞ！　と兄が私に駆け寄って

いる。

だから私たちは「帰りたい」と言った祖母の、その少し悲しそうな顔を見ることはなかった……

+ + + +

カタッ、カタッ……

「んっ……、」

私は小さな物音と少しの眩しさを感じ、まつ毛をふるわせてから瞼を薄く開けた。

「……んー、ここって……」

見覚えのない天井に硬めのベッド。一度目をとじまた目をあける。うん、夢じゃないみたい。

「あらー、起こしたみたいだね」

「ごめんなさいねえ、と言いなながら私のいるらしいベッドの頭の方にいたのは知らないおばあさんだった。

彼女は日の光を入れるためか、窓をあけている。さっきの音はこれのようだ。

窓と言ってもガラスではなく、雨戸のようなものでそれを開けてからカーテンをかけていた。

「あの、ここは……？」

なぜ、私がここにいるのか分からないので事情を聞きながら体を起こそうとする。

「村の入り口に倒れていたんだよ。丁度うちのおじいさんが通りかかって、近所の人とうちまで運んだのさ。それから丸1日半、寝続けていたんだ」

おばあさんはそう言いながら、水の入った桶と布を持って私のところへ来た。

「顔は軽くふいたけど、もしかた気持ち悪いところがあったらこれで拭きな。家に運んだ時は、顔も体もどこそこ汚れていたからね」
私に布と水の入った桶を渡すと彼女は部屋から出て行った。

急なことでまだ頭が回らないけど、とりあえず桶に入った水で顔を洗い、軽く腕や足、首などを拭いていく。一通りそれらの作業が終わるとまた彼女がきた。

「まだ病み上がりでそんなに食べられないと思うから、ミルクを温めたものを持ってきたよ。ミルクは体にもいいし、少しでも飲みなさいな」

そうやって私にミルクの入った木でできたお椀を渡そうとする。

「で、でも、助けていただいただけでご迷惑がかかっているのに、また迷惑をかけるわけには……」

そう。倒れていたところを運んでもらい、しかも家のベッドまで借りるなんて、すでにかかなりの迷惑をかけているはずだ。

「あなたは人が倒れていても、助けないのかね？　そしてその人が目を覚ましてもそのままほっぽり出すのかい？」

「それは……」

「ほら、また倒れられた方が迷惑になるよ！　文句を言わずに飲みなさいな！」

おばあさんは無理やりに近い状態で私にミルクを渡す。渡された

お椀を持っておるおろとしているよ、

ぐううう~~~~っ

と、私のお腹が鳴った。

「体は正直なようだね。さあ、温かいうちに飲んでしまいな」

私はお腹が鳴った瞬間、顔が赤くなるのに気付いた。そしてそれを隠すかのように一気にミルクをお腹に入れていく。おいしー！

「顔も正直なようだね。まだ足りないようだから、今度はスープでも持ってくるよ」

私がミルクを全部飲んで安心したのだろうか、おばあさんは優しい笑顔でスープを持ってくるため部屋を出て行った。

「なんだかよくわからないけど、優しいそんな人に助けてもらってよかった」

鼻の下についているミルクを手でぬぐいながら、彼女の出て行ったドアをみる。

彼女の使っていた言葉は日本語とは異なっていたが、昔兄と一緒におばあちゃんに教えてもらったのが幸いしたらしい。意外にも覚えていた。

私はベッドに座ったまま今の状況を考える。おばあちゃんの話でこの世界の存在は知っていたけど、国の名前や人々、彼らがどのような生活を送っていて、どんな生き物がいてどんな文化なのか、ということとはほとんど知らない。

私が知っているのは異世界、オイリスにある物語。それは地球でいうシンデレラや桃太郎といったもので、実際のものを元にしてい

るお話はあの「魔法のゆびわ」くらいしか知らない。それに、小学校高学年、中学に上がったころからはほとんど話を聞かなくなった。かわりに、妖精や魔法の使い方を聞くようになり、今はあまり物語の内容を覚えていないのだ。

今になって、おばあちゃんは故郷を思い出す話はしたくなかったのかもと思う。

「今度は野菜たっぷりのスープを持ってきたからね」
彼女はそう言って部屋へ入ってきた。

……えと、結構大きくありません？ その入れ物。
おばあさんはカップ、じゃなくて大きなお椀、丼ものを入れるような大きさのものにスープを入れている。

さあ、お飲み！ とでも言うようにそれを渡してくる。

で、でかい。

満面の笑顔の彼女を見ると断ることもできず、私はミルクを飲んだ時のようにスープを飲んでいく。

ゴクツ、ゴクツ、ゴクツ、ゴクツ……
喉を鳴らしながらスープを飲み込んでいく。さっきミルクを飲んだのにすんなりとお腹に入る。

「っはー、飲んだ！」

野菜もスープと一緒に口に入れて噛みながら飲んでいった。自分では気付かなかったが、思った以上にお腹がすいていたらしい。

ふーっ、とため息をついていると、

「これだけ飲めたら体の方は異常ないわね」
よかったねえ、と私のおばあちゃんに似たまなざしで私をみる。

彼女はミルクとスープの入っていたお椀と私が使った桶と布を持って、「ちよつと待つといでね」といい、また出て行った。

私はお腹が膨れた満足感が、だいぶ体力が戻ってきたみたいだ。でも、やはり険しい森の中を歩き続けたせいかなかなり筋肉痛にはなっている。実を言うと、さっきスープのお椀を持つだけでも少し腕がプルプルしてしまっただのだ。

体を動かすのがおつくうだが、このままベッドに居続けるのもいけないと思い、少しでもましになるように腕をまわし、足をもむ。するとおばあさんが服らしきものをもってきた。

「あんたのきている服はどうも見たことがなかったからね、脱がしかたがわからなかったんだよ。でも汚れたままじゃあ、あんまりだろうと思って家にあった服を持ってきたよ」

そう言っで渡されたのは、もしかしなくても男物の服？

彼女の持ってきたものは、今おばあさんがきているようなワンピース型のものではなく、頭からかぶる形の上着に腰を紐で結んではくようなズボン。

えーと、私っで男の子に見えるの？

渡された服を見て固まっている私を、おばあさんは私が服を気に入らなかつたのかと勘違いしたようで、

「家には若いものがないからこんなものしかないけど、後で近所の人にもいらなくなつた若者が着るような服をもらつてくるからそれまで辛抱しておくれ」

「ち、違つんです！ その、あの……」

い、言いにくい。てか、なんか恥ずかしい！ 男の子に間違われてるんですっなんていえないよう。

「大きさは大丈夫だと思うんだけどねえ」

おばあさんにはそんな私の心の声なんてもちろん聞こえない。

「ここは女らしくはつきり言っしかない！」

「あの、私は女です」

私は下を向き、おばあさんの顔を見ずに思い切っていった。

そしておそるおそる、顔をあげると、そこには目を見開いたおばあさん。

私と目が合うと、「はっ」と気を持ち直し、

「そうよね、髪が短いからって男の子とは限らないわよね」

一度は驚いた彼女だったが、年の功からだろうか、すぐに気を取り戻したようだ。

私の娘の若いころのものがあるからすぐに持ってくるわね、と言いながら渡した服をもち部屋を出ていく。

この世界の女性は長髪が一般的なのだろう。おばあさんも髪の毛をお団子のようにまとめていたが、おろしたら長いのもかもしれない。私はそれに比べるとかなり短いと思う。

私の髪は耳より少し下の長さのボブヘア！。日本にいた時は結構気に入っていた髪形だったけど、ここでは男の子に間違われる。うーん、これぞ異世界文化の違いか。

+ + + +

「そういえば、まだ名前を言ってなかったわね」

そういつおばあさんの横には、旦那さんだろうか、おじいさんが座っている。

今いるのは最初私がいた部屋の隣にあるキッチン兼リビングの居間にいる。

「わたしはトリアだよ。そして、こつちが旦那のボーロだ」

「どうやらおばあさんはトリアさんでおじいさんがボーロさんらしい。」

「私は雛です。いろいろとご迷惑をおかけしました」

ぺこりと頭を下げお礼を言う。

「ヒナというのね。ヒナみたいな子が外で倒れていたらこの村の間なら誰でも助けたさ」

「いえ、服も貰ったし、もらってばかりで……」

あの後、私はトリアさんの娘の若いころの服をもらい、今着ている。

「こつちも男の子と間違えてすまなかったなあ。どつりであんなに小さくて細ツこかったのか」

ボーロさんがすまなさそうな顔をしてあやまってくる。本当に優しい人たちだ。

「体はもう大丈夫だとは思っただけど、これからどうするんだい？もし行くあてがないんならここに住むかい？」

娘の部屋もあるし、私らもヒナがいると孫が増えたように感じてうれしいしねえ、といってくれる。

きつと、トリアさんたち夫婦は私がなんらかの事情があることを分かっていて、一緒に住もうと言ってくれているみたいだ。

オイリスにトリップして4日目、この世界で初めて出会った人たちは心やさしい老夫婦だった。

3 (後書き)

今回の登場人物は雛とトリアおばあちゃん、ボーロおじいちゃん
人です。

新たな日常

今、私は生まれて初めての経験をしている。

こんなにドキドキしたのは中学1年の時、隣のクラスの男の子に告白されて以来だ。

もちろん、家族と涼には内緒だったんだけど……、なぜかその日のうちにバレてたんだよね。

もちろん断ったさ。お兄ちゃんと涼がわざわざついてきて、恥づかしかつたのを覚えてるよ。

そう思っていると、あ、また！

ざっばーっ！ ガラガラガラッ

おおー、すごーいっ初めて見た。本物の井戸！

キラキラした目で井戸水をくみ上げているおじさんをみた。

すごい、すごいよっ！ 今まで井戸なんて、TVでしか見たことないのに。

目の前のおじさんは、私の羨望のまなざしに気付いたのか、「なんだ？」というように振りむく。

「おや、君は見たことがない子だな。井戸水を汲みにきたのかい？」

「あ、はい。今日からトリアさんとボーロさんの家でお世話になってます、雛といます。えと、井戸水を汲むのが初めてなのでやり方をみてました」

「もしかして、おととい村の入り口で倒れていた子かい？ ……女の子だったんだねえ、てつきり男の子かと思っていたよ」
「はははー！ と、口をあけて笑いながら話すおじさん。」

「どうやら、おととい私を運びこむのを手伝ってくれた人のうちの1人みたいだ。でも、やっぱり男の子に見られてみたい……。さすがにちよつとこれから髪伸ばそう、うん。」

「にしても、井戸水を汲むのが初めてなのかい？ まさか、どこぞの貴族や豪商の出だったりするの？」

「ここでは井戸水を汲むのが当たり前前で、使用人のいるところ以外は子供でも井戸を使えるのだろう。その井戸を使ったことのない私におじさんは疑惑の目を向けている。」

「いや！ 以前住んでいた家は森の中にあつて、そこには井戸なんてなくて近くの泉などの水源からとっていたんです」

「とっさについた嘘、……ではなく、これは村に入る前に口ウと決めていたこと。」

「もし、他人に家はどこか、家族はどこか、と聞かれてもいいように少しの事実と嘘を混ぜて、私の身の上話を作ったのだ。」

「どうやらおじさんは完全には納得してないようだけど、信じてはくれたみたい。」

「そして水の汲み方を教えてもらう。」

「意外につ、お、重い！」

井戸には中に雨水などが入らないように屋根が付いており、屋根の下には水を汲む際に使う滑車がついている。その滑車に縄をかけ、縄に桶をくくりつけて井戸の中に落とし、縄を引っ張ってあげる。

「なんだー、簡単じゃない？ っっておもってたけど、」

「かなり重いつ！」

無理だった。

筋肉痛がよけいひどくなるー、って思いながら引っ張っていると、
「お譲ちゃんには少しきつみたいだな」

おじさんが見かねて手伝ってくれた。すみません、お手数おかけ
します。

まだ、肩で息をしていると、持ってきた桶いっぱい水が汲んで
あった。

「ありがとうございます」

私はそう言っつてその桶を持ち上げようとしたら、

「トリアばあさんのとこまでだろ？ 持っつていっつてあげるよ」

と私が持ち上げようとしていた桶をもつてくれた。どうやらおじ
さんには私と同じくらいの子供がいて、その子も水汲みはするが、
こんな大きなものではないらしい。左手にはおじさん家ので右手
は私が持っつてきたもの。重たいから持っつていけないだろうっつて家ま
で持っつていっつてくれるみたい。うーん、紳士だ。

「これからはもう少し小さな桶を持っつていくことだな。面倒だが、
何回か往復した方が確実に安全だ」

さつきは私のことを男の子と間違えて笑っつていたおじさんだっつた
が、親切に声をかけてくれる。実を言っつと、笑われた時ちよっつとむ
かっつとしたことはなかつたことにしよ。

家の前までついできてくれたおじさんは自分の家の水をもつて帰
っつて行っつた。

「さ、ロウも中に入っつていっつて言われたから入る？」

私はドアの前で待っつていたロウに声をかけるが、返事はない。

「ねえ、ごめんっつて謝っつてるからさ、機嫌直してよー」

そうやって謝るが、ロウはプイツと顔をそむける。

どうやら私が倒れた時、ロウはかなり心配してくれたらしい。でも、村人がやってくるのを見てゆびわの中に入ったらしいのだ。そして、私が今朝目覚めたのにもかかわらず、全然ロウのことを心配したり探さなかったから拗ねてるみたい。

だからこうやって謝っているんだけど……一向に機嫌が戻らないみたい。

そりゃ、悪かったと思ってるけど、あの状況じゃしょうがないよ。

「ふん、どうせ私のことなど忘れていたのだろう？ 誰がこの村まで連れてきたと思っておるのだ」

私が今夜使う水を汲みに外へでた瞬間、ゆびわからロウが飛び出し、それからずっと今のような状態なのだ。

「寂しかったんでしょ？ 私がロウのことを忘れてたりなんてしないよ」

意地っ張りなんだからー、というのは言わずにロウの反応を見る。まだ顔をそむけたままだが、耳がひくひくしてるのと尻尾がかすかに地面上で左右に揺れているのを見ると凶星のようだ。まあったく、素直じゃないんだから！

私はドアを開けて、入り口に置かれた桶をなんとか中に入れ、次にロウを抱き上げて一緒に中に入る。無理やり抱きあげられたロウは私の腕の中でおとなしくしている。

「あら、もしかしてその仔がヒナの言っていたロウかい？」

「はい！ 本当に家に入れても大丈夫ですか？」

いいとは言ってくれたけど、こちらは居候の身。少しでも2人が嫌がるそぶりをみせたら、仕方ないけど外に出すか、またゆびわに入ってもらうか、と考えていた。

「あらあ、かわいいわねえ。ミルクでも飲むかい？」

「どうやら大丈夫みたい。小さくてかわいい外見からか、おばあちゃんには口ウにミルクを与えようとしている。」

「あ、口ウはミルクを……」

「飲みません、というか、食事しません！ って言おうとしたけど間に合わなかったみたい。」

「なんて説明しよう？」

「なんて一人でわたわたしていると、ぺろっ、と口ウがミルクを飲んでいて。」

「えっ、口ウってミルク飲むの？ 今までそんな素振りしなかったよね？」

「そう思っている間も口ウはミルクを飲んでいく。ついには全部飲んでしまったようだ。」

「ちゃんと全部飲むなんていい仔だねー」

「トリアおばあちゃんになでられながら軽く「げふっ」とげっふしてあくびをする。」

「おいおいおいおいっ、確か口ウは普通の妖精じゃないって言うってたけど、どういうこと？」

「私の頭の中はクエスチオンマークでいっぱいだ。」

「あとで、問い詰めてやるうと思いなながら私も夕食がのっているテーブルにいき、椅子に座る。」

「あまり豪勢ではないけど、遠慮なく食べて頂戴ね」
ロウにミルクをやり終えたトリアさんも席に着く。ポーロさんはすでに着席済みだ。

私たちの目の前には、確かに豪華とは言えないけれども温かくて愛情のこもった料理が並んでいる。

「どうやら私がいないうちに作ったようだ。
いただきまーす、と私は4日分の栄養を補うかのように食べていた。」

+ + + +

「ねえ、ロウ、さっきのあれ、どういうことなの？」

私たちは今朝目が覚めたときにいた部屋を与えられて、今ベッドの上にいる。

「どうして食事できるの？　なんか、ロウのすべてが謎過ぎてもう何聞いたらいいかわかんないよ」

「食事に関して言えば、私のように実体化できる妖精らは人間の食べるものからも魔力を補うことができる、とでも言っておこうか」
「実体化？　それは自然にいる妖精とは違うの？」

初めて聞いた内容に興味を持ち、さらに問いかける。

「自然にいるものは、主を決めていない者たちだ。私のようなものと違い、彼らは人間の食料から魔力をじかに得ることはできん」
「そういつて、ベッドの中に潜り込んでくる。」

「主？ ねえ、主って何？ ロウの主は私ってこと？」

「あーっ、質問の多いやつだ。ヒナは私にとって半分主で半分違う」

そういうのは自分で調べることだといい、もう寝るぞ、と強制的に質問タイムを修了してきた。

「えー、もっと教えてよ」

布団にもぐったロウを起こそうとするが、くると丸まってしまってもう話す気はないみたい。

「はー、まだ聞きたかったけどしょうがないか。明日から牧場の手伝いもあるし私も寝よ」

今日の夕飯のときに話したのだが、居候させてもらう分、何か手伝えることはないかと聞いていたのだ。そんなことはしなくても、ときどき手伝ってもらうくらいでいいと言われたが、無理を言ってお仕事を手伝えるようにしてもらった。

とりあえずは、仕事内容を覚えることから始めて、慣れてきたら牧場の仕事を手伝うことにした。

朝は早いみたいなので、私はこれからのことと、おばあちゃんのゆびわについて考えながら眠っていった。

新たな日常（後書き）

ありがとうございました！

朝、太陽が顔をのぞかせ始める頃、私は鳥たちの鳴き声を目覚まし代わりに目を覚ます。

それからまだ温かい少し硬めのベッドを名残惜しむように起き上がる。そしてガラスの代わりにはめてある木でできた窓を開け、夜の雰囲気を残す冷たい空気を吸い込みながら、頭をすっきりさせていく。

軽くベッドを整えながらロウを起こし、寝巻にしている質素なワンピースのまま、部屋を出ていく。

「おはよう、ヒナ」

ボーロおじいちゃんはテーブルの正面にある暖炉に火をくべている。

春の陽気になってきたとはいえ、まだ朝方は冷え込むのだ。

「おはよう。おじいちゃん、おばあちゃん」

私は2人に朝のあいさつをしながら、トリアおばあちゃんを手伝うために暖炉横にあるキッチンに近づく。ロウは暖炉脇でおじいちゃんになでられながら、気持ちよさそうにしている。

「あら、おはよう。もう出来上がるからヒナには水を汲んできてもらおうかしらね」

おばあちゃん手伝うよ、というと、私は水汲みを頼まれたので、桶を持って出ていく。

初めのころはただの水汲みでさえも失敗したりしたが、今では慣れたものだ。

外へ出てから、寝巻のワンピースのまま来てしまったことに気付

き、せめて上着だけでも羽織ればよかつたかな、と思いながら井戸へ向かう。

「リチエ、ナット、おはよー！」

先に井戸で水汲みをしている兄弟に声をかける。

桶いっぱいに入った水を持ち上げようとしている女の子がリチエ。水を汲んでいる最中の男の子がナットだ。2人は私の声に気付いたのか、同時に振り向き声をかけてくる。

「ヒナ、おはよ。ヒナも井戸使いに来たの？」

持ち上げようとしていた桶を置き、リチエが私のとこまできた。

「うん。リチエ達はもう終わる？」

そう聞くと、丁度ナットが「ねえちゃん、終わったー」と言っ
私たちの方をむく。

「終わったみたいだね。じゃあ次使っね」

私はそう言っ
ナットのいる井戸のところまで行く。

今ではこの水汲みが毎朝の私の仕事だ。でも、はじめの頃よりは
力がついたとはいえ、やっぱり重い。

うーんっ！ とうなりながら水を汲む。これが結構腰に来るのよー

「やっぱりヒナは力ないなー、かせよ」

横からナットの腕が伸びてきて、私が持っていた縄をもち、井戸
水をくむ。

おや。今日はずいぶん優しいこと。

「ナットが手伝ってくれるなんて珍しー」

「はあ？ ちびヒナが腕ふるふるさせてるから、かわいそうだと思っただよ」

俺って優しー、と馬鹿にした言い方で言ってくる。

はー?! ちびつて、私あんたより年上なんですけど!

どうやら、こちらの人は日本人より体格がいいみたいで、まだ12歳のナットでさえ15歳の私より背が高い。これでまだ成長期だからもつとでかくなるらしい。

リチエは私と同じ年で背は167cmある。158cmという日本の15歳では一般的だった身長から見るとリチエもだいぶ大きい。そして、特に比べてしまうのが、その……体つきだ。なんで私と年一緒なのに、そんなにボンキュボンツなわけ?

村の人全体が、地球で言う西洋人系で、東洋人の私と全然違う。

でもありえないでしょっだつて最初リチエは20歳くらいでナットが私と同じ年か少し上つて思ってたのに。

あれか? ミルクか? 乳製品のミルクやチーズを毎日食べてるからかー?!

この村では主に放牧を生業なりわいとしているひとがほとんどで、ナットたちのお父さんである以前井戸の使い方を教えてくれたレイグおじさん、などはそれ以外に猟師や畑仕事も放牧の傍らしている。

私がお世話になつているトリアおばあちゃんのところは2人で放牧と畑仕事をしている。

レイグおじさんが猫で取ってきたうさぎとうちのところで採れた野菜を交換したりもする。近くに大きな町はなく、お店がないこの村では、村全体がそうやって助け合つて生活をしている。

レイグおじさん家のみんなは私がこの村に着てからなにかとお世話になつていて、特にこの兄弟は子供が少ないこの村で一番年が近

いということであいたいいつも居るんだけど、

「ナットだってひよろひよろじゃん！」

「ちびヒナには言われたくねーよ！」

なんかナットと私って会うといつもこんなだよ。最初のころはナットが人見知りしてたけど、今では生意気な口をきいてくる。

「ほらほら、2人ともやめなさいよ。いつまでも帰らないからレルがお腹すかせて家から来ちゃったじゃない」

そう言ってるリチエの腰あたりにいるのがこの3人兄弟の末妹であるレルだ。

レルはお兄ちゃんまだなのー？ とかわいらしく聞いてくる。

「レルも待つてるから早く帰りなさいよっ」

リチエとレルが間に入ったことで私とナットのいつもの口論が終わった。

リチエは桶を片手で持ちながらもう片方でレルと手をつないでいる。ナットも水桶を持ちながら「ちびヒナまたなー」と行こうとしている。

その言葉にまたちよつとむかついたけど、私はナットが汲んでくれた水を見ると「水！ ありがと、ナット！」と叫ぶ。私がお礼を言ったのが意外だったのか、それとも照れからか、顔を赤くさせて「ヒナは弱っちいからな！」と行って立ち去って行った。

さ、私も早く戻る。

水の入った桶を両手でよいしょと持ち朝ごはんの待っている家に帰った。

+ + + +

モオ〜、モオ〜、ブルブルブル〜、ヒヒ〜ンツ……

放牧地である草原にはたくさんの牛と馬が自由に草を食^はんでいる。ここは村共同の放牧地でみんなの家の家畜がそれぞれいるため、見分けがつくように色分けをした首輪をつけている。

「今日もみんないいフンしてるよ〜」

などと、独り言を言いながら家畜を放牧している間に、私は牛舎の掃除をする。初めて来たときはこの独特のにおいに顔をしかめてしまったけど、もう慣れっこだ。牛たちのフンと糞をきれいにはき捨て、新しい藁を敷いていく。

私が世話をしている牛は他の家よりは少なく、掃除をする場所も広くはないけれど、1人でするとなるとそれなりにきつい。

おじいちゃんとおばあちゃんは春、夏に向けての畑仕事が大変なので私が自らこの仕事を引き受けたのだ。でも、他の牛舎や馬小屋の人たちが早く終わると手伝いに来てくれるのでなんとかやっていける。

動物たちとはこの異世界、オイリスでも意思を通わせることができた。

意思を通わせることができるので、牛たちの移動が簡単にできし、病気やけがの時も比較的早く気づくことができた。

「おーし、きれいになった！ これで牛たちも気持ち良く寝れるよね」

大変だけど、充実した毎日を送っているのだ。

私は午前中の仕事として、牛舎掃除が終わり、道具を納屋に直しに行きながら、これまでの生活の中で気づいたことをまとめていた。

まず、魔法を使えない人がいること。全員を調べたわけではないが、今の段階で使える人は村長さんとリチエたちのお父さんのレイグさん、その他3人だ。この村が50人弱なのでかなり少ないと思う。それに使える人も魔力が少ないのか、小さな、弱いものしか使えないみたい。それでも魔法を使えるということで、みんなに尊敬されている。

そして、私やお兄ちゃん、おばあちゃんが普通にできた、動物や妖精と意思を通わせることができる人に関しては0人だった。口ウに聞くと、もともと動物、妖精と意思を通わせることは難しかったようで、もしかしたら他の町にはいるかもしれないとのこと。

そして一番感じたのは、私がおばあちゃんの話から想像していた世界と実際のこの世界はかなり異なっていたということだ。

いや、おばあちゃんがいたころはみんなが魔法を使え、妖精たちも世界中にあふれ人々とともにすごしていたりしたのだろう。おばあちゃんが日本にトリップして約半世紀、その半世紀の間になにが起こったのかは分からない。

そして唯一、確信を持って言えるのは、私はいまだ日本に帰れないということだ。

トリップして、今は多分1カ月くらい。

日本に帰る希望は、悲しいけどほとんどあきらめ始めている。

とりあえず今は、帰ることばかりじゃなくて前を、この世界での未来を考えていこうと思う。

村で最初のころ、悲観ばかりしていた私が前向きになれたのは、村のみんながいたから。

日本のみんな、お父さん、お兄ちゃん、涼、そしておばあちゃん。私は大丈夫。ここには新しい家族と友達、村のみんな、そして相棒のロウがいるから。

2 (後書き)

ヒナはりチエと同年と知った時、かなり落ち込んだみたいですv

この小説を見に来てくださった方、お気に入り登録をしていただいた方、ありがとうございます！

3 (前書き)

少しですが、編集し直しました。
大きな流れでは変わっていないと思います。

「それ、れるが作ったのー！」

「本当？ すっごいおいしいよ。レルってお料理上手なんだねー」
私が食べているのはパンにチーズとレタスの挟まったサンドウィッチ。どうやらレルが作ったみたい。おいしいと言ってあげると、「おねえちゃんと作ったの！」と満面の笑みだ。

「レルはお料理大好きなのよねー」
リチエもそう言いながらサンドウィッチを食べている。

私たちは朝の仕事をそれぞれ終わらせて、今放牧場の端でお昼を食べている。

リチエ達はサンドウィッチを持ってきてくれて、私はトリアおばあちゃんが作ってくれたサラダを持って一緒に食べているのだ。
ナットもいるのだが、なぜか今朝の井戸から声をかけても無視されてしまう。それもあからさまな。

今なんて、私に背を向けてもくもくと食べ続けているし。

リチエいわく、「あの年頃だから、まだ子供なのよ」とにこやかに笑っていただけ。えー、思春期？ 反抗期とか？ よくわかんないけど、リチエだってまだ15歳じゃない！

どうやら、この国も20歳で成人らしいが婚約や結婚、学校や仕事など決まった年齢はないようだ。町や都市で決まりがある場合もあるけど、この村ではないのでリチエも立派な子供だ。

なのにいつも大人な感じがするんだよねー、って、私が子供っぽいってこと？

うーん、と一人うなりながら食べていると、

「今年も来ているわね、彼ら」

リチエは小川の向こう側にいるらしい、「彼ら」を見ている。

私たちがいる牧場の端には小川があり、小川の向こう岸には森がある。その森はレイグおじさんたち猟師が普段狩りをしている森で、私がトリップしてきたときに歩いてきた森でもある。

「そういえば、昨日？　一昨日ぐらいからいる気がする。あの人たちって一体なに？　森で狩りでもしに来たとかじゃないみたいだし」
もぐもぐ、と食べながら私はその「彼ら」を遠目でみる。10、いや20人くらいか。

2人で彼らを見ながら話していると、

「あの人たちは王都の学生だ。毎年この時期になるとこの森で訓練かなんかしているみたいだって、父さんが言ってた」

ナットが私に説明してくれる。お、なんだ、話してくれるんじゃない！

「あの中にいる人たちがいづれこの国を支えてくれるのよ。未来の騎士さまや魔法士さまたちよ！　この国の王子さままでいらっしやったらどうしようかしら！」

遠目で見られるだけでもいいわー！　と急にミィハーな女子高生のように騒ぐリチエ。うーん、あんまりこの国自体よく知らないからわかんないけど、どうやらすごいみたい。

いつかはこの村をでて、おばあちゃんの親戚でも探そうと思っていて、もう少しこの国や世界について勉強しなくちゃな。

ナットも「俺にも魔法使えたらなー」といいながら、最後のサンドウィッチに手をかける。

「あーっ！ それ私がつっておいたやつ！ ベーコンとチーズの！」
「いつまでもあの人たちに見とれてたからだろ。残しておいた奴が悪い！」

そういつてぱくつと食べてしまった。
くっそう。私は最後に好きなのをとっておくタイプなんだよ！
食べ物の恨みは怖いんだから。

きーつと唇を噛んでいる私をよそにナットは全部飲みこんでしまつたらしい。

それを見て、リチエはご飯を食べてお昼ねタイム中のレルを膝枕しながら、

「そのサンドウィッチってさっきヒナが口付けてなかったっけ？」
とナットに言っている。なんか顔がにやけてませんか、リチエさん？

その言葉をきいてか、「はあ?!」と行って咳込むナット。

おい、口は付けてないぞ！ にしても、そこまで咳込まなくてもいいんじゃないの？

ものすごい勢いでげぼげぼ言っているせいか、顔全体が真っ赤になっっているようだ。

「ちよ、ナット大丈夫？」

さすがにかわいそうなので、リチエが嘘ついたことを教えてやると「ねえちゃんのアホ！」と怒る。リチエはナットを見ながら「青春ねー」とにやにやしていた。

な、なんかこの感じ、涼に似てる。そのにやけた顔が特に！

私は今日、リチエの新たな1面を発見した。

そして私たちがそんなやり取りをしていたのを、小川の向こう側森の中にいる「彼ら」の何人かが見ていたのを気づかなかった。

+ + + +

「じゃあ、明日は一緒にお店みようね。井戸のところまで待ってるから！」

私たちは夕方、放牧しておいた牛たちをそれぞれの牛舎に帰してしまうと、明日の話で持ちきりだった。

明日は年に数回来る行商の日らしいのだ。

「分かったわ。ヒナはここにきて初めての行商だもんね、春の行商は品ぞろえが豊富だからいろいろみれるわよ」

「そっか、トリアおばあちゃんたちにお小遣い貰ったからなんか買おうかなー」

明日の行商にいろいろと考えながら、みんなで帰っていく。

「あ、俺は他のやつと行くから」

ナットはどうやら他の男の子と見回るみたい。

「確かに、一緒にいたら買いたいものも買えないわよねー」

トリチエがまたあのにやつとした顔をする。

お？ ナットはなにか欲しいものでもあるのか？　なんか、私たちと一緒に買えないみたいだけど……

「なんで姉ちゃんが知ってたんだよ！」

「ナットの友達に聞いたのよ。私に聞いてくれればアドバイスして

あげたのに」

ふふふーと私にはまったく分からない会話を始めた2人。

おーい。私を置いてくれるなーっ

「ねえ、なんの話？ 私は聞いてないよ」

「ヒナは後でわかるわよ。いいわね、春で」

確かに、もう春の季節だけでもっと分かりやすく言ってくれない？

私がうーんと唸っていると、ナットは「俺は先に帰るからな！」
と言って走って帰っていった。

結局ナットが何を買いたいのか分からずじまいだ。まあ、後でわかるみたいだからいつか。

私は「じゃー明日ね」とりチエと眠ったまま抱っこされてるレルに言って帰った。

+ + + +

「なんだ、明日は行商が来るのか？」

「そうみたい！ なんか物も食べ物もたくさん売ってるって。すっごい楽しみ」

「行商とはかなり久しぶりだな。私もヒナたちについていこう」
部屋のベッドで寝転がりながら私たちは明日のことについて話している。

ロウは昔、こっちにいた頃何度か行商を見たことがあるようで、約半世紀ぶりとなる今回の行商についてくるそうだ。

「もらったお小遣いがあったんだけど、行商人が来るからって余分にまた貰ったからロウのも何か買っうね」

さっきの夕食で、ボーロおじいちゃんから「明日何か買いなさい」とお給料としてもらったのだ。

最初はもらえないと言ったけど、「じゃあ、私たちにもそれで何かお土産でも買ってきてくれないかい？」と言って渡してくれたのだ。

特にお金に困っているわけではないが、余裕があるわけでもない。2人はいつも私を本当の孫のように接してくれる。私はその優しさについてお返しできたらいいなと思っている。

「明日はいつもより少し早いのだろうか？ 今日早くに寝ておくか？」

「そうだね。リチエとレルとも待ち合わせしてるし」

ベッドに横になり、おやすみーと言いながら目を閉じる。私の声と同時に自然と部屋の中の蠟燭が消え、明かりとりの窓からの月の光のみになった。

「うん、……んー、トイレー」

のそのそと起きてドアの横のタンスの上に置いてあるカーディガンを羽織る。

「まだ外は暗いから気をつけるのだぞ……」
とベッドの中でロウがつぶやく。

「んー、わかったあー」

私は足音をたてないように外にあるトイレへ向かう。

「はー、すつきり」

用を足し終えたのでまた家の中に戻ろうとしたら、

「あれ？ だれかいるみたい。 井戸のところに誰かいる？」

家から井戸まではそんなに遠くはなく、この月明かりだったろう
つすらと井戸を見ることが出来る。

井戸にいてと思われる人物は水でも飲もうとしているのか、何やら
さがさがしている。

「ちょっと今の時間になんなのよー。物音立てて近所迷惑ね！」

一言言つてやるう！ と思い、その人物の元まで行く。

「ちょっと、誰かわかんないけど、こんな時間にそんながちやが
ちやつたらうるさいと思わない？」

もう少し静かにしてほしくて誰か分からない人に言う。

暗くてわかんなかったけどこの人物は男性のようだ。

最初は井戸「《イコール》有名なビデオのやつを思い出したので、
ちゃんとした人間で安心した。

「誰だ？」

「いや、誰って……。だから、その音がうるさいっていつてるの！
私の注意にまったく耳を傾けようとはしない人に向かって再度注
意する。」

「おい、この筒のようなものはなんだ？」

「おい、無視してわけねー。なら私も無視しようじゃないの！」

「おい、だからこれは何だと聞いてる！」
目の前の人の迷惑を考えていない人物は自分から無視してきたくせに、自分の質問には答えさせようとしている。なんてジコチユーナ!

「だから！ 教えてあげるから静かにしなさいよ。人の話はちゃんと聞けって習わなかった？」

「っ！ 悪かった。……じゃあもう一度聞けど、これはなんだ？」
やあつとわかったみたいで静かになった。これでわかんなかったらどんだけだよ！って感じだけど。

「それは井戸よ。見たことないの？」

「これがか、本や資料では見たことあるが、結構大きいな」
へー、この世界でも井戸を見たことない人がいるのね。どうりで使い方が分からないように見えたのか。

「どうしてこんな時間にこんなところにいるの？ あなたって最近森の近くにいる王都の学生なのよね？」

私はただなんとなく聞いたんだけど、目の前の彼は違うようにつたようだ。

「なぜそんなことを聞く？」

「え？」

「そんなことを聞く必要があるのか？」

急に冷たい声になる。な、なによ。さっきまで普通に話してたじゃない！

「理由なんてないわよ。なに？ 急に怖くなっちゃって！ 妖精たちもびっくりしてるわよ！」

そういつと私はこれ以上長居は無用だと、家に帰ろうとする、が

……

「妖精？　　お、おい！　待て」

彼は私の腕をつかみ、無理やりとどまらせた。

「ちょっと、今度はなんなのよ。離してよ！」

私は振り向きざまに彼に向っていう。すると、今まで井戸の屋根の影で見えなかった彼の顔がうつすらとだが、見えた気がした。はつきりとは見えないが私は彼をみて息をのむ。

月の光に反射してきらきらと輝く、金のような瞳。

その美しい瞳を見た私は目を見開いたまま固まった。

3 (後書き)

ありがとうございます。

きっかけ

彼の背後にはその瞳と同じ輝きを持った月があり、星たちと一緒に彼と私を照らしている。

私よりも背の高い彼を見上げる形で私は一瞬、息を止めてしまった。

月の光で影になっている顔自体はほとんどみえない。しかし瞳だけはきらきらと確かな光を放っている。

「？ どうした？」

急に黙り込んだ私を不思議に思ったのだろう、彼は私の腕をつかんだまま聞いてきた。

「な、なんでもないっ」

彼のつかんでいる力が弱まったので、そのすきに腕を引き抜く。

たった今まであなたの瞳に見惚れていたなんて言えるわけもなく、少し赤くなった顔を隠すため下を向く。

「ひ、冷えるから家に戻るわ。これからは夜中に大きな音なんて立てないでね！」

そういうと、私は後ろを向き、走って家に帰る。

彼は今度は何も言わず、その場に立ったままだった。

私は一度も振り返らなかった。振り返ればいつまでも私を見ている彼がいたのにもかかわらず……

+ + + +

「ヒナ、これすごくいいわよ！ ヒナに似合うんじゃない？
私の髪の毛にあてながら、リチエは私に紐状の髪留めを勧めてき
た。」

「どんなの？」

「これよ。少し薄めの紫色。ヒナの目の色と似ているし、いいと思
うわ。」

そう言っただけにその髪留めを見せる。リチエの言うように淡い紫
色で、小さな花がたくさん描かれている。リボンのように結んで使
うもののように、春にぴったりのかわいい髪留めだ。

「あ、かわいいー！ でも、私髪を結ぶくらい長くないし……、」

リチエが手に持っている髪留めは確かにかわいいのだが、なんせ
私の髪が結べるほど長くないのだ。

ここにきて約一か月ちょっと。トリップしてきた時は耳より少し
下の長さが、今では首に掛かるくらい。最初よりいくぶん長くなっ
たけど、結ぶにはまだ少し短いのだ。

「髪なんて数か月したらすぐに伸びるわよ。それよりも色違いで買
わない？ 私はこの同じ形の黄色の買うから！」

「えー、色違いで？ いいよ、リチエだけ買いなよ。」

買う気まんまんのリチエに対し、私は色違いなんて恥ずかしいし
と断る。

「そう？ 行商なんてそんなに頻繁にないからここで買わないと同
じものを買うことはできないわよ。」

そういつて、店主にお金を払うリチエ。買うと決めたら迷わずぐに買う人のようだ。

「まいどー」と、言う声を背中できき私たちはそこから立ち去る。

今日は待ちに待った行商の日だ。

私たちはいつもより早く起きていつもの井戸で待ち合わせをした。ロウとレルは早く起きることができなかったみたいで、少し遅れて合流する予定。

とりあえず、一番に見たお店がこの髪留めのお店。小さな雑貨類が置いてあって、女性に人気のようだ。

行商はこの村の真ん中、井戸を中心とした円を囲むように行われている。

村自体が井戸を中心にしていて、囲むように家々があり、その井戸のあたりはちよつとした広場のようになっていて。そして家々の外側には牛舎や納屋、放牧場や小川などがある。私が倒れていた村の入り口は森へ向かう方の入り口で、ちょうど反対側にはもう一つ、他の村や町へと続く道がある入り口があるのだ。

待ち合わせ場所にした井戸からはほとんどのお店を見ることができ。今見たような雑貨があれば、薬や、農具、調味料らしきものを売っているものもある。

行商人たちは明日にはもう、他の村へ移動するようで、今日1日しか買うことができないみたい。長い時で、3〜4日開かれる時もあるようなので、今回は短いようだ。

買った髪留めを小さな手持ちのバッグに収めたらしいリチエは、

「さ、お寝坊さんたちももう起きてる頃かしらね」と、1人と1匹を迎えに行くことにした。

「すーい！ お店いっぱい！」
きゃっきゃつと、はしゃぎまわるレル。小さい子はやっぱりこういうのは大好きなようだ。

そんなレルを見て「ちよつと危ないわよ！」とリチエが手をにぎり、迷子にならないようにする。

確かに、村の中にはさまざまな品物であふれかえっている。地面に布を敷いてその上に商品を置いてある人や日差しよけの簡易テントのようなものを立てその下で売っている人、多くの場所をとっている人や狭い場所で売っている人さまざまだ。

人も物も普段のこの村からは想像が出来ないほど活気づいている。穏やかな村しか知らないからか、少し変な感じ。

レルみたいな小さな子だったらすぐに迷子になりそうだし、物を落としてもなかなか見つからないかも。

ロウはそんなことにはあまり驚かないのか、「ふああっつ……、」と大きなあくびをしている。

ロウってば自分から行きたいって言ったのに。そう思いながらロウを見ていると、リチエが何か見つけたようだ。

「ねえ、少し早いけどお昼食べない？　なんか、屋台もあるみたい」
「お」

というので早めのお昼をとることにした。

「お腹いっぱいねー、なんだかんだいって他のところでもデザート食べちゃったし」

ふっー、トリチエはお腹をなで満足そうだ。

横ではレルがぺるぺると買ってもらった飴をなめている。

「リチエはここで少し休む？ 私は最初のお店でトリアおばあちゃんたちにお土産買うから」

ということ、ついでそれぞれ好きなところで買い物しようといふから自由行動にした。

「じゃあ、買い物が終わったらまた井戸のところまで待ち合わせしましょう」

「じゃ、たくさん買うわよー！ と、今の今までお腹いっぱいですこしきつそうにした様にはみえない。

「ヒナもせっかくだから何か買いなさいよ」

「はいはい」

「じゃーね、と手を振って私とロウ、リチエとレルで別れた。

「うーん、どれにしようかなー。これもいいし、あっあれもいいかも」

私は1つ1つ手に取りながら何を買うかと悩んでいる。

今見ているのはトリアおばあちゃんに渡そうと思っっている、髪留め。ここは最初にきたお店でかわいいものがたくさんあったからまた来ちゃった。

リチエが買ったようなものでもよかつたけど、コサージユがついた髪留めにした。この世界ではゴムみたいなのがないみたいで全体的に結ぶ形のは紐状みたいだ。

「この花のコサージユのにしよ」

これ下さい！ と行商人のおじさんに渡す。

「おや、朝も来た子じゃないかい？」

にここにこと商品を小さな袋に詰めながら話しかけてくる。

「はい、ちょっと気になっちゃって、また来ちゃいました」

はい、と丁寧に袋詰めされた髪留めをもらい、お金を渡す。

「はい、まいど！ おや？ ……きれいな指輪をしているね。彼氏からかい？」

「え！ 違いますよー。これはおばあちゃんの形見なんです」

「そうかい、お嬢さんにとっても似合っているよ」

大切にしなよ！ とお釣りを渡しながら言ってくる。

「ありがとうございます」

私は他のお店も少し見ようと思って後ろを振り向きながら、おじさんにお礼を言う。すると、丁度人がいたのでその人にぶつかってしまった。

「すみません、大丈夫ですか？」

その人は少しよろけてしまった私の手を取り、声をかける。

「ああ、大丈夫です。すいません、ぶつかってしまって」
「お店お店で隣同士がすぐ横って感じなので、今日は何度も人にぶつかりっぱなしだ。」

「村人以外の人も多いのでしようがないっいたらしようがないけど。」

「私は軽く謝ってから、リチエと待ち合わせしている井戸に戻った。」

「あれ？ もう戻ってる。もっと買い物してるって思ったのに」
「不思議に思いながらも、リチエの元へ行く。」

「おまたせー、リチエ、レル、ロウ」
「最初はロウと一緒に回ろうと思ったけど、なんかお腹いっぱい井戸で休むと言ったので私一人で買い物に行った。」

「私結構かったよー、もちろんおじいちゃん、おばあちゃんにお土産買ったし！」

「私は今日の収穫物を見せながら近づいていく。」

「ヒナ、それどころじゃないわっ」

「えっ？」

「『彼ら』が来てるのよ！」

「ほら、あそこよ！」

「えー、見えないよ」

ほらほら、と言われても人が多すぎて全然見えない。……私の背が低いからじゃないよ。

とはいっても、本当に見えない！

別に見たいわけじゃないけど、もし昨夜の彼がいたら謝ろっかなって思ったから。

あのまま何も言わず家に帰えちゃったからなー、いたら謝ろ。いたらね。

「私たちが言った屋台のところよ。分かる？」

「んん？ ……あ、見えた！ あれか」

昨日の彼はいるかな？ と探すが、なにぶん顔がはっきりわからないので探しようがない。

「目を見たら分かると思うんだけどなー」

きゃー！ と言っているリチエを横にうーん、とつぶやく。やっぱり近づかないと分からないみたい。

それにあの屋台に居るのは3人だけで、あの彼という可能性は低い。

「ね、ねえ！ ヒナってば！」

でも、金の瞳って今日の行商で見た感じじゃ少なさそうだし、探そうと思えば探せるかな？

この世界の人の瞳の色は結構種類が豊富で、私の瞳を見ても驚く人はいなかった。

紫はここでも珍しいみたいだけど、いないわけじゃないみたいだし。

「ヒナっ」

「もー、なに？」

リチエったらさっきからなんなのさ。

「ちょっと静かに……って、え？」

さっきまであの屋台にいたはずの「彼ら」が私たちの目の前にいた。

きっかけ(後書き)

名前を考えるのって予想以上に難しいですね…;

今回もありがとございました！

2 (前書き)

改稿しました。3月30日、少々(とは言えないかもしれませんが)手直ししましたが大まかな流れは変わっていません。

今まで少し先にある屋台に居たはずの3人のうち2人がいつの間にか、私たちの目の前まで歩いてきた。私は考え事をしながら彼らを見ていたので、近づいてくる彼らに反応できなかったみたい。

私はリチエの声で彼らも目の前にいることによく気がついた。

そして、その2人に顔を向けると、

2人とも、美形だった。

「あわわわわっ！ どうしよう、ひなー」

「どうしようって言われても……」

彼らを見に行こうって言ったのリチエじゃない。とは言わず、と
うか言えず、とりあえず目の前の2人がどうして私たちのところ
にやってきたのか、聞いてみることにした。

「あの一、なにか？」

はつきりと「何？ 何か用があるの？」と聞きたいところだけど、
日本人の性さがなのか初対面の相手に対してそのような態度をとるこ
とはできなかった。

ていうか、上からそんなに見ないでよー！

返事をうかがうように下から見上げるように彼らを見る。

リチエも私の言葉にうなづくように相手の出方をうかがっている
みたい。

私とリチエがこんなに緊張しているのに、この子だけはマイペー

スのようだ。

「おにーちゃんたちすっごいびけいー。れるをお嫁さんにしてー！
ぎゃー！ レルったらなんてことを発言しちゃってんの！」

「レ、レル！ 何言ってるの！」
リチエがあわててレルの口元を塞ぐ。レルはまだもごもご言っているが、口を塞がれているので何と言っているのかわからない。

「君をお嫁さんにしてあげたいけど、あと10年は待たなくちゃいけないかなー」

そう言うのはすらっとした細身の美形さん。顔は美人系で、中世的な顔立ち。髪も私より長くて、後ろ手に一つに結んでいる。女装して声を出さなければ、モデルとして雑誌に出ているもおかしくない感じ。

そしてその彼はレルの言葉に対し、丁寧に答えている。
レルに話しかける際も、視線に合わせるように腰を下げている。
最初は美形だしちょっととっつきにくそうだと思ったけど違うみたい。

そう思っていると、彼がまた言葉を続ける。

「それに僕はたくさんの方の人にお嫁さんにしてって言われてるから、君をお嫁さんにできるのはもっとさきになるかもね」

結局はただのナルシストかーい！

レルは目をぱちくりさせ、リチエはぽかーんと口をあけている。
だってこの村にはこんな変な人いないもん。

「あの、それで私たちに何か用ですか？」
私はこのナルシストにじゃなくて、その後ろにいたもう一人の男の人に聞く。

「ああ、こいつがさっきから女の子に見つめられているとか言っ
て来ただけで用はないんだ。で、俺はただついてきただけ」

御守りとしてな、とまだレルと話していた彼を引き離すように首元を引っ張る。

「痛いなー、もうちょっと優しくしてくれよ、アスー。」と言
いながらナルシスとは立ち上がる。

立ち上がると、私たちに向かって、

「昨日も僕たちのことを見ていたみたいだし、君たちかわいいから僕から来ちゃった」

「昨日、ですか？」

「そうだよ。昨日は森にいた僕らを一生懸命見つめてくれてたよねー。女の子にそんなに見つめられたら、あいさつぐらいしなきゃいけないでしょ？」

そういって、「僕はヒースだよ。で、こっちはアスフィ」と名前を名乗ってくる。

「わ、私はリチエです！ この子はヒナで、こっちは妹のレルです」

勝手にリチエが名前を明かしてしまった。

リチエは最初、緊張してどうしたらいいかわからなかったようだが、彼、ヒースの性格なのか、リチエはすぐに打ち解けたみたいだ。

「すまないな。あいつ、誰にでもこうなんだ」

もう一人の彼、アスフィが私に話しかけてくる。彼もヒースに負

けないくらいかっこいい。ヒースが美人形ならアスフィは肉体系、とでもいうのだろうか。ワイルドなかつこよさで、体もがっちりしている。髪はみじかめで、ヒースに比べて頼れる人って感じ。

「ああ、いいですよ。こつちも乗ってるみたいだし」 そういうと私とアスフィは会話をすることもなく、2人の話が終わるのをいつかいつかと待っていた。

そういえば、2人も昨夜の彼じゃなかったな。

私はリチエ達を見ながら考える。話しているときに見たのだが、2人の目の色は期待したものではなかった。ヒースは新緑を思わせるような緑色で、アスフィは燃え盛る炎のような赤い色。

ほんの少しだけ期待していたから、ちよつと残念。

彼らに聞いたたらあの金の目の彼のことは分かるかもしれないけど、やっぱり自分で探したい。

それで会えなかったらそれまで、と思っているし。それに彼の方も私の顔とかは分からなかったかもしれないし。

ただもし昨日の彼に会えたなら、急に走り去ってしまったことを一言くらい謝りたかったのだ。

それにもう一度あの瞳はみたいかな。この世界の人は色々な色を持っていておもしろい。私と同じ紫の人ともこれから出会えるかもしれないな、とと思っているとまた新しい声が聞こえてきた。

「また女の子に話しかけてるのか？ もうすぐ戻る時間だから、そろそろ戻るよ」

そういって、私たちの後ろから一人の男の人が来た。彼は最初、屋台でみた3人の最後の彼だ。

その彼は、ヒースに向かって話しているので、顔は見えない。ようやくリチエ達の長いおしゃべりが終わるわー、と一息ついたとき、その新しい彼がこちらをむいた。

「君もすまないね。ヒースは女の子がいるとすぐに話しかけるんだ。まあ、悪気はないから許してやって」

長い時間ごめんね、という彼を見た私は目を見開く。

振り向いた彼の瞳の色は金色だった。

「ちえ、ランはいつもいいところをとるんだからー。せっかく仲良くなれたのに、ランが来たら2人ともランにくぎ付けになっちゃたよ」

ヒースは金色の瞳をした彼に向かっていう。どうやら彼の名前はランというみたい。

ヒースの言う「くぎ付け」という言葉はまんざらでもないかもしれない。まるで絵本から出てきた王子様のよう。ただ金髪碧眼ではないのが残念だけど……。それでも金髪金眼が似合い、麗しいと表現できる。

ヒースは「だからランがいないうちに女の子に話しかけたのに」とぶつぶつ言っている。

「ランがいなくなった途端、このありさまだ」「すまん。という風にアスフィが謝っている。」

「アスのせいじゃないよ。はあ、これならヴェルも連れてくればよかった」

「やだよ！ ヴェルがいたら絶対女の子に話しかけれないじゃないか！」

彼らは私たちがいるのを忘れたように話を進めていく。

あのー、私たちもいるんだけど……と心の中でつぶやいたのが届いたのかは分からないが、

「ああ、そういえば君たちごめんね。迷惑掛けたみたいだけど、もう戻るから」

そういふとかれらは私たちと離れていこうとしている。

「ま、まっつて！」

声をかけてから、しまった！ と思っただけでもう遅い。「なんだ？」と振り返る3人。

1人でも緊張してしまいそうな顔なのに、それが×3となると緊張を通り越してうるたえてしまう。「うっ」と言葉を漏らした私は引くにもひけない状態。

それに私は金色の瞳のかれにどうしても、昨夜のことを聞きたかった。彼が昨夜井戸に行かなかったと言ったら、私の探している彼ではないとあきらめがつくから。

とりあえず目の前の彼が昨日の彼か確かめなければならぬ。

私はそう思うと口を開いた。

「昨日の夜、この村の井戸に行きましたか？」

案の定、ヒースとアスフィは「なんのことだ？」というように首をかしげている。

私は緊張した面持ちでもう一人の彼、金の目の彼を見た。

「ああ、行つたけど？」

「やっぱりあの彼だ！」

私は今度は彼へ謝罪の待を込めて声をかける。

「昨日はちよつと言ひ過ぎたから、……一言謝りたくて」

昨夜はいやな奴と思つたりもしたけど、私も言い方がきつかつたかなと思う。これから会うことはないだろうが、いや、だからこそただ一言「昨日は急に帰つて悪かつた」と伝えたい。

「……え、何のこと？」

「え？」

金の目の彼は本当に覚えがないのか、首をひねらせている。本当に記憶にないらしい彼に戸惑つた私は「あ、ごめんなさい、私の勘違いだったみたい。何でもありません」と引きつった顔でなんとか言葉を繋げた。

「じゃあ、もう戻らないといけないから。今日はヒースが本当に悪かつたね」

私の言葉に彼は首を傾げていたが、それは一瞬のこと。彼は私が「勘違い」と言うつと納得したのか、別れの言葉を言つてから3人も私たちのところから離れて行つた。

+ + + +

「ヒナ？ どうした、何かあつたのか？」

周りの人に聞こえないように小声でロウが話しかけてくる。ロウは私とリチエ、レルと一緒に彼らを見に行かずに井戸のところまで待

っていたのだ。

彼らと別れた後、リチエは「みんなに自慢してくる！」と行ってレルと帰って行った。どうやら、あの王都の学生たちと話せたのがとてもうれしかったみたい。「明日ね」とスキップでもしそうなくらいはしゃいでた。

「はあ、確かにそこまで期待してなかったけど、目の当たりになると結構くるー」

探していた彼に会えたのに、あつちは昨夜のことなんて気にしてないってことよね。あの態度見ればわかるし。こんなことなら、聞かなければよかった。

一人落ち込んでいる私を見て、「なんだ？」というように聞いてくる。

ロウは昨夜のことも、さっき出会った彼のことも知らないから、私がどうして落ち込んでいるのか分からないようだ。

「何でもないよ。もうすぐ今日の行商終わっちゃうみたいだから、最後にもう一度見ようと思うんだ。ロウも行く？」

賑やかな所へ行けば、また元気になるかもと思ってもう一度お店を見回ることにした。

「いや、すぐに戻って来るのだろう？　ここに居ることにする」

「分かった、じゃあちよつと行ってくるね」

そういうと、私は一人行商の中へ入って行った。

「それにしても、そっけなさすぎ。期待して落ち込んだ私が馬鹿みたい……。それとただの村娘のことなんて気にすることでもないってこと?!」

最初は落ち込んでたけど、昨日とさっきのやり取りを思い出してだんだんと腹が立ってきた。「せつかく謝ろうと思ったのに」と独り言を言う。

そしてすでに店じまいやかたずけ始めている行商のなかをずんずんと歩く。

ほとんどの行商人たちがかたずけをしている最中みたくで、馬車や馬たちもいたるところに居る。

人や馬、荷物であふれかえっているところが明日には普段の穏やかな村に戻っているのだ。

私はぶんぶんと怒りながら、かたずけをしている人たちを見ながら歩く。はぁー、もう会うこともないし、怒ってばかりもいられないか。

こうやって、人ごみにまぎれて歩くことでちょっと冷静になれたみたい。

と、そのとき、

「お嬢さん！ そこどいて!!」

急に私のいたところが影になったと思って振り向いたら、周りに積み上げられていた荷物が急に倒れてきていた。

とっさのことで、よけることも最近ほとんど使っていなかった魔法も使うことができず、ただ目をつむって衝撃に構えることしかできなかつた。

「大丈夫かい!？」

そう言って荷物をどけてくれるのは私に危険を知らせてくれたおじさんだ。倒れてきたのは布などで、思ったより大事には至らなかった。

けれども、倒れた私の周りにはたくさんの方が散らばってしまった。落ちた布を拾うのを手伝っている人、先を歩こうとする人、ちよっとした騒ぎになっちゃたみたい。

「けがはなかったかい？」

心配してくれるおじさんはこの布の持ち主のようだ。

「大丈夫です。そんなに重いものでも硬いものでもなかったし」

私は邪魔にならないように端による。拾うのを手伝おうとしたら、「ああ！　ここは大丈夫だから、人が少ないところへ行きな！」と言われたので、ロウのところに戻ることにした。

+ + + +

「早かったな。なんにも買わなかったのか？」

ロウは私に気がつくのと、とことこやってきたので、そのまま家に帰ることにした。

「うん。今日の私ってお昼からついてないみたい。もうどこもおしまいたいだし、家に帰ってトリアおばあちゃんたちにお土産渡すことにする」

行商のあった所から見える家に向かって歩いてみると、ロウが急に立ち止まった。

「ロウ？ どうしたの？」

不思議に思った私はロウを振り返る。

「ヒナ、お前、ゆびわはどうした？」

「え？」

ロウが見ているのは私の指。私は途中で荷物が多くなって、バッグに入らなくなったからお店の人に袋を貰って両手いっぱい今日のお土産をもっている。

お昼すぎにたくさん買ってからほとんどずっとバッグを持ちっぱなしで、ゆびわが外れた感覚がなかったのかもしれない。

「本当だ！！ ない！ なんで?!」

「落としたのか？ それとも盗られたのか?!」

そう言われても、今日は1日中お店をみたり、たくさんの人と会話したり、ぶつかったり、布だらけになると、原因がありすぎて全然わからない。

「たとえ落としたただけだとしても、普段ならいざ知らず、この人だからなら結局拾ったやつが盗っているだろうな……」

昨日までの私は今日という日を楽しみにしていた。

でも、どこやら今日は私にとって最悪の日のように……

「やっぱりない……。本当にどうしよう……」

「こつちもないようだ……」

私たちはゆびわが無くなったと気づいてからすぐに探すことにした。

落ちているかもしれないし、親切な誰かが拾っているかもしれないからだ。村の人にも聞いたが誰も見ていないとのこと。村の人とはこれまでの、とはいっても短い期間だが、接してきて困っている人に対して嘘を言う人はいないと思っている。なので本当にゆびわを見た人はいないのだろう。

一度二手に分かれ探すことにし、今また家の前に戻ってきたところだ。

だが結局、ゆびわは落ちてはいなかったし、「親切な人」もいなかったようだ。

「あーもう！ 最悪だー！！」

私は目に涙をためながら家の前にしゃがみこむ。

「この状況では確実に盗まれたということだな。ただの物取りならいいが、故意に盗んだとしたらやっかいだ」

この状況でよく冷静に考えることができるよね。ロウにとっても大変なことなのにな。

「故意につて？」

「あのゆびわがただの『ゆびわ』と思って盗まれたのなら、そんな

に心配はない。だが、『魔石』だと気づいて盗んだのなら、話は別だ」

どうやらあの「おばあちゃんのゆびわ」の石の部分が魔石という物みたいだ。ロウはその魔石とつながっているみたい。盗んだ人たちが私のゆびわは魔石でできたものだとして故意に盗んだなら、その魔石とつながっているロウにも悪影響を及ぼすらしい。

「なんとなくわかる気のするような？ とにかく、早く探さないといけないってことよね。そういえば、ロウはあのゆびわの中に入りたり出たりできたよね？ 一回ゆびわに戻れば今どこにあるかわかるんじゃないの？」

そうだよ！ と思いついたように提案してみる。

「いや、今の持ち主であるヒナが持っていないから、安定した力を使うことができない。もしかしたらゆびわ自体から出ることも叶わない場合もある」

「そ、そうなの？ 私、あのゆびわについてほとんど何も知らないから……。おばあちゃんが亡くなる前にもらったって、本当にそれだけだし……」

ゆびわをもらった時、まだおばあちゃんは生きていたけど、もう余命数日と言われたのだ。ゆびわをもらった時も形見としてしか感じなかったから。以前ロウにあのゆびわは「魔法のゆびわ」だと聞いたけど、この世界ではどんな風に扱われているのか全然知らない。

「それだったら、もっと前にロウがいろいろ教えてくれたってよかったじゃない！」

八つ当たりと分かっているけど、今の私は誰かに当たらないと気が済まない。

たとえ今は関係ない話でも、何かを誰かのせいにしなきゃ気持ちが収まらないのだ。

「ここに来たときだってそうだよ。いつも『教えられない』って、そればっか！」

ロウは悪くないのに私の言うことを聞いてくれている。

「ここにだって来たくて来たわけじゃないのに！ もう帰れないのに……、みんなに会えないのに！」

ああっ！ もう、こんなこと言っている場合じゃないのに次から次へと言葉があふれてくる。

私は、はあはあと肩で息をしながらロウにわめく。

「ああ、すまないと思っている」

ロウはそんな私の叫びを目をそむけずに聞いてくれる。

「だが、ヒナの祖母、菊は日本で不幸だったか？」

私はロウのその言葉で顔を向ける。

「確かに、実の親や兄弟、友人と会えなくて泣いていたのは何度も見た。だが、お前の祖父と結婚して、娘であるヒナの母親が生まれ新しい家族ができた時、菊はとても幸せそうだったぞ？ 私はゆびわの中から出られなかったが、常に菊とともにいたのでその気持ちは痛いほど分かっている。」

おばあちゃんは日本にトリップして帰ることができず、亡くなってしまった。

でも、日本で家族ができて、ご近所さんともそれなりに仲良くなつて、それに妖精たちといつも一緒に楽しそうだった。

「おばあちゃんも帰れないことに気付いていたけど、日本で幸せを見つけたのね」

そうだ、日本に居る頃、思っていたじゃないか！ おばあちゃんの家族におばあちゃんは「幸せでした」って伝えたいって！

過去の自分を思い出し、そして私の叫びをきちんと聞いてくれたロウに対して、すまない気持ちになった。またそれと同時にさっきまでの自分が恥ずかしくなった。

私はロウの方へとまっすぐ向き直り、

「ロウ、ごめん。ゆびわが無くなったのはロウのせいじゃないのに八つ当たりして……。でも、今のロウの言葉で私決めた！」

すくっ！ と立ち上がり、今思いついたことを伝える。

「私、ゆびわを探しながら、おばあちゃんの家族探す！！」

うんつと腕に握りこぶしをつくり、決意する。あ、でもその前に、

「そういえば、ロウは大丈夫なの？ ゆびわ、魔石とつながっているんでしょ？ どうかなくなったりしない？ それにゆびわの持ち主が私なら、私もどうにかなっちゃたりする？」

もしかしたら、私やロウの体や力に影響があるかも知れないといけないので聞いてみた。

「いや、それに関しては大丈夫だ。魔石の持ち主だからと言って、その魔石が他の人物に渡ったとしても特にヒナには影響はない。そ

れとゆびわを盗んだやつが何かするなら、いくらかは私にも影響が出る。しかし今まで私はヒナと半契約状態だったからどうにかすることもできる。今回はそれが功をそつしたな」

「……んと？ よく分からないけど、大丈夫ならいいや」

それよりも、私って本当にこの世界について無知だと、改めて分かった。ロウがいなかったらなんてことは想像したくない。

「というか、本当に菊の家族を探すのか？ 私は確かに菊と一緒にいたが、それはこの世界から日本にトリップする少し前からだからほとんど何も知らんぞ」

どうやらロウは私の言葉を信じてないみたいだ。前々からたまに考えていたけど、いつまでもトリアおばあちゃんたちにお世話になるわけもいかないし。今回の出来事は良くも悪くも、新たな旅立ちのきっかけになったのだ。

「うん、とは言ってもまだ全然計画はないんだけどね」

たった今思い立ったからこれからどうすべきかたくさんのことを考える必要がある。

「とりあえずは、おじいちゃん、おばあちゃんに言わなきゃね」

ロウも私の決意を信じてくれたみたいで「そうだな」といい、2人の待つ家に帰った。

+ + + +

家に入るとすでに夕ご飯の支度が出来ていた。

「ああ！ 手伝わなくてごめんなさい！」
そういえば、ゆびわを探したり、ロウと話したりしていたので帰るのが結構遅くなっていたのに気づいた。

「片づけは私がするね」

そういうと、テーブルにつき夕食を待っていたら2人に謝りながら食べ始める。ロウもいつもの暖炉の前に座り、ミルクをのむ。さっきの話はできるだけ早く2人に話しておきたいけど、なんて話したらいいか分からない。私はこれからのことをどう伝えるかを考えながら食事を進める。

ゆびわが無くなったたりしなかったら今頃今日の出来事をいっぱい話ながら食べてたんだろうな、とふと思った。そういえば2人にお土産買ったんだった。

私は椅子に座る時に床に置いたお土産を渡そうと思って、一度椅子から立とうとした時、

「ヒナ、私たちに何か言うことあるんじゃないのかい？」

そう言ったのはボーロおじいちゃん。普段はあまり口数が多くない方だから、急に声をかけられて少し驚いた。

「ええっと、今日の行商のことだよ、始めてみたけどさ」「それじゃないよ。さっきドアの前で話していたことだよ」

「あ……、聞こえてたの？」
今日の行商のことだと思ったけど、さっきロウと話していたことみたいだ。

「ドアの前で話されちゃあ、聞こえないふりもできないからねえ」
そういうのはトリアおばあちゃん。「ロウは妖精だったのね」なんて言っているし、すべて聞こえていたみたい。

今思えば確かにそうだ。あんなに大声で叫んだりもしたわけだし、聞こえないはずないよね……

「それで、いつ出発するんだい？」

「え？」

「早く教えてくれないと、準備も遅くなるでしょう？」

2人は何も聞かずに私を送り出してくれるようだ。私だったら理由や素性などいろいろと詮索してしまうのに。2人の優しさはいつも私を包んでくれる。

「話を聞いていたなら、分かるかもしれないけど、形見のゆびわを失くしてしまって探したいと思っているの。村の中やみんなには聞いたんだけど見つからなくて……だから、できれば明日のうちにも行こうと思う」

行商人たちはもう今夜のうちに出発しているだろう。それにすべての行商人が同じところに行くわけでもないのだ。情報を早く入手するなら出発は早めがいい。

「そうかい、なら準備も今日のうちに済ませないとね。リチエ達には伝えるのかい？」

そうだ。あの家族、特に3姉弟には一番お世話になった。本当は伝えるべきなんだろうけど、

「ううん、伝えない。またここに帰ってくるつもりだから、別れの挨拶はしないよ」

それにきつと泣いてしまうから。行くなって言われると決心が鈍ってしまいそうだから。伝えることなんてできない。

「そうかい。それじゃあ、村を出たらどこに行くかは決めたのかい？」

私たちは明日のことについてどうするのかを3人で話した。
いつもはご飯を食べ片づけをしたらすぐに部屋に行っていたけど、
今日は遅くまで一緒に計画を立てながら、そして最後の夜を名残惜
しむように話し続けた。

3 (後書き)

お気に入り登録が100件を超えましたw
これからも主人公たちと頑張っていけます！

ありがとうございました！！

旅立ち

私は今まで受け身で周りに身を任せて生きてきたと思う。それは15歳という年齢なら、多分当たり前のことで。

きっと日本にいたままなら、今頃は高校に進学していた。だってそれが当たり前だったから。確かに家庭の事情などで進学できない人もいるけれど、ほとんど全員がごく当たり前前に高校に進学する。それが当たり前だから。

でもこの世界に来て家族もない、この世界の知識もないという何もないところから出発した私は、きっとこのままじゃいけないんだと思う。

この村にいたら生活はできるし、ここで生きていってもいいと思ってた。でも、やっぱりこの世界に来たからには自分の居場所は自分で作らないといけない気がする。

そのためには今までのように流れに身を任せるんじゃない、自分から動かないと。

なんの後見もないし、戸籍すらない。考えるとよく今まで生活できたなっただけ。それもこれもこの村の人たちのおかげだ。

昨日の今日で、急すぎるかもしれない。絶対リチエは怒るよね。でも、決めたから。初めて自分で決めことだから。

「ヒナ、準備はできたかい？」

「うん、そんなに荷物はないし、もう出発できるよ」

昨日は遅くまでトリアおばあちゃんたちと話して寝るのが遅くなっただけ、ちゃんと早起きできた。

朝から服や下着など必要最低限の準備をし、これから2人との朝ごはん。

「そうか、……それと調子は変わりはないか？」

「うん。ロウこそ大丈夫？」

「ああ、私は何度かしたことがあるからな」

私は昨日の夜、トリアおばあちゃんたちと遅くまで話した後、ロウと「契約」を行った。

契約を行うことで私とロウは直接つながりができるらしい。

今まではゆびわを媒介にした「半契約」という状態だったみたいでもそのゆびわが無くなり、ロウに悪影響を及ぼすかもしれないゆびわとの関係を切り離すためには半契約よりも拘束力の強い契約を行うのが手っ取り早いしかった。

でも「半契約」とか「契約」とかよくわかんないことだらけで、ロウに任せっぱなしだった。

聞きたいこともたくさんあったけど、ロウが私に教えられるのは限られているみたい。

こうなることが分かっていたらもっとおばあちゃんに魔法のこと聞いたのにな、と思うけど自分で調べなきゃ。自分の足で歩いていくって決めたんだしね！

「もうどこでも魔法使ってもいいの？」

「そうだな、契約したことでヒナの魔力に周りの妖精たちが群がってくることもないだろうしな」

「そう？ まあ、よくわかんないけど魔法使えるならいいや」

トリップしてきてからロウが魔法はあまり使わなっていた

のと、日本でも日常ではほとんど使っていないからというのもあって、不便はなかったんだけど、やっぱり魔法を使えるのはうれしい。

この森の妖精たちは本当に微弱で私が魔法を使おうとすると、私の魔力を求めて多くの妖精が来るかもしれないので今まであまり使わないようにしてきた。かわいそうだけど、みんなに与えられるほどの魔力はないし、私はロウの言うことを聞くことにしたのだ。

村の人たちの中には魔法を使える人がいるけど、もともと魔力が多くないみたいで、妖精が群がってくる心配もないみたい。

私はある程度、魔力が多いみたい。自分ではわかんないけど、ロウが言うならそうなのかな？

ロウ曰く「私と契約できるくらいには魔力はある」そうだ。

「ゆびわとおばあちゃんの家族を探すのも大切だけど、その前にいろいろ勉強しなきゃだな！」

ゆびわが無くなった時はこの世の終わり、……いや、そこまでないけど、本当についてないって思った。だってあのゆびわはおばあちゃんの家族を探すための唯一のつながりだったから。でもこれからはポジティブに！ そうだよ、異世界に来るなんてめったにないし。

「全部が終わったら世界旅行とかもいいかも！」

そう思うと結構楽しいかな？ そう思うとこれからのことがわくわくしてくる。

「……おい、ヒナ大丈夫か？ 荷物をまとめたら部屋をでるぞ」

一人で百面相していた私に怪訝な顔をしながら、ロウは私がドアをあけるのを待っている。

「だ、大丈夫。ご飯食べよ！」
いかんいかん、今日は新たな出発の日だからしゃんとしないと。
そう思いながら私は荷物を持ってロウと部屋をでた。

+ + + +

「荷物の確認はしたかい？ 急だったから食べ物もそんなに用意で
きなかったし大丈夫かい？」

トリアおばあちゃんはまるで本物のおばあちゃんのように私を心
配してくれる。

「私が確認したから大丈夫だ。忘れものもないようだしな」

「そうかい、ロウがそういうなら安心だね」
トリアおばあちゃんはほっとしたように胸をなでおろす。

2人にはロウが妖精であることを伝えているし、しゃべれること
も伝えてある。最初は驚いていたけど、すぐに受け入れることがで
きたみたいだ。

どうやら2人が若いころまではロウみたいな妖精もいたらしいか
らだ。ただ最近はそのような妖精たちはこのところ見ていないから
驚いたみたい。

でもすぐに3人は打ち解けたみたいで私もうれしいかな。

「ああ、ヒナに任せると心配でたまらないからな」

「そうだなあ、ヒナは普段はしっかりしとるが、いろいろと抜けと
るからな」

「私もヒナがこれから一人になると思うと心配でたまらないけど、
ロウがいるなら大丈夫かしらねえ」

……うん、打ち解けているみたいでうれしい、かな……？
なんだか素直に喜んでいいのか？ これ……、うーん……。

「ヒナ、もうそろそろ行くか？」

私が一人うーんと唸っているとロウが声をかけてきた。

「あ、そうだね。あんまり遅いとリチエ達に気付かれそうだし」

そう。結局私は村の人に出発を伝えないことにしたのだ。トリアおばあちゃんたちは伝えた方がいいと言ってくれたけど、こればかりは譲れなかった。なんとか説得したし、朝も早いから気付かれな
いはずだ。

「手紙は持ったか？」

「うん、持ったよ。でもトリアおばあちゃん、本当によかったの？
急なことだし、確認もしていないし……」

ドアをでる直前にロウが聞いてきた手紙とは、トリアおばあちゃん
んが書いた手紙のこと。

私たちはこの国の中心である、王都にまずは行くことにしたのだ。
この世界にも戸籍などが存在しているみたいで、ここで生きてい
こうと決めたので戸籍を作ろうと思ったのだ。手続きなどはよく分
からないが、比較的簡単にできるみたいだ。

そういうことを昨夜話したところ、そのようなことを教えてもら
ったので行き先は王都に決まった。

すると2人の娘が王都にいるらしくて、もちろん王都になんて知
り合いのいない私に紹介してくれるそうさ。そのために手紙を書い
てくれて渡してくれた。

なぜか中身は見るなど言われている。この世界の文字は簡単なも
のだったら読むことができるけど、人の手紙をみるなんてことはし

ないよ。

「大丈夫だよ、なんせ私たちの娘だからね。きつとヒナを気に入ってくれるわ」

さあ、早くお行き！ と私の背中をおす。

確かに2人の子供ならきつといい人にちがいないよね。

私は2人の方を向きながら「本当にありがとう」と言いながらドアを開けた。

「ヒナのバカ！」

「うっ！！」

どんっ！ と、ドアを開けた瞬間、誰かが私に抱きついてきた。

今はまだ朝と言うには早すぎる時間。太陽はまだ顔を見せず、うつすらと星たちの輝きも見える。この村では朝日が昇る前から働く人もいるが、ほとんどの人は陽が昇ってから外へでる。なのでこの時間に外へ出て、高い確率で人には会わないと思っていた。……しかし今日に限ってその予想は外れたみたい。

「どうして急に出ていくことにしたのよ！ それも何も言わずに！ どうやらドアの前で待ち構えていたのはリチェのようだ。でもなんで私が出ていくことを知ってるの？ 昨日の今日で決めたことな

のに。

私は驚いた顔で私に抱きついてるリチエを見ながらも、首をかしげる。

「遅くにポーロじいちゃんが来て、ヒナが今日村を出ていくことを教えてくれたんだよ」

その声はナツトだ。リチエが私に覆いかぶさっていて、リチエより小柄な私は後ろを見ることができなかったので気付かなかった。

「そーよ。でも理由は教えてくれなかったわ。だから納得いかないのよ、どうして出て行くのよ！ しかも何も言わずに、急に！！」
リチエは怒ったように私に問い詰める。私はポーロおじいちゃんにどうしてリチエ達に伝えたのか聞きたかったけど、なんとなく理由が分かるからあえて聞かないことにした。

「ごめん、でも決めたの。はっきりとした理由はやっぱりいえないけど」

私はまっすぐリチエの目を見て言う。

……きつとポーロおじいちゃんは私が後悔しないようにリチエ達に今日のことを言ったんだと思う。

それは私のためだけじゃなくて、リチエ達のためでもあると思うたのだから。

何も言わず出て行ったら、お互いによくないと思ったのだから。

「……決めたのね？ 自分で。……でもヒナなんて私たちがいないのに寂しがつて毎日泣けばいいんだわ！」

なんだか矛盾したことを言ってるみたいだけど、素直じゃないリチエなりの言い方だっってわかってる。

「そう、自分で決めたの。いままでありがとね、本当に感謝してるの」

そう言いながら私は村の入り口に向かうため、リチエから離れる。

すると、

「あ、……村のみんな？」

太陽もまだ顔を出してない時間で普段なら静かなはずの村にたくさんの方がいた。

「ヒナを見送るためにみんな早起したんだからな」

ナットが私のところに来て、私の前に何か小さな箱を出してきた。

「なに？」

それを受け取りながらナットに尋ねる。

「昨日の行商で買ったんだよ。ヒナに。……今となつちゃ選別みたいなものになっちゃったけど」

それを聞きながら中身をあげると小さな紫の花がついたネックレスだった。

「かわいい……、これ、ナットが私のために？」

「別に！ ただなんとなくだよ！」

ふいつ、とそっぽを向かれたけど、「ありがとう」「というと照れたのか耳が赤くなったみたい。

「ヒナ！ 私もヒナにこれを渡したかったの！」

はい、と渡されたのは紫の髪留め。これは、

「これって昨日の？」

「そう。私とおそろいよ。嫌って言わせないんだから！」

髪が伸びたら使ってね、と行って渡してくれた。

もう！ 泣いちゃうかもしれないからみんなに言いたくなかったのに……。

「いつでも帰っておいで」とみんなが言ってくれれば本当に泣きそう。

私はみんなに付き添われながら森とは逆の方の入り口へと向かった。

ここをできれば私にとって未知の世界が待っている。これから何が起こるかは分からないけど、ここからまた新しい一歩が始まるのは確かだ。

「おねえちゃん、また帰ってくるんだよね？」

レルも今日は頑張っただけで、眠そうにしながら私に聞いてくる。

そんなレルにつこりと笑い、

「もちろん。だってここが私の故郷だもん」

そうだ。この村はこの世界で私の故郷なのだ。短い間だったけど、そう思えるくらい充実した日々を送った。

「言ってくれるわね。じゃあ、帰ってくるときはみんなにお土産たくさん持って帰ってくるのよ！」

リチエはにやっと笑い、私の肩をおす。

「それよりも王都までどうやって行くんだ？ 馬もないみたいだし、徒歩なら相当かかるんじゃないのか？」

ナットがそういえばって感じて聞いてくる。

これは昨日もトリアおばあちゃんたちと悩んだところ。でも、解決策はすぐに見つかったのだ。

「それは大丈夫。ロウに連れてってもらうから」

「……え？」

村のみんながどういうこと？　って感じで見てくる。

私も初めてだから少し心配だけど、……大丈夫かな？

ちょっと不安を感じつつも、「ロウ！」と呼ぶと少し離れたところにいたロウが私の声と同時に体から薄い紫の光を放ち、巨大化した。

「本当に狼だったんだ」

そうつぶやく私の声が聞こえたのか、

「だから何度も言ったではないか！」

と鼻を鳴らしながら私の元へとやってくる。今のロウの大きさは立ったら2mはありそうなくらい大きい。

周りの人たちは茫然としすぎて反応できないみたい。「……え？」とか「よ、妖精？！」とかそんな声が聞こえる。

「ヒナ、あんたって一体何者？」

リチエはなんとか立ち直ったのか、私に声をかけた。

「うーん、私自身もまだよく分からないかな？　でもこれだけは言える。『私はわたし』よ」

私はそついうと背中を屈めたロウの大きな背中に乗る。

前を見るとそこにはようやく顔を出し始めた太陽の姿。
この世界での私もようやく一歩を踏み出した。

旅立ち（後書き）

今回も覗いてくださりありがとうございます…（

お気に入り登録や拍手、評価していただいた方々にも感謝感謝です
！

「すごい！ 速いよ！！」

私たちは太陽が昇り始めたあと、村を名残惜しみながら旅立った。そして今、私はロウの背中に乗り、森の中を駆け抜けているのだ。

「ふっ、これで早いかな？ なら私が本気で走ればもっと速いぞ」

「うわあっ！」

ぐんっ、とスピードが増した。その急な動きに私の上半身が仰け反る。そして今までもそれなりの早さがあったのだが、ロウはそれよりももっと早いスピードで走りはじめた。

「このように風を切って走るのはいくら振りだろうか……」

日本にいた頃はおばあちゃんのゆびわの中にずっといたのでこうやって外で走るのとても久しぶり何だとか。それにこちらに来てからもずつと小さいままだったから思いっきり走ることができなかつたみたい。

「走るのが好きなら、毎日じゃないけどたまにこうやって私を乗せているんなところにつれてって！」

かなりのスピードになってきたから、私は目を開けることができず、声も叫ばないと届かないくらい

「そうだな！ ヒナには感謝せねばな！ この姿に戻ったのも何十年ぶりか！ ……ヒナ、すっかりつかまっておるのだぞ！！」

「っえ！ ぎいいやあぁー！！」

ロウは私に声をかけると同時に森の先、木が途切れた場所、崖が
ら思いっきり飛んだのだ。

「ぎゃー！ しぬー！ー！ー！」

私は怖さのあまりロウにぴったりとしがみつく。ロウは崖の手前
で一度体全体をかがめ、足や体すべてに力を溜めたかと思うと一気
に飛躍した。その瞬間、私は何とも言えない浮遊感と恐怖感、それ
と少しの高揚を感じた。

ちよつと好奇心でうつすらと目を開けてみる。

「……うわあ、すごつ。きれーい！」

眼下には森の木々や川、少し開けたところには森の動物たちだろ
うか、鹿みたいな動物が群れで走っている。

森の中から見える景色と空から見える景色はこんなにも違うなん
て、なんというか、言葉にできない。陳腐だけどすごい、としかい
えない。

「つて、あれ？ ロウって空飛べるの？」

「いや、飛べはしないな。ただ跳んだだけだ」

ですよねー、だって羽根とかないし。同じ「とぶ」でも意味違っ
よねー

「と、いうことは……、跳んだらっ！」

「落ちるな」

サラツと言っちゃってるけどー！ だってめちゃくちゃ高いよ、
落ちたら死ぬよ！

私たちの下にはさっきまで感動していた景色がまだある。
だけど今は感動なんてして暇ない。

「さっきより森が近づいてるんですけどーっ!」

ぎゃー! と叫ぶだけ叫びまくる私。誰だって叫ぶでしょ、この状況は!

「耳元で騒ぐでない。耳がおかしくなるではないか」

そんな殺生な! 私はロウの体にこれでもかとぴったり貼りつく。どンドン地上に近づいてるー! 口を開けたら舌を噛むかもしれないので口をしっかりとじ、着地の衝撃に備える。

もう着く! という瞬間、目をぎゅうと閉じたけど……

「……あれ? どんってならない。もう着いたの?」

「ああ、もう地上に着いたから目を開けても大丈夫だぞ」

そう言われたので、私はそー、と薄眼を開ける。と、ロウの言う通り空から見ていたであろう、森にしていた。

「し、死ぬかとおもった……」

私はロウにしがみついたまま、はーっため息をつく。一時はどくなるかと思っただよ。

「楽しかったらろう?」

ロウは頭だけこちらに向き、さも、当たり前のように聞いてくる。けど、ひとこと言わせると、

「もう絶対いやー!」

森の中に私の叫び声が響いたのだった。

+ + + +

村から出発して2日。最初は跳んだりものすごいスピードに驚いたりしたけど、だんだんと慣れてきた。それよりもちょっと楽しくなってきた。

初めて崖から跳んだときは天国のおじちゃんやおばあちゃん、お母さんたちに「こんなにちは」しなきゃいけないかもと本気で思ったのに。

まあ、でもそれが2日続くと慣れてくるもんだね。……慣れてって怖いねえ。

私の魔力のおかげで疲れを知らないロウはどんどん進んでいった。なんと、今日の夕方には王都に着くかもしれないらしい！

歩いて2週間、馬や馬車でも1週間近くかかるといわれているだけに、比べるとかなりの速さだと分かる。

ま、道なりに進んだわけでもないしね……。

とにかく、こんなに早くつくとは！

でも何度も死ぬ思いをしたんだし、それくらい早くついてもらわないとね。

今日の夕方には着くといってもまだここは森の中。

村のみんなにロウの姿はあまり見せない方がいいかも、と言われたから整備されている道じゃなくて獣道を通って来たのだ。

「確かに、ロウといったら目立ちそうだしね……。」

「何か言ったか？」

「ううん、それよりもどのあたりまでこうやっていくの？」

まだ森の中で人目に触れないように来ているが、王都に近づくと

つれてその森が狭く、そして木なども少なくなってきた。隠れるのが難しくなってきたのだ。

途中に大きな町や他の村をよけて通ってきた。その町や村を抜けると徐々にだが王都へと向かっているであろう馬や馬車に乗っている人々や本で見たような騎士の恰好をした人々が増えてきていたのだ。

そういえば、村で見たあの王都の学生たちも途中で越した。彼らも、先生だろうか、大人の人の先導に馬に乗って移動していた。

「そうだな、もう少し先まで行くつもりだ。私たちには馬がないからな。ぎりぎりまで行かないと歩いていくはめになるしな」

そうなのだ。途中でロウから降りてしまったら、馬のない私たちは徒歩で王都まで行かないといけない。もちろん、ロウに乗ったまま行くわけにもいかないから、最後は降りないといけないんだけど。。

「ま、馬があっても乗れないしね！　じゃあ、ロウが大丈夫だと思うところまで行ってくれない？」

「ああ、分かった」

私は歩くことに関しては、あのトリップしてきたときの経験からか、かなり遠い距離でも大丈夫かなという気持ちがある。歩くことに関しては、あれ以上のものはないよね……。

途中人が多いところや、影がないところなどは歩いて移動した。休憩もはさんだのでロウが予想していたよりは少し遅れたけど、ついに王都が見えてきた。

「見えてきたな。あれが王都だ」

「あれが……、」

ロウは今は小さい仔狼の姿で私たちは先ほどから道に出て歩いてきていた。

今私たちがいる場所は小高になっている丘の上。後ろ、今歩いてきた道は整備された道に沿って広大な森が広がっていた。

そして私たちの目の前には天をも貫く高さの山脈。その山脈に背後を守られるようにして王都が扇状に広がっていた。王都の周りには中と外を区切る堀があり、王都へ入るための門がいくつも見える。堀の中、門のすぐ近くには一般人の家らしきものが建ち並び、門に沿う大通りにはたくさんのお店が立ち並んでいる。門がいくつあるのでしょうか。大通りも同じ数だけあるのだろうか。

そして、その大通りの突き当たりにはこの国の要、お城が立ち構えていた。

「……お城ってもっと煌びやかなものを想像してたけど、全然違うね。要塞って感じ」

王都の中心といっても、すぐ後ろに山脈がある場所に要塞のようなお城があった。

まるで山脈と一体になっているみたいにも見えるお城は、さすが国の象徴、と言えるものだ。

「そうだな、他の国に攻められても簡単には落ちない作りにしてあるからな」

「そういえば、ロウは何度かここに来たことあるって言ってたね」

「昔のことだな」

ロウは昔、王都に来たことがあるみたい。まあ、この場所を知っている時点で分かっているけど、懐かしくはないのかな？

「ロウ？」

「……さあ、日が暮れないうちに王都に入るぞ。夜になると門が閉まってしまはずだ」

ロウは一瞬、懐かしそうに目を細めて王都を見たかと思うと、次の瞬間にはいつもどおりに戻っていた。

昇った太陽が私たちの背後にある森へと沈んでいく。

沈んでいく太陽の光で私たちの影は伸び、その影を追って歩いていく。

夕日は山脈に当たりきらきらと輝き、お城に光の粉が降り注いでいるようにも見える。

町々は夕日で茜色に染まり、山脈の背後にはうっすらと月が昇り始めている。

私はその幻想的な景色に見惚れながらも、王都に入るため足早に丘を下っていった。

2 (後書き)

ありがとうございます---

太陽が沈み月が輝き始めるのとともに、いくつかある王都への門は静かに閉まっていった。あたりは門を閉めるときの合図である、鐘の音が鳴り響いている。

風の妖精たちが私たちを歓迎するかのようになり、さわさわと私と口ウの間を通り、心地良い風が吹く。

王都だからだろうか、このあたりの妖精たちは他の場所の妖精たちよりも魔力に満ち溢れているみたい。

私とロウは丘の上から王都全体を見た後、足早に丘を下りなんとか無事に王都へと着くことができた。

でも最初は小走りで走るくらいだったんだけど、ちょーっと間に合いそうになかったから、

「な、なんとか着いた……、こんなに……本気で走ったのって、いつぶり………」

最終的には風の妖精の力を借りて、全速力で走るはめになってしまったのだ。

かなりすごい形相だったのか、門を閉じようとしていた中世の騎士のような恰好をした人たちがちょっと待ってくれたくらい。

「お嬢さん大丈夫か？」

「あ、はい。なんとか。お恥ずかしい姿を、見せてしまって、すいません………」

私は呼吸を整えながらその騎士のような恰好をしたおじさんに声をかけられたので返事をする。

私がつこりと返事をかえすと安心したのか、「若い娘は元気だなー」と言って仕事に戻って行った。

どうやら私が最後だったらしく、おじさんは同じ恰好をしたもう一人の人と門の施錠を行っていた。

私は門から入ったすぐのところにいる。あたりには手続きするようなどころもないし、トリアおばあちゃんたちも何も言っていないから、多分このまま入っていいのかな？

周りには私よりも先に来た人たちであろうか、旅人風の人や商人風の人達がまだ何人かいるみたい。

彼らも何も手続きしてないし、大丈夫っぽい。

「ヒナ、本格的に夜になる前に渡された手紙の住所のところに行くぞ」

「そうだね。とりあえず、今日はトリアおばあちゃんの娘さんのところにも泊めてもらえたらいいけど」

息が整ってきたし、ここに居続けるわけにもいかないので移動することにした。

よいしょつ、と数少ない荷物をもち私とロウは目的の場所を探すためにまず、大通りへと目を向けてみたけど……。

「えーと、このまままっすぐでいいのかな……？」

……どうやら簡単には行きそうにないみたい

+ + + +

「ねえ、ロウは王都に行ったことがあるんでしょ？　なんとなくか、道分らない？」

門のすぐそばからたくさんの店が並び、路地には家が立ち並んでいる。

この大通りには家路につく人や飲食店に入って行く人などでわいわいと賑わっている。

さすが王都となると、私たちがいた村や途中で通った町とは比べ物にもならない。

街並みもきれいに整備されていて、建物はどの村、町もそうだったが、地球ではヨーロッパを連想させるようなレンガで建てられたものなどモダンな感じ。

「……………まったくわからんな」

「やっぱりね……………」

まあ、ロウは50年近くも日本にいたんだし、街並みも変わるはずよね。でもこうもはっきり言われると何と言うか、潔い《いさぎよ》《よ》というか。

「とにかく行ってみるしかないのではないか？　ここにいてもどうにもならんしな」

「そうだよね、道は人に聞けばいいか！」

ということ、まずは道なりに歩いてみることにした。

最初はなんとかなるさー！　と歩いていただけ

「……迷った」

「迷ってしまったな……」

結局は迷子になってしまった。

とぼとぼ、と周りを周りを見渡しながら、もうどこを歩いているか分からないけど歩き続ける。

さつきも通ったかもしれない道だけどそれすら今日来たばかりの私たちでは分からない。

何度か人に道を尋ねたけど、この王都が広すぎて途中でどの通りをいけばいいか分からなくなってしまふのだ。

「あー、どうしよう。この年で迷子って嫌だーっ。もうさあ、どっかの宿に泊まらない？」

疲れたのとお腹すいたのととにかく休みたいと思った私は口々に提案してみる。

お金は村を出るときに今までのお給金としていくらかもらったものがあるので、安い宿だったら泊ることはできると思う。

「そうだな。さすがに2時間歩いて見つからんのなら今日はあきらめた方がいいかもな……」

そう。私たちはもう2時間近くも迷子、……じゃない、トリアおばあちゃんの娘の家を探しているのだ。

というところで、今日は宿を探そうということになったのだが、丁度その時。

「なんだ？ さっきのお嬢ちゃんじゃないか？」

「あ、門の！」

おじさんに会った。

+ + + +

「はははー！ まさかあの時からずっと歩き続けてたなんてなあ！
聞いてくれさえすれば教えてあげたのに！」

長い時間歩き続けていたから最初の門から結構離れたところにいる
と思ったけど、あんまり移動してなかったみたい。
というか、同じところをぐるぐると回ってたのに気づいてなかった
たのかもしれないけど……

「いやいやー、そんなことできませんよ！ お仕事してたみたいで
すし」

それに今は大丈夫なんですか？ と付け加える。

「まあー、あれは確かに仕事だな。でも今日は門を閉じたら終わり
だから大丈夫だ」

「でも本当にいいんですか？ もう遅くなってきたし、帰宅途中だ
つたんじゃ……」

「いいよいいよ！ 困っていたらお互い様だしな。それに俺もこれ
からそこに行くつもりだから」

丁度今、このおじさんに出会ってなんと私たちの目的地である、
トリアおばあちゃんの娘さんの家に連れて行ってくれるみたい。
しかもここからそう遠くないところにあるらしく、すぐ着くとの
こと。

……うーん、そんなに近かったのならなんで私たち迷ったんだ？
なぞだ……

ということでおじさんのお言葉に甘えて、連れて行ってもらうことにした。

あ、そう言えば……

「まだお名前聞いてなかったですよ。伺ってもいいですか？ ちなみに私は雛で、こっちは相棒のロウです」

こんなにお世話になっているのにずっと脳内でおじさん呼ばわりしていた。

もしかしたら若いかもしれないし、おじさんはいけないよね。

ロウは今、仔犬のふりをしているのでちょっとおじさんの方をみただけで、声は出してない。

「そういえばそうだったな！ 俺はグローリーだ。グロウでいいよ」
そう言って自己紹介してくれたおじさん、グロウさんはどうやら30歳らしい。……おじさんって言うってごめんなさい。もうちょっと年上だと思ったことは内緒で……。

「はい、グロウさんですね。今日はありがとうございます！」
「礼儀正しいなー、よくみればかわいいのにすごい顔で走ってきた女の子と一緒にだなんて思えないな」

グロウさんは、もう一人の奴もかなり驚いてたぞー、と笑いながらさっきのことを言うてくる。

「そ、それはもう忘れてください！」

あの時はかなり必死だったんだから！ と頬を膨らませながらグロウさんを見上げる。

頭1個分以上は高さが違うから、私は話しながら歩いていると首

が痛くなってきた。

「ははっ！　じゃあ、忘れるということにしておくよ。……あ、あれがヒナの探していた家、というか店、宿だな。俺はいつもここで飲んでいるからおかみさんにヒナのことを紹介してやるよ」

歩きながら、私はグロウさんに知り合いの紹介で今の目的地へきたということと話していたのだ。それでその話をしたらグロウさんがついてだからと一緒に行つて紹介してくれるみたい。

あの顔を見られたのを省くと、王都で最初にグロウさんと知り合えてよかった。

私は慣れない街を歩いた疲れを少しでも癒したいと思いながらも、とりあえず目的の1つである場所にようやく来れたことに安心した。そう思いながら彼の後をついていくと、彼は一軒の宿らしきところに入つて行つた。

私とロウもそのあとに続いた。

王都での生活

「ほあーっ しあわせー！」

私は目の前のベッドに跳びこみ、足をばたつかせる。久しぶりに体を洗って、久しぶりのベッドだ。

「まったく、来た早々騒がしいやつだな！ 私は疲れたからもう寝るぞ」

ロウは私が今ごろごろしているベッドの隅に潜り込み寝る体制だ。どうやら長時間、変身？ あの大きな姿になってたから魔力をたくさん消費したみたい。

私はとくにどうもなっていない気がするけどなあ。いつもよりお腹すいたくらいかな？

「えー、まだ夜は始まったばかりだよ。起きてようよー」

「知らん！ 下に行けばグロウやラネ達がいるはずだから、起きていたいのならそっちへ行けばいいだろう。私は寝る。」

そう言うといくら声をかけても返事をかえしてくれなくなった。しっぽや耳をこちょこちょしたりしたけど反応なしだ。

疲れてるのかー、とあきらめた私はさっきロウが言ったように下の階へ行こうかなとも思ったけど、それはやめることにした。

「あの2人につかまったら朝までしゃべってそうだしな……」

そう思ったので、私もロウの眠るベッドの中へ入っていく。ロウの温もりですでに少し暖かくなっている布団に包まれながら、今夜のやり取りを思い返す。

+ + + +

「よう、ラネさん！ 今日も飲みに来たぜー！！」

グロウさんはある一軒のお店の中に入って行った。そのあとを追って私たちもドアを開ける。

カラン、とドアについた鈴の音が店中に響く。

私は先に店内へ入ったここで唯一の知り合いであるグロウさんを探すためにきよろきよろとあたりを見回した。ここはどうやら食堂のようで、仕事帰りの人たちであろうか、何人かがテーブルでお酒を飲んだり、ご飯を食べたりしていた。

そしてグロウさんは奥のカウンターらしきところで1人のおばさんと話をしていた。

「お、こつちだ！ ヒナ！ この人が多分ヒナが探していた人じゃないか？」

手招きをしながら私を呼ぶのでそちらに向かう。近くで見ると、かなり恰幅のいいおばさんだ。

「あんたがヒナかい？ 知り合いに私を紹介してもらったと聞いたけど、誰に紹介されてきたんだい？」

あんたみたいな女の子を持つ知り合いなんていたかね？ と首をかしげている。

全然知らなくて当然だ。だって、トリアおばあちゃんたちは私のことを知らせていないと言っていたからだ。だからこうやって直筆の手紙を持参したのだ。

「はい。私はトリアおばあちゃん、……トリアさんから紹介されてきました。えと、トリアさんからの手紙も預かっています」

私はトリアおばあちゃんから預かった手紙をおばさんに渡す。受け取った彼女はその場でその手紙を読み始めた。

「……なんて書いてあるんだろう？ 王都で仕事を探してやってとか、困ったことがあったら手伝ってあげて、とか書いてあるのかな？」

そんなことを考えながらおばさんを見ると、どうやら手紙を読み終わったらしく、私の方に顔を向けてきた。

「ヒナは私の母さんたちのところで一緒に住んでいたみたいだね」

「あ、はい！ 1、2カ月ほどでしたがお世話になりました」

「で、家族や親類はいないんだね」

「……はい、森の中で祖母と暮らしていたんですが、その祖母が亡くなったので。身元も不確かな私に良くしてくださいました村のみんなにはとても感謝しています」

どうやら手紙には私のことについていろいろと書いてあるみたい。紹介、と言つても相手のことを知る必要があるしね。

トリアおばあちゃんたちにもトリップのことだけは伝えていない。いつかは言つつもりだけど、今は心配させたくなかったから。

「そうかい、それはさびしい思いをしたね……。それからヒナは今日から一緒に住むことになったからね」

「はい。……って、え?!」

つい「はい」って言っちゃたけど、今一緒に住むって言ったよね？
なに？ 手紙には何が書いてあったの?!

考えていることが顔に出ていたのか、おばさんが説明してくれた。

「簡単に言うと、『家族が増えた。あなたの目の前にいる娘は義理の妹だ。初めての王都で困っているようだから助けてあげな』ということだよ」

母さんの言うことには逆らえないからねー、と笑っている。

笑う時の目元がトリアおばあちゃんに似ていて、見た目は迫力あるけど優しい人なんだと分かる。

「でも！ そんな急だし、迷惑になるし！」

そうだよ！ しかも他の家族の人に相談もしてないみたいだし！
家族の人も急に他人と一緒に住むことになったら迷惑だと思っし！

「家族が困っているなら助けるのが当たり前だろう？ 知らない間にできた妹というよりも娘だけど、母さんたちがあんたは良い子だつて書いてあつたし、それに困っている子を外に放り出すわけにもいかないしねえ」

……『家族』。トリアおばあちゃんたちが私のことをそう思ってくれていたなんて。

いつも親切に接してくれていたけど、改めてそう言われるとかなりうれしい。

「他の家族の方に聞かなくてもいいんですか？ 一緒に住むのならやはりみなさんの意見も聞かないと……」

もし誰かに反対されたら無理しても違うところで宿をとるか、部屋を借りるかするつもりだ。

家族の意見も大切だしね。

「ああ、それなら大丈夫さ。この家の主権は私にあるからね！ 旦那も息子も私が言ったことに文句は言わないよ！」

というかわせないよ！ という感じがするのは私だけだろうか

……
どうやら住む場所には困らないみたいだ。

+ + + +

ロウも一緒にいいと言われたし、こんなに円滑に物事が進んでいいのかな、と思っっちゃうくらい。

私たちはあれから旦那さんと会って軽く挨拶をして、グロウさんも一緒に夕食を食堂でとらせてもらった。

おばさんの名前はラネットさんで、旦那さんはウインズさん。

ラネさんはやっぱり豪快なお母さんって感じで、ウインさんは優しいお父さんって感じ。

2人はこの食堂兼、宿を経営していて表はラネさんが裏方はウインさんが切り盛りしてるみたいだ。

で、2人には息子が1人いるらしいけど、どうやら学校の寮に住んでいるとのこと。

週末にはたまに顔をだすって言ってた。

私が与えられた部屋はその人、名前はイアンとかいうラネさんたちの息子さんの部屋だ。

ほとんど帰ってこないから荷物なんかはすべて寮にあるとのこと、借りた部屋はベッドやタンスなど必要最低限しかない。

自由に使っていいと言われたのでトリアおばあちゃんのことでもそうだったように、ここでもお言葉に甘えることにした。

「あー、この家族にはお世話になりっぱなしだなー。働かせてもく

れるし、本当にラッキーだ」

部屋の明かりを消しているので、暗い中ベッドで独り言を続けた。ラネさんたちは私を住まわせるだけではなく、仕事まで与えてくれるというのだ。

明日から頑張るぞー！ と意気込む。すると久しぶりに温かいベッドで横になったからか、心地よい睡魔が襲ってくる。

私は「ふあぁっ」と大きなあくびをすると、下の階からうっすら聞こえるラネさんたちの声を聞きながら眠りについた。

王都での生活（後書き）

今回もありがとうございました！

窓から太陽の光が入ってくる。その光が窓わきで寝ている私の顔にかかり、眩しさを目を覚ました。

王都だからか宿だからか、ラネさん家の窓はトリアおばあちゃんのところの雨戸のような開け閉めする窓じゃなくて、日本のようなガラスの窓だ。

寝る前にカーテンをしなかったので、その窓から直接日の光が顔に当たる。

「……うん、眩しいー。もう朝………?」

村にいた頃は朝日とともに起きていたけど、昨日の今日で疲れがたまっているみたい。起きないといけないと分かっているにもかかわらず起きられないんだよね、これが。

「んー、でも初日から寝坊できないしー」

そう言いながらベッドの中で背伸びをする。そして「つよー!」と勢いをつけて起き上がる。

「王都2日目、頑張りますか!」

ちよつと体がだるいけど、ベッドで寝れたし野宿の時よりかはいくらか疲れがとれた。

私は村から持ってきた麻のワンピースに着替えると、まだ寝ている口ウに「起きて!」と起こす。

私より先に寝たのに、余程疲れていたのかな……。

私はようやく起きた口ウと一緒に昨日からお世話になっているラ

ネさん夫婦の元へと向かった。

「ちがうよ、あつちのテーブルに持って行って!」「いらっしや
いませー」「おはようございます!」

一階へ向かうとたくさんの人でにぎわっていた。
宿に泊まっている人や外からのお客さんが朝食を食べに来ている
のでこの時間はかなり混むみたいだ。

昨日の夜はお酒やおつまみ、夕食などだったが、今はパンのいい
匂いが私のいる一階の食堂部分にあふれている。

「うわあ、朝から忙しそう。もっと早く起きて手伝いすればよかつ
たかな?」

ラネさんは従業員だろう人と何人かで接客をしている。かなり忙
しそうで話しかけられる状況じゃないようだ。

厨房の方へ行ってみると、こちらもすごかった。ウインスさんを
中心としてこちらは何人かで朝食を作っていた。それぞれが何らか
の持ち場があるみたいで素早い動きでどんどんこなしていった。

「……まるで戦場だな」

ぼそつとつぶやいたロウの声は離れた場所にいるはずなのに、み
んなの声でかき消されるくらいだ。

「なんか、今行ったら逆に邪魔になりそうだなよね」

ということと、それから1時間程度邪魔にならない位置でみんな
の働きを見守っていた。

+ + + +

「ヒナ！ そんなところにいたのかい？ 声をかけてくれれば朝食を準備したのに」

今からは朝の時間が終わって、これから従業員の人たちと遅れた朝食をとる時間らしい。

「そんな、みなさんが働いているのに私だけ食べるなんて！ お手伝いしたかつたんですけど邪魔になっちゃいそうだったんで何もできずすいません……。明日からはもつと早く起きてきますね！」
ウインスさんたち厨房の人が次々とおいしそうな食事を運んでくる。

私は何もしてないのにいいのかな？

「昨日来て疲れていると思ったからね、起こさなかったんだよ。でもヒナがいいなら手伝ってもらおうかね。丁度人手が足りないところだしね！」

さあさあ、座りな！ と私の分の朝食も用意してくれている。もちろん口ウにはテーブルの下にミルクが置かれていた。

みんなで朝食をとりながら、他の人たちに私を紹介してくれた。ここで働いている人たちは主に主婦の人たち、日本で言うパートさんのような人たちだ。そのほかはウインスさんのように厨房で働いているおじさんたちだ。おじさんたちはこの従業員のようで朝、晩働いているらしい。

主婦の人たちは朝は働く人、昼働く人などで分かれていて、この朝食が終わったら今日は帰るみたいだ。

私が「よろしく願いします！」というと、

「こんなに若くてかわいい娘が来たらお客さんも増えるんじゃないのー、ラネさん！」

みんながよろしくね、と言ってくれた。どうやらい人そうな人達ばかりでお仕事も教えてもらえることになった。

「ちょっとー、ロウ邪魔だよ。手伝わないんならどいてよー」

今私がしているのは床掃除。先ほどの食堂部分から掃除をして、廊下までできている。一階部分が終われば次は宿になっている2階部分だ。

「手伝いとは……、さすがに何を手伝っていいのか。私にできることは何も無いぞ！」

ロウはそう言いながら日の当たる暖かい場所に移動して日向ぼっこ状態だ。

んもー！ 確かに手伝いとかできなさそうだけとさ！

私はごろごろしているロウをじとー、と見ながら掃除を続ける。

「食べてすぐ寝たら牛になっちゃうんだからね。そうになったらロウは仔狼じゃなくて子牛だよ！」

ふんっ、と寝ているロウに叫ぶ。すると「な、なに?! 牛になるのか? 食後に寝たら!」と跳び起きていた。そんなロウを見て声を立てて笑いながら階段も掃除していく。

この店の名前は「リコット亭」という名前で食堂兼、宿をしているそう。宿は1日中開けているけど、食堂の方は朝、昼、夜と時間を分けていらしい。

今の時間は朝と昼の間の時間。朝は働いていた主婦の人たちは朝食後に家庭へと帰って行った。お昼に働く人が来る前にラネさんやウインスさん、厨房のおじさんたちとで掃除やお昼の仕込みに仕入れ、宿の方の洗濯をすませるとのこと。

朝いた主婦の人たちは2人で、お昼も同じ2人。夜はラネさんとウインスさん、厨房のおじさんの2人、全員で4人で働いてるらしい。宿の仕事もあるから食堂を開けているのは朝、昼とも2時間程度。夜は夕暮れ、門が閉まる鐘がなったあたりから開店するのだ。

「ヒナー！ 終わったかい？」

裏口から声をかけてくるのはラネさんだ。彼女は今、開いている部屋のシーツなどの洗濯をしているみたいだ。

「もうちょっとですー！」

少し離れた場所にいるのでお互いに大声になってしまふ。「それが終わったなら外の掃除も頼んでいいかい？」と聞かれたので、

「わかりましたー！」

と答えた。

「でも、今から階段と二階部分だしなあ。でももうちょっとで終わるって言っちゃたし……」

あわてて掃除の速度を速める。ロウと話したら遅くなっちゃたじゃない、と人じゃなくて、ロウのせいにして残りを掃除していく。

「風と水の妖精に頼めばいいんじゃないか？」

「わあっ、いつの間にかいたの？ びっくりした……って、ロウいいこと言っ……」

さつき私の言った「牛」発言を信じたみたいで寝転がるのをやめて私の後について来ていた。

「今のヒナが魔法を使えばこんな掃除、すぐに終わるんじゃないか？」

「そっか、もう普通に使って大丈夫だったんだよね。忘れてた！」

そう言いながら私は近くにいる風の妖精を探し、集まってきた妖精たちにゴミを集めてほしいとお願いした。

風の妖精たちは「いいよー」と言うように私のところまでゴミを集めてくれる。

そんな妖精たちを見ながら、水の妖精にも声をかける。

「床を掃除したいんだけど、お願いできる？」
すると彼らも「このあたりだけー？」という感じできれいに水拭きしてくれた。

手伝ってくれた彼らに「ありがと、助かった！」と魔力を与えてあげる。

妖精たちは「こっちこそありがと！ いつでも呼んでー」と私たちの周りを回りながら消えていった。

「さ、外も掃除しますか」

外は軽く掃いて水をまくだけだったので、すぐに終わることができた。

私が外掃除をしているときにお昼の人達がきていたので、もうすぐ開店のようだ。

よーし、次はお昼の戦場だー！

+ + + +

「おつかれ、ヒナ。今日からなのによく頑張ったね」
ウインズさんが私にお昼を渡しながら声をかける。

15分ほど前にお昼の時間が終わってようやくお昼をとることができるのだ。

「いいえー、あたふたしてあんまりお役に立てなかったし。みなさんはやっぱり凄いですね！」

ありがとうございます、と受け取りながら答える。

そう、お昼は朝に比べてお客さんの入りがすごかったのだ。

接客をしていたラネさんや主婦のみんなはどんなにお客が多くてもテーブルの場所や注文の内容を覚えていたりたくさんのお皿を片手に乗せていたり、その他もろもろを素早くこなしていたのだ。

「あら、ヒナは今日からだって言うのに、結構さまになっていたわよ」

「そうよ。私の時なんか、緊張しちゃってお皿何枚割ったか覚えてないわ」

「本当ですかー？ まあ、ほとんどお皿を引いたり、テーブル拭いたりとかしかしてないですから」

お昼の主婦の人たちも一緒に食べながら今日のことを話す。お昼の人は主婦と言っても20代の人たちで年が結構近いせいか、何かと話しかけてくれる。

ラネさんや厨房のおじさんもよく頑張ったと褒めてくれると、最初はおろおろだったけど今ではやる気が大きくなった。

「そうだ、ヒナ。この後は休憩をやるからワインと一緒に役所へ行ってきな」

そうだった。この世界、国での戸籍がないので作らないいけないと言ったのは私なのにその本人が忘れていた。戸籍がないと、町や王都に入ることができても、病院やなんらかの証明があるときに提示できなくて不便だそうだ。

「でも、いいんですか？」

ワインスさんも一緒に行ってくれるのはありがたいけど、2人も抜けたらこっちが大変なんじゃ、と思ったのだ。

「ああ、こっちは大丈夫さ。ワインにはついでに買い出しも頼んであるしね」

「そうですか、じゃあこの後すぐ行ってきますね！」

そうときまれば早くお昼食べてしまおうと、ぱくぱくと残りを口に入れていく。

「　　っごほ！　けほっ」

……ちよっとむせた。

「あせらなくていいから、私もまだ食べているし、ヒナもゆっくり食べなさい」

「あ、ありがとうございます……」
ワインスさんに背中をさすられながら喉に詰まったものを飲み込んだ。

「わー！ おつきいですねえ。これはお城じゃないんですよね？」
「ああそうだよ。ここは王都の住民がなにか手続きを行う時に来る場所だ。働いている人の中には貴族の方々もいらっしやったりもするんだ」

今私たちがいるのは大きくて立派な建物の前。門が、塀が、わあ！ 中にはシャンデリア？！

ここはお城、王宮ではないようだけど、それに近い場所にある王都の民のための詰め所なのだそうだ。

市役所とか役場ってところかな？ にしても豪華さが半端ない！ そんなにきらきらしなくてもいいんじゃないかってくらいだ。なんか椅子とかもムダに豪華！ 壺とかあるし、これ壊したらどうなるのー？ きよるきよると、まるで小さな子供のように視線をさまよわせながら、ウインスさんについていく。

「ここが戸籍を扱うところだよ。ヒナはまだ未成年だから私が一緒についてきたんだ」

「なるほど。確かに子供だけじゃ、そういった手続きはできないですよね」

一人で空いた時間にでも行こうと思っていたが、ウインスさんに聞いてそうだなと思った。

そんなことも知らなくてよくここまで来れた自分を褒めたいくらいだ。

「こんにちは。今日はどういった要件でしょうか？」

受付の女性が私たちに聞いてくる。ウインスさんが私の戸籍を作りたいと説明してくれた。

私は簡単な質問にいくつか答えると「では新しい戸籍を作るので、

家名を決めてください」と言われた。

「ヒナ、家名はどうするんだ？ そのままヒナのおばあさんの家名にするのかい？」

「えっと、うーん」

家名のことなんて全然思いつかなかった。やっぱり異世界っぽいのがいいよね、と思ったので、

「フローリスで。ヒナ・フローリスをお願いします」

「どういう意味なんだい？ フローリスとは」

元来た廊下を歩きながらウインズさんが尋ねてくる。それはフロリスという名はないわけではないが、家名ではなくて主に名前の方で使われることが多いからだそうだ。

それもそのはずだ。

「フローリスと言うのは祖母の名前なんです。家名は今まで使うこともなく、覚えていなかったので祖母のなまえにしました」

「なるほど。まあ、ヒナにあっているからいいと思うよ。それにしてもヒナは魔法が使えたんだね」

「はい、王都でも珍しいんですか？」

先ほどの女性の質問の中に「魔法が使えるか」というのも含まれていた。特に気にせずに応えたけど、使えないって言った方がよかった？

「確かに珍しいものもあるけど、それを表にださなかったからびっくりしたんだよ。魔法は貴族の方々によく発現するもので、私たちの

ような一般人には珍しいんだ」

だから少しでも使える人は尊敬されたりもするし、中には傲慢な人もいるくらいだよ、と教えてくれた。

どうやら、村にいた時と同じように魔法を使える人は少ないみたいだ。

おばあちゃんはこの世界の人はみんな使えると言ってくれたのに、この半世紀で何があったのだろうか？

「そうなんですか……。あ、今日はありがとうございました！」

そう言っただけで私はウインスさんと別れる。ウインスさんはこの後買い出しに行くらしい。私は夜の間まで休憩を貰ったので少し王都をぶらぶらすることにしたら。そして「じゃあ、また後で」と私たちは門の前で別れた。

「ロウお待ちせ！」

私は門の前で待っていたロウに駆け寄る。さすがに建物の中には入れてもらえなかったのでここで待ってもらったのだ。

「ああ、ではどこに行くか？」

「そうだなー。ゆびわとかの情報を探さないといけないんだけど、とりあえずは王都に何かがあるかを見たいと思ったんだよね。お城もだけど、図書館とか。おばあちゃんが話してくれたお話があるかもしれないし！」

あんまり内容は覚えてないけど、見に行く価値はあるかなと思ったのだ。それに図書館にはこの世界についての情報もたくさんあるし。

「王都の図書館か。確か一度行ったことがあるし、城の横にあるの

でも覚えている」

「ロウが場所を知っているようなので連れて行ってもらうことにした。」

「そういえば、この前ロウにおばあちゃんの名前を聞いてたからよかったよ。家名を何にするかって聞かれて、とっさにおばあちゃんの名前にしちゃった」

私はロウについていきながら先ほどのことを説明していた。

「そうか、まああの名前を使ったのは数度だけだがな。菊とこちらにいたのは前にも言ったがほんの少して日本に行ってから少しして名前を変えていたしな」

「ふーん、でも名前も何らかの情報だよな！ 忘れないためにも家名にしといてよかった！」

そのあとはさっきの建物の内装のこととか、王都の人もあんまり魔法を使える人はいない、などの話をしながら歩いた。

20分ほど歩くとお城とは違う建物が見えてきた。お城はあまりにも大きすぎて王都の中だったらどこからでも見えそうなほどだ。

そのお城の城壁の横にある建物が王都の図書館らしい。こちらもかなり立派なんだけど、どうも横にお城があって目立たなくなっている。

「わあ図書館までもが豪華！ 本を読むところなのに！」

「こちらロウは中に入れないみたいで外で待ってもらうことにした。」

「こういうときはおばあちゃんのゆびわがあつたら便利だったんだけどなあ、と思いつつも一人で中へと入って行った。」

中に入るとそこには天井まで積み上げられた本棚でいっぱいだった。

2階や3階もこのように本があるらしくて、図書館に地図が置いてあった。

司書の人も大勢いるし、学生だろうかローブのような制服？ を来ている人も多く目立つ。

普通の人はまだ仕事の時間だから大人は司書の人や子供連れの親以外はあまり見かけない。

そして図書館独特の埃かぶったような静かな空気の中、私はまるで本の国に来た気分になりつつ本棚の並ぶ世界へと足を踏み入れた。

2 (後書き)

こんばんは！ 今回も覗いてくださりありがとうございます！
ではこれからもよろしく願いします。

図書館にて

「広すぎてどこに何の本があるか全く分からないや……」
入り口に置いてあった図書館の地図を片手に持ち、物語が置いてある本棚を探しているんだけど……

「どこも同じ作りじゃわかんないよー」

ずらーっと同じような本棚が団地みたいにならんでいる。一日じゃ把握できない量だ。

地図を見ても意味なし！ と判断したのでとりあえず近くにある本を手にとってみる。

「んー、ま？ まほう、……きそ、にゆうもん？」

隣の本も見てみるとどの本にも「まほう」と書いてあるようなので、ここは魔法を取り扱っている本棚のようだ。

「にしても、私の識字力の低さに自分自身びっくりだよ。お兄ちゃんと一緒に一応勉強したんだけどなあ。やっぱり本物は違うってことか」

おばあちゃんが元気だったところに魔法を教えてくださいませんか一緒にこちらも文字も教えてもらったのだ。

おばあちゃんが紙にお手本を書き、私と兄が真似して書いたり読んだりした。

文字は魔法を勉強するうえで必要ないと思っていたけど、もうちょつと真面目に勉強すればよかったよ。

「レベル的には小学生程度かな？ なんとか頑張れば、簡単な本は読めるかも。文字と魔法の勉強にもなるし何冊か借りようかなー」

私は適当な本をとると、また移動した。

一冊一冊が分厚い本が何冊も並んでいる。どうやらここも魔法に関する本棚のようだが、今の私では読むことはできないみたいだ。

高校の制服に似た服の上にローブを羽織っている人たちが何人かいる。本を読んで勉強をしているのかな？

「おっ、魔法使いっぽい……」
彼らを見ながら小声でつぶやく。

私は魔法使いっぽい学生をそんなに熱心に見ていたわけではなかったのだが、どうやら相手方は私の視線に気づいたらしい。

本棚の前で立ち読みしていたであろう2人が急にこちらを向いたのだ。

彼らがこちらを向くまでは遠目で、しかも薄暗い中なのでそれまではどんな人たちか分からなかった。

しかし、

「あつれー？　もしかしなくとも、ヒナちゃん？」

この声には聞き覚えがあった。

「いつかのように、僕を見つめる視線に振り向いたらヒナちゃんだったんだー。王都にいたなんて驚きだよー」

「俺たちは課題の資料を探しに来たんだが、なぜおまえがここに
いるんだ？」

偶然出会った？ のはいつぞやの2人でした……
村の行商の時に一度たまたま話しただけなのに私のこと覚えてい
たんだ。

「あ、私は昨日王都に来て、どんなところなのかとろろろしてい
たら図書館を見つけたので入ったんです」

えーと、名前はヒースとアスフィだったよね、と彼らのことを思
い出しながら話をする。

今私たちがいるのは本棚と本棚の間の位置。周りにはほとんど人
がいないのと、図書館だからというので声を落として話している。

「ふーん、僕たちは今日の朝、王都に着いたんだよ」

「はあ、そうなんですか」

それが何か？ って感じだけどそんなに親しいわけでもないし、
ヒースって軽くてなんだか苦手でなんと返したらいいかわからない。
アスフィはこの前のようにほとんどしゃべらないし。

「結構早い速さで馬を走らせてきたつもりなんだけど、ヒナちゃん
の方が早く着いたんだねー」

「……っえ？ あ………」

ヒースはにこにこしながらも、どこか何かを疑うような目つき
で私を見てくる。アスフィも興味がないという感じで本を見ている
が、横目でちらりと私の方をみている。

これがへびに睨まれるカエルの心境かー？！

「どうやってたらそんなに早く来れるんだろ？ 不思議だー」

「行商の後すぐに馬車に乗ってきたんです。急いでいたので、寝ずに馬車を乗り替えたりして、休まずにきたら早く着きました……」
別にロウのことを隠すわけじゃないけど、なんだか言いにくい感じなので本当のことは言えなかった。

私がそう言つと、「ふーん」とそれ以上はつつこまれなかった。

気まずいから早く帰りたいな、と思いながらもヒースといくらか話を続けた。

「あの、私これからお世話になっているところの手伝いをしないといけないので、もう帰りますね」

会話が途切れたところで、すかさず帰ることを告げる。

ヒースといたら話が長くなっちゃうよ！ 私は「それじゃあ」と相手方の反応も見ずにくるりと後ろを向く。

本当は図書館では走つたらいけないんだけど、早くここから逃げたいせいか小走りになってしまふ。

私がいいた本棚の列をそのまま小走りで曲がるうとしたそのとき、

「うわあ、すいません……」

どんつ、と効果音がつきそうなくらいに勢いよく人にぶつかった。どうやら男性のようで私は彼の胸辺りに当たったみたい。私は痛つたー、と鼻をおさえる。

「……いや、」

目の前の彼は私を気にかける風でもなく、私の当たったであろう胸のあたりをまるで汚れが付いたかのようにぼんぼんと払っている。

「っはー？！ 確かに私が悪いけどさ、そんな風にされたらちよつと嫌なんだけど！」

私は横にどきながらどんな奴だと顔をみた。

か、かつこいい……

彼は目も鼻も輪郭もすべてにおいて美麗としか表現できない顔だった。でも女性的ではなくて男性的なかつこよさもある。そして「銀色の瞳」が彼を一段と引き立てている。

「くっそー！ でも顔がよくてもそんなんじゃないご婦人にはモテないんだから！」

彼は最後まで私の方を見もせず、今まで私がいた、ヒースとアスフィのいる本棚へ向かった。

「そういえば今の人、あの人になんとなく似てたな。」

私は止めていた足を動かして出口へ向かおうと動き出した。

「ヴェル、遅かったな。俺たちはもう目的の本をみつけたぞ」

「そうだよー。途中まで待ってたけど遅いから先に課題やっちゃうよ？」

「あいつが急に家に帰る用事が出来たとか言っついでいくはめになっただ」

「あー、そういえば僕たちが帰って来てからなんか騒いでたね」

彼らのいる本棚から離れようとしたら、ヒースたちの会話が聞こえてきた。

あの人たち友達だったんだ。みんな顔はいいけど近寄りにくい感じ。

ま、関わることもないだろうし。図書館では気をつけよ。

彼らの声を背中で聞きながら、手に持っている本を1度抱え直す。私は出来るだけ足音をたてないように小走りで、ロウが待っている図書館出口へと急いだ。

図書館にて（後書き）

雑の今の識字力は多分小学3、4年生くらいなのです（今のところ）
やればできる子なんでこれからどんどん文字を読めるようになって
思います！

ありがとうございました！

王都での生活 3

お城を中心に大通りは3つあり、どの大通りもたくさんの人でにぎわっている。

メインとなっていて大通りには様々な店が並んでいる。建物は主にレンガなどで作られているようで、まるで中世ヨーロッパを連想させるおしゃれなつくりだ。

高さも2、3階建てのものがほとんど、道路には車や電車代わりに馬車が走っている。

映画や小説でしか見ることがなかった世界を私は歩いているのだ。

「デジカメ持ってたらたくさん写真とるのになー。せめて携帯の電源がつきさえすれば撮れるのに」

私は本を借りて図書館を出た後、待たせていたロウとリコット亭へ戻ろうとしていた。

周りの建物、風景を見ていると旅行に来ている感じだ。

「写真を撮っても現像できんし、ここに住んでいるのなら撮る必要もないのではないか？」

ロウは私の横を歩きながら現実的なことを言ってくる。

まあ、確かにそうだけどさー、

「もう、夢がないなー。女の子はこういうった雰囲気のある町が好きなの！ だから写真に撮って記念に残したいと思ったんだよ。現像とかここに住んでいるからとか、夢がないよー、夢が！」

ロウは女の子の気持ちが分かってないんだからー！ ここで生ま

れ育った人はそうは思わないかもしれないけど、現代日本育ちの女の子や女性でこの景色みたら写真撮りまくるにきまつてる！！

そんな私の熱意が届いたのか「そ、そうか…」と少し引き気味にうなずいていた。

私たちが歩いているのは王都の大通りの1つ、観光を中心とした店が多くある通りだ。この通りにはリコット亭などのような食堂や宿、土産物店、雑貨などの店が軒を連ねている。

旅人や外国から仕事などの用事で訪れる人はこの通りをよく利用するみたい。

あと2つは市場を中心とした大通りと、私がさつきまでいた図書館を先頭にした美術館などの芸術を主とした建物が並んでいる大通りがある。この3つがメインの大通りで、お城から扇状で3本線で広がるようにのびている。そしてその3大通りをつなぐかのようにいくつかの通りがあるのだ。

大通りはそれぞれに独特の空気を持っているので時間があればゆつくりと回ってみたい。

「そっついえば本を借りているようだが、ヒナが知っている物語があったのか？」

ロウは私が片手に持っている本を見ながら話しかけてくる。

結局私は最初に手に取った本、「魔法基礎入門」と「初めての魔法」という本の計2冊を借りた。

探していた、昔おばあちゃんが話してくれた魔法のゆびわの本や魔石についての本は見つからなかった。

というか、広すぎというのがあって探すことを挫折してしまった

んだけど……

「それはなかったんだけど、魔法についての本を借りてきたよ。ここではどんなふう魔法について書いてあるのか興味があったから」
私が想像していた魔法があふれている世界じゃないみたいだし、ここではどんな風に魔法が扱われているのか知りたかったのだ。ゆびわも探さないといけないけど、まったく情報がない今、できることをやるしかないと思っている。

「そうか、私は人間に直接魔法の理を教えることはできないからそうやって自分で学ぶのはいいことだな」

ロウから聞いたけどどうやら妖精たちなどは人に魔法について詳しく語れないみたい。

彼らは生まれながらに潜在的な知識があるけど、人間にはないみたいでそれをうまく説明できないそう。

たとえば言うなら、人間は二足歩行で歩くことができるけど、どうして赤ちゃんのころから自然に立てたのかを説明できない感じかな？ 当たり前すぎて説明できないってことらしい。

だから人は魔法を学ぶそう。先人の知識と現代の知識から新しい魔法の理を見つけている。

王都にも魔法を学ぶ学校があるらしいから、面白そうだし通ってみたいな！。

頭の真上にあつた太陽は今ではもう西へと傾き、徐々に夕方の気配を見せてくる。

私たちは暖かい春の日差しを受けながら、街並みや借りてきた本などの話をしながら帰っていった。

+ + + +

「ただいま戻りましたー。……つて、あれ？」

私はお店のドアをあけ、カランツとドアについている鈴の音を鳴らしながら中に入る。

今はまだ夕方で、王都の門が閉まる時に鳴る夜の鐘はまだ聞こえていない。

しかしお店の中には従業員ではない人がいた。

「あの一？ まだ夜の開店はしていないんですけど……。あ、もしかして宿に泊っているお客さまですか？」

一般のお客は店にはまだ入れないが、2階にある宿を利用しているお客なら開店の前でもお店を利用してもいいようになってる。

だからこの人もそのお客だと思ったんだけど……、

「ああ、君がヒナちゃん？ ちなみに俺はお客さまじゃないよ」

中へ入った時には後ろ姿だったその人は、私が声をかけるのとはほぼ同時にこちらを向いてきた。

その人、彼は私に爽やかな笑顔で話しかけてくる。

……ん？ でもどうして私の名前を知ってるんだろう？

「すみません、えと、どこかでお会いしましたっけ？」

この王都に来てまだ2日だけど朝、昼でたくさんの人、お客に接したのでその中の人なのかな、と思ったのだ。

でも、こんなに優しくそうで爽やかなお兄さんいたっけなー。

「あれ？ 俺のこと何も聞いてないの？」
目の前の彼は目をぱちくりさせながら首を横に傾げている。

「え？」

私も彼と同じように首を傾げていると裏口の方からラネさんがやってきた。

「ヒナ、今帰ったのかい？ もう少しゆっくりしてきてもよかったのに」

エプロンを着ながらこちらにやってくる。どうやら夜の準備はもう終わっているようだ。

「いえ、何かお手伝いあるかなと思ったので。ラネさん、あの、こちらの人は…？」

ラネさんと目の前にいる彼は知り合いのようだ。ラネさんから彼のことについて聞いた記憶がなかったので尋ねてみた。

すると答えたのはラネさんではなく、

「女の子が家に住むことになったからって連絡してきたのに俺のこととは何も言っていないの？ 母さん」

爽やかなそうな彼が答えた。……つて、え？ 母さん？！

「いや、息子がいるとは一応言っていたけど、今日来るなんてことは話してなかったからねえ。気付かなかったんじゃないかい？」

ラネさんが息子さん？ と話している。

けど親子？！ ラネさんと彼が！

「そうなんだ。俺も朝連絡が来て何も言わずに来たからね。じゃあ

改めて自己紹介するよ。俺はイアン・リザーズ。イアンでいいよ。この一人息子で今は学校の寮に住んでいるんだ。ヒナのことを聞いた時は正直驚いたよ」

そう言えばイアンという名前の息子がいるって言ってたな。寮に住んでいるってことはあまり会う機会がないってことか。

「私はヒナです。急なことだったんですけど、みなさんが優しく受け入れてくれたのでとても感謝しています。あ、それとイアンの部屋を借りてるんですけど大丈夫ですか？」

一応部屋主なんで許可をもらわなくっちゃね！ まあ、ここでダメだって言われたら困るんだけどね。

「大丈夫だよ。ま、駄目だっていつても母さんがいいと言ったら逆らえないしね。よろしくヒナ」

イアンは「敬語じゃなくていいよ」と言い、ラネさんの方を見ながら私と握手をする。

やっぱりこの家ではラネさんが一番強いらしい。

ラネさんは女性にしては体格、存在感のある姿だ。元気で肝っ玉母さんって感じ。

一方の彼は体系はすらーとした痩せ形で結構身長もある。顔もラネさんのように笑顔が似合うと言うよりも微笑みの方が似合う感じだ。共通点と言えば髪や目の色かな？

2人とも髪も目もきれいなチョコレート色。日本にいたころに髪を染めるならこんな色がいいなって思うかも。

なんとというか、それ以外は2人が親子だという共通点が見当たらないのだ……。

「おや？ ヒナも帰ってきたのかい？」

私が入ってきたドアが鈴の音とともに開く。ウインズさんが買い出しから帰ってきたようだ。

「ウイン、お帰り！ 思ったよりも早かったね」

ラネさんはウインズさんの荷物を受け取り、それを厨房へと運んで行った。

「お帰りなさい、ウインズさん。買い出し手伝わなくてもよかったですか？」

ウインズさんと役所で別れる前、買い出しを手伝うと申し出たのだが町を見て回りなさい、と断られたのだ。

「いいんだよ。それよりも時間は足りなかったんじゃないかい？」
私の方がお世話になったというのにラネさんといい、ウインズさんといい、みんな優しくすぎるよー！

「父さん、久しぶりに顔を見せた息子には何も言わないの？」

私とウインズさんで話しているとイアンが横から入ってきた。

2人は「そういえば、久しぶりだなあ」「父さんそれってひどくない？」なんて言いながら話している。

あー、そっか。イアンはラネさん似じゃなくてウインズさん似か。そっちの方がしっくりくる！

ウインズさんもイアンのようにすらっとした体形で優しそうなおじさまだ。きつと若いころだったらもつと2人は似ていたのではないか、と想像できるくらい。

「さあさあ、もうすぐ夜の開店だよ！ 今日はいアンも手伝っても

らっからね!」

ラネさんが厨房から顔を出して、私たちの会話を遮ってくる。

イアンは「はー、母さんには本当に逆らえないなー」と言いながらウインズさんと厨房へ向かっていった。

さあ今日最後の仕事だ!

王都での生活 3 (後書き)

ありがとうございました！

仕事の後で

「みんなお疲れ！ ヒナも慣れない仕事だったろうけど良く頑張ったね。助かったよ」

ラネさんがみんなに声をかけ、今日から働き始めた私にもねぎらいの言葉を言ってくれる。

今日の夜の食堂も終わり、これから少し遅い夕食が始まる。

ウインズさんや厨房のおじさんたちが残った食材でいろいろなものを作ってくれた。

いつもは夜の食堂が終わったらおじさんたちは帰るみたいだけど、今日は私の初日だからってみんなでご飯を食べることにしたのだ。

私とラネさんは出来上がったものを食堂の木でできたテーブルに運ぶ。イアンも食べていくみたいで厨房で料理を手伝っているようだ。

「ロウのはここにおいておくよ」

ウインズさんがテーブルの下にミルクの入ったお皿を置く。ロウはそれを見ると、とことこやってきてすぐに飲み始める。

ミルクを飲むロウの背中はずややかなはずの毛並みがぐしゃぐしゃになっている。

お酒の入ったお客さんたちの相手になっていたようで、なでられたりもみくちやにされていたのだ。

ロウの本当の姿を知らない人から見るとただの仔犬にしか見えないうつで、たくさんのお客にかわいがられていた。

ぺろぺろとミルクを飲んでいるロウはいくぶんやつれた様にも見

える。

うーん、ご愁傷様。ロウのその触りたくなるような毛並みのせいなのだよ。頑張れっ！ 後で毛づくろいはしてあげるからね！

「さ、みんな食べようかね！！」

ラネさんの掛け声で私たちも食べ始める。厨房のおじさんたちはお酒も飲んでいいる。

夜は働く人数が少なく大変だったけど、終わった後でみんなでこうやって楽しく過ごせるから明日もまた頑張ろうって気持ちになる。

それにしても……、

「どうしてグロウさんもいるんですか？ 開店しているときからずーっといませんか？！」

そう、なぜか私たちと一緒にグロウさんも夕食を食べているのだ。

「いいじゃないか、そんな些細なこと！ 大勢で食べるとよりおいしくなるって言うしな！」

はははー！ と私の斜め右向かいに座っているグロウさんは笑いながらも食べる手を止めない。

どうやらこのみんなとも親しいらしくて他の人は何にも言わず、普通に接している。

よくこうやって閉店してからも飲んだり食べたりしているそうだ。あ、代金はちゃんと貰ってるらしい。

私は「はあ、みんなが何も言わないのなら私も何もいいません」とつつこむことをやめた。

グロウさんって真面目な感じにしていれば渋い大人の男性って感じで魅力出ると思うんだけどなー、なんて考えながら食事をつづける。グロウさんは次にそのまた右隣のラネさんと話し始めたようだ。

「イアン、食べ終わったらすぐ帰るのかい？」

ウインズさんがイアンに尋ねている。そう言えばイアンは寮に住んでいるみたいなので門限とかあるのかな？

「ああ、そのつもりだよ。最初はこの時間までいるつもりはなかったんだけどね。せつかくヒナとも知り合えたし夕食までは食べていくことにして、この後は帰るよ」

私の右横に座っているイアンがこちらを見ながら話す。

「イアンの学校ってここから近いの？ もう夜だけど大丈夫？ 門限とかは？」

今の時間は日本時間で言うなら多分9時過ぎというところ。ずいぶんゆっくりしているけどいいのだろうか？

「まあ、本当はいけないんだけど今日は大丈夫だよ」

イアンはふわつと笑いかけてくる。おおっ！ イアンってすっごくかっこいいとかではないんだけど、その笑顔を見るとなんかときめくって言うか。

親近感？ 親しみやすいつて言うか、そんな気持ちになる。ラネさんみたいな豪快な感じではないけれど、優しさがこもっている笑顔が一緒なのだ。

「そうなんだ？ 大丈夫ならよかった。あ、ウインズさん今日はお世話になりました！」

私は少しどきまぎしてしまつたのを隠すようにイアンから顔を見せずし、目の前に座っているウインズさんに向かって改めて今日のお礼を言う。

「ははは、何度もお礼を言わなくてもいいよ。そんなに大したことじゃないしね」

ウインズさんもお酒を飲んでいるようで、少し顔が赤くなっている。

「父さんと何かしたの？」

「今日、戸籍を作るときに一緒に来てもらったの。実は場所もやり方も分かんなかったからウインズさんがいてくれてよかったよ」

イアンは今日のことは知らないので説明する。私とウインズさんが出かけている間に帰ってきたみたいで、知らなかったようだ。顔が少し赤くなつたのがおさまったので私がイアンの方を向き、説明すると「そうなんだ」とうなずきながら納得していた。

「そうだ。ヒナにも手紙がくるかもしれないなあ。今日のがきちんとして処理されていれば今回の春のには間に合うかもしれない」

私とイアンが他愛もない話をしていると、ぽつりとウインズさんがつぶやいた。

「手紙、ですか？」

「え、まさかヒナもそうなの？」

「ああ、まあ結果は分からないけど手紙が届く可能性は高いとは思うよ。今年の春のはまだなんだろう？」

なにやら私には分からない話を始めた2人。ウインズさんのさっきのつぶやきを聞いたイアンはとても驚いているようだ。

私はなんだかのけ者にされた見た気分になり、ご飯を食べながら良く分からない会話を続ける2人の話を聞いた。話を聞いていると、私宛で春に手紙が来るらしいというのはわかった。でもそれ以外の内容はあまりよく分からなかった。

「あの、手紙ってなんですか？」

でもやっぱりどういふことを話しているのか気になったので会話を遮って聞いてみた。

とりあえずウインスさんが言っていた手紙についてだ。

「あれ？ ヒナは知らないのかい、手紙のこと？」

どうやらその「手紙」とやらは誰もが知っているものらしい。が、私はついこの間とっていいほど最近、この世界オイリスにトリップしてきたのももちろんその手紙についても知るわけがない。

ウインスさんとイアンは私が知らないことに対して軽くびっくりしたみたいだ。

「もし手紙が来るとしたら、遅くても4月の初めかな。まだ確実ではないみたいだし、実際に届いたときにでも説明するよ」

ウインスさんは手紙について何も知らない私に説明してくれようとしたけど、以外にも話しこんでいたみたいでもう夕食を食べ始めてから1時間以上経っていた。みんな片づけの作業に取り掛かろうとしている。

詳しく聞きたかったけど手紙が来たら話してくれるみたいだしいか、と思った私はそれ以上その話を聞くのをやめた。

厨房のおじさんたちが家に帰る支度をはじめ、グロウさんも帰り支度を始めていた。ラネさんは食べ終わった食器を流しに運ぼうとしている。

私も手伝おうと立ち上がる。ウインスさんはラネさんに続いて厨房に入って行った。イアンもお皿をまとめたりしている。

「でも本当に手紙が来たらいいのにね」

イアンがその言葉をつぶやいた時、私は空のお皿を厨房へ運んでいる途中で聞こえなかった。荷物をまとめるためにおじさんやグロウさんたちも食堂の端にいたので聞こえなかった。

だからか、イアンの言葉はテーブルの下ですでに眠っている口ウにしか届かなかった。

そしてこのとき話していた手紙がこれからの私の人生を大きく変えるかもしれないものだとは、まだこのときの私は知る由もなかったのだ。

仕事の後で（後書き）

季節感や時間の流れはこちら（日本）と一緒にです。

表記のみ2月19日 2の月19（）の日（）のように変えています。

そのほかの時間の表記などものちのち出てくると思います！

今回もありがとうございました！

お知らせ

窓から暖かな光が入ってくる。それらの光で家の中は暖まり、以前よりかはいくぶん過ごしやすくなった。

ここへ来た頃はまだ厚手のワンピースを普段着で着ていたが、今では薄手のものでも十分だ。

しかし朝方や夜は冷たい空気が王都に流れている。そのため、朝夕は少し厚めのカーディガンなどを羽織り、太陽が昇って暖まり始めると脱ぐのだ。

私は今、薄手の長袖ワンピースを着て、いつものように食堂と宿のある2階部分の掃除をしている。さっきまでお昼のお客で賑わっていた食堂は今では静かな空間になっている。

聞こえてくるのは厨房で野菜を切っているような規則的な音や裏口にある庭で洗濯をしているであろう水音、そして私が床を掃いている音だ。ゴミを集めたり水拭きは最初の日から魔法を使っているが、集めたゴミをまとめたりするのは自分ですることになっている。

私はゴミを集め終わると空気を入れ替えるために、食堂入り口の横にある両開きの窓を開けた。

すると外からそれまでほとんど聞こえなかった人々の声や馬車の走る音、馬の鳴き声などが風と共に入ってきた。

「んんーっ、いい風。私もロウみたいに日なたでお昼寝したいよー」

ロウはいつものように陽のあたる場所でお昼寝中だ。あまりにも

気持ちよく寝ているのか、私が触っても起きようとはしないくらいだ。私が掃除を始めたころはお昼寝はせずに、私が掃除している様子を見たりしていたが、このほか陽気での睡魔には勝てなかったようで伏せの状態で眠っている。

窓からは気持ちの良い風が吹き、その風に揺れるように私の髪がふわりと舞う。

私は風で乱れた髪を手櫛ですく。以前より伸びた髪は今では肩に触るくらいまで伸び、髪を結ぶこともできるようになったのでリチエにもらった髪留めを使い、軽く髪をまとめる。

髪をまとめて改めて窓から外をみると、王都はもうすっかり春の陽気になっているように思う。

まだここでの生活が慣れない頃は日の光が暖かく感じるときもあったが、まだ冬の気候が強く感じられた。

冬から春に季節が変わっていくのを見ると時間の流れを感じることもできる。慣れなかった仕事や町の風景も今では慣れたもので、まだこの世界に来て数カ月しかたっていないというのが嘘のようだ。

この後は少し休憩したら買い出しに行く予定だ。開けた窓を閉め掃除道具を片づけると、食堂のテーブルに置いておいた本を読むため椅子に座る。

まだゆっくりとしか読めないがそれでも毎日読むことで最初よりは読めるようになった、と思う。今回読んでいる本は子供向けの絵本で、挿絵を見ながらぱらぱらとめくっていく。

絵本は当たり前だけど日本にいた頃は見たこともないものばかり。

でもおばあちゃんが話して聞かせてくれたものはまだ見たことはない。

初めは魔法の本を借りたりしたけど、読むのに時間がかかりすぎるといいうのもあって、絵本など子供用の本を借りることにしたのだ。

そして本来の目的である、ゆびわの行方とおばあちゃんの家族探しは足踏み状態だ。というか、ここへ来てからは慣れるのに必死でそれどころではなかったのもあるのだけだ。

「やあ、ヒナ今一人？」

カラン、とドアの鈴を鳴らして入ってきたのはこの一人息子のイアンだ。

「うん、さつき掃除終わったから休憩中。もう少ししたら買い出しに行くつもり」

そういえば、今日は週末か。週末のこの時間になるとイアンはこうやって顔を出しにくる。

こちらの世界でも時間の流れやそれを表す日付なども地球とほとんど一緒だ。月や週の考えが一緒なのでとても助かっている。

「そう。じゃあ買い出し手伝うよ。今日は夜までいるつもりだし」
イアンは私の向かい側の椅子に座りながら話しかけてくる。どうやら一緒に行ってくれるみたいだ。

「いいの？ 休みの日くらい寮でゆっくりすればいいのに。友達と

遊んだりとか」

読んでいた絵本を閉じながら言う。

どうやらラネさんたちによると、前も週末になると家に顔を出しに来る時もあったのだが、最近のように毎週ではなかったそうだ。

そう、最近は何週週末は家に帰ってきてからこうやってなにかしら手伝って行くのだ。

毎週会うからか、いつの間にか私たちは友達になっていてたまに文字を教えてもらったりもして結構仲がいいのだ。

イアンは私の言葉に対して「んー。ま、遊んだりもするけど、最近は何白いことがあったからね」なんて、にこにこしながら話してくる。なんだ？　なんかよく分かんないけど、手伝ってくれるならいいや。

「ふーん。じゃあ、もうそろそろ行く？　イアンと一緒にならたくさん買えそうだし！」

私たちはウインスさんや厨房の人たちに必要なものを教えてもらい、さっそく買い出しに出かけた。

+ + + +

「あつ、ちょっと待って。　最後にあそこ、よっていい？」

「あそこってどこ？」

たくさん買い物したせいで、私たちは両手いっぱい荷物を持っ

ている。私も手が離せない状況なので目線でイアンにある場所を教えようとする。

「あそこっ、あの屋台だよ。一度食べたことがあるんだけどすっごくおいしいの！ せっかくだしちよつと食べてもいい？」

私たちがいる場所から10mほど離れた場所にある屋台に向かって歩く。この辺りは私たちが買い出しをした市場を中心にした大通りと、宿を中心とした大通りをつなぐいくつかある小さな通りの1つだ。

この通りにはたくさん屋台があり、歩きながら食べるものや屋台で食べるのもを売る店、食べ物以外でも雑貨や品物を売るところもある。なんだかお祭りの屋台みたいな感じで、初めて来たときは1軒1軒見て回ったりした。

それで今向かっているのは1度だけ行ったことがある屋台。手軽に食べられて、値段もお手ごろだったので買って食べてみたところとってもおいしかったのだ。今日はまだ時間もあるし、ちよつと荷物が多いけどここはやっぱり食べないとね！！

「おじさーん！ それ1本くださいな！」

私は屋台につくと持っていた荷物を地面に置き、お金を渡す。するとおじさんが「はい、ありがとねー」と言いながら私に1本の串焼きを渡してくれた。

「おいひーっ このあまつ辛いのがたまないんだよね！」

この通りでは様々な食べ物売ってあるんだけど、ここのは見た

目と味が焼き鳥に似た串焼きを売っているのだ。初めて見つけた時は感動のあまりお昼を食べた後だったんだけど4本も食べてしまったんだよね。

私は大きな口を開けて串焼きにかぶりつく。リコット亭で食べる料理ももちろんおいしいんだけど、たまにはこういった懐かしいものも食べたくなる。こちらの世界の食べ物には西洋風のものばかりでこの串焼きみたいな食べ物はない。たまに食べるとおいしさも数段違うのだ。

「うまい、うまいよー、ともぐもぐ食べていたら私と一緒にいたイアンが「つぶはー!!」といきなりふきだした。」

荷物を持ったまま串焼きを食べる私を見ていたイアンだけど、急にどうした?! え、もしかして口の周りにタレとかがついてる?! あわあわしていると「くくくっ…!」と肩を震わせながら笑っていたのが徐々に収まってきたみたい。でもまだ何か面白いのか、目に涙をためている。

「いやー、やっぱヒナっていいよ。一緒にいて飽きないし」

「な、何? 私何かそんなに面白いことした? やっぱ顔に何かついてるとか?！」

「ははっ! 違うよ。顔だけみるとかわいくて体も小さいし、ちょっと頼りない感じだけどそのかぶりつく姿を見たらつい笑っちゃった。女の子でそうやって食べる子はここではなかなかいないしね」
「えーっ そういうことは早く言ってよね! じゃあこの前この屋台で4本も買ってかぶりついてた私って周りの人からどんなふう

に見られてたんだ……。うう、女の子なのにー

「でもそうやって食べてくれるところちはうれしいよ！ なかなかうちのよな屋台には女の子は来てくれないからね」

はい、おまけだよと、どうやら話が聞こえていたらしい店主のおじさんが串焼きをただでくれた。

また来てくれよ、とにっこり笑顔で渡されると受け取るしかないよねっ。

おいしー！ と2本目を食べていたら「っふは！」と後ろでまたイアンが笑っていた。

「イアンも食べなくてよかったの？」

「ん？ 俺はヒナが食べている姿を見ただけで満足だよ」

屋台から何やらずつとにこにこしている。そんなに私の食べる姿っておもしろかった？

「そっいえば私、イアンがあんなに笑うところって初めてみたよ。私の中のイアンはあんなに笑う人じゃなかったからびっくりしちゃったよ」

「まあ、確かに今日みたいにあんなに笑うことってないかもね。仲がいい奴らといるときにだったらこうやって笑う時もあるけどね」
いつもの爽やかな笑顔で話すイアン。そっか、やっぱり仲がいい友達といるときは笑ったりするよね。

重たい荷物を持ちながらだったので行きよりも帰りは若干歩く速度がゆつくりだったけど、イアンの話も聞きながら帰ったのであったという間だった。

もうすぐそこに私たちの帰る場所であるリコット亭が見えてきた。まだ夕方前だから開店していないけど、お店の中から料理のいい匂いが漂ってくる。

「あ、そういえば言い忘れてたけど……」

少し前を歩くイアンが私の方へと振り向く。

「ん、なに？」

イアンが立ち止まったので必然的に私も立ち止まる。にこにこしながらなかなか言葉を続けようとはしないイアン。いったい何よー？

193

「口の周りにタレがついたままだよ？」

にっこりとそう告げるとクルリと前を向き、目の前に迫っていた家に入ってしまった。

逆にそう告げられた私は目を見開いたまま立ち止まっている。

えっ？ あの屋台から歩き始めて20分近くは経つよ。てか、その間普通に喋ってたよね??!

ええー!! なに？ イアンってそういう人なの？

人はみかけによらないと、口の周りに串焼きのタレをつけたまま、
そう実感させられた私だった…。

+ + + +

「ああ、ヒナお帰り。そんなにたくさん、ありがとね」
中に入るとラネさんが食堂の準備をしていて、私の持っていた袋
の1つを持ってくれた。
厨房へと行き、厨房のおじさんたちの指示通りに食材を保管して
いく。

口の周りについていたタレはあのあと持っていたハンカチでしっ
かりとふきとったのでついていない。

厨房から食堂へ出るとラネさんとイアンが夜の準備をしていた。
ロウは私がい出しに行った後で起きたみたいで、私が帰ってき
たと同時に走って私を迎えにきた。
さっきのことがあったのでちょっとイアンの方へじとーとした
視線を送るが、いつもの笑顔のままあえて知らなふりをされた。イ
アンって実はただの爽やか青年じゃないってことね…。

私はぶりぶりしながらもラネさんたちを手伝い、開店準備をする。
ほとんど準備が終わったところにウインズさんがやってきた。

「やっぱりきたよ、手紙。どうやら今回の間に合ったらしい」

そう言ってウィンスさんが持っているのは一通の封筒。それを持って私に渡してくる。

「私に、ですか？」

手紙をもらつ心当たりがないので首をかしげながら尋ねる。トリアおばあちゃんやりチエたちも特に手紙を送りあたりしてないので、本当に心当たりはない。

「俺もそろそろだと思つてたよ。でも結構ぎりぎりなんじゃない？」

「おや、ヒナにも手紙が来たんだねえ」

イアンやラネさんたちが話している横で私はその中に入っている手紙を開ける。封筒も上等な紙を使つて高級だったが、中身もこれまた高級な紙が使われている。なんか、豪華な模様みたいなのがキラキラしたものが封筒と手紙に載つてるんだけど！

ちよつとドキドキしながら中身を読むと、こう書いてあった。

ロータス王立学院魔法科 受験許可証

ヒナ・フローリス殿

ロータス王立学院魔法科を受験することをここに許可する。

ロータス王立学院魔法科学科長

日時 4の月1の日 9の刻

場所 魔法科敷地内 8の刻30分までに学院の本館に到着する

こと

|||||

最近絵本ばかり読んでいたけど、意外にも普通に文字が読めたよ、なんて一人で思っていると、

「やっぱり俺の時と一緒にだ。魔法科の試験は難しいらしいけど受かったらさまざまな知識を得ることができるし、将来も安定するよ」

「ヒナがたまに魔法を使っていたのは知ってたからね、手紙が来るだけでもすごいことだから気負わずがんばるんだよ！」

イアンとラネさんが口々に話してくる。そういえば、ここへ来た最初の夜の夜にウインスさんたちが話していたのはこれのことか。

どうやら魔法を使えることを戸籍を作る際に言っていたため、学院側に伝わり手紙が来たようだ。

手紙が来たというだけですごいことで、その試験に合格すればもつとすごいらしい。

って、イアンその通ってるんだよね？ イアンってすごかったのか…。

合格率は5割程度で、12歳から受験資格があり試験に落ちても次の年、手紙が来ればまた受験できるそうだ。でもそこまでして合格したいものかな？ 確かに魔法は勉強してみたいけど何度も失敗したら受ける気なくしそう…。

受かるためにはある程度の魔力がないと受からないらしい。

せっかく合格しても授業についていけなかったら意味ないもんね。だから実質、1度落ちたら2度目の手紙が来ても合格のチャンスは

かなり低いつてことだそうだ。

でも、せっかく貴重な手紙が届いたんだしこれは受けてみなければ！

試験日は4の月1の日か……、んん？？

「試験日って3日後とかいてあるじゃないか！ イアンのときは半月前には来たのに、ヒナ大丈夫かい？」

ウインズさんが手紙を覗き込みながら言っているので私の読み間違いではないらしい。

でも、3日後っていくらなんでも早いでしょうーっ

「まあ、ヒナなら大丈夫だと思うよ」

イアンが私に向かって励ましの言葉を言う。ラネさんとウインズさんも「ヒナがいなくなったら寂しくなる」なんて言いあっている。

いやいやいやいや、その前に……、

全然大丈夫じゃないし、まだ合格してませんからー！！

外はすでに夕日で赤く染まり、夜の時間を迎えようとしている。
今日も残すところあと数時間。

明日を1日過ごせばその次の日は試験の日だ。

お知らせ（後書き）

トリップ 魔法 学園物という自分の中で思っている王道になりつつあります。

陳腐すぎですかね？汗

でも王道が好きなんだー！ と自分に言い聞かせながら書きました。
笑

こんな作者ですがこれからもよろしくお願いします…（

試験当日

「ここが学院……、なんだかすごいとしか言えない……」

「ヒナは学院を見るのは初めてだったのか。広いだろう？ 私も何度見ても驚くが、初めて見るならなおさら驚くだろうね」

ウインズさんがぼかーんと口を開けながらつぶやく私を見ながら笑っている。

とつとつ今日は試験当日だ。今私が手に持っている手紙には時間が記されているが、リコット亭には時計がないので時間を知らせる鐘の音を頼りに早めに来た。ロウも一緒についてきたのだが、どうやら馬車の揺れで眠たくなったようで今はおとなしくしている。

時計は貴族以外の一般家庭にはほとんどないらしく正確な時間を確かめる術はない。

そのため、平民は時間を知らせるための鐘の音や太陽の位置で時間を把握している。この鐘の音は朝、夕に行われる王都の門の開閉を知らせる合図としても使われている。

門が開く朝6時から日中は毎時間ごと、門が閉門する夕方6時から3時間ごとに鐘が王都に響き渡るのだ。

鐘の音で大体の時間を把握することはできるが、普通に生活していたら曖昧なものではない。この人々は私のいた日本のように時間に追われた暮らしではなくもっとゆっくりとした中で生きている。

太陽が昇ったから仕事を、夜になるから家に帰る、など日本では考えられないほど時間に曖昧な生活だ。鐘は普段門の開閉のときの合図くらいの役割で、リコット亭でも店の開店や閉店の合図として使っている。

ただ、曇りや雨の日など太陽の位置がわからないときは鐘の音が1日の時計として使用されるみたい。

このゆったりとした時間の流れに慣れない頃もあったが、慣れると過ごしやすい。それに太陽を見るために空を見る機会も増え、改めてその大きさを感ずることができた。

ただまだ意識しておかないと、鐘や太陽の位置で時間を計ることはできないんだけど…。

「はい…、でも広すぎじゃないですか？ ものすごく先にも建物があるように見えるし、図書館や役所みたいに建物も豪華だし。それに…、森って！ 校内に森ってどうなんですか？！」

私たちは今、試験会場であるロータス学院の正門前に立っている。場所が少し遠いということどこへきて初めての馬車、乗合馬車に乗って学院まで来たのはいいんだけど、途中から塀に沿って走り、しばらく経ってからおかしいなって思ったんだよね。

だって、どんだけ長いんだよって思ったから。まさかとは思っていたけど、学院を囲む塀だったわけね…。

でも塀の先が見えないって…、なんだかすでに私が想像していた学校とは違うよ。

私が想像していた学校とは校舎と運動場がある私の中での一般的

なものだ。広いと言っても1日で十分歩きまわれるくらいの広さ。でもここはそんな私の想像をはるかに超えた広さを持つ敷地の学校だ。

「大学とかよりも広いよ……」

「だいがく？」

ここへ到着してから開けっぱなしの口で小さくつぶやいた声がウインズさんに聞こえたみたい。

私は「いえ、なんでもないです」と首をふり、遠のいていた意識を呼び戻しながら答える。

「じゃあ、時間は少しぎりぎりなようだけどは大丈夫なようだし、ここから先はヒナだけになるが頑張るんだよ」

門の中へは私が持っている手紙、受験許可証を持っている人しか入れないそうだ。

まだ門が開いていることから、時間には間に合っているのは分かるが辺りにはあまり人は見られない。

来る途中ですれ違った馬車や塀沿いに受験者を乗せてきたであろう馬車が止まっていることからすでに多くの受験生がなかにいるのだろう。

本当を言うと初めての場所だし、ロウも一緒じゃないからちょっと不安もあるけど、

「はい、大丈夫です。周りのみんなも一人で中に入るわけですし。それにロウもここで待っていてくれるみたいなので」

朝早いからだろうか、眠そうにふらふらと立っているロウを見る。

ロウは私の試験が終わるまでここにいるが、ウインズさんはまたリコット亭に戻るのだ。

朝からわざわざ送ってもらってありがたいよ。ラネさんも行くと言っていたがさすがに朝の食堂が大変になるからとウインスさんに言われ断念していた。

本当は自分で行くのがみんなにも迷惑をかけないんだけど、甘えてしまった。

「そうかい？　じゃあ夕方には終わっていると思うからその時に迎えに来るよ。もしなにかあっても、ここにはイアンもいるから心配いらないよ」

ウインスさんはイアンと同じ爽やかな笑顔で私の頭をなでてくる。「みんなで応援しているからね」と言ってくれた馬車にまた乗り帰って行った。

ここからは、まあロウもいるけど一人で頑張らないとね。

まだ何人か私のように到着したばかりの人もいるみたいだ。あ、さっきの私と同じように驚いている人もいる。やっぱりこの国の人でも初めて来る人だったらかなり驚くよね。

ロウに行ってくるねと告げ歩き始める。私は前に行く人何人かについていきながらも、周りをきよろきよろと見る。

正門からまっすぐに延びる道をしばらく、5分ほど歩くと正面の建物にぶつかった。先ほど門から見えていた建物の正体はこれのようだ。美術の教科書にでも載っていきそうな左右対称のバロック建築のようで、辺りにある建物と比べてもひときわ巨大で立派な建物だ。初めて来た人でもここが学院の本館だと誰もが気付くだろう。

その中へと私と同じ受験者の人たちが入っていくので私もそのあとに続く。

入ってすぐにどうやら受付をするようで、ここの生徒だろうか、数人の同じ制服をきた人たちがここへ来たばかりの人に対して何かしている。

とりあえず私も受付のための列の最後尾に並んだ。

「こんにちは。ヒナ・フロリス、さんね。あなたの受験番号は、…93よ。それと筆記用具などは忘れずに持ってきたかしら」

受験許可証の確認と、手紙の最後に添えられていた必要なものの確認、それにどうやら受験番号があるようでその通知のようだ。

手元を持っていた受験許可証を渡し、私の受験番号を確認するとなぜか受付の先輩と思われる女性は残念そうな顔をしていた。

私は首をかしげながらもこの先輩の行う受付を済ませると奥にある部屋へ入ることの指示を受けた。受付が終わるとその部屋に入り、話があるみたいだ。

「うわあ、もう結構人がいるよ」

私は部屋の中へと入るために、重厚な扉を開けた。扉は2mほどの高さがある両開きのもので、見た目どおりに重く片方を開けるのに精いっぱいだった。

「中も広いし、なんだかどこかのお城見たい」

そこはバスケットコート2面分くらいの広さの部屋というよりもホールで、大きな窓や絵画がありここで舞踏会が行われてもおかしくない感じがする。

どうやらテラスもあるみたいで、ここからは手入れをされた芝生とお花しか見えないが奥には見事な庭園が広がっているのかもしれない。

「わあーっ、今にもお姫さまとかが出てきそう。ちよつとドキドキするよー」

世界遺産みたいだ、なんて言いながら1人で歩きまわる。辺りには私と同じ受験者の人がいるけど、まだ先生らしき人もいないのでそれぞれ自由に過ごしているみたい。私はそんな彼らの間を通り、奥の方はどうなっているんだろうと1人進んでいく。

すごい、絵とかも飾ってある。よく分かんないけどきれいだ。触ってみたいけどだめだね。

私は様々な装飾がされている天上や壁や絵画を見ながら歩く。

ここには特に知り合い（イアンは別として）はいないし、普段利用している図書館などとは違った芸術的ともいえる内装に目を奪われていた。

だからなのか、私はいつのまにやら周りに人がいるのも忘れていたみたいだ。

「きゃっ！ ちょっとなんですの？」

「わっつ、ごめんなさい！ 大丈夫ですか？」

壁の方ばかりを向いて歩いてきたせいか立っていた人に気付かず、ぶつかってしまった。

相手は私と（見た目は）同じくらいの女の子だ。当たった拍子でよろけたのか、周りにいた友達と思われる女の子たちに支えられていた。

彼女はよろめいた体を立てなおすところを向く。私は最後にもう一度謝ろうとして彼女に近づこうとした、……が、

「あなた、平民の分際でわたくしに触れるだなんて、なんておこがましいのかしら！」

「……………えっ？」

「まったく、あなたがわたくしに触れたからドレスが汚れたじゃない！ あなたの着ているその貧相なものとは違つのよっ。」

「……………はあ??？」

な、何なんだ？ この子いったい。

見た目は赤毛のくるくるパーマのかわいい女の子なのに、確かに私が悪いんだけどこの言われようは何？

くるくるパーマの子の周りにいた5人くらいの似たような感じの女の子たちも私に向かって一斉に罵ってくる。

それに機嫌をよくしたのかくるくるパーマの子は罵り言葉の最後を締めくくった。

「平民ごときが魔法を学ぼうとするなんて分不相応ですわっ。平民なら平民らしく城下で働いていればいいのよ！」

さすがにこれはかなりムカつくっ……！

話の内容からすればこの子たちは貴族の子女なんだろうけど、国の要である貴族の子供がこんな風に人を見ているなんて。

今までこんなにはつきりと人から悪く言われたことがないから、ちよつと涙でそう…。

なによっ、少し当たっただけじゃない。それにここまで言う？ 学芸会じゃないのにそんなぴらぴらしたドレスなんて着ちゃってな。

初対面の相手に向かって普通だったら穩便に済ませるでしょ。

ねちねちねちねちと嫌み言ってきて、きーっつやな感じ！

周りにいる私に嫌みを言ってきた女の子たち以外も、くすくす笑いながら私たちのやり取りを傍観している。そんな彼らの服装から見る限りどうやらこの辺りにいる人たちは貴族や裕福な家のものば

かりのようだ。

入ってきた扉の辺りには私のような身なりの、いわゆる平民のものが多くいた。だが今いる奥には彼女たちのような平民ではないものが多いらしい。

上から見下すような目で見られ、居心地の悪さを感じる。

「何をしているの、リディ。あなたの声は響くんだからもう少し静かにしなさい。もうすぐ説明が始まるみたいよ」

「セレシア様！ 申し訳ございません。さっ、みなさんも行きましょう」

ついさっきまで私を罵っていた少女たちは一人の少女の出現によって、まるで私という存在が最初からなかったかのようにその場を離れていった。

周りにいる第三者たちも興味をなくしたようで、もうこちらをちらりとも見ようとはしない。

「なんだか先が思いやられそう……」

私はその場を離れてもつと奥、入り口とは逆の方へと移動する彼女たちを眺めながらぼそりとつぶやく。

最後に「はあ、」と息を吐いた私はまた同じことが起きないためにも今度は人に当たらないよう十分に気をつけながら最初にいた扉のあたりに戻っていった。

試験当日（後書き）

お嬢さま言葉って難しいですね（笑）

というか今回はなんだか話が進んでいるように進んでない…

では今回も覗いてくださりありがとうございました^^

壁際には先生や先輩たちと思われる人々がちらほらと、私たちを観察するように立っている。

私が入ってきた入り口である扉は今も堅く閉ざされ、そこには先ほど受付をしていた先輩たちがいた。

カツ、カツ、カツ、カツ……

他の受験生たちもその存在に気付いたのかさっきまで騒がしかったはずの室内が急に静まり返った。

布ずれの音や呼吸の音などしか聞こえない。外へ通じる扉と窓は閉まっており外界の音も遮断されている。緊張を孕んだ空気がこの部屋全体を覆う。ごくくり……と誰かの息をのみこむ音が聞こえた。

空気がピリピリする。

この状況をたとえるのならそう表現できるだろう。もし人の魔力を感じるができるとするなら、今がそうなのかもしれない。

たった1人の人間の出現が100人以上いるであろうこの空間を変えている。

今私がいる扉側とは真逆の、さっきまでいた方のずっと先の壁に

背を向ける形で一人の老人がいた。

彼とはかなりの距離、人も間にたくさんいるはずなのにはつきりとした存在感を感じる事ができる。

きつと周りにいる他の人も同じだろう。

その老人は衰えを感じさせない足取りで歩き、部屋の丁度中心となる部分で止まると、辺りを一度見回してから話し始めた。

「今日はここ、ロータス王立魔法学院魔法科へようこそ。わしは魔法科学科長であり、学院長をしておるエーヴァルトじゃ。今ここにいるものたちは皆、大きな可能性を持ったものばかり。もちろん、試験を受けられなかったものたちも未来に大きな可能性がある。そして君たちはその他の人々よりも魔法を操る力が優れ、それはここで学ぶことによってより顕著に力を得ることができ。今日の試験を合格すればこの学院で素晴らしい先生方の下、先輩たちと共に勉強することができだろう。皆、精いっぱい自分の力を出し切るのじゃ」

ぴん、と張りつめた空気には似つかわしくない柔らかい声で学院長と名乗った老人は話し終えた。

よく目を凝らしてみると優しそうな人のようだ。にこりと笑った学院長の雰囲気は氷のように冷たかった空間を溶かすかのようだった。

最後に「ではまた後で会えることを期待しておる」というと、あちら側にも扉があるのか、学院長はまた最初出てきた方へと戻っていった。

+ + + +

「あの人が賢人とも言われているイーヴァルト様か。初めて見たけど、優しそうな方だったな」

「ああ、だが最初に現れたときの一瞬にしてその場を変えてしまう存在感というのはさすがだな」

私の前を歩く受験生の2人の男の子が先ほどの様子を話している。そのほかの人たちも口々に学院長のことを言いあっている。

その後、学院長が話し終え出て行かれた後、先生の一人がこれからの指示をした。

それによると、どうやらすぐにも試験が行われるようだ。私たちはその指示に従い、今度は全員で教室を移動することとなった。

「あ、すいませんっ」

人が多いからか、みんながそれぞれ動いているからか、今にも当たりそうなくらいの近さのまま移動しているので、気をつけてはいはいたけどやはりぶつかってしまった。

「いや、こっちこそごめん」

相手は私より少し背が高めの男の子みたいだ。私は謝りながらそ

の彼を見る。そして私はその彼を見た瞬間「うわ」と声をだしてしまっただ。

その声は小さかった。その彼には聞こえてなかったみたい。口を押さえながらも気になっちゃってしまっただ。ちんちん何度か視線を送ってしまっただ。

ちんちんと視線を送る先には金髪碧眼の男の子。

うわあ！ 実際では初めて見た私は少し興奮気味。だって金髪碧眼で！ それに金髪碧眼が似合っているというのがすごい。かわいい顔してるけど大人になっただらきつと涎もんだっ、なんて勝手に想像する。

私がぶつかってしまった彼も身なりのいい人みたいだったから、さつきみたいに言いがかりつけられるかもしれないと思っただけど大丈夫みたいだった。ま、あの娘たちみたいなのは人ばかりなわけないか。

今歩いているのは広い廊下。左右には絵画や花を生けた花瓶などが並びまるで貴族のお屋敷のようだ。

そして窓が無いはずなのに、廊下の壁に明かりが均等に並んでいるので暗さを感じない。その明かりというのも火を灯したものでなく小さなふわふわとした不思議な明かりだ。

壁に備えてあるガラスの中にあるその不思議な明かりをみるとここが魔法を教えるための場所なんだということを感じた。

そうやって最初に集まっていたところから出て暫く歩き移動する

と、ようやく到着したのだろうか開けた場所に出た。

「すげー……っ、どれだけ広いの？　ここ……」

目の前に広がるのはとてつもなく広い中庭。とてつもなく広い、
というのはまるでどこかの競技場くらいに広いからだ。そしてその
競技場並みの広さを囲むように建物がある。

もはや中庭と言えるレベルではないが、それ以外どのような言葉
で表すかが分からない。

私以外もみんな呆けたように突っ立っている。私のような平民の
恰好をした子たちはもちろん、豪華で広い邸宅に住んでいるであろ
う貴族の子たちも、この広さ立派さは規格外なのだろう、誰もが
同じように驚いている。

「何をぼーっとしているの。さっき説明したように分かれなさい」
ここへ来る前に説明をした女性の先生が呆けている私たちに一喝
した。

私も含め、ようやく気を取り戻した受験生たちはあわてて決めら
れたグループに分かれた。

そのグループとは受験番号順を3等分にしたもの。どうやら私の
93が最後の番号だったようで丁度31人ずつ分かれることとなっ
た。

そしてなぜ受付の先輩が私の番号を見て残念がっていたのかをこ
こへ来る途中、他の人たちが話していて知ることができた。

1～93までである受験番号はいわゆる「期待度」みたいなものら

しい。学院は受験資格者を決める際、戸籍に記入されている魔法を使えるか使えないかをみる。そしてその他にも家族、親族、祖先に遡って周りに魔法を使えるものがあるのかも調べるみたいだ。

家族全員が魔法を使えるとそれだけ期待度が高いということ、また家族の中に国に仕えるくらい力の強い魔法士がいるものはより注目される。

例外的に親族の中に魔法を使えるものはないのに強い魔力をもったものもいるらしいが、あくまでも例外なのだそうだ。

普通は1に近ければ近いほどその期待度が高いようで私なんかは見向きもされないってこと。

あの先輩も多分私の番号をみて不合格になるだろうと思ったのだろう。

魔法のセンス？ 魔力の保持量みたいなものって遺伝的なものなのかな？

なんだか私は違うような気もするけど、そう言われているのならそうなのだろう。

そうこう考えているうちに、3グループに分かれたようだ。

1、2、3グループに分かれた内、私は受験番号の後半のものが属する3グループ。同じグループの人はなんだか平民の恰好をした人が多いようで、逆に1グループにはほとんどいない。

うーん、こういうのってやっぱり貴族の方が魔法を使えるってことなのかな。

そう思いながら1グループを見るとあの金髪碧眼の男の子や私に嫌みを言ってきた赤毛の女の子がいた。

「うわ、あの子だ。できるだけかわらないようにしよっ」

私はあの女の子をみると少し顔をしかめる。威張っている感じが私にはどうも合わないし、それに自分に対して嫌みを言ってきた子とは関わり合いたくない。

私たちはそれぞれのグループで固まると、先ほどの女性の先生がまた説明を始めた。

「それでは、3組にわけられましたね。では今から実技試験を始めます」
遠くまで響くような声で話す先生。説明はこれだけだと言うように、ただそれだけを言うとその先生は1グループの方へ歩いていった。

「ええ？ いきなり実技って。筆記はないのかしら？」

「去年は筆記の後に実技だったと聞いたのに」

「筆記用具って書いてあったからってつきり筆記試験があると思ったのっ」

「いや、実技の後に筆記かもしれないわ」

いきなり実技試験だと言われ、ざわざわとした雰囲気になる。
しかし先生たちや先輩たちは気にもせずそれぞれの持ち場へとわかれ始めた。

もちろん私がいるグループもどうということなんだ、と口々に話し

ている。

「おい、静かにしろ！ もう試験は始まるんだからな」

グループに1人づつ先生がいるらしく、私たちのところにも一人の先生が来たみたいで、ざわついている私たちに向かって声をかけてくる。

……って、うん？ この声、聞いたことあるような…

「せ、先生、筆記試験ではなく、実技試験が最初にあるんですか？」
私がうーん、と悩んでいると誰かが先生に質問した。周りも気になっていいのか静かに答えを待っている。

「なんだ、そんなことか？ 確か筆記用具必須などと手紙には書いてあったかもしれないが、筆記試験を行うとは書いてなかったはずだ。ま、誰もが知っているとは思うが毎年入試方法が違うからな」

先生がそう言うところ「そんなっ！」なんて言う声や、「よかったー」というような声などが聞こえてくる。でも今いる場所が場所なりに、みんなある程度は予想していたみたいで、それ以上の質問はあがらなかった。

私はもちろん「よかったー」という声に共感だ。だって筆記なんてされても解答できない自信があるからね！ 最近は文字を読むことに慣れてきたけど書くことは苦手。

でも私も筆記試験があると思っていたから羽根ペンで名前を書く

練習くらいはした。なんて言葉は通じるのに文字は書けないんだ！
っなんて思いながら書き慣れない文字を一日かけてひたすら練習。
結果的には筆記はないみたいで安心した。

私がほっと胸をなでおろしていると、また先生の声が聞こえてきた。

「俺が受験生だったときは決闘制だったしな。ま、俺の場合は筆記
がなかったから合格できたな！」

はははー！ と笑う声が聞こえる。…やっぱり聞いたことがある
声だ。

一番後ろにいて、先生の顔が見えない私はその声の主が気になっ
たので、横から回り込み先生の顔を覗き込む。

「…って、グロウさん？ え、でも先生？」

なんと声の主、先生の正体はグロウさんのようだ。私の目が確か
ならば、だけど…。

私がグロウさんを見ると、視線に気づいたらしい。こちらに顔が
向いた。しかし、声をかけるわけでもなく、ただ目を細めるように

して私を見ただけだった。

やっぱりグロウさんだ。目もあつたし、私に気付いたよね？ だけど先生が受験生と知り合いたというのはあんまりいいことじゃないのかもしれないから、あえて知らないふりしたのかな？

なんて考えていると、試験内容の説明が始まった。

+ + + +

あちこちで突風だったり、雷だったり試験中の受験生から様々な魔法が繰り出されている。

試験を行っているこの中庭には木や花が咲いたりしているが、魔法の影響で今にもなぎ倒されそうだったり葉っぱが散ってしまいうそになっている。

試験中の受験生以外はグループごとに端にかたまっていて、数人の先生や先輩達に囲まれているので特に危険はない。

ただ髪の毛なんかは風のせいで見るも無残になっているけど…。

それでもこんなに間近で兄以外の他人の魔法を見ることはそう言えはじめてだと気づく。

私は試験管である先生たちにアピールするように出される魔法をわくわくとした目で見つめた。

説明が終わり試験が開始してすでに30分以上が経つ。

その説明では今年の試験内容が発表された。

それによると、今年の試験は「魅せる」だそうだ。まだ魔法についてきちんと勉強していない私たちがどのようにして魔法を魅せることができるかを見ると言っていた。

魔法についてきちんと学んでいないということは、様々な方向性
に開花させることができる可能性があるということ。何にも染まっ
ていない自由な発想は能力が上である大人をも凌駕することがある
からだ。

そのような説明が終わった後すぐに試験が始まった。

- ・ 試験時間はひとり3分。
- ・ 中庭敷地の範囲内で魔法を使うこと。
- ・ 他のものに危害もしくは妨げになる行為をしたものは即失格とする。

試験の規約として挙げられたのが上の3つ。そのほか、自分が試験中に負傷してしまっても自己責任である、ということも挙げられた。

受験生たちは工夫を凝らした魔法を出す。

どの魔法も初めて見る私はどきどきと高鳴る胸を押さえ、一つも見逃すまいと目を見開くのだった。

2 (後書き)

今回はファンタジー色が濃いです。

疲れてしまった方がいましたら申し訳ないです (汗)
お付き合いくださりありがとうございます！

さんさんと輝く太陽の光が試験会場である中庭に降り注ぐ。

その太陽の下では3人の受験生たちが個性的なそれでいて魅了するような魔法を繰り出していた。

同じく受験生である他のものたちもはつきりとは応援はしないが、時には「おおっ!」「すげー!」などと魔法に魅せられている。

「次、20番目! 準備を始めろ!」

グロウさん、もとい、グロウ先生の言葉で私たちのグループの20番目にあたる女の子が中庭の中へと移動していった。緊張しているのか、顔が真っ赤になっている。

今終わったばかりの人はこちらへと戻ってくる。思いどおりにできたのだろう、胸を張って晴れやかに戻ってきた。

1、2グループの人たちもそれぞれ立ち位置に立ったようだ。特に立ち位置は決まっていらないが、お互いある程度の距離はとらないといけないので離れて立っている。

試験は3グループの内ですべて一人ずつ、そして3グループ同時に試験を開始する。そのため、試験が始まるのと同時に三者三様の魔法があらわれるのだ。

「あ、あのくるくる赤毛の子だ。どんな魔法使うんだろ……」

今回の1グループの受験生はあの女の子のようだ。中庭のほぼ中

心といえる場所に立ち、すでに準備万端らしい。

あんまり関わり合いたくはないと思ってもやはり気になるものでつい見てしまう。

それと彼女を見て気付いたのが、どうして髪の毛が乱れてないんだ？ ということ。

他の人は何人が使った風の魔法でぼさぼさな髪やよれよれの服になっているというのに。着ているぴらぴらドレスもまったくもって無事なようだ。

「うーん、不思議だ」

私がそうつぶやいたのと同時に、始まりの合図が出た。

辺りにいる妖精たちが3人の魔力に集まる。集中しているのかみんな目を瞑り、魔力を凝縮していく。

あのくるくる赤毛の子が最初に準備が整ったようだ、自分の限界まで力を引き出すと、目を「かつ！」と開く。

「きゃあっ！」

「うわ！ー！」

目を見開き、妖精に指示を与えるかのように言葉を紡ぐ、と同時に彼女の周りで炎があがる。

彼女の周りには多くの火の妖精がおり、彼女の魔力と紡がれた言葉によって、凝縮された魔力がはじけるように炎もどこからともなくあふれ出す。

いきなり現れた炎に驚いたのか、数人が声をあげていた。

最初はただ見境もなく、とでも言うように燃え上がる炎だったが、徐々に1つにまとまり始めた。

やがてそれは巨大な炎の鳥となった。「ギョオーツ」という鳥の鳴き声なのか、炎が燃え盛る音なのか、耳を突き刺すような音が辺りに響く。おとぎ話に出てくる不死鳥を連想させる炎の鳥だ。

彼女の命を聞くかのようにその鳥は巨大な羽根を広げ、中庭を円を描くように一周すると空へと消えていった。

炎の鳥が消えてもなお、火の妖精たちの名残である火の粉や熱風が辺り一面に漂っている。

たった2分弱の出来事だが、それよりも長い時間であったかのよう感じた。

そしてその魔法を生み出した本人である彼女はやり残したことはない、とでもいうかのように堂々としていた。

「すげーっ!」

「いいぞー!!」

彼女の魔法に最初は驚いて声も出なかったようだが、一度声が出ると次々と彼女を称えるような声があふれ出す。

ただ、その声が出ているのは私と同じ受験生ではなく、今日の試験を見に来た先輩たちだ。

まだ試験は終わっていないのにいたるところから声が降ってくる。

この中庭を囲っている建物の屋上は観客席のようなものがあるようで、その観客席から覗き込むように多くの先輩たちがいるのだ。初めに気付いた時はいつの間にもいたのか、と思った。他のみんなもそう感じたのだろう、驚いたように屋上を見ていた。

その先輩たちは今までも声をだしたりしていたが、今のように大きな歓声をあげたのは初めてだ。

他の2、3グループの受験生も試験中なのだが、その声に気を取られているみたいであまりうまくいってないみたい。

試験が終わるとその2人は肩を落とすように戻っていった。

「見ている分にはいいけど、試験が重なったら災難かも」
終わってもなおざわついている会場を見渡しながらつぶやいた。

そのざわつきが収まるのも待たずに次の試験が始まる。

それからも様々な魔法を見ることができたが、さっきの炎の鳥のような誰もが唸る魔法はあらわれなかった。

次々と試験が進みもうすぐ最後、私の番となる。

今までの試験で「魅せる」魔法というのがなんとなくわかった。

どの受験生もそうなのだろう、後半になるにつれて難易度や完成度が高くなっている気がする。

多分先生たちもそういうことは予想しているだろうから、前半と後半どちらとも公平に審査はしているだろう。

それはいい、いいんだけどここで一つの問題がある……。

それは呪文だ。

どの受験生も魔法を使う際、呪文を唱えているようなのだ。場所も離れていて呪文自体ははっきり聞こえないけど、唱えているのは分かる。

しかし私は魔法を使うのに呪文なんて使ったことがない。

いや、おばあちゃんに魔法の使い方を教わった時教えてもらったこともあるような……？

でも私も兄もおばあちゃんも特に呪文を使わずに魔法を使っていたし、こちらに来てからは生活するので精一杯で人（イアンとか）に教わったりすることもなかった。本も最初の1冊目、しかも最初の部分で挫折していたから今まで気づかなかったのか。

呪文って言わないといけないのかな？

あー、そういえば小説なんかでは呪文を唱えずに魔法使う人もいたし、元々私もそっちだし大丈夫だよな。

もう次に迫っているのだからあれこれ悩んでも逃げ場はないと思った

私は「なるようになってっ！」と私の時が来るのを待った。

+ + + +

「次、31番！ 最後の組だ。準備を始めろ！」

グロウ先生が私に声をかけてくる。今日はきちんと会話をすることはなかったし、私から話しかけることもしなかった。だけど今声をかけるときに、私の方に向けた顔が「頑張れ」と言っているようにみえた。

そう見えただけかもしれないが、誰かが応援してくれていると思うだけで頑張れる気がする。

「よしっ、行きますか！」

小さな声で自分自身を励ますと、中庭の中へと足を踏み入れた。

今までは中庭の端から試験を見てきたが、今回は私自身が試験さ

れる側、みられる側となる。

私の周りにはもちろん誰もいない。

離れた端には同じ受験生たちと先生や先輩たち。そして中庭を囲む建物の屋上には数えきれないくらいの先輩たち。

ここにきて、緊張で体がかくかくしてきた。

「うーっ…、失敗したらどうしよう…。帰りたい…」

分かってはいはいたけど、やはり本番は想像していたのと違う。心臓がこれ以上速くは動かないという勢いでどくどくいつている。

早く終わって、と思いつながらもまだ始まらないで、という矛盾した気持ち私の中を巡っている。

「3人とも立ち位置に立ちましたか？ 準備が整ったなら最後の組の試験を始めます！」

2グループを担当しているだろう先生が私たちに確認する。

私以外の2人を見ると移動を終えたようだ。

「あ、あの男の子だ」

同じ最後の組の2人の内の1人に、廊下でぶつかった金髪碧眼の人がいた。

彼は全くと言っていいほど緊張しているという感じがしない。

試験会場の中庭にいてと言ってもできるだけ端っこの方に、と思っている私やもう一人の受験生とは違って中心に立ち、試験開始を待っている。

「やっぱり、1グループの人って自分の魔法に自信があるってことか。じゃないとあんなに堂々とできないよ」

あのくるくる赤毛の女の子も始まる前から自信満々だったし。でも人前ってことで緊張はしないのかな？ 私は魔法もだけど、こんなにたくさんの方の前にいるってだけで緊張しているのに。

特に動こうとはしない私たちを見て準備が整った、と判断した先生が「では始め！」と試験開始の声をだした。

いつの間にか静りかえっていた試験会場。

どくどくと早鐘を打つ胸を押さえながら、ざわついているよりも静かな方が集中しやすいな、と思った私は妖精たちを感じるために顔をあげる。

顔をあげるとそこには大地を照らす太陽の光。耳を澄ますとそよそよとした風の音が聞こえる。

すぐに感じることでできた妖精たちは私に向かって「頑張っ！」と言っているよう。

そういえばグロウさんも応援してくれていたみたいだし、きっとイアンも試験を見ているはずだ。

なんだか始まる前よりかは緊張が解けてきたみたい。

私は空を見上げたまま、「すう、はーっ」と深呼吸をする。

そして春の陽気を肌で感じながら、できることをやろうと思った私だった。

3 (後書き)

炎の鳥、不死鳥はハリ　夕にでてくる不死鳥を想像すると分かりやすいかもです（分かる人のみb笑）

あとこのターンまだ続きます。長くなって申し訳ないです（汗）
次回もよろしく願いしますっ

登場人物紹介（前書き）

34話目（再会、3月26日更新）までの登場人物紹介です。
そこまで読んでいらっしやらない方にはネタバレ要素があるかもしれないのでご注意ください。随時更新予定。

人物確認のためなどにご利用ください^^
登場人物の順番に関しては変わる可能性が、内容も増える可能性
があります。

登場人物紹介

ヒナ・フローリス（雛）

15歳 黒髪紫眼 魔法科1年

日本から異世界オイリスのロータス王国にトリップしてしまった女の子。

おばあちゃんから魔法や文字など教わったので日本にいたときからいくらか使うことができる。

周りの人々に支えられ遅く生きている。現在髪の毛を伸ばし中。ロータス学院魔法科に入学し、寮生活を送る。

ロウ

普段は仔犬（柴犬みたいな）、大きくなると2mほどになる。

雛がトリップして最初に出会った。人語を話すことができる。

リコット亭のマスコット。しかし今はヒナと共に魔法科の寮に住む。

雛の家族（日本）

一：^{いち}兄。黒髪紫眼。文武両道、家の家事全般を担っているできた兄。

魔法を使うことができる。

父母：父は魔法を使うことはできないが、娘と息子が使えるのは知っている。

母は雛を生んで数年後他界。

菊（フローリス）

雛と一のおばあちゃん。若いころ日本にトリップしてきた。

雛や一に魔法や文字を教えたり不思議な物語を語った。濃い紫

の瞳を持つ。

去年他界。

涼：雛の親友。家族ではないがとても親しい間柄。

村の人々

トリアおばあちゃん：村の入り口で行き倒れていたヒナを助ける。
ボーロおじいちゃん：心やさしいおじいちゃん。

リチエ：雛と同年の女の子。15歳

ナット：リチエの弟。12歳。思春期真っ只中。

レル：リチエとナットの妹。自分のことを「れる」と言うかわい
い女の子。

レイグ：3人兄弟の父親。行き倒れていたヒナを助けた一人。

リコット亭

ヒナが王都でお世話になっている食堂兼宿屋

ラネット・リザーズ：おかみさん。トリアおばあちゃんの娘で肝
っ玉母さん。

ウインス・リザーズ：リコット亭の店主。笑顔が素敵なお父さん。

リコット亭で働いている人達

20代の奥さまからおじさんたちまでリコット亭で働いている。
仕事以外でもご飯を食べたりお喋りしたりと仲がいい。

ロータス王立学院魔法科

セレシア・マム・デモール

通称：シア 13歳 魔法科1年

金髪碧眼の少女。いつも長い髪をポニーテールに結び、見た目や発言から13歳とは思えない（ヒナ談）イルの双子の姉

イルディア・マム・デモール

通称：イル 13歳 魔法科1年

金髪碧眼の男の子。シアの双子の弟

リデーレ・レソン・パツセル

通称：リデイ 13歳 魔法科1年

赤毛のくるくるパーマの女の子。見た目はかわいいが出会ってすぐヒナに嫌みを言ってきた。ヒナの苦手とする人物の一人。

31話「友達」でヒナと友達になる。

ヴェルリル・ロータス・ラリイメス

通称：ヴェル

銀色の瞳をもった人物。ランとは兄弟

ランセル・ロータス・ラリイメス

通称：ラン

金色の瞳をもった人物。ヴェルとは兄弟

イアン・リザーズ

通称：イアン 15歳 魔法科4年

ラネさんとウィンスさんの一人息子。茶髪茶眼の笑顔が似合う青

年。院内外では優等生として通っている。

ヒース・シスル・ハイデイリウス

通称：ヒース

中世的な顔をした美人さん。その容姿から女性には困らないようだが、言動が変態っぽい。ヒナが苦手とする人物。またその言動は誰にでもそうだと判明。

しかし医療魔法には特化している。

アスフォデイル・シスル・ランス

通称：アス、アスフィ

ワールドで肉体派な見た目。口数は少なめ。よくヒースと行動している。

またまじめな性格なのか、ヒースが変な行動をしたときの歯止め役となっている。

ロータス学院教職員

グローリー（グロウさん）

ヒナが王都で初めて出会った人。よくリコット亭に訪れる。30歳

ロータス王立学院魔法科の先生。

エーヴァルト（学院長）

ロータス王立学院の学院長。

国一の魔法士であり、賢人とも言われる。お茶目な性格のおじいちゃん。

空から雨が降ってきた。

今日は晴天だ。雨を降らせる雲は空の上をふわふわと、青空の中を浮かんでいる。

普通なら雨なんて降らないはずの天気だとわかるはずだ。

この空を見ると、誰にでも今降っている雨は自然現象ではないことがわかるだろう。

だが私たちの頭上に降り注ぐ雨は幻影でもなく、ここにいるすべての人たちを濡らしている。

口火を切ったのは2グループの男の子だった。

彼は試験開始の合図がでてほんの20秒も経たないうちに魔法をだした。

私が空を見上げ深呼吸しているとぽつり、と雨の雫が落ちてきたのだ。

私は周りに集まってこようとする精霊たちを気にしながらも、彼が繰り出した雨の魔法を見る。

春の陽気とはいえ、今はまだ肌寒さが残る。

雨で直に濡れれば余計に寒さを感じるはずだ。しかし少なくとも

私は寒さを感じなかった。

太陽の下で降り注ぐ雨はその光に反射し、きらきらと輝きながら落ちてくる。

光の雨の中には虹ができています。

太陽の光とその光に反射する雨、そして偶然か、太陽を囲むように虹が覆いかぶさっている。

この風景を見ていると雨に濡れたことによる肌寒さを感じることも忘れてしまった。

きっとそれは他の受験生や先輩たちにも言えることだろう。辺りは歓声を挙げることにすらせずに空を見上げている。

「雨を降らせるだけでもあんな魔法が魅せられるんだ…」
私も空を見上げながらポツリとつぶやいた。

2グループの彼の周りには水の妖精たち。あまり数は多くないし、力もさほど強くはないみたいだが彼とは相性がいいのだろう、妖精たちはうれしそうに彼に力を貸しているようだ。

今日の試験を見る限り、特に突飛な魔法ではないと思う。

でも彼は周りにいる妖精たちの力を十分に発揮し、その妖精たちは魔法を使った後も彼のそばを離れようとはしない。

離れない妖精たちに彼は少し困ったような顔をしているが、それでも嬉しそうに水の妖精たちと触れ合っている。

魔法を出し終わったのだが、妖精が彼から離れないために普通なら消えてしまはずの雨がまだ降り続けている。時折その雨の中から顔を出すように水の妖精が私の元へやってくる。

「この雨は君たちだよね。とってもきれいだよ」

私がそう言っていると水の妖精は恥ずかしそうにしながら、また彼の元へと飛んでいった。

雨はまだしとしとと、ふり続く。この中庭には屋根と言うものはないので、壁際に立っている受験生たちはもちろん、屋上にいる先輩たちもこの雨ですっかり濡れてしまっている。

しかし静まり返った会場内はそのまま、しーんとした空間がこの辺り一帯を覆い尽くす。

先ほどまでの試験で風や火、そのほかの魔法によって無残な姿になりつつあった木や花たちは雨が降ることですしずつ元気を取り戻しているようだ。

水の魔法も今まではあったのだが、今回のような雨という全体的に影響を与えるような魔法ではなかったのだ。

私はぬれた顔をすでにこちらも濡れてしまっている服の袖で軽く拭う。

彼の魔法につい魅入ってしまったが、私も試験中なのだということを出した。

試験には時間制限があるのでその中で魔法を魅せないといけない。

…うん、ただどこかで緊張しているのほぐれたかも。

今の時点で多分、試験開始1分弱ではないだろうか、始まるころはあんなに心臓をどくどく言わせていたのに今ではいつもの私に戻っていた。

平常心を取り戻した私は時間を気にしながらも集まった妖精たちを見渡しながら、どんな魔法を出すか考え始めた。

試験中に色々考えてたけど実を言うとまだ決まってるないのだ…。

他の人たちがしたようなことはさすがにできない。私が考えていたのと似たような魔法で試験を受けた人もいて、ネタ切れという状況だ。

最後になれてよかった、と思ったけど今になると逆に最後ってあんまりよくないってことに気付いた…。

そんな風に考えていると今まで体を濡らしていた雨が急に止んだ。

代わりに降ってきたのは雪。

ついさっきまで雨が降っていたのに今度は雪がふわふわと降ってきた。

「これも魔法……、」

雪の魔法を出したのは1グループの金髪碧眼の男の子だった。その魔法は雨の魔法を利用して雪を降らせたと思われる。

私が彼を見ると、彼は続いて何か呪文を唱え終わったようだ。唱え終わったその瞬間、目の前が白い煙みたいなもので覆われる。

「つな、なに？」

私は手をぱたぱたと動かし煙を払う。

煙が薄くなってきた、周りを見渡すと他の人たちも私と同じように手を動かしていた。

そして徐々に辺りが開ける。一体何が起こったのかと周りを見回した。

「え、今の一瞬で？」

空は相変わらずの晴天だ。雪も降りだしたときそのまま変わらない。今の一瞬で変わってしまったのは、

「雪が、…積もってる」

この中庭一面に雪が降り積もっているのだ。

地面にはもちろん、木や花、そして私たち人間にもいつの間にか積もっていた。

体に積もるその白くて冷たいものはどこから見ても雪だ。
雨で濡れているはずなのに、魔法だからか解ける様子もない。

私が「すごい…」と思いながら空を見上げる。もちろん空から降るのは雪。

だが、よく見ると雪と一緒に他のものも降ってきた。

雪と一緒に降ってきたのは光の雪。光の妖精が雪に交じって、空から光を降らせている。

まるで太陽の輝きがそのまま降り注いでいるかのようだ。

その魔法を出したのも1グループの彼のように、光と水の妖精たちが彼の周りを飛んでいる。

幻想的ともいえるその魔法はいつまで見ても飽きないくらいだ。

そして彼の場合も2グループの男の子と同じようで、妖精たちが居続けているためにまだ魔法の効果が続いている。

同じ最終組の2人の魔法は妖精たちの本来の姿を生かした魔法だ。雨や雪といったありふれたものだが、魔法で生み出すことで幻想的な空間を醸し出している。

それは太陽と雨、雪と光のように現実ではあまり見られない組合せの現象だからつい魅入ってしまったのかもしれない。

私は最後に雪と光の雪を見ると目をつぶった。

今まですごいことをしないといけないと思つて、試験でどんな魔法を出そうかと考えていた。

もう残された時間は1分もない。

でも今はさつきまで悩んでいたのが嘘のように自然に頭に浮かんでくる。この短時間で成功するかは分からないがやるしかないのだ。浮かんだ魔法に必要な妖精たちが周りからたくさん集まつてきた。雪で冷たいはずなのに妖精のおかげか、なぜか暖かい。

十分に妖精たちが集まつたところで目を開き顔をあげ、右手をあげた。

私が空に向かって勢いよく腕を振りあげると同時に中庭の外から風がなだれ込んでくる。

太陽の光で十分に暖まっている風は魔法の力も合わさつて、中庭一面に降り積もっている雪を瞬時に溶かしていった。

いつの間にか降っていた雪もやみ、もとの暖かさが戻っている。

次に私は掲げた右手を横になぎ払う。

すると私の周りにいた樹の妖精たちが中庭にある植物に成長を促すかのように力を貸した。

中庭はまるで花畑のように花でいっぱいになり、木も青々と生い茂っていった。

本来の春の陽気を取り戻したかのように、花の周りには蝶が、木

の枝にはかわいらしく鳴く鳥たちがいる。

樹の妖精たちはまだ植物たちと戯れているが、風の妖精たちは私の周りを一周すると空高く舞い上がり帰っていった。

「そこで試験終了！ 止め！！」

風の妖精たちが消えてしまっただけからすぐに試験終了の合図が聞こえた。

そして私を含む3人は自分が属するグループへと戻ろうとした。

そのとき、

「すごくきれいだった！」

「素晴らしいっ」

「さー！！」

屋上にある観客席から、同じ受験生から同じような言葉が投げかけられる。試験終了の合図が出るまで周りから声が聞こえなかったために、せきを切ったように投げかけられる言葉がものすごく大きな音量で聞こえる。

言葉の中に「3人も」というものが入っていて、2人だけじゃ

なくて私もその称賛に含まれているのが分かるとなんだか照れてしまう。

でもやはり称賛の声を浴びるのはうれしい。たった3分前までは人の前に出るのでさえ緊張していたのに今ではその人前を堂々と歩いている。

私は歩きながらまだ中庭に残っている妖精やその他の集まってくれた妖精にお礼を言う。

そして私たち3人は鳴りやまない言葉を浴び続けながらそれぞれのグループへと戻っていった。

+ + + +

カラカラカララ……、

私は不規則な音を聞きながら流れる景色をみる。

外はすでに太陽が傾き、逆方向からは月が顔を出し始めている。

時折揺れる馬車内は快適とはいえないものの、車とは違う少し遅い速度や自然との距離感が近くてそういった意味では快適だ。

「ヒナ、お疲れ。今日は疲れただろ、着いたら起こしてあげるから眠ってもいいんだよ」

外を見ていた私に話しかけてきたのはリコット亭から迎えに来てくれたウインスさん。

試験が終了して学院の外で待っていた私を迎えに来てくれたのだ。

「大丈夫です。体は少し疲れているみたいだけど、眠くはないんでウインスさんにそう言うのと私の膝の上に乗っかっているロウを撫でる。」

ウインスさんは気持ちよさそうに撫でられているロウを見ながら「そうかい、確かに眠くはないかもしれないね」と言い、私へと顔を向け言葉をつづけた。

「今日は食堂を貸し切ってヒナのお祝いだね」
「優しいような笑顔でそう言うウインスさん。」「多分今頃は家に知らせが行っているはずだから準備しているかもしれないね」なんて言っている。

「ええっ！ そんないいですよ、わざわざ私のためにつ」

「いや、お祝い事はきちんとしないとね。せっかく学院に合格したんだから」

そう、今日の試験になんと私は合格したのだ！

試験結果を聞いて一時は信じられなかったけど、そのあとの合格者説明で入学についての話を学院長から聞いていたら信じるしかなかった。

最初は驚いていたけど今はもう冷静に受け止めている。それは学院がどれだけすごいとかが私自身よく分かっているからかもしれない。

ない。

「ううーん、でも貸し切りでまでしなくても…」

合格祝いをしてくれるみたいだけど、いつもの食堂が終わってからちょっとしたお祝いをしてくれるだけでも十分だ、なんて思うけどどうやら私が合格した場合は貸し切りで祝うって決めていたみたい。

合格の連絡もすでに届いているとのことらしい。あ、これはイアンの時がそうだったから分かるそうさ。

「それに魔法科の生徒は寮生活になるわけだし、これからはあまり顔を合わせることができなくなるんだからこれくらいはしないと」

学院長が行った合格者説明で、そのことも聞いた。魔法科に属するものは特別な事情がない限り寮で生活をしなければならないのだ。それは貴族、平民に関係なく絶対事で誰も覆すことはできない。

「んー、でも私もお手伝いはしますからね！」

「ははっ、ヒナには叶わないな」

沈む夕日に照らされながら、私とウィンスさんはリコット亭に帰りつくまで話し続けたのだった。

4 (後書き)

ま、魔法の説明が難しい…orz

分かりにくかったなら申し訳ないです…。

皆さまの妄想力で補ってくださることを期待します！

ありがとうございました。

祝いの後で

外はすっかり夜の闇に包まれている。

この世界には日本のような煌びやかな街灯はなく、店先に灯る蠟燭ろうそくの火や建物の窓から漏れる光などが夜の街を色づける。

初めて王都へ来た時、私はロウとこの夜の街を歩いた。明かりが少なくて驚きもしたが、今では当たり前前の風景だ。

頼りない光は不便かもしれないが、なんだか暖かさを感じる事ができる。

それに月の光や星の光もあるので街灯も必要ないのかもしれない。空を見上げれば一面に、何百という星を見渡せる。村でも見ることができたが王都でも見れるなんて驚きだ。

溢れんばかりの星はよく見るとそれぞれ色が違っていて、ちかちかと瞬いているのが分かる。

私は窓から星空を見上げ、まだ肌寒さを感じる春の夜の風を感じると「さむっ」と呟きながら窓を閉める。私がいる部屋は大通り側には面しておらず、そのためか窓を開けていてもあまり外の喧騒は感じない。

窓を閉めてから魔法で机の上にある蠟燭に明かりを灯す。

小さな光だがなんだか心が温まるような光だ。

「もうこちらへ戻ってきてもよかったのか？」

一緒に部屋へと戻ってきたロウが私に尋ねてくる。ロウは蠟燭の周りにいる火の妖精たちを見ながら話をする。

「あのままいたらお酒飲まされそうだったし。それにみんなもう結構出来上がっているみたいだったから私がいなくなっても気づいてないと思うし大丈夫だよ」

明かりをつけてからベッドに腰掛ける。ロウもベッドに跳びのり私の横へと腰を下ろした。

「帰って来てからすごかったからな。長時間もあんなに騒いでいられるとは、見ているこちらにも疲れてしまった」

「ははっ、ロウは苦手そうだよね。でもあんなに喜んでもらえて、しかもお祝いまでしてくれるなんて。なんかうれしい」

階下からはラネさんたちの笑い声が聞こえてくる。お祝いといって開かれたパーティーにはリコット亭の人たちがみんな参加してくれた。イアンや学院の先生と分かったグロウさんたちは参加していないが、その他参加したみんなは自分のことのようにうれしそうに私の合格を祝ってくれたのだ。

まだここで働き始めて短い期間だが、こんなにも本当の仲間のよううに家族のように接してくれる人たちが私は大好きだ。ようやく仕事に慣れてきたころでの合格で、これからは寮生活になりみんなにあまり会えなくなるのが残念だが…。

「人とのそういった絆は大切だ。学院に入学すればもっと多くの大切な人々が増えるだろう」

「そうだといいね。年が近い人達ばかりだし、最初は緊張すると思
うけど少しは楽しみかな」

私は膝の上に寝転がるロウを撫でながら話を続ける。
部屋の中は蠟燭の明かりが1つだけのはずだが火の妖精たちがい
るのでほんのり明るく、そしてほんのり暖かい。

「そう言えば、試験はどんなだったんだ？ 聞いてなかったな」
忘れてた、と言うようにロウが私に話を振ってきた。

今までは周りに人がいたので、ただの仔犬のふりをしているロウ
に今日の詳細は話していないのだ。

「んと、試験は実技1回のみで合否が決まったの。その実技は魔法
をどうやって『魅せる』かって試験。色々な魔法を見たよ。それか
ら……」

今日見たこと感じたことを思いだす。

そして私はロウに試験のことを話し始めた。

+ + + +

試験が終わると受験生である私たちは1時間の昼休憩を与えられ
た。屋上にいたはずの在校生たちはいつの間にかいなくなっていた。

試験があつた中庭のある建物を、初めて来たときに入ってきたの
とは違う方向へと通り抜けると食堂があつた。普段は在校生や教職
員しか使用できないが、入学試験の時は受験生にも開放されるらし
い。

食堂ではなくカフェテリア、レストランと言ったほうが正しいと思われるそこは外装から見ても豪華だ。

外から眺めると1階はカフェテリアのようになっている。休憩時間が始まってからいくらか経っているためか、多くの受験生たちが在校生に交じりそのカフェテリアまたはレストランのようだと思われるその建物にたくさんいた。建物の周りにはテーブルやベンチなどがあり、外で休憩している人もいるみたいだ。

私は持参したお弁当があつたのでその建物からあまり離れていないところにある木の根元に座り、そこでお昼を食べることにした。

試験があつた建物が見える範囲までなら移動してもよいとの事だったので、私はあまり遠くに行くこともなくその木の下でお弁当を食べながら休憩していた。

持参したお弁当はもちろんリコット亭で作ったもの。とはいっても私が作ったのではなく、料理人のおじさんたちに作ってもらつたお弁当だ。時間もたっぷりあるのでゆっくりと味わって食べる。

そういえば口ウはどうしてるかな、なんて思いながらお弁当の身を口にしていった。

最後の一口を口にした後、どこからか1匹の鳥が飛んできた。その鳥は私の掌ほどの大きさの真っ白な鳥で、くちばしに紙を啜くわえていた。

「なんだろ、私についてことかな？」

その白い鳥は私に1枚の紙を渡すと役目を果たし終えたのか、ま

た空へと羽ばたき戻っていった。

「まだ休憩時間のはずだけどうしたんだろう」

独り言をつぶやきながらも目的地へと歩いていく。

多くの受験生がお昼を食べるために先ほど見た建物にいるからか、周りには私以外いない。

私は歩き進めながら「もしかして私だけ不合格とか……」など考える。

紙には先ほど試験があつた中庭へと行くように、と一言書いてあつただけ。

私は中庭へと続く扉を緊張しながら開けた。

「おお！ やつときたか。君で最後じゃな、では話を始めようかの」

扉を開けた先にいたのは数十人の同じ受験生たちに数人の先生、そして学院長だつた。

私の中庭へ入ってきたとき、みんなが一度こちらを振り向いたが学院長が話し始めるとすぐに前を向いていた。私は「もっと中へ入りなさい」と入り口付近にいた、試験中1グループを担当した女性の先生に声をかけられ、受験生たちのいる方へと向かつた。

「では全員揃つたところで、改めて『合格おめでとう』！」

学院長がそう言うと、周りにいた先生たちがぱちぱちと拍手をす
る。

私は「え？」と言いながら目をぱちくりさせる。

他の受験生たちは最初から分かっていたのか、それとも私が来る
前に話を聞いていたのか、さほど驚いているようではない。

私は1人、学院長の言葉に耳を疑いながらも話を聞いた。

話を聞くと、ここにいる人が試験に合格したものらしい。外で休
憩している人は今回不合格ということだ。

学院長はまず、祝いの言葉を述べてから今回の試験について全体
的な感想とここにいる私たちが合格した理由をおっしゃた。学院長
も試験を見に来ていたらしいが、受験生に隠れてみていたとのこと
だ。

確かに有名だと言われている学院長自ら試験監督だったら緊張し
て力を発揮できない人がいるかも…。

そういった感想を伝えた後は今後の予定について説明された。

入学手続きのための書類はそれぞれの家庭に送付され、書類と共
に制服も送られるそうだ。なぜ制服のサイズが分かるのか、という
のは謎だがそれもいつの間にか調べてあるのかもしれない。

その他、必要なもの、教科書類は学院で揃えるそうなので必要な
いとのこと。

入学式は5日後。今回の試験の時のように、表の正門から入って
くるようにだそうだ。

試験もいきなりだったが、入学もいきなりだ、なんて思っている

と学院長の話が終わった。

この後は解散。休憩時間は終わり、不合格の者たちには結果は後日だと伝えているらしくほとんどの人が学院の外に出ていた。

私も外へ出るとウインズさんとロウが待っていて、私たちは乗合馬車に乗って帰ったのだ。

+ + + +

「なるほどな。とにかく合格できてよかったではないか。ロータス王立学院といえば、私がこちらにいたころからあった学院で魔法を勉強するに適したところだと思うぞ。なんせ私が知っているくらいだからな」

私の話を聞いていたロウは、今度入学する学院を知っているようだ。ロウが知っているくらい、というのはよく分からないが国内有数の優れた学院だとは私も教えてもらった。

「合格したのは40人だって。私が受けたのは魔法科だけど、普通科もあるみたい」

不合格者のほとんどがその普通科に入学するらしい。その普通科も一般的には合格難易度が高いが、魔法科を受験したものは優先的に入学許可が下りるのだ。

「魔法科は寮に住むのだろうか？ ヒナも寮に入るのなら私はどうな

るのだ？」

ラネさんやウィンスさんが話していたのを聞いていたのだろう、不安げに顔をあげながらロウが尋ねてきた。

「それに関しては大丈夫みたい。学院長の話では危険とみなされる以外の動物だったら連れてきてもいいって」

動物、という言葉にロウは少し反論したけど一緒に学院に行けると聞いて安心したようだ。

「ヒナを1人にしたら不安でたまらないからな！」

「…それってどういうことよ」

そのあとロウと少し話した私は疲れた体を癒すべく、お風呂場に向かった。リコット亭のお風呂場はもちろんお客さん優先だが従業員である私なども自由に使うことができる。

ただ時間指定はされているので決まった時間に急いで体を洗わないといけない。

お風呂は普段は夕方の時間から薪でお湯を沸かしてある。私はその少し熱すぎるお湯で体の汚れを落としていった。

「はぁー、いいお湯でした」

さっぱりした体で部屋に戻る。部屋には火の妖精たちがお留守番をしてくれていたからか、ほんのり暖かい。部屋を出る際に蝋燭は

消していたが、星の光や火の妖精たちのおかげで暗さも感じない。

そのままベッドに倒れこんだ私はこのまま寝る体制に入る。

中途半端に乾いた髪の毛そのままにして寝ようかなと思っ
るところに、ロウがベッドに入ってきた。

ロウの体は風の妖精に頼んで乾かしてもらったのでふわふわだ。

「そう言えば、魔法を使うときって呪文みたいなのは唱えるものなの？」

今日の試験で私が見ていた限りでは呪文を唱えてから魔法が出ていたようなのだ。

何と言っていたのかは分からないが口の開きで何か言っているのはわかった。

「呪文か？ 一般的には呪文を唱えるものが多かった気はするが、
唱えないものもいたぞ。菊は呪文を詠唱したり、しなかったりと両
方だったな。今の事情は分からんがどちらかと言えば普通は呪文を
使うのではないか？」

それがどうした、と寝ている私の横に顔を出したロウが聞いてく
る。

「そっか。あの時にあれやってよかった」

「なんだ？」

私のつぶやきに首を傾げてきたロウに「なんでもないよ」といっ
て目をつぶる。

なんとなくだけど、私以外の受験生たちが呪文を唱えて魔法を使

っている中、私がいつものように魔法を使ったら目立ってしまったのではないかと思ったのだ。

あの時、あの試験の時にとっさにだったが「口ぱく」で呪文を唱えているように見せかけて魔法を使った。

ばれた、ばれてないは分からないがやらないよりはいいだろうと思っただけだ。

試験中の学生と他の人たちとは距離もあって小さな違和感は気付かれにくい。

多分気付かれていないだろう。いや、もしかしたら気付いた人間がいるかもしれないが…。

なににせよ、今日という日乗り越えることができたので一安心だ。

私は隣で寝ているロウを抱きしめながら、眠りの底に落ちていった。

祝いの後で（後書き）

ありがとうございました^^

入学式

「ヒナ、準備はできたかい？」

部屋にラネさんが入ってきた。私は「はい、ほとんどできました」とラネさんのいる部屋の入り口の方へと振り向く。

「あら、似合っているじゃないか。……ああ！ 掃除なんてしないでいいんだよ。後でやっつくから」

「でもお店もあるし……」

「せっかくの入学式なのに、新しい制服が汚れでもしたらどうするんだい？」

試験の日から5日後、今日は学院の入学式だ。

入学式は入学試験と同じ時間の9の刻からで、8の刻30分までに学院本館で受付をしないといけない。

私は新しい制服に身を包み、準備もほとんど終えた。

これからは学院の寮生活になるのだが、家具などは備え付けなので服や小物などだけ持参すればいい。

今まで暮らしていた部屋なので掃除くらいは、と思いゴミを集めたりしていたのだがラネさんに断られてしまった。

いつもより早めの朝ごはんができているみたい。

今回はお言葉に甘え部屋の掃除をラネさんに頼むことにし、真新しい制服のスカートを揺らしながら小走りで食堂へと向かう。

「おはようございます」

私が1階の食堂へ行くと朝働きにくる女性の人がいた。まだ開店には早い時間で普段なら厨房のおじさんたちくらいしかないはずで、女性たちはもつと後に出勤なのだ。

「おはよう、今日からでしょ」

「制服、似合っているじゃない」

「ありがとうございます。わざわざ早く来てくれたんですか？」

「そうよ、ヒナの晴れ姿を早く見たかったのよ」

朝働きに来る2人は私を見送るためにいつもより早めに来たみたいだ。

私に「頑張つてね」と言うと、時間に余裕があるからカラネさんの仕事を手伝いに向かっていった。

私たちの会話が聞こえたのか、ウインズさんが厨房から顔を出してきた。

「おはよう、ヒナ。テーブルに朝食があるから冷めないうちに食べなさい。食べてしまったら声をかけるんだよ」

ウインズさんはそういうと、仕事があるのかまた厨房へと戻っていった。

私は「分かりました」と返事をし、テーブルに置いてある朝ごはんを食べ始める。

今日は学院に行くのが2度目ということで、1人でいくことにした。

現地まで馬車なので迷うことはないし、それに朝は食堂で忙しい時間なので1人でも抜けると大変なのだ。

ウインズさんは今回も一緒に行くと言ってくれたが迷惑をかけるわけにもいかない。

最後まで心配していたが、なんとか私が1人でいくことに賛成してくれた。ただ馬車代は出すからと言われてそれはお願いしてしまっただけ……。

いつの間にか起きてきたロウも床の上に用意してあったミルクを飲んでいた。

私は朝食を食べ終わると食器を持って厨房に向かう。

「ウインズさん、食べ終わりました」

そういうと「多分もうすぐ馬車が通るだろうからそれに乗っていい」と、私が持っている食器を受け取りながら話をする。

私はウインズさんにお礼を言うと、部屋へ戻り荷物を持って食堂へ戻る。

「あ、みなさん……」

私が階段を下りてくるとリコット亭のみんなが集まっていた。ロウも一緒に待っていたようで、私が来たのに気付くと足元に駆け寄ってきた。

「ヒナがいなくなるのは寂しいねえ」

「いつでも帰ってくるんだよ」

みんなが口々に言葉をかけてくれる。私は「ありがとうございます」「頑張ります」など言葉を返していく。

ここで働いている人たちはどの人も暖かく、そして優しさであふれている。まったくの他人同士なのにここまで思ってくれているなんて、改めてここにいられたことに感謝したい。

「ほら、あんまり話していると仕事が間に合わなくなるよ！」

ラネさんの一言で「そうだった」と厨房のおじさんや主婦の女性たちはそれぞれの持ち場に戻っていった。

最後に残ったのは店主とおかみさんである、ウインスさんとラネさん。

「あの、今まで本当にありがとうございます」
私はお礼を言ってぺこりとお辞儀をする。

「一生会えないわけじゃないし、そんなに畏^{かしこ}まらなくていいよ」
ラネさんが私の背中を撫でながら顔をあげるように言う。

「ああ、いつでも帰ってくるといい。分からなかったらイアンも連れてくればいいさ」

ウインスさんがいつもの笑顔で話しかけてくる。

そんな2人にもう一度お礼を言うと、少ない手荷物が入った鞆を持ち外へ出た。

+ + + +

入学式という晴れの日にふさわしい、雲ひとつない晴天だ。

時折大きな揺れを伴う馬車内からその気持ちのいいほどの青空を見上げる。

私が乗っている馬車には窓ガラスなんかは付いていないので直に風が当たる。

春の風はなんとなく花の匂いが含まれているようで、気持ちのいいものだ。

少し前だったらまだ冷たい風も吹いていてこのように感じることはできなかつただろう。

私は春の匂いのする風を浴びながら、学院までの道のりを馬車で進んだ。

「いつ見ても大きいなあ。…にしても人が多いっ」

2度目となる今いる場所、学院の門には新入生と思われる学生たちと保護者や付き添いの人々であふれかえっていた。

新入生だと識別できたのはみんな同じように真新しい制服に身を包んでいるから。

私が着ている女子の制服はチュニック型のもの。襟付きのシャツの上に見た目がジャンパースカートを着た感じ。腰より少し上、胸より少し下の部分をベルトで締めることで体を細く見せることができる。襟にリボンもついていて結構かわいい。

男子は今見た限りだと襟付きのシャツは同じで、ベストまたはセーターなどを着用しているみたい。

そして今私は羽織ってはいないがローブをつけている人もいる。

私は同じ新入生の人たちを見ながら歩こうとするのだが、かなりの人と荷物が多さだ。

ざわざわとしていて、なかなか前に進むことができない。

というか、そんなに荷物は必要なの？！　っていうくらい多荷物の人もいる。

門の中へは試験の時と同じく、新入生以外の人は入ることはできない。

荷物が多いのは女の子がほとんどで、革製の箱型の鞆を何個も馬車から出している人がいた。

どうやってそれらの荷物を運ぶんだろう…、なんて思いながら私はロウと一緒に門をくぐった。

門から中へ入ると外の喧騒がうそのように静まり返っている。

静か、とはいっても鳥たちの鳴く声や風のさわさわとした音は聞こえ、とても心地よい。

私は5日前に通った道を今度はロウと一緒に歩いていった。

+ + + +

「こんにちは、入学おめでとうございます!!」

門の中にいた先輩と思われる人の指示に従い、入学試験の時に最初に入った建物である本館へ向かった。

本館には新入生の半分の人数である約20人程度がいた。

今いる場所は入学試験で多くの受験生が集まった、広いホールのようだった所。

本館に入っつてすぐの入り口で本人確認の手続き、それから手荷物を預けるとすぐにそのホールへと入った。

私たち新入生以外にも学生がいるが、それは男女とも同じ左胸についている校章の色が学年で違うことから分かる。

ロウは手荷物と一緒に預けているのでここにはいない。

今日から住む寮に入学式の間移動することだ。

入学式はこの広間で行われるそうだが、まだ時間には早いようである。始まるまで時間があるようだ。

私は特にすることもないので入り口横の壁に肩を預けるように立ち、このホールへ入ってくるこれから同級生となる新入生を眺めていた。

「あら、あなたこの間の平民じゃないの？」

入り口の方を見ていると、横から声をかけられた。私は「友達できるかな」とか「勉強についていけるかな」なんて考えながら新入生たちをぼんやり見ていたので、声をかけられるまで気がつかなかった。

「口を慎みなさい、リディ。この学院は身分関係なく、入学が許可されたものなら誰でも学ぶことができるのよ。……あなたも気を悪くさせてしまったのならごめんなさいね」

「あ、いえ」

声をかけられた方を向くと、2人の少女がいた。

最初に声をかけてきたのは赤毛のくるくるパーマの子。彼女は入学試験の時にも会ったことがある。その時も確か私のことを「平民」呼ばわりして少しあたまに來たのを覚えている。

そしてもう一人の少女は金髪碧眼の見目麗しい少女。下ろしたら腰まであるだろう髪を頭の上で結び、すっきりとした首回りが彼女を知的に見せている。金髪の彼女は私に「リディも悪い子ではないのよ」と眉を下げ、すまなそうな顔で謝ってきた。

私は謝ってきた彼女にあわてて怒っていないということを伝えようと、彼女はほっとした顔をしていた。

「え、えーと。私はヒナ・フロリスです。これからよろしくお願
いします」

私はこの気まずい空気を変えようと、自己紹介をすることにした。そう言えば、赤毛の子には入学式のときにも会っているが、名前もはっきりと知らないということに気付いた。金髪の子はともかく、本当は赤毛の子とはよろしくしたくないが、同級生が40人なら嫌でも関わらなければならぬだろう。

「わたくしはリデーレ・レソン・パッセルよ」

「もうっ、リディったら。……私はセレシア・ママ・デモール。シアでいいわよ。こちらこそよろしくね」

金髪の子はシア、赤毛の子はリディと呼ぶことになった。

リディはシアに言われたせいか、私のことを平民とは言わなくな

ったがなんだか不満そうだ。

口をへの字にして、私と目を合わせようとはしない。

最初のころはリデイの態度に腹が立っていたが、なんだかここま
であからさま過ぎるとどうでもよくなってきた。

というか、顔にまではつきりと私に対する態度が出ているがシア
がいるためか、口にまでは出さないようだ。

シアたちに年を聞くと2人とも13歳ということだった。

12歳から試験を受けられるので、新入生は12、3歳がほとん
どを占めている。

私のようにそうではない人もいるみたいだが、数は少ないみたい。

15歳の私とあまり年は変わらないが、年下だからと思うとリデ
イの態度も少しは我慢できる。

でも2人の年齢を聞くと驚いてしまった。なぜなら2人とも身長
は私よりも高く、体つきも13歳と思えないくらいに豊かだからだ。

まだ私が村にいた頃、同い年のリチエを見たときもそうだが、こ
の世界の人間は体の発達が早いようだ。

私も一応この世界の血が流れているはずなのに……、なんて思っ
てしまう。

「なんだか人が増えてきたみたいね。もうそろそろ始まるかもしれ
ないわ」

私がつなだれていると、シアがホールの中にいる人々を見ながら
つぶやいた。

どうやら私たち3人は思っていたよりも話しこんでいたみたい（

私トリデイは会話らしい会話はしていないが、その間に新入生のほとんどが入室していたようだ。

丁度その時、私やその他の新入生が入ってきた扉が閉まった。

「諸君、入学おめでとう！」

いつの間になっていたのか、学院長がホールの中央、新入生に囲まれるようにして立っていた。

みんなも今気付いたのか、あわてて学院長から離れ、学院長の周りを囲むように新入生がいる。

私たちも学院長が見える位置に移動した。

「ここにいる新入生はロータス王立学院魔法科の諸君じゃな。みんなも知っているだろうが、魔法科の他に普通科もある。普通科と魔法科は場所が離れているということと別で入学式を行ってある。まあ、式といつてもわしの簡単な挨拶ぐらいじゃが……」

急にあらわれた学院長はみんなのあわてる顔を見ながら「ほっほっほ！」と笑い、話を続ける。

「今日から7年間、ここが皆の家となる。特にここにいる同級のものど長く過ごしていくことになるが、それぞれが良き友、良き好敵手（ライバル）になることを望んである。……それでは、わしは普通科の入学式にも顔を出さねばならんでな、また後に会おう！」

室内の空気が学院長の周りに集まる。小さな竜巻のようなものが

学院長を囲み、その竜巻が拡散したと思っただら中にいたはずの学院長が消えていた。

「さすがこの国一の魔法使いね。最初来た時も気配すら気付かなかったし、今の魔法も確かあんな簡単に使えるものではないはずよ」

「そうですね！ わたくしもエーヴァルト学院長の下で学べることを誇りに思いますわ」

私と共にいる2人の少女が今学園長がいた辺りを見ながら、目をキラキラさせている。

周りの同級生たちも同じように目を輝かせながら、興奮したように声をあげている。

ざわめく新生生たちに向かってパンツと手を合わせた音が聞こえると、先生の説明が始まった。

「静かに！ それでは、今から入学にあたっての諸事項を伝えます。そのあとに寮へ皆で向かい、各自に割り当てられた部屋へと入室してもらいます。昼ごはんは今日だけ特別に、部屋に用意してあるので自由に食べてください」

門限や立入り禁止場所、寮の説明といった注意事項がほとんどだった。

後は各々の部屋に紙が置いてあるのでそれを読むように、とのこと。また、寮の中に学院からの必要な情報を書いてある紙が掲示されるので、部屋に帰る際に見ること、と伝えられた。

説明が終わると、次にこれからの私たちの家となる寮への移動だ。

数人の先生に先輩たちの後に続いて移動する。

「わあ、豪華！」

「まあまあですわね」

私はシアとリディと並んで歩き、目の前に寮が見えると口々に声を出した。

「ここがこれからの私たちの家になるのね」

シアの言葉に頷きながら、建物の前で立ち止まった先生の話聞く。

「ここから左の棟が男子寮、右が女子寮です。男女の寮をつなぐ真ん中の建物はお風呂場や軽い食事をとれる食堂、談話室などがあります。また、寮を管理するものたちもこの中央の建物にいます。分からないことは先輩方に聞くといいでしょう」

先生がそういうと、一緒にいた数人の先輩たちが男女に分かれ私たちを寮の中へと案内する。

「では、夕方まで自由時間とします。部屋の片づけなどをしてゆっくりと過ごしてください。……それと男女それぞれの寮への行来きまでは厳しく注意しませんが節度ある態度で過ごすように、以上です」

「どんな部屋かな？」

「わたくしはセレシア様の近くがいいですわ」

「そうね、私もリディヤヒナと近くの部屋がいいわ」

先生たちは寮の説明を先輩たちに任せ、離れていった。私たち新入生は先輩たちの後について、これからの家となる寮の中へと入っていった。

入学式（後書き）

ありがとうございました…

友達

寮の中へと足を踏み入れると、そこはまるでお城のようでした……

と、言いたくなるような内装。いや、お城なんて入ったことはないから想像なのだけだ。

「うあー、広ーい！」

私たちは先輩の後に続いて男女の寮の間にある中央棟へ入った。中へ入るとまず目に入るのが奥にある螺旋階段^{らせん}。2手に分かれている階段はそれこそ物語のお城にありそうだ。

2階まで吹き抜けになっているみたいで、天井も高い。

入ってきたところから1階部分は中学の時の修学旅行で泊ったホテルのロビーよりも立派で、先輩も合わせると50人近くいるのに全く窮屈感を感じさせない。

「この1階部分が寮で1番広い談話室となっています。周りにはソファやテーブルなんかは自由に使っていいから。暖炉はやけどに注意してね」

先輩の1人が今私たちがいる場所について説明していく。

あと、1階にはお風呂場があり前にある階段の両脇に男女別で入り口があった。

2階部分は吹き抜けの周りが談話場所や食事をとれる場所になっ

ていた。

寮の管理人さんもいるらしく、その人は2階の隅にある部屋にいるそうだ。

私たち新入生は周りをきよるきよるしながらも先輩の説明を聞いた。

この中央棟には夜や休みの日には多くの生徒がいるらしく、自由に過ごしているとのこと。

壁にはテストの日程だとか、授業休講のお知らせだとかが無数に貼ってあり、それを見るとやっとここは寮なのだと感じることができた。

「それでは男女に分かれて部屋の案内をします。女子は私に着いてきてね」

そういうと2手に分かれて寮の部屋へと移動することになった。

この中央棟から寮がある棟に入るには、中央棟にはいつて右奥にある大きな扉を開くだけ。

扉を開いたその先には2階へと続く階段。左右には廊下が伸び、離れた間隔で扉が続いている。

「1年生は7階に部屋があるから。部屋わりはもう終わっていて、扉の前に名前が書いてあるからそれを見て入ってね。ドアは開いて、荷物は届いているはずで、鍵も一緒に置いてあるはず。それとトイレは各自部屋にあるから」

女子だけで移動しながら、先輩がいろいろと説明してくれる。

洗濯や部屋の掃除なんかはいつの間にかしてあるらしいとか、部屋にお菓子を置いていると寝ている間に消えているとか……。

「聞いたことがありますわ。この寮には妖精がいて、彼らが掃除や洗濯をしていると」

「それなら私も聞いたことがあります。その妖精たちは私たちに隠れているから知らないうちに掃除がされているように見える、と言う話でした」

リディとシアが先輩の話を聞いて答えていた。他の子たちも聞いたことがあるのだろう、うんうんと頷いていた。

「ふふ、有名な話だものね。でも実際に洗濯なんかされていたら少しびっくりするかもね」

そう話しながらいくらかすると、やっと7階に着いた。

2、3階は話ながら登っていたが、7階に着くころにはみんなへとへとだった。

「あら、だらしないわね。ここで体力は男女関係なしに必要よ。まあ、嫌でも毎日上り下りしていたら体力はつくけれどね」

ええ、という声が聞こえてくる。私もその悲鳴に同意。毎日上り下りするのを想像するだけで疲れそうだ。シアとリディを見たら、意外にも2人ともケロツとしていた。

先輩は最後にいくつかの説明と次に集まる場所の確認をすると階段を下りて行った。

「それじゃあ、部屋探そっか」

周りでお互いにそんな風に言いあうと、みんなそれぞれ自分の部

屋を探していった。

「あ、私ここだ」

最初に見つけたのは私。廊下突き当たりの角部屋だ。階段から離れているけど、分かりやすいからまあいっか、などと考える。

「私はヒナの横の部屋みたい」

「わたくしは向かい側ですわ」

どうやらシアは私のお隣でリディはお向かいさんのようだ。偶然か分からないが、知り合いが近くにいると思うだけで安心する。

また後で、と2人と別れるとさっそく部屋の中へと入っていった。

+ + + +

「遅かったな」

「ロウ！ やっぱりいたんだ。よかったあ」

部屋に入るとロウがとてとて、と走ってきた。私はロウを抱えて、奥へと歩いていく。

「おおおっ！ 想像以上……」

部屋は想像以上の広さだった。1人部屋だとは聞いていたがここまで広いとは正直驚きだ。

部屋に入るとすぐに居間があり、テーブルやソファ、勉強机などが備えてある。

入り口ドアのすぐ隣には個室のトイレもあり、中も清潔に保たれていた。

居間を歩き、右の部屋に入ると寝室があった。

ベッドはもちろん、チェストやクローゼットも備えてある。

「ベランダまである。しかもこれまた広い」

居間と寝室にベランダがつながっていた。外を見ると遠目に学院の建物が見える。

辺りは自然な林が生え、寮の周囲は庭が整備されどこかの庭園のよう。

なんだか旅行に来た気分になってしまう。

買い物などは王都の街まで行かないいけないのが唯一の不便、今のところ本当に不便はそれくらいしか思いつかない。

「ここは住みよいな。魔力が安定し、私のような妖精には快適だ」

「妖精だけじゃなくて人間も住みやすいと思う。同じ王都の中なのにここまで違うんだ……」

活気に満ち溢れていた王都とは違って、ここは物静かな自然あふれる場所。

ロウが言うように、妖精たちが住みやすいのかいたるところに気配を感じることができる。

また、妖精だけではなく動物たちも住みやすいようで、小鳥たちが私に挨拶をしてくる。

「7年間って長いなどは感じていたけど、ここなら頑張れそう」

そう1人呟くと、部屋に届いた荷物を確認することにした。

「ヒナ？ 片づけ終わった？」

私が持ってきた服などをチェストに入れてみると、トントンというノックと外から声が聞こえてきた。

「丁度終わったとこー、入ってきていいよー！」

寝室にいた私は大声で外にいるであろうシアに声をかけた。

「どうやらシアも荷物をまとめ終わったようで私の部屋へと来たよ
うだ。」

「部屋の内装は一緒のようね。リディのところにも行ったのだけど、
なんだか色々と音が聞こえてきて入れなかったわ」

肩をあげてリディの部屋の様子を話すシア。

なんだかすぐそんなので聞かないことにしよう……。

「シアは早かったのね。荷物は少ないの？」

「ええ、特に持ってきてないわ。荷物になるだけだし」

意外になことにシアは少ない荷物で来ていたみたいだ。

今までの様子からシア達は貴族だと分かっていたのでかなりの多荷物なのだと思っていた。

貴族のお姫様って色々必要そうなので。

「それに、必要になれば買ってくればいいでしょ？」

……やはりシアもお嬢様だったらしい。

「ねえヒナ、」

「なあに？」

ねえ、と話しかけながらシアはロウを膝に抱き撫でている。

私の部屋にロウがいるのに気づいたシアは「かわいい仔犬ね」と抱き上げていた。

仔犬、という言葉にピクリと反応していたロウには気づかなかつたふりをしよう。

「なんとさえばいいか分からないけれど、これからよろしくね」

真つ直ぐに私の眼を見るシアに私も「うん」と頷いた。

私の返事にほっとしたのか、にこりとシアが笑う。初めて見るシアの笑顔は、それまで大人びていた雰囲気とは違って年相応の満面の笑みだった。

+ + + +

「さあ！ もうすぐ夕刻ですわ。セレシア様、まいりましょう！」

ようやく部屋の片づけが終わったらしいリデイがやってきた。

私は今、シアの部屋にいる。最初は私の部屋で話していたが、シアの部屋の様子を見たいと言って入れてもらったのだ。

「分かったわ、ちょっと待って頂戴」

シアがリデイにさういうと、私の方へと振り向く。

そして「お願いね」と言いながら私にウイंकするとシアはリデイの元へと歩いていった。

「イルディア様！」

女子寮の扉を開け、中央棟へと入るとリデイが急に声をあげた。リデイが名前を呼んだ人物は女子寮扉前にいて、「あ、リデイ」と言っていて話している。

「イル、もしかして待っていたの？」

「まあね、シア達の様子も聞きたかったし」

彼女たちと話しているのはシアによく似た男の子。顔や髪色なんかがよく似ていて、2人ともきれいな金髪碧眼だ。そしてどこかで見たことある顔だった。

「……あ、もしかして試験の時の」

よく見ると試験で同じ最後だった男の子だ。あのとき見とれてしまっほどの容姿を忘れるわけがない。そう思って彼をじっと見ていると、

「ん？ 君は一緒に試験を受けた……？」

「イル、ヒナを知っているの？」

私が見つめているのに気がついたらしい彼が私の方を見る。うれしいことにその彼も私のことを覚えてくれていたみたい。

「まあね。もうシア達と友達になったの？」

「あ、はい。私はヒナ・フロリスです。これからよろしくお願ひします」

やっぱり美少年だ、と思い緊張しながらも彼に挨拶をする。そして彼も私に自己紹介をしてくれた。

「僕はイルディア・マム・デモールでシアの弟。同級生なんだし敬語じゃなくていいよ。それと僕はイルでいいから」

「え、シアの弟？」

「そうよ。私たち双子なの。容姿なんかはよく似ていると言われるわ」

確かに男女の差はあるにしても2人はすごく似ている。きれいで流れるような金髪の2人は並ぶと天使のよう。そんな彼らと知り合えて幸運だと思いつながら「よろしく」とイルに挨拶をしていると今まで黙っていたリディが声を出してきた。

「ちよつと、お2人に馴れ馴れしすぎよ！　ここが学院だからわたくしもあまり口には出さなかつたけれど、お2人は高貴な方なのでからもう少し話し方など気をつけた方がよろしくてよ」

私に向かって怒ったように話すリディに私は目をぱちぱちとする。シアとイルは苦笑いをしながらリディをなだめていた。

「リディ、『友達』なんだからこれくらい普通よ」

「シアの友達なら僕の友達だ。それに友達は身分に関係ないと思っ
ているし」

2人はリディに向かってそう話す。でもリディは納得がいかない

みたい。

「しかし……！ わたくしは、」

「リディ、僕たちは君も『友達』だと思っている。だからヒナみたいに僕たちに接してほしいけど」

「そうね。これからは敬語は使わない、名前もイルとシアと呼ぶことにしましょう」

シアの提案にイルも乗っていた。リディだけは「そ、そんな」と茫然としたように口を開け、困った顔をしている。

「それと、リディ。身分は関係ないのだからヒナとも仲良くしなさいよ」

嫌そうな顔をするリディ。ああ、さっきシアによろしくと言われたけど、やっぱりよろしくしたくない……なんて思いながらリディに声をかける。

「リ、リディ？ 私と友達になってくれる？」

こう言いながら、友達ってこういう風に作らないよね？ なんて私は脳内で1人つつこむ。

というか、今までのリディを見ていてこのたった一言で友達になれるはずがないのでは？

反応がないみたいで、やっぱりだめかなんて思う。

「……わよ」

リディの反応は無く無言の状態だったので、私は小さくため息をついた。と、私がつめ息をついていた時声がうっすら聞こえてきた。

「え？」

小さすぎるその声は、周りの同級生たちのざわめきで聞きとれない。

私はリディに近づき、何と言ったのかもう一度聞こうとする。

「そ、そこまであなたが言うならと、友達になってあげてもいいわよ！ 学院に入学できたこともだけれど、わたくしが友達になってあげたことを幸運に思いなさい！」

ふんぞり返るように言うリディ。

そこまで、って別に言っていないけど……なんて思いながらもリディのことがようやく少し分かった気がする。

今までは嫌な子、関わらないでおこう、なんて思っていたけどそれは私の一方的な考えだった。

私はシアに視線を送ると、ウインクを送られた。

シアの隣でイルが話しかけている。多分私とシアのやりとりについてでも聞いているんだろう。

出会いは偶然。

友達になるにはきっかけが必要だ。

私はリディに「きっかけ」を作った。

『リディは真っ直ぐなのよ。真っ直ぐすぎて周りに合わせる』

苦手なの。特に身分には周りにも自分にも厳しいわ。それはリディの家がそうだから仕方のないことなのだけど、時に誤解を受けることもあるわ』

先ほど私が部屋でシアに聞いたこと。幼いころから共に過ごしてきたらしいシアはリディのことについてよく知っていた。

『でもきつかけを与えてあげればリディも受け入れることができるの。リディから折れることは少ないからこちらから言う必要があるけどね。……だからヒナから言うてあげて？』

「改めてよろしく、リディ」

「よろしく。……ヒナ」

私はリディに向き直り声をかけた。

リディは顔を赤らめながらも私の顔をみてヒナ、と名前を言った。

「それじゃあ、僕のことも『イル』って言うこと…」

「そ、それは無理なので『イル様』とお呼びしますっ」

私たち4人は顔を見合わせると笑い合った。

日本とは違い「身分」がある世界。私にはそれが人の関係にどのように影響するのかわかりにくい。最初に会ったころのリディのようないひともいれば、シアやイルのように身分に関係なく

接してくれる人もいる。

村や王都の平民と言われる人たちにも、私が気付かないところで身分差があるかもしれない。

この世界で生きることを決めただけとまだ分からないことだらけ。それでも分かり合うことができる実感できた。

『……だからヒナから言っておいて？ 友達になろうって』

出会いは最悪。

それでも未来はどうなるか分からない。

友達（後書き）

ありがとうございました！

再会

寮の外に出るとすでに辺りは暗く、星たちの時間になっていた。私が部屋を出て、中央棟に移動を始めたのが夕方あたり。1時間程度話していたということか。

私はようやく分かり合えた？ リディやシア、イルと話していた。周りでも新入生同士で友達ができ始めたからか、わいわいとした雰囲気だった。

私は他の人たちとも話したかったのだが、なぜか私たち4人の周りには人が少なく話しかけるタイミングが掴めなかった。

私は不思議に思いながらもこれからまだ時間もあるし、3人と友達になれたからいいかと思っているところに先ほどの寮まで案内をした先生がやってきた。

そして今、その先生を先頭に私たち40人の新入生はそろそろと星空の下を移動している。

「どこに行くんだろ？」

「特に説明もありませんでしたし……」

周りでも同じようなことを話しているのが聞こえる。

新入生は誰も知らないのか、夜の暗い中を歩いているというのも

あつて、みんな不安な気持ちで歩いているようだ。昼は太陽のおかげで暖かかったが、まだ夜は風が冷たく、余計に不安になってしまふ。

私も同様に時折吹く冷たい風に体を丸め、不安な気持ちを抱きつつ歩く。そして歩いているとなんだかお腹が空いてきた。

「え、ちょっと今の音はなんですか？」

「何か聞こえた？」

「いや、僕は何も……」

私たち4人は夜道を先生の後に着いて歩いている。前を歩いていたシアとイルには聞こえてないみたいだが隣を歩いていたリディには聞こえていたみたいだ。

3人が話しているときにまた鳴りだす私のお腹。

ぐうぐう〜

お昼から何も食べていないからか、とうとうお腹が悲鳴を上げ始めた。

できれば気づいても聞き流してほしいところだけど、リディに私の気持ちは伝わらなかったようだ。

「またっ！ な、なんの音ですか？」

「今のは私にも聞こえたわ、変な音ね」

「確かに。動物の唸っているような音にも聞こえる」

私のお腹の音に対して勝手に批評し始めた3人。その間にも鳴り続ける私のお腹。

お腹の音でこんなに言われるとは……、
前を歩き続けながらも話し続ける3人に私は恥ずかしい気持ちを
押さえて声をかけた。

「……それお腹が鳴る音だから」

「「「え?」「」」

3人同時に振り向く。

「へへ、お腹が減るとそんな風に音が鳴るのね」

「腹が減ることはあってもそんな風にまでならなかったからなあ」

「もー、その話は終わろうよっ」

シアとイルがまじまじと私を見る。多分リディも含めた3人も食に不自由をしたことがないのだろう。お腹が鳴る、ということに無縁だったのかもしれない。

まだシアとイルが不思議そうに互いに顔を合わせて首をかしげている。

どうにか今はお腹が鳴るのが止まったのでほっと胸をなでおろす。

シアヤリデイならともかくイルなどの同年代の男の子にまで聞かれたのが少しショック……。

私は空っぽのお腹をなで、肩を落としながら歩いた。

「それにしてもすごい音でしたわね」

そついうりデイに私は余計に肩を落として歩いたのだった。

+ + + +

「それではみなさん、全員ついてきましたか？」

到着したのだろう、足を止めた先生が後ろにいる私たちの方へ振り向き、新入生全員に声をかけてきた。先頭にいる先生の後ろには大きな建物。周りは暗く、外灯も歩いてきた道に沿ってある程度足を照らすほどにしかなかった。そのため、私たちの目の前にある建物は大きな建物としか分からなかった。

私たちが先生の周りに集まるのを待つと、先生は私たちが全員いるのかを確認するように1度見回し、それから話を始めた。

「今から入るこの建物は、皆さんも1度来たことがあります。しかし、まだここにきて不慣れでしょうから、目的地に着くまで私から離れないこと。また、これから学院内で生活するのに、どこに何があるのかが分からないと不便でしょうから各部屋に地図を配布し

ています。これは部屋に戻ってから確認すること」

先生の話聞いて、多分地図を先に渡さなかったのは今日の自由時間に勝手に外出させないためだったのかな、なんて思いながら話を聞いた。

「そして今から行く場所にはあなたたちの先輩である魔法科の生徒、また先生方もいます。礼儀を忘れず、そしてロータス王立学院魔法科の一員だと意識し、誇りを持って行動するように」

先生は「ではついて来なさい」と建物の中へと入っていった。

建物の中は外と違って明るい。それは廊下の壁から照らしている光のせいだろう。入学試験の時にも似たような廊下を歩き、同じような光が炎の代わりの明かりとして使われているのをみたので覚えている。

しんつ、と静まった廊下を先生のあとに続く。これから先輩たちや先生たちの元へ行くからか、外ではみんな話しながら歩いていたが今は誰も話しておらず、緊張しているのが分かる。

シアやイル、リデイも外にいた時よりも硬い表情をしていることから緊張感が伺える。

廊下には窓があり、外の様子を見ることが出来る。私はこの息が詰まるような雰囲気から気をそらすために外を眺めながら歩いた。

立ち止まったのは巨大な扉の前。高さは2mはあると思われる扉

だ。

先生はその扉の前に立ち止まる。

「これから長い間勉強に励むことになります。しかしロータスでは勉強以外にもみなさんに学んでほしいことがあるのです。そして…、まあ堅いことはとりあえず、今日は楽しむといいでしょう」

先生はそういうと、前にある大きな扉に手を当て軽く押した。

見た目は巨大でかなりの力を入れないと開かないと思われたその扉は簡単に開いた。

「では、ロータスによっこそー！」

開いた扉からたくさんの音と光、そしてお腹を刺激するいい匂いが溢れます。

私たちはその扉の中へと足を踏み入れた。

「うわー、すごいわ」

「さすがロータスね」

近くにいる女の子たちが話している。

その他の同級生たちも今いる場所の様子にあっけにとられているようだ。

「ここは入学試験が行われた中庭だよな」

「ええ、魔法のために様子がすっかり違うけれど私もそう思うわ」

イルとシアはすぐにこの場所がどこだかわかったみたい。

言われたみれば地面は床ではなく土。周りには見覚えのある木や花たち。

この前初めて中庭に来た時はその広さに驚いたが、今日は違う意味でもっと驚いている。

「すごいすわね、どれもすべて魔法なのかしら？」

リディはそう言いながらすぐ近くに浮かんでいる小さな光に触れていた。

この中庭にはリディが触っている光がたくさんあり、明るく照らしている。中庭を照らす光以外に、木には様々な色を放つ光がついており、まるで日本にいるころ見たクリスマスツリーのよう。

また魔法の光は蛍の小さな光のようなものから、手のひら大くらいの大きなものまで様々だ。

暖かいわ、と言うリディを見て私も光に触れてみた。

「本当だ、暖かい。不思議……」

「どっじゃ？ わしの魔法は」

「わあっ?!」

「が、学院長？」

リディと私が光の魔法を見ていると、不意に後ろから声がかけられた。

声の持ち主は学院長でまたしても私たちの虚きよについての登場だ。

シアとイルも驚いていて口を開けたまま固まっている。

もちろん声をかけられた私とリディもだが、双子の彼らは全く同じ体勢で笑いそうになってしまった。

ほっほっほ！ と笑う学院長は私たちが驚いている姿をみて満足げだ。

「みな、新入生同士で固まらず自由に過ごすとよい。今日はわしからの入学祝いとしてこの場を開いたのじゃ。同級生と仲良くなるのはもちろんじゃが、先輩たちもみなと仲良くなりたがっておるからの。そんな入り口におらずに中へ行ってみたらどうじゃ？ 食べ物もたくさんあるからどんどん食べるといい」

学院長が手をあげると、どこからかふわふわと骨付き肉が飛んでくる。

それを素手でとるとおいしそうに頬張っていた。

まだ固まったままの私たちを見て「わしがおると食べれんのかの？」といい、以前見たようにまた学院長の周りに小さな竜巻のようなものがおきると消えてしまった。

「ま、また急に消えた……」

「そ、そうですね……」

ついでに言うと、学院長が持っていた骨付き肉までなくなってい

た。

学院長をすぐ目の前で見ていたリディと私はまだ茫然としていた。しかしそのほかの同級生たちは学院長の言われていたように先輩たちのいる中庭奥へと歩いて行くのが見える。

先輩たちは私たち新入生の方を伺いながらも、すでに食事を始めているみたいだ。

実を言うとかかなりお腹空いてるんだよねー、と私は辺りを見回す。

どうやら立食パーティーのようだと思いながら、私たち4人も奥へと足を進めた。

+ + + +

この中庭にはおそらく魔法科の全校生徒がいるだろうと思う。普通科の人数は分からないが、魔法科は私たち1年が40人と言う人数から全部の7学年を合わせても多くて300人程度ではないだろうか。

300人という人数に加えて、先生たちの姿もあり、食べ物置くテーブルも数多く見える。

それを確認すると改めてこここの広さを実感した。

「それじゃあ、僕たちも食べよう」

「そうね、色々あるみたいでどれもおいしそうだわ」

ということでも私たちも食事をすることにした。

周りにはたくさん人がいて、先輩と思われる人たちは私たちに気軽に声をかけてくれる。

私は先輩たちに対して「はい」「いいえ」くらいしか返せなかつたけど、リディたちは初対面であろう先輩たちにも物怖おじせず話していた。

「すごいなー、3人とも。社交性があるっていうか……」

私はお皿に盛った料理を口に入れながらそれぞれに先輩たちと会話をする友達3人を少し離れた場所から眺めていた。

「どうしたの？ 君、1人？」

「……え？」

私は1人、シア達3人を見ながらご飯を食べていたら後ろから突然声をかけられた。

最初は私じゃない他の人に声をかけたと思った。けど中庭の端にいた私の周りにはあいにく人がおらず、声をかけられたのは私だとすぐに気付いた。

「あの、友達も一緒です……って、」

私は返事をしようと声をかけてきた人物の方へと体をむけた。

「イアンじゃん！」

「ははっ、やっと気づいた？ 久しぶりだね、ヒナ」

後ろを向いて、そこにいたのはイアンだった。イアンはいつもの爽やかさで私に「入学おめでとう」と話しかけてきた。

そっかイアンはこの生徒だったか、と思いながら私もイアンに返事をする。

「うん、ありがと。でもなんだか変ね感じね、同じ制服着てると。私ってすぐ気付いたの？」

「学院長がヒナのところにいたのを丁度見て気付いたんだ。友達と一緒になの？」

「そう、なんか色々あつて3人と友達になつたよ」

私はそう言いながら「あそこ」と3人の方を示す。

あ、あれ？ シア達と話している先輩たち増えてないか……？

私は不思議に思いながらもすでにあんなにたくさんの先輩たちと話せている3人をすごいなと思った。

それと3人はまだそれぞれ先輩たちと話しているみたいなので、私もイアンと話していて大丈夫かな。

イアンが大勢の先輩たちに囲まれている3人を見ると「……へえ、もう友達できたんだ。よかったね」とにこやかに言ってくれる。

「イアンは今1人なの？」

私はイアンがシア達3人をじっと見つめていたのでどうしたのか、と思ひ話しかける。

するとイアンは私の方を向きなおった。

「いや、友達も一緒だけど、……1人は新入生たちに声をかけてたり、他は多分いろんな人に捕まっているんじゃないかな」

首をかしげながら苦笑いをするイアン。「ま、俺もちよつと逃げてきたんだけどね」など呟いている。

「？ 結局、友達何人としたの？」

イアンの話からはイアンが今まで友達としたのは分かったけどよく分かんない部分が多い。

私が目をぱちぱちさせていると「ヒナは今のままでいいんだよ」とわけのわからないことを言われた。

再会（後書き）

ありがとうございました！

あと、短編小説を書きましたので興味がある方はどうぞw

「そっか、それじゃあヒナが学院に慣れてしばらくしたら一緒に家に戻ろうか」

「本当？ そっしてくれと助かる。1人でも大丈夫と思うけど、イアンがいたら安心するもん！」

「……ヒナ、他の人^{やっ}にはそういう風にあんまり言わない方がいいよ？」

私はシア達が帰ってくるまで（まだ先輩たちと話しているみたいだから）イアンといることにした。

イアンの方も友達がまだ来ないらしく（なんか人に捕まっているみたい？）、その友達が来るまで一緒にいてくれるみたい。ついでにその先輩たちも紹介してくれるとのこと。

まだ入学したてで、知り合いが少ないので先輩とかと知り合えると助かる。

勉強なども含めてこれからのことを教えてもらえるから。

そして今、イアンとリコット亭のことについて話していた。

私が慣れたら一緒に時間があるときに帰ってくれるみたい。イアンがいてくれると安心すると話していたんだけど、なぜか眉をひそめられた。

私が「何で？」というと、イアンにため息をつかれた。

イアンが苦笑いしながら「はあ……、」と息を吐き出すのを見た私は、理由が分からず首を傾げる。

「イアンー！ ここにいたんだー」

「……イアンが勝手に消えたからこいつ連れてくるのに時間かかってしまった」

私が傾げていると後ろから小さいけどはつきりした声が聞こえてきた。私たちがいる場所は中庭の端っこ辺りなのであまり人はおらず、呼ばれているのは私の目の前にいるイアンだと分かった。

声をかけられたイアンは「ごめん、ごめん」と言いながら私の後ろにいてるであろう人に手を振っている。

さっき言っていたイアンの友達？ と思いついた私は傾げていた首を元に戻す。するとイアンが私の考えていることに気付いたのか、説明してくれた。

「さっき話した俺の友達。あと2人いるんだけど、まだ女の子たちにも捕まってるのかな？」

「女の子……？」

そういえばちょっと前にイアンが色んな人から逃げてきたって聞いてたけど、それは女の子たちだったの？ 1つ解決したと思ったらまた1つ疑問が。私は縦に戻した首を再び傾げた。

「なになに？ イアンってば急にいなくなったと思ったら女の子といたの？ 意外とやるねー」

私の後ろから聞こえる声がだんだんと近づいてくる。声の低さからして男の人だと分かるが、この独特な子供っぽい話し方……、以前聞いたことがあるような。

私はまさか、と思いつつも2度あることは3度あるとも言っしなで考える。

もし予想通りだったら振り向きたくないかも……。

「なんだ？ 新入生に知り合いでもいたのか、イアン？」

「まあね、……ヒナ？ どうしたの？」

イアンが首を傾げたまま顔を俯かせた私を不審に思っ、肩に手をかけてきた。

そして「ヒナ？」と声をかけてくる。

おおーい、私に話しかけてくれるな！ 紹介とかいいからそのままそつとして、友達同士で話してくれ。 なんて私の考えていることが伝わるわけでもなく、いや先ほどは伝わったはずなのに、と思っっている間もイアンは私の名前を連呼する。

「え、その子ヒナって言うの？」

「ん？ ヒナのこと知ってるの、ヒース？」

やっぱりっ！ この話し方聞いた時点でなんとなく気付いていたけどはつきりと名前を聞くまでは違う人かも知れないと思っただ。

しかしその声の持ち主はヒースだったみたい。以前、私が村で出会った同年代の男の子たち。またその後私が王都へ来て初めて行った図書館で1度再会したこともあったので今回会うのは3回目となる。

俯いている私に顔を覗かせるヒース。彼のさらさらとした長い銀髪が私の頬にあたり、少しこそばゆい。私よりもかなり高い身長なので腰をずいぶん曲げているみたい。

「やっぱし、ヒナちゃんだ」

「おまえここの新入生だったのか」

ヒースに顔を覗かれその澄んだ翡翠色ひすいの目と合うと、あきらめて私は顔をあげた。すると案の定、前に会ったことのある2人だった。意外にも2度目に会ってから時間が経っているにも関わらず、私の

ことを覚えていたようだ。

私の方はまあ、忘れたくても忘れられなかった。何度見ても思うが、なんせ種類は異なるが2人とも美形だから。そして前も感じていたけど苦手なんだよね。美人なところは差し引いてもヒースの軽い感じとかが。ほとんど無表情といえるアスファイも変わらないんだけど……。

私はイアンの友達だと思われる2人を見て挨拶をした。私とこの2人が知り合いなのを知らなかったらしいイアンだけが状況を飲み込めていないみたい。私たち3人の顔を見ながら、どうということなのか説明しろ、という風に見える。

私はイアンに私たちがどのような関係なのか、いつ出会ったのかなどを簡単に説明した。その説明している間にヒースが「うんうん、僕たちって運命の絆でもあるのかなー」なんて言っていたのは無視。それをいうならアスファイとも運命の絆があるってことになるじゃないか。

「なるほどね。最初に会った村の時は俺は行ってなかったから知らないはずだな」

「そのあとの図書館でもイアンはいなかったしな」

「ああ、あの時は俺がヴェルについてきてもらって家に帰った時か」

イアンとアスファイが確かめ合うように話している。私たちの関係がようやく分かったらしいイアンが納得するように頷いていた。

「それにしても偶然だねえ」

ヒースが間抜けな声で呟いた。

その話し方をやめてもつと礼儀正しくすれば文句ないのに、と思

うが声には出さない。しかし今ヒースが呟いた言葉には私も頷く。
なぜなら国一広いと言われる敷地の王都なのに、偶然が重なり会
うのが3度目だからだ。

王都の中では2度目だが、まったくの他人同士で出会うにしては
偶然すぎる。先ほどヒースが言っていたようにそれはいかにも……

「本当に運命かもしれないねえ」

いや、運命ではない、はず……。

「それにしても2人は入学試験見なかったの？」

私はヒースとアスフィに聞いてみた。イアンはこの中庭であった
入学試験を見てくれていたみたいで、2人で話していたときに感想
も言ってくれた。

合格までは知らなかったみたいだけど、試験を応援してくれたの
がちよっとうれしい。

「だって面倒くさいじゃん」

「部屋で寝てた……」

……うん、イアンって本当にいいやつだ。

話を聞くと入学試験当日、イアンたちのような在校生はお休みだ
つたらしい。でも特に入学試験を見学したらいけないとは決まっ
ていなかったもので、たくさんの在校生の先輩方が見に来ていたとい
うのだ。

中にはヒースやアスフィのように見に来なかった人もいるらしい
が、それはほんの数人とのこと。

「イアンも飽きれているのか、だからあの日いなかったのか」と話している。

話していて気がつかなかったが、そう言えば3人とも先輩なのだ。イアンは同じ年、ということもあって特に気を使わずに話していたが、残りの2人にもイアンと同じように話してしまった。

イアンは2人と親しげに話しているので、年は変わらないのかもしれない。でも一応（ここ重要）先輩なので敬語がいいのかと思ったので、こっそりとイアンに聞いてみた。

「敬語？ ははっ！ いいよ、今まで通りで。逆に今さらって気もするし」

「そ、そう？」

「えー、どうしたの？ 2人で内緒話？」

こっそりのはずがヒースたちに聞こえていたみたい。するとイアンが今私が言っていたことを話してしまった。

「……確かに今さらだな」

「だねー、それにしても僕らのことを先輩だと敬ってくれていたんだ」

「いえ、ちつとも」

ヒースの一言に即答してしまった。あわてて口に手を当てるが、結局は後の祭り。口に手を当ても吐き出した言葉は元には戻らない。

さすがに3度目とはいっても初対面に近い相手に今のような言い方はまずいと思う。

あわあわと口に当てた手を握り締めた状態で私よりも高い位置にある2人の顔を見上げた。

「……………へっ？」

その口に出した私は顔をあげたまま固まる。

見上げた先には目をぱちくりさせた2人。美麗といえる2人は目を見開いたまま固まっけていても、やはりかつこいい。……ではなく、私は動かない2人を見て、まずったと思いいアンに目を向けた。

「……………はっ？」

目を向けた先には声を殺して笑うイアン。片手を口元に当て、肩を震わせている。

後ろには目を見開いた2人に前には笑っているイアン。えーと、どうということ？

相当困っている顔でもしていたのか、イアンが笑いを押さえながら話してくれた。

「うん、大丈夫だよヒナ。ただ驚いているだけだから」

その大丈夫は安心していいということ？ はっきりと言いきちやっただけど大丈夫ってことよね？

私は声に出さずにイアンに訴えかける。イアンの言葉で後ろの2人は怒ってないということだが、それにしてはなぜ黙ったままかと、まだ不安なのだ。

もし年が同じでも先輩には敬語じゃないといけなかったのでは、と心配になってしまう。

「別に怒ってはいない」

最初に口を開いたのはアスフィ。私はアスフィの声を聞くと後ろを振りかえった。

「僕も怒ってないよー。でもイアンが言うようにびっくりしちゃっ

た」

次に言うのはヒース。子供っぽい口調とは裏腹の大人っぽい頬笑みに一瞬ドキッとしてしまう。

「でしょ？」

最後にイアンがヒース達の方へ移動しながらにこやかに私に言うてきた。こくん、と頷く私を見てまた笑っていた。

「ヒナって珍しいね。新鮮な感じだよ」

「……だがあえてそう振舞っているのかもしれない」

ヒースは緩やかに口角をあげ、アスファイは鋭い目つきで私を見据える。

美形の2人に見つめられている私は、きつねに睨まれた兎のようにふるふると震える。そして頼みの綱であるイアンはにこやかに笑いながら私たちを見つめているだけだった。

「ヒナー？ どこにいるんですの？」

居心地悪く肩を小さくしていた私の耳に、今日できた友人の声が聞こえてきた。

当初、私といた3人の友人は多くの先輩に囲まれ談笑していた。私もそこまで人見知りではないとは思うけど、3人のように話せるほど社交的でもない。中庭の端で友人たちを眺めながら食べ物をつまんでいるとイアンに声をかけられたのでそのまま話していたのだ。途中でヒースとアスファイも加わり、もしかしたら思っていた以上

に話しこんでいたのかもしれない。

私がいる位置は友人、リディ達には見えないみたいだ。それは私の前に立っている3人の男の子に隠れているから。今の声が私以外の3人にも聞こえたようで、イアンは「ヒナの友達？」など聞いてきた。

私はイアンの言葉に頷くと、3人にリディを連れてきていいかと尋ねる。いいよ、という言葉が出たので声をあげてリディを呼ぶことにした。

「リディ！ こっち、……違う、後ろよ！」

きよろきよろと私を探している友人に声をかけていると、最初に私に気付いたのはリディではなくシアだった。シアはリディに声をかけると、こちらへイルも一緒に歩いてきた。

手を振る私自身にもようやく気付いてくれたみたい。イルは私に手を振り返してくれている。

そして私は3人が歩いてくるのを待っていたのだが、近づいてくるたび鮮明になる表情に3人とも信じられない、という顔をしていった。

2 (後書き)

ありがとうございます。

同じ新入生である3人の友人は驚いた顔をしながら、私のところへやってきた。

中庭ではまだたくさん生徒が和気あいあいと談笑したり食事をしたりしている。

春の夜で普段は冷たい風が吹いたり、それでなくとも肌寒さを感じるはずなのに私たちのいる中庭は暖かい。これも暖かい光を放っている光魔法と同じく、学院長が何らかの魔法を行使しているのかもしれない。

私がちらへ歩いてくる友人を見ながらそう考えていると、もう目の前まで来ていたシア達に声をかけられた。

「ヒナ、ごめんなさいね。一緒に食べようと言っていたのに」

「僕もごめん。4人でゆっくり食べたかったんだけど……」

「ううん、大丈夫よ。でも実を言うとお腹すいてたから先に食べちゃった。だからこつちこそごめんね？」

シアとイルは4人で食べられなかったことについて謝ってきた。

それと他の先輩たちと話していたことについても。確かに最初はちよつと寂しかったんだよね……。

でもイアンたちと話していたおかげでその寂しさもなくなっただけ。

私はシア達3人にイアンたちを紹介しようと思って口を開こうとした。

そのとき、リディは私がシアとイル、3人で話している横で元々ぱっちりとした目をそれ以上に見開き、口も半開きの状態で私と一

緒にいた先輩たちを見て声をあげた。

「ど、どうしてヒース様とアスフォデイル様がここに?!」

「え? アスフォデイル? リディ、2人のこと知ってるの?」

私がそういうと信じられない、という目つきでリディがせきを切ったように話し始めた。

それによるとヒースは意外にも学院一、医療魔法が得意らしい。アスフィはアスフォデイルというらしく、こちらは見た目通りで攻撃魔法では学院内でも有名なのだそうだ。

そして2人に共通するのが中級貴族出だということ。中級貴族といても国の中では上級貴族と変わらないほどの扱いだとか。学院内でもそうだが、学院外でも将来の有望株として扱われているそう
だ。

それにこの2人の名前が知られているのは家柄や能力だけではなく、その容姿も彼らが注目される要因なんだとか。

確かに女性から見てもつい「きれい」と言ってしまう外見のヒース。そしてヒースとは反対の一見、朴訥ぼくどつとした感じのアスフィ。アスフィは私からすると取っつきにくい気がするけど顔かたちは恰好いいと言える。その艶やかな黒髪と瞼にかかる程度の前髪から覗く鋭い眼光が彼をより魅力的に見せている。

私も今まで話していて思ったが、確かに2人とも人目を引く顔立ちだ。しかし恰好いいと思うが、それだけで、他は成績がいいのか、と思うくらい。まあ私がロータス王国や学院についてまだよく分かっていないから彼らのすごさが理解できていないだけかもしれないが。

それにあまり美形すぎる人には緊張してしまう気もするし。2人のように恰好いいとまでいなくても、例えばイアンのような爽や

かで人当たりがよさそうな人の方がいいけど……。

なんて1人、話のずれたことを考えているとリディに「ちよつと、聞いていますの?」と言われ私はリディに顔を向け直した。

「ああごめん。聞いてたよ? 2人とも有名なんだね」

「んもう! だから先ほどからも言っているように、なぜそのお2人といえるのかと聞いているのですっ」

どうやらリディの問いに的外れな解答をしていたらしい。私はリディの早すぎる言葉についていけず、聞き流したりしていた。眉を寄せているリディに次はきちんと答えるように今度はリディの問い、どうして一緒にいるのか、を簡単に説明した。説明ついでにイアンのことも紹介したけどリディは知っていたみたい。

「……知っていますわ。4年のイアン・リザーズですわよね」

「うん、そうだよ。イアンのこと知ってたんだ?」

「僕も彼のこと知ってるよ。かなりの秀才で、学院内だけじゃなくて王宮からも注目されているらしいね」

へー、イアンって秀才なんだ。

イアンの話になると口数が少なくなったりリディに代わり、イルが語ってくれた。イルによるとイアンは優等生に位置付けられ、先生たちにも一目置かれている生徒、だそうだ。

私はイアンの方をあまり見ようとはしないリディに首を傾げながらもイルの話をきいた。途中、その私の仕草に気がついたらしいシアが息を吐きながら「やれやれ」と首を横に振っていた。

「ねえーヒナ、僕たちには紹介してくれないの?」

「うわ！ ヒース？」

によき、という感じで私の首横から急に顔を出したヒースが声をかけてきた。急に、しかも顔の横に現れたヒースに対して私は「びくっ」と肩を揺らす。リデイは私がヒースを呼び捨てにしたことに對して何か言っていたようだけど、驚いている私には聞こえなかった。

「僕は別に紹介なんて必要ないよー」

「そうね、イル。私も特に聞かなくていいわ」

「ええ、酷いなあ、イルディア様とセラシア様は。んじゃあ、そっちの赤毛の娘は紹介して貰おうかな」

「わ、わたくしですか?!」

話を聞いていると、ヒースはシアとイルのことを知っていたみたい。今はリデイのことを聞いているようだ。

それにしても私の時もそうだったが、初対面の人物であってもその他の人物であっても態度は変わらないのか……、とある意味すごいなと思ってしまった。

その様子をしばらく見ていたら、イアンの横にいたアスフィがヒースの首根っこをつかんで引き戻していた。「いたいよー、アスー」とぶつぶつ呟いているヒースにお構いなしだ。アスフィはイアンのところまで連れて行くと、今度はイアンがヒースに耳元で話していた。

「……うん、リデイだっけ？ よろしくね。その他の新入生たちも、僕ら先輩に聞きたいことがあったらいつでもどうぞ！」

イアンが何か言っただけで、ヒースはアスフィに引つ張られてだらけていた体を元に戻し、いきなり真面目に話し始めた。私たち、リ

デイ、シア、イルはその変わりように目を丸くした。

イアンの一言で大人しくなったヒースを中心に私たちはテーブルにある料理を食べたり、話したりしていた。改めてイアンたち先輩組とお互いの軽い自己紹介を終え、これからの学生生活などについても話した。

その中で私が「ヒースとシア、イルの3人は元から友達だったの？」とさっきの会話で気づいたことを質問した。するとその3人は顔を合わせたかと思っただけなら笑われてしまった。

私は3人を見て、何かおかしいなことも言ったのかと目をぱちぱちさせる。

3人は嘲あざわらった感じの笑いではないが、隣にいるリディは明らかにあきれた、というようなため息をつけていた。

「どうしたの？ そんなに笑って」

3人の笑い声に対して、ため息をついているリディ、私を見てにこやか顔のイアンやほとんどしゃべっていないアスファイ達ではなくその他の人物の声が聞こえてきた。

その男性にしては少し高めの声、青年の澄んだ声が私たちから少し離れた場所、中庭の中央側から聞こえてきた。

「……こんな所にいたのか」

次に聞こえてきたのはさっきの声よりも若干低めの声。どちらも大きい声ではないがよく耳に届く澄んだ声だ。ここにいる全員に聞こえたのだらう、ここにいた7人はその声の主の方へと一斉に顔を

向けた。

中庭の中心の方から歩いてきたのは2人の少年。いや、体格などからして私よりもいくつか上のように見え、青年と言ってもいいかもしれない。その2人ともしきれいな金髪だ。しかしシアやイルのような透けるような金髪ではなく、収穫前の小麦のような金髪だ。

私はその2人を見ると茫然と立ちすくんでしまった。

髪にも目はいくが、その瞳の色にも目はいつてしまう。1人は金色の目でもう1人は銀色の目。この世界に来て、日本では珍しいと言われていた私の紫の目が特に何も言われない理由がなんとなくわかる。

様々な色をこの世界の人は持っているからだ。

しかし私が立ちすくんだのはその見た目だけではない。

「ラン達遅かったねー。僕たちはもう結構食べちゃったよ」

「まったくだ、だがヴェルが来て助かった。こいつの世話頼む」

彼らもまた1度会ったことのある人物たちだったからだ。

「またヒースが何かしたのか？」

「はあ、僕たちも少しはつまんできたから大丈夫だけど」

「別に何もしてないよー。アスの思い過ごしだからー」

新しく現れた2人がヒースにあきれたような目線を送っている。だがヒースは別に気にもせずその視線を受け止めていた。

私はこの2人のことについて説明を求めるようにイアンに視線を

向けた。するとそれに気付いたイアンが「さっき言った残りの2人俺の友達だよ」とにこり、笑顔で教えてくれた。

そういえばこの2人に出会ったときはヒース達も一緒にいたな、とふと思ったがそれにしても世界は小さいなとも思ってしまう。いや、彼ら2人が私のことを覚えている可能性は低いのだけれど。

「ちょっと、2人とも僕たちには声をかけてくれないの？」

「イルの言う通りよ。従姉弟いとこの私たちが目の前にいるのに」

「ん？ 気付いていたよ、でもここは後輩の君たちから声をかけてくるのが当たり前かと思っただからあえて話しかけなかつたんだ」

イルが「えー」と言い、シアは「確かにそうかも」と納得している様子だ。

そしてイルとシアに答えたのは金髪金眼の方。にこにことした雰囲気はイアンにどことなく似通っている。

「ちえ、僕はイルディア・ママ・デモール。これからよろしくお願ひします」

「私はセレシア・ママ・デモールです。よろしくお願ひします、ラン兄さま、ヴェル兄さま」

「はい、よろしくね。2人とも」

知り合いらしいのに丁寧に自己紹介する2人を眺めていた。するとシアが突然こちらを向き「私たちの友達なの。紹介するわね」と手を振られた。

急にこちらを向かれてうまく反応できず、とりあえず隣にいるリディに対応してもらおうと横を向いたら……。

「リ、リディ？ どうしたの？」

リディは人形のように固まっていた。

私がりディに話しかけるとようやく「っは！」と意識を取り戻し、そして少しふらついていた。

「大丈夫、リディ？」

ついさっきシアに話を振られた私も動揺していたが、ここまではなかった。それに先ほどヒースたち会った時もここまでリディは取り乱してはいなかったたので、今の状況に少し驚いた。

私がどうしたのか、と思っているとリディが急に膝をつき頭を垂れた。

それを見た私はリディがおかしくなってしまったのかと慌てふためく。そして慌てふためく原因のリディが言葉を発した。

「わたくしはリデーレ・レソン・パッセルと申します。シア様とイル様の元についております。……この度はお会いできたことをうれしく思います、両殿下」

いきなり頭を下げたかと思っただら話しだしたリディ。私が声をかけてからの動きがあまりにも機敏すぎたので途中で話しかけることができなかった。……が、間で気になることを言っていなかったか？

「は？ ……殿下？」

でんか、殿下……、貴族という言葉も馴染みがなかったが、殿下という言葉も私にとってまったく馴染みがない。そのためリディが言った言葉を脳内で変換するのに暫く時間を要した。

私が1人、うーんと唸っていると殿下と言われた2人が動いた。

「頭をあげて、……ここは学院だからね。僕もヴェルもみんな同じ学生だよ」

「しかし、ランセル殿下……」

膝をついたままのリディに手を差し伸べたのは金眼の方の先輩だ。もう1人の銀色の目の先輩は腕を組み、成り行きを見ている。差し伸べられた手を見てうろたえた様子のリディだったが、ついにはその手を取り立ち上がった。

リディをみるとほんのり顔が赤くなっているのがわかる。また顔を俯かせたまま、今までの態度とは違い淑しとやかにふるまっている。

「ほらラン、あまり彼女の手を掴んだままだと彼女、ずっと俯いたままだよ」

「そうだよー、まったくいつも僕にばかり注意してさ。ランも人のこと言えないじゃないか」

イアンとヒースの声で「そう?」と言いながらリディの手を離れた。「大丈夫?」と最後につけたしながら手を離していたが、リディは小さく「はいっ」と答えるので精いっぱいのようなのだ。

「ラン兄つては無自覚のタラシなんだから」

「ちょっと、イルつてば! 今のが友達の1人のリディ。パツセル家は聞いたことあるでしょ?」

「ああ、聞いたことあるよ。そうかシア達と同じ年代の子がいたのを聞いたことがあるよ」

「なるほどな、ではあそこに立っているやつは誰だ?」

シア達の従姉弟らしい2人はリディのことは分かったようだ。ど

うやら貴族同士だとこの家のものかで判断がつくみたい。そういう世界にまったく無関係だった私はへえーと頷いていると、いきなりみんなの目がこちらを向いた。

「あつと……私？」

ここにいるほとんどがに美形に属しているため、急にその人たちに注目されるとなんだか尻込みしてしまう。私は「ううっー」と声にならないうめき声を洩らすだけだった。

「ヴェル兄さま、そう睨まないでよ。えつと、この子も私たちの友達でヒナというの。今日友達になったんだけど、ここにいる先輩方とも偶然にも知り合いだったみたい」

「えつと、ヒナ・フロリスです。よろしく願いします？」

自分で名前を言ったのになぜか疑問口調になってしまった。でもそれ以上何か言える雰囲気ではない気が。それは私をじつと睨んでくる殿下？ の眼光のせいだ。ひくひくと口角がひきつる。

「……おまえ以前どこかで会ったか？」

目をひそめて私を見たと思ったたらそう聞いてきた。聞かれた私は驚いて「え？」というだけ。

確かに一度図書館でヒース達と会ったときに帰る際ぶつかった記憶はあるが、それは「会った」内に入るのだろうか？

私が答えに困っていると横から助けの声が聞こえてきた。

「ランばかりじゃなくてヴェルもー？ まったく2人して、僕たちのことはほったらかし？」

「ヴェル、ヒナのこと知ってるの？」

ヒースの声で私を見ていた銀色の目が横にそれほつと息をつく。そしてイアンの質問には「……いや、気のせいだ」と返し最後にちらりと私を見たかと思うとイアンたちの方へ移動していた。

「ヴェル兄ってば……。ヒナ、気付いたかもしれないけどこの2人は僕たちの従姉弟。金色の瞳がランセル、銀色の瞳がヴェルリルだよ。あ、ちなみに2人は兄弟だから」

もちろん知っているよね？ と付け足すと、私の反応を待つ。どうやらその他のみんなも私の反応を待っているようだ。心なしか後ろの方にいるイアンがにやけ顔なのが気になるが……。

でも知っているよね、といわれてもこの国出身ではなく、また今まで貴族などに関わりがなかった私だとえ殿下といわれる人たちであっても知るはずがない。というか、イアンは知らないのだろうか、私がこの国に疎いということを。

当たり前前のごとが私にとっては当たり前じゃないのでどう答えたらいいかを十分に考え、それを言葉で紡いだ。

「えーと、2人は王子さまだよ。殿下だから。………多分？」

自分の言葉に自信がなくて結局はまた疑問口調になってしまった。そして言ってしまった後で「本当にそうだったらこの言い方はいけなかった？」とか「リディみたいに頭下げるべきだった？」とか考える始末。こういう機会はこちらでも日本でも全くなかったので対処法が思いつかない。

先ほどのヒースやアスファイ達の時のように1人でおろおろしてい

ると、後ろで腕で口を押さえているイアンが見えた。

1日目、朝

からりと晴れた空。春独特の暖かさを含んだ空気が辺りに広がっている。

ふと、窓から外を見ると鳥の群れが空を自由に飛んでいた。窓を閉めたままの空間なので鳴き声は聞こえないが、鳥たちが風の妖精と戯れながら気持ちよさそうに飛んでいるのは分かる。

私は窓から目を離すと、昨夜準備しておいた手提げの中身をもう一度確認することにした。指定の教科書に書き込み用の用紙。これは私が知っている教科書やノートと比べると古臭く感じる。記憶にあるきれいに製本されているものではなく、中の紙が少しずれていたり紙の色がまちまちだったりとしている。また、革張りの本だったりし、もしかしたら1冊1冊手作業で作られているのかもしれない。

荷物を確認し終わるとそれらを持ち、玄関へと向かう。玄関で一度、今着ている制服を軽くチェックし、手提げを持ったまま空いた片手で髪を整えた。この世界では靴を履き替えると習慣はなく、地球でいう西洋のように土足で家や部屋へ入る。最初こそ戸惑ったが私の中で今では当たり前だ。部屋にお留守番となる口ウに「頑張ってくるのだぞ」といわれると、靴を履いたまま部屋の中に入った私はそのまま外、寮の廊下へと出たのだった。

「おはよう、ヒナ。今日からね」

「シアおはよ。そうだね、どんな授業かちょっと楽しみ！」

廊下には私のお隣さんであるシアが立っていた。初日の今日は4

人みんなと一緒にいこうと昨夜の歓迎会の帰りに話し、待ち合わせしていた。あとは向かい部屋のリディと階下へ降り、男子寮のイルと中央棟で落ち合うのだ。

「おはようございます、シア様、ヒナ」

「おはよう。リディ」

「おはよ、……じゃあ行く？」

シアと話しているとリディが荷物を持って出てきた。シア、私の順でリディと挨拶を交わすとイルの待つ1階まで降りることにした。

「おはよー、3人とも」

女子寮から中央棟へとつながる扉を開けると、私たちの姿に気がついたイルが声をかけてきた。周りにも私たちのように昨日の内にできた友人なのか、同じ1年生が数人でかたまり外へ出ていた。

同級生である1年は40人という人数と何度か顔合わせしたということもあり、先輩と同級生の見分けはつく。それは年齢の差もあるがウキウキというか新しい未来が始まるというキラキラしたものがある気がするから。……まあ私もいくらかは浮かれているのだけだ。

もちろん1年の他に2〜7年生もいる。その先輩たちの中には新入生の私たち1年に気がつく親しげに挨拶をしてくれる人もいる。私たちは待ち合わせしていたイルに挨拶を返すと、たくさんの人で溢れかえる中央棟を後にした。

「え〜と、どこに行けばいいんだっけ？」

外へと足を踏み出した私たち4人は最初の目的地である食堂を探す。食べ物の持ち込みは大丈夫だが、朝昼夕の食事は基本、今から向かう食堂だ。なんせ無料なのだ、時間の指定はあるものの、無料ならば私は絶対に食堂を利用する！

「ええと、これによると……あちらかしら？」

どこだろう、と言い合っていると紙を手にしたシアがある方角を指差した。指が指した方にはあまり大きくはない建物。シアが見ていた紙は昨夜、歓迎会の間に扉の隙間に挟んであった学院内の地図だ。

「さすがシア様ですね。それでは行ってみましょうか」

リデイの言葉に私は頷くと食堂であるはずの場所へと向かった。

「……ここって食堂だよな？」

「あーお腹すいた。僕何食べようかな」

目指していた建物へ近づくと、そこは多くの学生で賑わっていた。どうやら決まりの時間はあるようだがそれ以外は自由なようで、先に食べたものは授業の教室にでも移動するのか、寮とはまた違う方角へと歩いていた。

前を歩いていたリデイとシアは先に建物の中へと入った。扉はこの時間、常時開いているのか両開きに固定され、中の様子が外からでも分かった。そういえば入学試験でみたレストランと勘違いした食堂はここか、と思い出した。あの時も外から見て驚いたが、もつと近くでみた今日はさらに驚いた。

そして先に入った2人を気にもずに私は立ち止まる。そしてまた考える……ここは食堂、だ。

「なにしてるの、ヒナ。2人とも中に入ったよ。僕も先に行っちゃうよ?」

「え、ああと、待って!」

開かれた状態の扉の片方に手をつきながら私の方を振り返るイルを追いかけ、私も中へと入っていった。

学年、男女関係なく朝食をとる学生たち。バイキング形式なのか入ってきたところから一番奥に列ができていく。イルを追いかけるように入った私は、辺りを見渡しながらイルの後を歩く。昨夜の歓迎会が催された中庭まではいかないけれど、かなり広々としている。ここの全生徒数は約300人くらいだと思ってるが、その人数は余裕で入るのではないだろうか。特に窮屈感はなく、逆に広々と感じるくらいなのだ。

中庭も寮のある棟も私にとって規格外とは思っていたが、ここも規格外とは。なんだかここまでできたら他の施設も予想がつく。それでも慣れるまではやはりじろじろ見たりするかもしれないが。

先に入ったシアとリディを見つけたらしいイルは「あっちだ」と急かすように私の腕をつかんできた。広いとは言っても、イルに腕を掴まれ早足の私は料理を持った人にぶつからないために注意しながら人の間を縫うように進んだ。

「あ、やっと来たわね。2人の分もとってきたわよ」

「ありがとシア。あぁ〜やっと食べられる」

「ありがとうシア、リデイも。大変だったでしょ？」

4人掛けのテーブルの上にはおいしそうな朝食。すでに準備を終えたらしいシアとリデイは2人並んで座っていた。イルは私の腕を離すと椅子に座った。私もイルの隣に座り、みんな揃ったところで朝食を始める。

「あれ、ヒナ？」

「うんっ……、イアン？ おはよー……」

今日からの授業などについて他愛のない話をしながら朝食を食べていると、後ろから声がかかった。

口に食べ物が入っていた私は一度それを飲み込むと、声の主であるイアンの方を向いた。

「　　っあ、」

後ろにいたのはイアンだけではなかった。

イアンと共にいたのは金髪に銀目である殿下の1人。私が振り向いた丁度目線の先にいたのがその殿下で、目が合ってしまった。昨日も思ったが目つきが悪い、……じゃなくて鋭い。そのため私は目があつた瞬間息を飲んでしまった。

「おはようございます、ヴェル兄様にイアン先輩」

2人に気がついたシア達3人が挨拶をした後に私も簡単に挨拶をすると、急いで顔をそらした。

昨日、彼は私に「以前会ったことがあるか？」と聞かれたが横か

ら違う人物の声が入り、結局答えていないままだ。そのあと会話をすることもなく解散してしまった。もう一人の金眼である殿下は「この前村でヒース達といた？」と聞かれた。しかしやはりその前夜のことは覚えていないみたいだった。

私は殿下から顔を背け料理を口に含む。しかしなんだかまだ見られている気が、殿下の視線を感じる気がする。私はその視線を振り払うようにイアンに話しかけた。

「イアンたちも朝ごはん？」

「いや、もう済ませたところ。で、これから教室へ向かおうとしたときにヒナ達に気がついたんだ」

だから声をかけたんだよ、と続けて言うイアンに私は相槌を打つ。そしてイアンの話を聞いて思ったのだが、この2人は友達なのだろうか……？

イアンには悪いが友達には見えない。というのも、イアンの隣にいる殿下は正しく王侯貴族という雰囲気というか、見た感じ偉ぶった人に見える。そしてイアンは昨日両殿下の友達だと言っていたが、貴族などにつき従う人、侍従や傍仕えとでも言うのだろうか、そう言った人に見えるんだけど……。

……ということなど本人の前で言えるはずもないが、一見ではそのように感じた。

しかし私と同じことを考えていたのだろう、友人の1人が戸惑いもなく質問をした。

「ヴェル兄ってイアン先輩と友達なの？」

そしてそれはイアンでなく、もう一人の先輩である殿下に質問し

ていた。

質問したイルは思ったことをそのまま口に出したようで、先輩2人の返事を待っている。

「そうだ、……その前に俺にはどうして先輩と言わない」

「えーだってヴェル兄はヴェル兄だし。ラン兄のこともそう呼んでるし」

「まあいいじゃんヴェル。……イルだっけ？ 友達だけど一応俺は4年でヴェルが5年ね。先輩後輩でもあるかな」

私は男子3人の話を聞きながら「ふーん」と頷く。私を入れた女子3人は朝食をとりながらもそのやり取りを見つめる。そして今度は彼らの話を聞いていたシアが話しに加わった。

「それにしてもヴェル兄様がラン兄様以外といるなんて珍しいわ」

「僕もそれ思った。だってヴェル兄はなんだか近づきにくそうだし、友達出来てよかったね！」

「おい……、それはどういうことだ」

先輩である殿下とシア、イルは従兄弟だから、言にくいことまでつつこんでいる。

その言葉にこの場にいるリディと私だけがハラハラし、殿下の横にいるイアンはイルの発言に声をあげて笑っていた。

「いやあ、ヴェル達の従兄弟だからどんな子たちかと思ったけど素直でいいと思うよ。あ、それと俺のことは別に『先輩』じゃなくてもいいから」

イアンが声をあげて笑うのが珍しい。それだけ仲がいいのだろう。身分では王族と平民である2人は学院という繋がりが無ければきつ

と知り合いにもなつてなかつたはずだ。私と3人の友人たちにも言えるだろうが、出会いとは不思議なものだ。

「じゃあ僕は遠慮なく、イアンって呼ぶね。シアとリディもそうしなよ」

「イ、イル様？ わたくしは……！」

「そうよ、イル。そんな勝手に」

「まあまあ、ヒナも俺のことイアンって呼ぶし深く考えなくてもいいよ」

イアンの話を聞きながら「私はイアンと同じ年だから」と思ったが、盛り上がっている彼らに口は出さなかった。

あ、そう言えば私みんなに自分の年齢言っていないかも。ふと思い出したがいつでも言えるか、と考え意識を友人たちの方へと戻した。

みんなの方をみると、どうやら結論がでたみたい。渋っていたシアとリディもイアン、と呼んでいた。ただリディはイアンと話をする際にその他のシア達とは違って、高慢な言い方に聞こえるのは気のせいだろうか……？

なんととはあれ、私の友達同士が仲良く？ なれたのはやはりうれしい。

もう一人の先輩である殿下とは結局挨拶だけしか言葉を交わさなかった。

初めての授業1

「へえ、授業はこの建物内にするのね」

「今からあるのは言語の授業か、もう行ってみる？」

シアとイルの会話を聞きながら今、授業が行われる建物の入り口までやってきた。

そこはもう馴染みのある場所、入学試験や歓迎会の行われた広い中庭を持つ建物だ。

その建物の扉からたくさんの学生が次々に入っている。先を歩いていたリデイが「さあ行きましよう」と建物入り口すぐの位置からこちらを振り向いた。

朝食中に出会ったイアンと殿下は私たちよりも先に教室へと向かっていった。残った1年組の私たち4人はまだ時間もあつたので、特に急ぐわけでもなくゆっくりと食べ、教室のある建物へと向かったのだ。

私は建物内の廊下を歩きながら周りを見回す。友人たちと話しながら教室へ向かう学生に、忘れ物でもしたのか、走って私たちが入ってきた扉から外へと出ていく学生もいた。学生以外を見る。明かりは魔法でできているみたいだがそれ以外は予想外に魔法を感じさせない。建物の中は入学試験の際に1度入ったことがある。でも実を言うと動く階段とかあるかななどを期待していたのに……。昔読んだことのある某小説に影響されているとは思っただけど、少し残念……。まあそれは初めて学院内に入った時から気付いていた。

私は友人3人の後ろを歩きながらぶつぶつ言っているとその声が聞こえたみたいで「動く階段……？ 何を言っているのです？」と

リデイが話しかけてきた。他の2人も不思議そうな顔をしている。あわてて何でもないと伝えると「そう？」と前を向いてくれた。ただリデイが変な子、とでも言うようにあきれた顔をしていたのには気づかないふりだ。

「ここかしら。……新入生はこの教室に入るように、と書いてあるしやはりここね」

シアがある教室入り口前に貼ってある紙をみて立ち止まった。イルとリデイ、私の3人もシアの後ろから紙を見る。どうやらこの教室らしい。初めての授業だから丁寧に教室を教えてくださいのだから。

昨日歓迎会が終わり、部屋に戻ると置いてあった院内の地図、今シアが持っている地図には時間割と教室の名前が一応載っている。でもその地図だけで目的の教室にたどり着くには少し困難かもしれない。どこも同じような扉が並び、一見ただけでは見分けがつかないからだ。

私たち4人は同時にホツとため息をつく。そして一度互いの顔を見合わせると教室の扉を開いた。

教室の中には教卓と黒板、そして机と椅子。これだけ言えば私が知っている教室と同じだ。

しかし私はその教室をじっくりと眺める。壁には呪文だろうか、貼り付けてある紙の上にぎっしりと文字が書かれ、壁一面に埋め尽くされている。窓以外の壁がそのようになっていて少し異質な感じ。壁を見ながら3人の友人の後に続き、席に着いた。私が座ったのは1番前、隣にはリデイが座った。

固定された長机は隣の席と繋がっていて、椅子だけが自由に動かせるようだ。教卓を中心に、左右に分かれた机が並び、1つの机に

4人が並んで座れるようになっていた。

私たちは4人で1列に座らず、後ろにシアとイルが座った。席につき、手提げを机に置いた私は後ろに座る2人に顔を向けて話しかけた。

「ねえ言語の授業ってどんなのかな？ 他国の言葉とかかな？」

「んー、僕は呪文のことだと思っけどうだろう？」

魔法を使うには普通、呪文を使用するのが一般的らしい。イルが言うには、古の時代は言語と呪文が同じものだったそうだ。そのため今からある言語の授業とはその呪文を学ぶのでは、と思っけいるみたい。確かにここは魔法科、というくらいだしの授業も魔法に関係するのかもしれない。私はイルの言葉を聞きながらそう考える。

「教科書を見る限り、イルの言うとおりだわ……」

イルの隣に座っているシアが私と同じ教科書をパラパラとめくりながら話す。昨夜のうちに予習でもしたのか、まっさらの私の教科書とは違っけすでに折り目がついけいる。

教科書を見ていたシアは視線を私とイルに向けると「もちろん事前に教科書を読んけいるはずよね」とでも言いたげな目で見てきた。

「う、うん。私もシアと同じ考えだよ」

「僕も、……最初から呪文の授業だと思っけたよ！」

少しだけどんな教科書かと思っけ昨日の夜ベッドの上で見ていたんだけど、眠気に負けて眠っけしまった。朝も結局教科書を見ておらず今を迎えけいる。……多分イルも同じ感じだろう、私と似たような反応で言葉に詰まりながらシアに返事をしてけいる。

私の横ではリデイが「さすがシア様とイル様ですわ」と褒めてけいる。そんなリデイの教科書もしっけかりと開いた跡があっけた。

「ほら、静かにしなさい！」

私たちが話していると女性の声が教室に響いた。

声のした方向は私の後ろ、シアとイルにとっては前から。私は体を前に戻すといつのまにか教卓にいた女性を見る。

この先生って気配を消して急に現れるのが当たり前なのかな？
エーバルト学院長も入学試験や昨日の歓迎会の時、急に現れてびっくりしたから。

先生だと思われる女性が教室にいる同じ1年生に着席するよう声をかける。その同級生たちも私と同じようにぱっと姿を現した先生に驚いていた。

それまでに散り散りになっていたみんなは急いで椅子に座る。ガタガタと椅子を引く音が教室に響いた。

「みなさん、おはようございます。……言語の授業がみなさんにとって初めて受ける授業ですね。人によつては家庭で勉強したことがあるかもしれませんが、この授業は全員基礎から学んでもらいます」

それではさっそく始めましょうか、と言葉が続いた。そして自己紹介などもなく、ロータス学院魔法科1年の初授業が開始した。

魔法を使うには妖精の力が必要だ。これは誰にも変えることのできない大原則。

そして呪文とは妖精と人とを繋ぐもの。人は呪文で妖精に頼み、妖精は魔法という力を与える。また、呪文には人の持つ魔力を妖精に与える要素も含まれる。

人以上に修業したもののや相性の良い妖精に対して魔法を使う際に

呪文を必要としないときがある。

それはいわゆる無詠唱といわれ、呪文というものが無くとも人と妖精が意思疎通できる場合のみ、発現できるそうだ。

しかしほとんどの人は呪文を唱えて魔法を使い、この授業では先ほどシアやイル達と話していたように呪文について学ぶみたいだ。

「それではなぜ呪文学ではなく、言語学という授業なのか分かる人はいいますか？」

先生は教卓に手をのせ、みんなの顔を伺っている。私は先生の問いに疑問符を浮かべたように首を傾げた。

先生が「あら、誰も分からないの？」と教室を見回す。私は1番前の席なので後ろの様子には分からないが先生の言葉からすると誰も手を挙げるなど、解答への意思表示をしていないようだ。

それともまだ慣れない間柄で分かっている目立つ行為は避けたいのかもしれない。そう思っていたら後ろから「はい」と声が聞こえてきた。

「今では『呪文』という括りですが、昔、妖精が私たち人と共に暮らしていた時代、その頃は誰もその呪文を日常で使用していたからです。そして」

その声は私の後ろの席にいるシアの声だった。12歳であるシアの声はその年頃の少女独特の高い声ではなく、幼さが見えない大人の女性のような声だ。その声が教室全体に広がった。

「今は魔法を使用する際に呪文を使います。ですが、当時はその呪文が人や妖精の共通語であったため、当時の名残を残して呪文学ではなく『言語学』といわれるのだと思います」

さして長くはない説明が終わると同時に今度は先生の声が響いた。

「ええ、そうね。今答えてもらったように呪文は大昔に使われた言葉で、古代語または妖精語ともいわれます。この授業では呪文を使うために、呪文について学んでいきます。もちろん呪文というくらいだから、魔法も少しは使うわよ」

シアの解答が満足いくものだったようで、先生はにこりと笑顔で話す。

周りでは「おおっ」というような感じで小さく歓声が上がった。声の中には「さすがセレシア様だわ」なんていうのも聞こえる。そしてその少しざわついた生徒たちを静かにするため、また先生が声を出した。

今度は声で注意するだけではなく、持っていた教科書の背表紙で机をカンカンと叩く。少ししてざわめきが落ち着いていた。そして教卓の上に置き教科書を開くと本格的な授業が始まった。

+ + + +

「ヒナ？ こんなところでなにしてるの？」

「……んー？ イアンかぁ」

壁際に座り込み、うとうとしていた私は、すぐにはイアンの声に反応できなかった。

暖かな日差しでいつの間にか眠っていたみたい。私は手の甲で目をこすりながら立ち上がった。

「他の3人はどうしたの？」

立ち上がりながら頭上でイアンの声が聞こえてきた。

「3人は1度部屋に戻るからって、お昼の授業には教室棟の入り口で待ち合わせしたの。それまで暇だったから昼寝してた」

「昼寝って……」

あきれたイアンの声が聞こえる。まあ、昼だからって教室棟の壁に凭れかかっていたら変な人だと思われるかもしれないな。いや外にいるにしても、ほとんどの人は教室棟の中庭、あの広い中庭でくつろぐのだろう。

言語の授業の後、私はシア達3人とお昼ご飯を食べた。学院の授業は朝に1つと昼に1つあり、授業数が少ない分、1つの授業時間が長い。しかし途中で休憩時間があるのであまり疲れは感じなかった。

そしてご飯を食べてから3人と別れた。時間も昼の授業まで十分あるからと思つてたどり着いたのが今、イアンに声をかけられた場所。

建物の扉から少し離れているし周りには木や草花があり、地面は芝生になっている。このぽかぽか陽気にお昼を食べた後ということもあつて、つい寝てしまったようだ。

それにしてもどうしてここに人がいるつて分かつたんだろう？
木や草花で周りから見えにくいと思つたのに……。

私は目から手の甲を離し、少し眩しく感じる周りの明るさに何度か瞬きをした。

そして私の前にいたのはイアンと銀眼の方のヴェルリル殿下。声はイアンのしか聞こえなかつたけど殿下と一緒になのはなんとなく想像できた。それは朝ご飯の時に2人は「友達」だと聞いたから。

そして次の授業のこともあるから。

「多分もうすぐしたら3人も来ると思う。あと、お昼の授業はよろしくね」

イアンは私の言葉を聞くと「わかつた」と頷いた。そして殿下にもお願いします、とペこりとお辞儀をしながら話したら「……俺はイアンのように優しくないからな」と言うのが聞こえた。

また後で、と言うと先輩2人は教室棟の扉の中へ入っていった。

太陽の光が頭の真上から降り注ぐ。2人と会話したことで目が覚めた。

もうすぐ3人の友人も来るだろうし、このまま起きてようかな。そう思いながら、空を仰ぎ見ると朝の言語の授業を思い出していた。

さわさわと吹く風が近くにある木の葉を揺らしている。空には風
のつて数匹の鳥が空を飛び、そして木の葉を揺らした風が私のと
ころへ届くと髪の毛を舞い上げる。

私はその風でゴミが入るのを防ぐために目を細め、満腹になるま
で食べて少し膨らんだお腹をさすると覚えてたての言葉を紡いだ。

「ルーマ」

右手を地面と平行にまつすぐ伸ばす。そして私が使いたい魔法、
光の魔法の元となる光の妖精の存在を感じる。光の子たちは私が意
識をするとすぐに数匹集まってきた。

今日は天気がよく、太陽の光がいたるところに降り注いでいるか
らかもしれない。私は周りにいる妖精たちにくり、とすると朝の
授業で習った呪文を言った。

私が「ル^光ーマ」というと光の妖精が淡く光り出した。それは小さ
な光。私の人差指と親指で輪っかを作ったくらいの大ささだ。その
光は私の伸ばした腕辺りをふわふわと浮かんでいる。

目の前で見ようと両手で魔法の光を包み、顔の前でその手を開い
た。

「あつ、光が消えてる」

私の手の中にいたのは1匹の光の妖精。「どうしたの?」という
感じで、魔法の光を間近で見ることができなくて残念がつている私
を伺っているみたい。

やっぱり呪文で魔法は難しいなあ……。

そう思いながら目をつぶってため息をつき、目を開いたら水を掬うように形作っていた両手の中いっぱい光の妖精が溢れていた。

私はぱちぱちと2度瞬きをして、辺りを見回す。どうやら私の周りにいた光の妖精たちが私の手の中に集まってきたみたい。

周りにいた妖精たちは最初に私の手に包まれていた妖精に嫉妬したのかもしれない、「ふふふつ」とかわいらしいと思いながらも妖精たちを見て笑う。

私は笑みを浮かべ、目を閉じると今度は呪文を唱えずに妖精たちが光る様子を想像した。

そして目を閉じても感じる光に私はそつと瞼を開ける。そこには溢れんばかりの光。

また光る色も赤・青・黄・緑など様々で、大きさはどれも呪文を唱えて光魔法を出した時のと同じくらい。その光を手で持ったまま頭上に持ち上げ、一斉に離す。とたんに周りに広がる光。

きつと夜の暗い中だったらもつと鮮明に見れたかもしれない。

「呪文を使わない方が私には魔法を使いやすいかも……」

周りにはふわりと舞う光魔法が上から地面へと落ちていく。空からふわふわと地面へ落ちていく様は、まるで子供のころ遊んだシャボン玉のよう。

地面へ落ちたらシャボン玉が消えたように光魔法も消え、妖精の姿へと戻っていった。

最後の1つが消えるのを見届けると、後ろから声がかかった。

「ヒナー！ 待った？」

聞こえてきたのはイルの声。地面を見ていた私は頭を上にあげて

声のする方へと視線を向けた。

「大丈夫、3人と一緒に一緒だったんだ」

「ええ、私とリデイと一緒に寮の外へ出るときに、イルも丁度会ったのよ」

シアの言葉に「そっかあ」と言いながら建物の扉まで歩く。

リデイが私のいた辺りを振り返っていた。

「今まで何をしていましたの？」

「えと、朝習った魔法の練習」

私がそう言うとりデイは「なるほど」という感じで頷いていた。

「魔法の練習？ 昼の授業は実技だけどヒナ、大丈夫か？」

イルが朝の授業を思い出しながら私に尋ねてきた。朝の言語の授業では講義と教室内で少しばかりの実技。イルやシア、リデイはもちろん他の1年生はある程度すぐに魔法を発現できた。

私も先生に習ったように周りの妖精を感じながら呪文を唱えるんだけど、上手くできなかつたのだ。

一応発現するんだけど力が弱くて、すぐに消えてしまう。それは先ほど1人で練習した光魔法のときみたいに。

それを思い出した私は「はあ……」と肩を落とす。シアやイルが「これから練習すればもっと上手くなるよ！」「ここに入学できたのだから自信を持つのよ！」と励ましてくれる。

「ありがとう……」

私はそう言うと4人で次の授業場所へと向かった。

次の授業場所は教室内ではなく、外、中庭だ。この中庭は実技の授業や昨日の歓迎会のようなイベントなど、様々なことで使われるそうだ。

私たちはその中庭にきている。すでに何人もこの中庭にいて、自由に話したり魔法を使ったりしている。

「思った以上に人が多いわ」

中庭に入り、最初に声を出したのはシアだ。周りを見渡すとシアの言うとおり、たくさんの人がいる。

制服の左胸にある校章の色から、同じ1年生だけではなく先輩もいることが分かる。

朝の授業で先生が昼にある実技の授業について説明してくれた。それによると今日の授業では4、5年生の先輩たちも一緒なのだそうだ。

実技では他学年と合同で授業を行うことがほとんど。授業では先輩の学生が後輩に魔法の扱い方を教える。もちろん先生もいるが、誰かに教えることは教える側にとっても良い勉強になり、また違う学年同士の交流にもつながるので、そういった授業方針をとっている、と言語の先生が言っていた。

私たちは周りをきよろきよろと見ながら中の方へ足を進める。リデイが「あちらに先生がいらっしやいますわ」と中庭中央に顔を向けていた。

そこにいたのは朝の授業の先生。周りには見覚えのある学生たち。多分1年は最初にあの場所に集まるのだらうと思いい、私たちもそこに向かった。

私たちの後に何人が1年生が来ると、先生が辺りを見渡し全員がそろったと判断したようだ。

「全員集まりましたか？ 今からの授業では朝、説明したように実技を行います。周りを見ても分かるように先輩たちもいますから、分からないことがあったら遠慮なく質問してください」

先生はそう言う私たち1年生を2グループに分けた。どうやら4、5年生にそれぞれ振り分けられるらしい。

そして私はリディと5年生側に、シアとイルは4年生側にそれぞれ分かれることになった。

「別れたところで、では授業を始めましょうか。1年生は初めての実技ですが、緊張せずに頑張りましょう」

担当の先生は言語の先生と同じみたい。私たち1年生は半分に分かれたため20人だが、5年生はその倍はいる。1年と5年というだけあって、体格差もさることながら雰囲気も大人に近い気がする。

年齢でいえば私と5年生は同じくらいだけど、そう見えないのが少し悲しい……。

入学してから最初の内は基礎魔法、簡単に言えば魔法を総合的に学ぶ。総合的、というのは魔法には様々な種類があり、例えば攻撃魔法や防衛魔法、医療魔法と分かれている。

私が魔法というのはそんなに色々とあるのを知ったのはついこの間。1年生は学科でも実技でも広い範囲で学び、ある程度してから自分の専門を選択するのだそうだ。

上の学年に進級するたびに同学年全員での授業は少なくなるのだが、今日のように1、2年の実技では教える側となって先輩たちも一緒に授業を受けるのだ。

「最初は朝の復習をしましょうか。……5年生は適当に1年生の元に分かれて見てやって！」

適当に……、真面目な先生とってたのにそんなんでいいの？ と思っていたのは私だけじゃなかったようで隣にいるリデイも「適当……」と呟いていた。

1年生20人の中には1人である子や私とリデイのように2、3人である子たちもいる。1人でなくてもいいようだ。周りの1年生に次々と先輩たちがつく中、私たちにはどんな先輩がつくのかな、と先輩が来るのを待った。

「……あ」

「どっしたの、リデイ？」

一緒にいるリデイが何かに気付いたのか、ある方向を見つめている。

私が声をかけても聞こえていないみたいで、何かあるのかと私はリデイの視線の先を辿った。

「……あ」

今度呟いたのは私。隣ではリデイが「ヴェルリル殿下……」と言っているのが聞こえた。

確か殿下は5年生だったと思います。イルやシアが朝ご飯の時に

言っていたように殿下は1人でいるようだ。私がさつき外で会った時はイアンといたが、そのイアンは4年生だから今は一緒ではないのだろう。

殿下、王子という立場だから周りの人も近寄りがたいのかもしれない。それは周囲の人がちらちらと殿下を伺っているのから分かる話しかけたいけど話しかけにくい、みたいなの。

殿下はなんというか、冷たい外見と表情の薄さが重なってそういう感じるのかもしれない。

そしてリディと私がなぜ「……あ」と呟いたのかというと

「相手がいないんだったら俺が見てやる」

殿下がこちらに歩いて来ていたからだ。

私がリディの視線を辿って殿下を見た時にはすでにこちらへと向かっていた。そして私が「……あ」と言った時にはもう目の前にいたのだ。

そして私たちを見降ろしながら殿下が私たちに声をかけてきた。

1年の同級生たちは思い思いに魔法を繰り返していた。そして先輩たちが後輩たちに注意や助言、褒めたりもしている。

先生は最初に「今日は朝学習した基本的な魔法を練習すること」とだけ言うとは5年生に任せ、自身は歩きまわりながら生徒を見て、時々指示をしているようだ。

同級生たちは時折教科書を確認したり、先輩のお手本を見ながら練習している。

そして私も朝習ったことを思い出しながら呪文を唱える、のだが

「もう一度だ」

「え、……はい」

「……はあ」

慣れない呪文に私自身気付かずに戸惑っているのか、なかなか上手く出来ない。「もう一度」と言われるのは何回目だろうか、一緒にしているリディはあきれたようにため息をついている。

「^{光よ}ルーマ」

私が練習しているのは光魔法の初歩中の初歩。同じく練習していたリディは1回で殿下の満足いく魔法を出したが、私が何度も失敗しているため、ずっとこの調子だ。

呪文を唱えると周りにいる光の妖精が淡く光り、成功したように見える。しかし光ったと思ったらすぐに消えてしまい、また光の強

さもとても儂いものなのだ。
そしてお昼の時間に私が1人で練習していた時もこんな感じだった。

私よりもかなり背の高い殿下から「ふざけているのか」とでも言いたそうな眉を寄せている顔で見下ろされる。

そんな風に見られれば誰だって緊張して失敗するよ、とは言えずただただ呪文を唱え続ける。

「魔法について少しは習ったんだろう？ どのようにして魔法を唱えている」

リデイがため息をついてからまた何度目かの光魔法を練習していると、殿下が私に聞いてきた。

どのようにして、というのは朝の言語の授業で勉強したやり方だろうか？ そう解釈した私は先生に朝教わった通りのことを言った。

「まず自分が使いたい魔法、例えば光魔法だったら光の妖精を感じ取り、……すぐ近くにいないときは呼びかけたりします。そして、必要な呪文を唱えます」

模範とまではいかないにしても、大体は合っているはず。呪文も短く、間違えてはいないはずだ。

何がみんなと違うのだろう、この学院に入学してもよかったのか、と不安になりながら私の前に立っている殿下を見上げた。

「……おい、確かパツセル家の者だったな」

殿下は伏し目がちに何かを考えると、私の横にいたリデイに声をかけた。リデイはいきなり殿下に話しかけられて驚いたのか声を裏

返ししながら返事をしていた。

「な、なんででしょうか？」

「手本を見せてやれ」

殿下にそう言われるとリディはおどおどしながらも、私に光魔法の手本を見せるため呪文を唱えた。

リディが片方の手を挙げ「ルー^光メ」と言うといくつかの光が私たちの周りに灯る。リディとの違いを見極めようとするが、特に違いが見つからず私は途方に暮れる。

すると殿下が私の手を掴み、手を挙げているリディの手に触れさせる。急に手を掴まれた私は最初「な、何？」と驚いたが、リディの手に触れた瞬間その驚きは違う驚きへと変わった。

「……………暖かい？」

それは人の体温とは異なる暖かさ。言葉では言い表しにくいけど、なんとというか、体中を満たすような、心地よい暖かさ。

手に触れているだけなのに、ずっとこのままでいたいとも思う。

「それは『魔力』だ」

「魔力、ですか？」

殿下が声を出すのと同時に、リディは魔法を止めたらしい。リディの手は通常の体温に戻っていた。

名残惜しみながらその手を離すと、私は殿下の方に顔を向けた。

人が妖精に魔法の力を求めるように、妖精は人の魔力を求める。それは人なら誰にでもある力。

人は自然から食物を得ることで、魔力といわれる力を手にすることが出来る。いつの時代から魔力と言われ始めたのかは定かではないが、古いにしえから伝わっている。

目にははつきりと見えるものではないが、感じることはできる。今、私が呪文を唱えたりデイの手を暖かく感じたように

「そして、魔力は妖精が魔法を使うための力だけではなく、人にとっても大切なものなの
「な、なるほど」

私と殿下、リデイのやりとりを見ていたらしい先生が、途中から入り込んできた。魔力についての説明をにこやかに教えてくれる。横にいるリデイが「いつの間に……」と言っているのが聞こえた。言語の授業でも急に現れて驚いたが、もうそろそろこの登場に慣れてきたかも……。

私はそう思いながらも、先生の説明に耳を傾けた。

「だから本来なら誰にでも魔法は使えるのだけど、その魔力を留めるための容量が小さかったり、うまく制御できない人は魔法を使うのが苦手ということ。魔法を使えないと言われている人のほとんどは、容量が小さいから妖精に与える魔力自体がないか、とても微量なのよ。無理して魔法を使おうとすれば命に関わることもあるほど」

詳しいことはこれからの言語の授業でやるから、と言うと先生は「頑張つて!」と言いながら他の生徒たちの元へと向かっていた。

「……だから俺が言いたいののは、呪文を唱える際に魔力が伴っていないのではないかということだ」

立ち去る先生を見送った後、殿下が改めて話を始めた。……何だ

かため息が聞こえてきたのは気のせい？

呪文に魔力をのせ、それを妖精に渡す感じだそう。

昔、まだおばあちゃんが生きていた頃、私と兄はおばあちゃんに魔法の使い方を教えてもらった。その時も確かそんなことを言っていた。しかし私は魔法を使い終わった後、妖精に私の力である魔力を与えていた。今の説明を聞く限りでは魔法を使う前に魔力を与える必要がある。

もしかして知らないうちに渡していたのか？　ということは、魔法を使う前と使った後、2回も魔力を与えていたということだ。…多分そうなのかも。

とにかくやってみるべし！

そう思うと私は一回深呼吸して周りにいる光の妖精を感じ取る。私は呪文を使わないで魔法を使う時のように、どんな魔法を出すか想像する。そして魔法を使い終わり、妖精に魔力を渡す時に自分の魔力を一点に集中させるのと同じ要領で、手に魔力を集めた。

妖精を感じる、魔法を想像する、魔力を手に集める、……そして呪文を唱える。

「……ルー^光メ」

私は今日何十回と唱えた呪文を、今度は魔力をのせ妖精に届けた。

すると辺りにいた妖精たちが次々と光り出す。今までは心許ない光だったのが、昼の今でもはっきりと確認できる強さの光だ。色は黄色に近い色だけだが、最初よりは確実によくなっている。

「やるじゃありませんの！」

「へへっ……、ありがと」

リデイがはつきりと褒めてくれるのがうれしくて、なんだか照れてしまう。

それでも目に見えて成長するのが分かると、とてもやりがいを感じる。

私は成功するきっかけとなった殿下にお礼を言ったため顔を少しあげた。

「殿下、ありがとうございました！」

私は歯が見えるくらいの笑顔を殿下に向けた。私の笑顔につられてか、口ではそっけなく「まあまあだな」とは言っていたが、殿下もほんの少しではあるが口角があがったように見えた。

周りでまだ光っている妖精たちが私の気持ちに応えるようにふわふわと浮きながら輝く。

それを見た私はまた頬を緩めてはにかんだ。

「最初よりはマシになったな」

殿下とリデイが今の光魔法についての感想を言ってくれた。

魔法を習いたてにしてはまあまあだが、これから改善の余地あり、だそうだ。

妖精を感じ、周りに引き寄せるのはそれなりに上手いが、その後呪文を唱えてから魔法を発現させるまでの時間が長いらしい。それは何度も練習して、自分なりのコツを掴むしかない。

2人は私に的確に助言してくれ、しかもその助言は分かりやすいものだった。

そして今日2度目の「ありがとう」を言うと、周りで光っていた光の妖精たちが次々に元の姿へと戻っていた。

「……ここまでにするか。途中で休憩を入れていなかったからな」

殿下はそう言うと時間を確認するかのよう上空を見上げた。

昼の授業が始まったところは太陽が真上から私たちを照らしていた。しかし今では横に傾き、もう少ししたら夕方の時間になるのでは、と思うくらいだ。

「ヒナ、体は疲れていませんか？」

「体？」

リデイが私に体の様子を聞いてきた。それは私が授業の間ほとんど魔法を使い続けていたから。

しかし私はリデイの心配に反して特に疲れを感じていない。

そのことを伝えると横で聞いていた殿下が「ふっ」と笑うのが聞こえた。

「成功したのは最後の1回だけと言ってもいいからな。それまではほとんど魔力を消費していないだろうし、疲れを感じなくとも当たり前だ」

殿下の言葉に頷くようにリディも「確かにそうですわね」と笑っていた。なんとなく小馬鹿にした言い方に、私は唇を尖らせながら「えー」と言った。

殿下が最初私たちに声をかけてきて、魔法を覚えてくれることになった時はどうなることかと思っただけどなんとかなってよかった。

初めて殿下を見た時から怖い人に見えたけど、話してみればそこまでなかった。リディの時もそうだったように1度や2度、会ったり話したりしただけではその人のことは分からないってことだ。

殿下はともかく、リディやシア達ともこれから一緒にいることでもっとお互いに知り合い、仲良くなれるだろう。そうだったらいいなとは、私の一方的な思いだけだ。

「周りも何組かは終了しているな」

「終わる時間は明確に決まっていますか？」

「いや、……多分あそこを教えたら終わりかもしれない」

あそこ、というのは私たちがいる場所から少し離れた中庭の壁側で、先生と数人の1、5年生が話しているのが見える。時折、1年生と思われる女の子が魔法を使っている。その他では終わりの時間に近づいているからか、授業、魔法の練習というよりは談話になっているみたい。殿下は周りのそんな様子を見ながらリディの質問に答えていた。

今ではもう、リディは普通に殿下に話しかけられるようになったみたい。ほんの数時間前までのリディだったらありえない光景だ。

そんな2人を眺めながら、私はシアとイルがいる方を眺めた。中庭半分で4年と5年に分かれて授業をしていた。

「あ、シア達はイアンと一緒にしているみたい」

少し離れているが、見事といえる金髪の双子は少し遠くても気づくことができた。他の学生にも金髪の者はいるが、シア達の髪は一段と輝いており比べ物にならない。

どうやらイアンは4年の同級生2人と一緒にイル、シアに魔法を教えているようだ。

私がポツリ、と言った言葉に反応してか、一緒にいるリディと殿下も私の見ている方へ顔を向けた。

「やはりあの2人にはイアンがついたか」

私は殿下が従姉弟であるシア達を見ながらそう言っているのに頷く。イアンとイルはいつの間にも意気投合したのだろうか、仲よさげな感じだ。シアを含めた3人も真面目に練習しているように見える。

「そう言えば私、イアンが魔法を使っているところを見たことなかったな……」

離れた場所から眺めながらふと、思った私は小さく独り言を言った。

その独り言が聞こえたらしい殿下が目線はイアンたちに向けたまま、話しかけてきた。

「イアンは4年だが上級生にも劣らず優秀で、このままいけば卒業と同時に国の魔法士団に引き抜かれるだろうな」

「魔法士団、ですか？」

聞き慣れない言葉を聞いた私は説明を求めるため殿下に聞き返した。

ちらりと顔を見上げると、眉を寄せ私を見降ろした殿下と目が合った。誰もが知っている、あたりまえのことなかもしれない。私に知らないという言い方をしたために、変な目で見えてきたのだ。

しかしそれは一瞬のことで、次の瞬間には視線をイアン達の方へと戻し説明を始めた。

「魔法士団とはその名のとおり、魔法士、魔法使いと言われる者の集まりだ。通常は魔法の研究や鍛錬、医療士として働いている」

「へえ、そうなんですか」

仕事の内容は聞いても今の私にはあまり想像できない。でも優秀と言われているイアンが引き抜かれるかもしれないというのだから、エリートな集まりなのだろう。

深くは考えず、殿下の説明にただ相槌をうつ。その相槌を打った後に「こいつ分かってんのか」というような視線を感じたのは気のせいだろう。

私の曖昧といえる相槌のあと、リデイが付け加えるように言葉を繋げてきた。

「魔法士団は国の象徴なのですわ。他国にもわたくしたちの国の魔法士団と同じような組織があります。魔法士の方々が研究する技術や医療術は国の発展に貢献し、また戦闘でも優れた人材を多く持つていればいるほど国として一目置かれるのです」

「そうなんだ。じゃあそんな所に引き抜かれるかもしれないイアンってすごいんだ」

国の象徴とまで言われる組織なのだからすごいと素直にそう言った。もちろん実際に見たことがあるわけではないが話を聞く限りでは、だが。

私がそう言うと殿下は「ようやく分かったのか」と呆れ気味だった。

ははは、と苦笑いの私は逃げるようにリデイの方へと顔を向ける。

「……リデイ？」

リデイは少し眉を寄せた顔でイアンたちを見ていた。苦々しい、とまではないが気に食わないことでもあったのか、と思わせる顔だ。私がリデイに声をかけると「はっ」としたように、澄ました顔で私の方を向いた。

「まあ優秀だからといっても問題はあるんだがな、この国には……」

リデイが私の方を向いて「何でもないですわ」と言つのと同時に先生が「そろそろ終わりにしますから集まって」と大声で言つたの聞こえてきた。

そのあとに聞こえる学生たちの返事がざわめきとなって辺りを包む。

だからか、私には殿下の小さな咳きは届かなかった……。

先生が本日の授業終了を伝えると、そろそろと学生たちが中庭から出ていった。時間帯はもう夕方と聞いていいほどで、空は夕日によって赤く染まっている。

ほんの数時間前まで暖かかった空気が少しずつ冷たいものとなってきている。しかし今日はいつもよりも気温が高いようでいくぶん過ごしやすい。

私は季節の変わり目の雰囲気味わうように深呼吸をした。王都ではあまり感じることもなかった木や花の香りがほのかにする。その香りは私が初めてこの世界に来てお世話になった村、トリアおばあちゃん達の住む村を思い出させた。

そんなことを一人で考えながら懐かしく思っていると、友人たちが私を呼ぶ声が聞こえてきた。

「ヒナは今日の実技どうだったの？」

私に話しかけてきたのはシアだ。

授業が終わった後、シアとイル達がいる4年生のクラス側が終了するのを待っていた。そしてシアとイルを待っていた私とリディは今、寮へと戻っている途中だ。

先ほどまでイアンと殿下も一緒だったのだが2人は先に夕食をとるらしく、途中で別れた。

「んー……、まあまあ、かな？」

最後の1回は成功と言っているだろう。しかしたった1回なのだ。完璧とか上出来とは程遠く、それを言い表すにはまあまあ、としか思いつかなかった。

私が言葉の最後に疑問符をつけたからか、シアと横にいて話を聞いていたイルが「「どういう意味？」」と笑いながら聞いてきた。

同じタイミングでしかも同じ言葉で言ってきたのにはさすが双子だと感心してしまった。

その感心のために2人の質問に答えるのを忘れてしまい、代わりに一緒に授業を受けていたリディが答えた。

「はつきりと言いますと下手ですわね」

「リ、リディ……はつきり言っね〜」

遠回しな言い方ではなく直球な物言いにたじろぐ私。初めて会ったときからリディは私のことに対してはつきり物をいうふしがある。今回もそんなリディの直球な言葉で今日の私をひと言で表した。

「あら、本当のことを言ったままですけれど。……まあ最後の魔法は下手とまでは言わないでおきますわ」

「ははは……、ありがとう」

さつき、最後に魔法が成功した時には褒め言葉を言ってくれたのに、2度は言ってくれないみたいだ。

また「下手とは言わない」という言い方はリディらしさが見えた気がした。多分面と向かって何度も褒めたりすることはしないのだろう。

私たちのやり取りを見ていたシアとイルは「いつの間に仲良くなったの?」と聞いてきた。どうやら今の会話の様子で2人は私とリディが仲良くなったかと思っっているみたい。……仲良くなっているのか?

私が首を傾げていると「な、仲良く?」と戸惑っているリディの姿が見えた。シアとイルはそんなリディを見ながらにこやかに笑っていた。

「……あ、そう言えば私達はシア達を見てたよ。イアンとやってた

んだね」

「そうそう、僕たちにはイアンと後2人の先輩がついたんだ。練習とはいつても基礎だし、あまり習うことはなかったんだけどね」

イルの話の聞いていると今日練習したような魔法はすでに習得済みだったようだ。……そういえばリデイもすぐに殿下の合格点を貰っていたし。

私はきつとこの世界の人も私が小さい頃おばあちゃんに魔法を教えてもらったように、魔法が使える人は幼い時から魔法の練習をしていたのだろうと考えた。

「そうなんだ。私なんか失敗ばかりで大変だったよ」

「僕たちはある程度の魔法は練習して習得しているからね」

魔法科には基本的に身分関係なく合格すれば入学できる。しかし学生のほとんどは貴族や豪商といった出のものばかりで、それに比べると国民の大半を占める平民の学生はほんの一握りだ。

私がイルの言葉に「入学する前から勉強してたの？」と聞くと魔法科の現状について教えてくれた。

魔法科の学生には貴族階層の者が多い。それは幼い頃から家庭で基礎魔法教育が行われているから、だそうだ。

イルはそう教えてくれると「ただ出発点が違うだけで伸びる可能性はヒナが高いかもしれないし」と言ってくれた。

「確かにそうかもしれないわ。だって魔法科に入学するために屋敷へ教師を招いて学んだ人も多いのに、それでも入学できなかった人もいるくらいなのだし」

話を聞いていたシアが横から入り、イルの言葉に賛同した。
私は急に声が聞こえたからではなく、シアの話す内容に驚いた。

「教師を招いてって……」

「だからそのような人達ではなくて、ヒナのような人が合格するのは可能性を見出されるからよ。イアンがいい例だわ」

私が「へえ〜」と言うとイルとシアが「……今のところそんな風には見えないけれど」「僕もそう思う」と顔を見合せながら話していた。

「えー、それってどういうこと？」

くすくす笑う2人に加えて「わたくしもお2人に賛成ですわ」と目をつぶりながら言う。

そんな3人に目を向けながら私は頬を膨らませた。

1日目、夜

外はまだ夕日のおかげで暗くはないが、寮の中は明かりをつけな
いといけないようだ。

暖炉やソファー、お風呂といった施設のある寮の中央棟では私た
ちが入るとすでに明かりが灯されていた。

その光はもちろん魔法の光。どことなく暖かさを感じることがで
きるその光は2階まで吹き抜けとなっている中央棟全体を灯してい
る。壁はもちろん天井にもあかりはついており、その明かりの下で
授業から戻った学生たちが自由に過ごしていた。

ひとまず自室に戻ろうということではイルとは別れて女子寮につな
がる扉の中へと入った。

「はぁー、またこの階段を登るのか」

そう呟いたのは私。なにせ7階まで登らないといけないのだ。そ
う呟いてしまうのは仕方がないと言いつける。

授業では体力的にそこまで疲れなかったためまだ余裕のあった私
は先ほどの話で気になっていたことを尋ねた。

「ねえ、魔法科には私のような、いわゆる平民？ の学生は少ない
んだよね。貴族の人達は入学する前から、勉強して試験に臨んでい
るからって……」

「そうね、もし同じくらい潜在能力を持っている者が2人いたな
らより勉強している人の方が合格する確率が高いと思われるわね」

私の質問にそう答えたシアは「あまりいいことだとは思っていな
いんだけどね」と続けた。

私は階段の手すりを支えに登っている。そして時折「ぎしっ」と階段を軋ませながら話を続けた。

「あまり良い言い方ではないけど貴族と平民だったら、魔法を学んだことのある貴族の方が有利だし、それをほとんどの人が当たり前のように思っているわ」

「でも、私やイアンみたいに貴族じゃなくても、合格、してるよね？」

若干息切れし始めた私とは違い、シアはまったく疲れをみせない。一緒にいるリディもシアと同様、息を乱さず登っている。

「多くはないけれど、毎年数人はヒナのように合格している人はいらわ。……それを受け入れたくない人が多いのだけれど」

「 どういう、こと？」

「卒業生は望めば何かしら国の中枢、例えば王宮内で働くことが約束されるわ。殆どが魔法に関する場所、軍や魔法士団のだけど……」

言いくいのか途中で言葉を詰まらせるシア。先をなかなか言い出さないシアに代わって代弁するようにリディが話し始めた。

「つまり、平民出の者には従いたくないという者達がいるのですわ。そう言うわたくしもその1人なのですけど」

「リディ！」

はっきりとした物言いだ説明したリディにシアが咎めるかのよう
に声をかけた。私の知っているリディならシアに対して反論的な言
葉は言わないはずだが、今は違うようだ。

「わたくしは幼いころから魔法やその他について厳しく教育されました。それはシア様やイル様をお守りする為もありますが、両親や兄の元、一生懸命に励みましたわ。国の為に、民の為にと言われて励んできたのに平民の下にはつきたくないのです」

話し方は淡々としているがリディの目ははつきりとした意思を宿しているかのようだ。シアもそんなリディの目を見ていた。

「貴族は王族と民の為にあるとわたくしは考えていますわ。民には民の役割があり、……時には例外もあるでしょうが国を成り立たせるためにはそれぞれの役目を堅実に全うする必要がありますのです。だからと言ってヒナが平民だからとここで学ぶことを否定はしませんけれど」

そのリディの話を聞いて「だからリディはイアンをよく思っていない感じだったのか」と思った。はつきりとは言葉に出さないもののリディのイアンに対する態度はあまり良いものではなかった。

きつとイアンが「優秀」と言われているのが原因かもしれない。私に対する態度とは違つところがあつたから。

それでもリディがこんなことを考えていたなんて。私の中では初めて出会つた時の印象とはかなり変わったものになっている。

私がそう思っているとシアが言葉をつけたした。

「リディのような考えの人もいるのだけど、実を言えば単に差別的に見ている人がほとんどなの。恥ずかしいことだけだね。魔法は貴族が使うものだから、リディの言っていたこととは反対に民が国、貴族の為にあるという考えの持ち主も多いわ」

「そうなんだ……」

まだそういった差別されるような場面（リディと初めて会った時は除いて）には運良く？ 出くわしていない。
そうこうと話していると部屋のある7階へ到着した。廊下を歩きながら私の前を歩くシアが後ろを振り向いた。

「私たちはそんな考えを無くしたいの。だからヒナやイアンには頑張ってもらいたいわ」

「わたくしはイアン・リザーズの下では働きたくないですけどね」
「それならリディがイアンよりも上にいけばいいじゃない」

なんだか話が違う方向へ進んでしまったけどシアとリディが楽しそうに（多分）話しているのでそのままにしておいた。

それにしてもイアンのことばかり話している2人に「私は？」と
思い、言葉を投げかけた。

「ねえ、私は？ 私はイアンみたいに優秀になれると思う？」

先ほどまで話していた内容を思い出すと、私にも魔法の力が伸びる可能性がある、ということ saying していた。だから2人に聞いたの
だけど……………、

「うーん、リディの話の聞く限りまだ先は長いと思うわ」

「今日共に授業を受けてみて、わたくしも先は長いと思いましたがわ
お互いの部屋の前で立ち止まり、2人は私に向かってそういった。
シアはから目をそらして、リディは苦笑いで。」

「そんなあ〜」

私が悲しむように言うと、2人は「まだ始まったばかり」と励ま

した。励ましながらなぜか笑いをこらえているような顔をしているのは気のせいではないみたい。

私が「ははっ」と笑うとつられてシアとリディが笑った。

「ただいま〜」

がちやり、と部屋に入るための扉を開いた。部屋の中は夕方、夜近くになっているために暗いと想像していたがなぜか明るかった。

明るさの理由はどうやら光と火の妖精たちがいるためらしい。昼、とまではいかなくとも仄かな明かりが私を出迎えてくれた。

「よつやく帰ったか」

「ロウただいま。……これってロウの仕業？」

私は部屋の中をふわふわと浮かぶ妖精たちを示しながら聞いた。妖精たちは私の視線を感じたのか、「なににー？」とでも言うように周りに集まってきた。1つ1つは蛍の光のような小さな光だけと集団になると結構な明るさだ。

私はそんな妖精たちに少しあたふたしているとロウが「気がついてら集まってきたのだ。丁度暗くなってきたし、集まっていたこやつらは明かりにするのに適していたからな」なんて言ってきた。

「そんな理由で……。ま、まあ部屋の明かりに困らなくてすんだけどね」

妖精たちも嫌がっているわけじゃなさそうだし、いいか、とそのままにしておくことにした。

私はロウに「これから夕食に行く」と言ったところ、ロウもついて行くことにしたらしい。部屋にいる妖精たちはそのままに、持っていた荷物を置き、身軽になった私はロウと部屋の外へ出た。

「あら、ヒナも準備できたのね？」

「うん。シア達を待たせちゃった？」

「いいえ、私たちも今出てきたところだから大丈夫よ」

部屋を出るとシアとリデイが待っていてくれた。シアは私と一緒に出てきたロウを見ると「夕食に連れて行くの？」と聞きながら抱き上げた。

「今日は1日部屋にお留守番させっぱなしだったしね」

私はそう言いながらシアに抱き上げられているロウの頭を撫でた。私以外の人がいるため、仔犬のふりをしているロウはしっぽを振りながら「くう〜ん」と鳴く。

そしてなぜかロウを見つめたまま黙っていたリデイはロウの鳴き声を聞くと、ぴくり、と反応していた。

もしかして苦手なのかな？　と思った私はリデイにロウも一緒に大丈夫かと尋ねた。

「リデイ……もしかして犬苦手？」

「えっ?!　い、いえ、大丈夫ですわ」

その言葉に私はほっと息をつくけど、リデイ本当に大丈夫なのかな？

そう思っていると「さ、イルも待っていると思うし行きましょう」とシアがくすくす笑いながら歩きだした。私はそのあとに続きなが

ら後ろを歩くリディをチラリと振りかえった。

……その時、先頭を歩くシアに抱かれながら揺れるロウのしっぽを見てリディが「しっぽ……もふもふ」と小さく言っていたのは私の聞き間違いだろうか？

「あれ？ その犬どうしたの？」

中央棟へ入ると、先に来ていたイルが暖炉の前にあるソファーに座って待っていた。夕食時だからだろうか、周りにはあまり人はおらず閑散としていた。

私たちが来たことに気付いたイルはシアが抱いているロウに興味をもったみたい。

「ロウって言うの。私の部屋で飼っているんだけど一緒に夕食へ連れて行こうと思って。……って犬とか食堂に入れても大丈夫かな？」

そういえば、と思った私は3人に聞く。シアに抱かれているロウの頭を撫でながらイルが答えた。

「大丈夫なんじゃないかな。ヒナのように動物を飼っている人も多いみたいだし」

イルはそう言いながらシアの腕からロウを抱き上げた。ロウは特に嫌がりもせず、されるがままのようだ。イルがロウの前足を「にくきゅう」とぶにぶに触っている。

肉球を触られるのは嫌なのか、ロウは若干身体をよじらせる。しかしイルだけではなくシアにももう片方の前足を掴まれ、身動きが取れなくなってしまったらしく、諦めたようだ。

ロウの肉球を触る2人を見ながらリディはもう耐えきれないという感じで「わ、わたくしも……！」と言いながら、シア達に混ざっていた。

+ + + +

私たちが寮の棟から外へ出るとすっかり夜になっていた。歩きながら今日の授業のことや夕食のことなど、他愛のない話をしながら食堂へと向かう。部屋を出てからシアに抱きつばなしにされているロウは先ほどイル達に肉球を含め、体のいたるところを撫でられた為か、疲れてぐったりした様子だ。

私はロウを伺いながら、3人と共に食堂の中へと入っていった。

「本当に大丈夫なのかな？　ロウを連れてきて……」

私は中へ入ってすぐに3人に再度問いかけた。するとイルがある方向を見ながら「ほら、あそこ」と視線で示した。イルの視線の先にいたのは

「あ！……鳥?!」

私の知っている鳥の中でいうなら、例えば鷹のような鳥が天井付近を飛んでいた。

その他にも猫がテーブルの下から出てきたり、ロウと同じ（本当は狼なのけど）犬も見かけた。鷹のような鳥はともかく、その他は注意しなければ気がつかないと言っただけは少ないが確かにいる。たくさんではないけれど動物がいることが分かり、私は安心して中に入ることができた。

他の学生たちも私たちが動物を連れていても特に気にしないようだ。これなら朝や昼も連れてくれば良かったと思いつつ座る席を探す。たくさんの人で賑わっているが、それ以上に中も広いので座る場所に困ることはない。空いている席もいくつか見つけたが、私

私たちは出入り口の奥、朝と同じ場所に座ることにした。

「あら、先客がいるみたいね」

私たちが座ろうと思っていた場所には先客がいた。そしてその先客の正体に1番に気がついたらしいシアが声を出した。

「私たちもご一緒してもいいかしら？ ラン兄さま」

シアが話しかけた先にいたのは、シアとイルの従兄弟である王子2人だった。シアに声に気がつき「あぁいいよ」と、優しい声で返したのはラン兄さまと呼ばれた王子殿下だ。確か名前はランセルだったな、と思い出しながらシア達に倣って席に着いた。

「ラン兄とヴェル兄だけ？ イアンはいないの？」

椅子に座るとイルが対面するように座っていた2人に話しかけた。私たちがいるテーブルは長方形で、その端に腰をかけている2人に対して話しかけるため、イルは体を横に向けた。

「イアン？ 今の時間は見ていないな。ヒースとアスならさっき見かけたけど」

「そっか、ならいいや」

どうやらイルとイアンは今日1日で結構仲良くなったようだ。ランセル殿下の言葉に返事をしたイルは「料理持ってくる」と言って席を立った。私も、とイルの後に続く。……シアとリディはここでも口ウを撫でくりまわしていたので、おいて行くことにした。

「うわぁ……どれにしよっ」

ズバリと並ぶ料理に「ごくり」と唾を飲んだ。手に持っているのは2枚のお皿。私はそのお皿を持ったまま何を食べようかと思案する。

「あー、どれもおいしそうっ」

独り言を言いながら料理を物色していると背後から声がかかった。「それ以上皿のどこに盛るんだ？」

「……うえ？」

後ろを振り向くと同じように料理をとりに来たイルとヴェルリル殿下がいた。それで私に声をかけてきたのは殿下の方。イルは「意外に食べるんだ」と目をぱちくりさせている。

そんな2人のお皿を見ると……そんなに変わらないんじゃないかと思う。……うん。

確かに私の持っているお皿にはすでにたくさんの料理で溢れていた。でもこれくらいは普通じゃないのかな、と思いながらイル達のお皿を覗いた。するとあまり変わらない量に私のことを言えないじゃん、と言いたいところだが心に留めた。あともう少しのせようと思っただけどまた何か言われるかもしれないので席に移動した。

「あら、わたくしたちの分まで持ってきてくれたの？」

「ありがとうヒナ。ロウが可愛くって料理とりに行くの忘れてたわ」

「えっ、えっ……?!」

そう言いながら私が持ってきたお皿から料理を小分けにしていくリディとシア。私はそんな2人を交互に見ながらあわあわとすだけだった。

「あれ？ 量減ってない？」

後から来たイルが私のお皿を見て言った。「もうそんなに食べたの？」と、また目をぱちくりさせている。

「ま、まあね」

せっかく自分好みのものを選んだのにと肩を落としながらぱくり、と少なくなつた料理を口にいれた。

「おいしー！」

私は料理をおかわりすればいいか、と考え直して食べることにした。

「君が今日ヴェルと授業で一緒になつたんだよね？」

「……え？ あ、はい」

お腹が空いていたために、目の前にある料理にばかり集中していたので少し遅れて声の主の方を見た。もぐもぐと口に含んだ状態だったので一度飲みこんで返事をする。ちなみに料理はお代わり済みだ。

「ヴェルから聞いたよ、すごい下手なんだってね」

「え、……」

くすくすとランセル殿下は肩を揺らす。私の横に座っているイルはランセル殿下の言葉を聞くと「そうなの？」と不思議そうに私を見てきた。

片方の口角をあげて、ひくひくさせるが何も言葉を返さない。いや、返せない。色々な意味で……。

私は言葉の原因となつたヴェルリル殿下をチラリとみた。澄ました顔をしながら料理を口に運んでいる。その流れるような動きはまさに王侯貴族といえる……じゃなくて。

ランセル殿下の話は聞こえているはずなのに、話の始まるきっかけとなつた本人はちらりとも私を見ようとはしない。

「でも『これから期待だな』とも聞いたよ」

「え、……」

「おい、ラン」

私がヴェルリル殿下へ目を向けているとランセル殿下が続けて言った。

そしてさっきはピクリとも反応せず、料理を口に運んでいたヴェルリル殿下がランセル殿下の言葉を止めるように口をはさんだ。

「うん、ヴェルが他人のことを話すなんて珍しかったからね。あ、君のことも言ってたよ」

ランセル殿下はヴェルリル殿下を流して話を続けた。リデイにも「なかなかやるみたいだね、さすが、と言つべきなのかな……」と言っている。

「……おい」

「珍しいというのはイアンの時以来だからかな？ あの時『あいつ誰だ？』なんて聞いてきたんだよね」

ヴェルが知らないなら僕も知るわけがないのに、とランセル殿下は歯切れよく続けた。

終始にこやかに話し続けたランセル殿下に対し、気に食わないことでもあったのだろうか、ヴェルリル殿下はむすつとした表情になった。

「そういえば2人のこと名前で呼んでなかったよね。イルやシアのようにヒナ、リデイと呼んでもいいかな？」

「で、殿下にそのような呼び名で言われるのは……」

「だめってこと？」

ランセル殿下の提案にももちろんだめですっ、という雰囲気のリディ。しかしどうやらランセル殿下の提案に反対できなかったようである。

「イルとシアもそう呼んでいるんだし、いいよね？」

「……はい、もちろんです」

最終的には頷くことになったようだ。

イルとシアも2人の殿下の従兄弟、つまりは王族なわけだが直系ではない。だが、王子と言われる殿下たちは違う。さすがにいつれ未来に王となるであろう人物から愛称で呼ばれることは抵抗というか、恐れ多いのではないのだろうか

あまりそういった感覚が分からないという私もその気持ちはなんとなく理解できる。

しかしそんな私たちの気持になんか気付かないのか、笑顔で「僕のことにはランでいいから」なんて言ってくる。……これに対してはリディと本気で遠慮させてもらったのは言うまでもない。

「え、シア達の家には？」

私は口に含んでいた果物をごくくり、と飲み込むと目の前に座るシアに聞き返した。

今私たちは1日の授業が終わり、食堂で夕食をとっている最中だ。入学当初よりも若干暑くなったからか、中には半袖の人もいる。確かに最近は夕食の時間帯になっても肌寒さを感じることはなくなつた。

私はシアを見ながら冷えた果物に手を伸ばす。

「そうよ。ようやく学院の生活にも慣れてきたし、次の休みは一度家に戻るうと思つて。それでヒナもどうかしらつて思つたの。もちろなりデイも一緒よ」

シアはそう言いながら首を横に傾げる。実年齢はともかく、見目が私よりも大人っぽいシア（自分で思いながら少し悲しくなつてきた……）は時折かわいらしい仕草をする。そして今、そのかわいらしい仕草でシアが問いかけてきた。

「……ごめん、その日は用事があるの。あ、嫌つてことじゃないから！ また誘つて！」

私が断りの返事をする、シアは少し肩を下げる。そんな様子のシアに私はあわてていい繕う。

「まったく、シア様のお誘いを断るだなんてどういうことですか？信じられませんわ！」

「〜だからあ、ごめんつて言つてるじゃん。本当に用があるんだよ」シアに向かつて両手を合わせながら、謝りのポーズをしていると横からリデイが声を張り上げた。

シアの隣に座っているリディはシアの肩に手を添えながら私を非難するような目で見る。そしてリディに慰められているシアは、と
いうと……

「いいのよ、リディ。ヒナにはヒナのやりたいことがあるのだし。

……友人だから休みの日まで一緒にいたいだなんて、しかも家に呼ぶだなんて、ずうずうしいわよね」

「シア様！　なんてお可哀そうにっ」

2人はそういいながら肩を抱きしめ合う。

なんだかシアの言葉がセリフじみているような気がするのはい思い
過ごしかな？　リディにはそんな気配はまったくしなかったけど。

少しわざとらしいシア達を見ながら私は苦笑いする。

「んー、夕方とかなら大丈夫だけど。……でも迷惑でしょ？　遅く
な
」

「　　そうだね。家に泊ればいいのよー！」

私が再度、断りの言葉を言っていると、途中で遮るようにシアが
声をあげた。

「……え?!　シアの家に？」

「どうして思いつかなかったのかしら。お茶会などを催したことは
あったけれど、……私としたことが……」

シアはそういいながら「いいわね」なんて1人で納得している。

リディも、「わたくしも一緒してもよろしいのですか？」なんて
聞き、シアも「もちろんよ」などと答えている。

「えーと、私の意見は……？」

進んでいく計画に、置いてきぼりの私。でも楽しそうな2人を見
ながら「まあいつか」と息を吐いた。

「そついえばさヒナって……」

私の隣に座っているイルが話しかけてきた。イルはお泊りの話を女子3人でしているときには特に横から口をはさむわけでもなく、もくもくと食事をとっていた。お泊りの話がシアとリディの間で盛り上がりつつ来た今、私に顔を向ける。

「ヒナって休みの時はいつもなにしてるの？ 学院の用事ってわけじゃなさそうだし」

「ああ、リコット亭に帰ってるのよ。お世話になったし、休みの日くらいは手伝いたいと思って」

イルの問いに小さく笑みを浮かべながら答える。

私たち1年が学院に入学して1カ月が経つ。大分、授業や寮での生活には慣れてきた。まだ戸惑うことはあるし、実を言うと同級のシア達3人と先輩のイアンや殿下達しか友人と呼べる人物はいないのだが。

それでも魔法や豪華な建物、7階まで登らなければいけない寮の階段にも徐々に慣れてきた。宿題や学院の用事などではまだ不慣れな部分もあるが、随分ましになったのではないだろうか。

「ふ〜ん……。それはイアンもってことだよな？」

「あー、イアンは時々、かな」

口を濁すようにいう私に、イルは「そうなんだ」と言うとそれ以上は聞いてこなかった。

まだお泊りの話で盛り上がりつつしているシア達の話に加わったイルを横眼で見ながら内心、ほっと息をつく。

今、イルと話していた通り、休みの日になると私はリコット亭のある王都へと行く。それはもちろん、さっき話していたように手伝いをするためだ。店のみんなは「たまには遊んだらいいのに」と言われる。それでも休日のたびに行くのはお世話になった、というの

もあるけど1番は居心地がいいからだ。

というのも学院では貴族階級などの人達が多く、話をするだけで疲れを感じたりするのも原因かもしれない。学院に入学する前に王都でお世話になっていたリコット亭のみんなやお客さんたちとは違う、話しかけにくい、とでも言うのだろうか、そんな雰囲気は漂わせているのだ。

「今、リディとイルと話したのだけど、本当にヒナも今度の休みの日は家に泊りにこない？ 確かその日の夜、父様や母様はいないとおっしゃっていたから、そんなに気兼ねしなくても大丈夫なはずよ」
もちろん数少ない友人であるシア達はまったくそんな雰囲気を感じさせない。身分からして違うのに、気さくに接してくれる。それと同時に気を使ってくれているのも分かる。

「うん、それじゃあ参加しようかな」

「ヒナが夕方からなら、王都のどこかで待ち合わせするといいいんじゃないでしょうか」

私が参加するという言葉を聞き、うれしそうに笑うシアに向かってリディが話しかける。

リディは平民と貴族を区別している。しかしそれは差別的な意味合いではなく、貴族は国の名を背負っていて国民を守るものという考え方からきているのだと今では分かる。最初こそは、リディの言葉に不快な気持ちを抱いたりしたけど、そんなリディの考え方を知って見方も変わった。

ただシアやリディ達のような見方をしている人間は多くはないというところもこの学院に入学して分かったけど。

「わざわざ待ち合わせって……、迷惑かけちゃうし。住所と何時に

行くかっていう時間さえ決めてたらなんとかなると思う」

「そう？ まあ王都にある家は分かりやすい場所にあるし、私やりデイが迎えに行かなくても大丈夫かもしれないわね」

シアはそう言いながら小さな笑顔を見せる。

「そつだよ。んー、後で一応簡単な地図とか書いてもらおうとうれしいなあ」

「それじゃあ……」

着々に進んでいく計画に時折頷きながら話を聞く。しばらくそのまま話を続けていると隣でイルが「ふわあ」とあくびをした。

「ねえ、僕そろそろ寮に戻るよ」

「あらもうそんな時間？」

「シア様、続きはまた後日にして、わたくしたちも戻りましょう」

テーブルにある皿をまとめながら寮へと帰る支度をする。そしてイスから立ち上がったリデイが私に顔を向けた。

「わたくしたちは先に寮へと戻るけれど、中央棟で待っていてもいいわよ？」

「ううん、部屋に帰っていいよ。お風呂の時間とかもあるし。あ、ロウはシアカリデイの部屋に連れて行ってもらえると助かる」

わかつたわ、と返事をするリデイに手を振りながら見送る。シアとイルも「頑張つてね」と私を振り返っていた。

私は入学して数日たってから学院の雑用……アルバイトをしている。入学手続きなどはリコット亭のラネさん夫婦に手伝ってもらったがお金に関する事は断った。遠慮するな、と言ってくれたのだが卒業までの7年間もの長い間、お世話になり続けるのは心が痛いからだ。

幸いにもロータス学院には私のように何か事情がある人間のため

に、奨学金制度が存在している。それには条件が存在するのだが、それさえ承諾すれば学院の生徒なら誰でも奨学金を受け取ることができるのだ。

「さて、さつさと終わらせますか」

扉の外へと出ていく友人たちから目をそらすと私は扉と反対側、調理場のある方へと体を向ける。

奨学金を貰う条件の1つである仕事をするためだ。今からするのは食堂を片づける手伝い。その他にも先生からの用事で外に行くこともあるし、授業のアシスタントのようなものもある。1年の私にはそういった仕事は少なく、今からする片づけや掃除の手伝いが多いらしい。

そしてこれらにはお給金がある。仕事の内容で変わるらしいがそれでも働いた分だけ貰えるのはありがたい。……それにシア達も私のことを応援してくれているし、冷たい視線や言葉にも慣れた。

テーブルにまとめられた食器を持ち、今夜の仕事場である調理場へ行く。

「あの子でしょ？ セレシア様方と一緒にいたのって……」

「そうよ、なんであんな子と……。それに殿下と話しているのを見た人もいるらしいわよ」

「こそこそと、それでもはつきりと聞こえるように言っている。」

「入学当初から優秀で学年上位なわけでもない、なんの取り柄のない平民が……」

シア達のいないときに、あえて聞こえるように囁かれる。入学して数日は突き刺さるような視線だけだったけれど最近ではこういった言葉をよく聞くようになった。

「さつさと辞めればいいのに」

ぐさり、と突き刺さる言葉。

きつとシア達に言えばすぐにでも収まるだろう。でも言えなかった。理不尽な言葉だと思っても言われていることは正しいと私自身感じているから。

さつき計画したお泊り計画。数少ない学院の友人と過ごす休日はきつと楽しいものになるだろう。

……何も起こらなければいいけど。私はこそこそと話している人達に視線を送ることもせず背を向けた。

少しばかり蒸し暑い教室内に先生の声が響く。皆、授業を熱心に聞いているからか、教室には先生の声と外から風を入れるために開いた窓の外からの風や鳥の鳴き声しか聞こえない。

いや、もしかしたら真面目な生徒以外もいるかもしれない、……私みたいに。

「ふわぁ……」

黒板に向きあい、私たち学生に背を向けている状態の先生を見ると私は小さくあくびをする。時間は昼過ぎで、もう数分で授業が終わるといふ頃合いだ。大分授業に慣れてきたからか、最初の頃のよくな緊張感がなくなり、逆に眠気がたまに私を襲うようになってきた。

それにお昼を食べた後の学科の授業とは、……なぜか眠くなる。特に直接、魔法とは関係のない授業の時は。

「……なので、妖精というのは私たちの周りに常に存在してある。もちろん私たちが魔法を使う際に見たり感じたりするのが妖精たちで、説明せずとも皆も分かるだろう。しかし妖精について全てを解明することはできておらず、その謎を我々のような者や魔法士などが日々研究していて」

実際に学べる実技の授業や呪文を学ぶための言語学、医療などに役立つ薬学などと比べるとこういった説明の授業は単調でどうも私には合わない。頭では必要な知識だとは分かっているけど勉強していると不得意、というか苦手な授業の1つや2つは出てくるから仕方がない、はず。

それでも試験なんかがあると分かった日にはきつと徹夜なんだろうな。

私は書き写した黒板の文字や簡単なメモで埋まったノートのパージをめくる。そしてまだ真つ白なそこにたった今、黒板に書き足された文字を写していった。

「 それでは、今日はここまで」

先生がいうと同時に室内はざわざわと生徒の声で満たされる。扉を開けて出ていく先生を見送ると私は大きく背伸びをした。

「 ちょっとヒナ、あくびばかりして！ 先生のお話を真面目に聞いていたんですの?!」

「 聞いてたよ、ばつちり。ただちよくと眠くなっただけ」

「 まったく、信じられませんか!」

私が腕を伸ばしているとリデイがこちらを向いた。私を見る目は少し怖い。

いつも真剣に授業に取り組んでいるリデイには私が授業中にあくびをしていたのは耐えられなかったのだろう。……あくびをした瞬間、隣に座るリデイの視線が痛いほど感じられた。

「 まあまあ、僕もヒナの気持ちはわかるよ。お昼の授業で眠たくなる気持ち」

「 でしょ? イルもそう言って……る、し」

笑いながら言う私の隣からまたリデイの視線が。私は最後まで言いきらず「ご、ごめんリデイ。これからはちゃんとする」と言った。「ははっ、リデイは真面目すぎるからね。同級の女の子達と比べてみたらよく分かるよ」

イルの言葉に私は室内を見回した。昼の授業が終わりクラスのみんなはすでに帰った者もいれば、帰り支度をしている者もいる。私はそのクラスメイトの中でも女の子たちに視点を送る。

「 イルの言いたいことが分かるような……」

綺麗にほどこされたお化粧に、どうやって結うのか想像もつかないような髪型。そんな彼女たちは白く傷1つない肌をしていて、私たちが着ている制服よりもドレスの方が似合うのではないだろうか。それにしても1人でどうやってあの髪形を作っているのか不思議でたまらない。

私はいわゆる「お嬢様」な彼女たちを見ながら、うう〜んと唸る。「イル様、わたくしをあんまり弱なご令嬢方と比べるだなんてひどいですわ。家名、家柄に縋り、ろくに勉強はしようとはしない。それなのにプライドばかり高い彼女たちなどは」

ふん、と鼻息を荒げながら力説するリディに私とイルは若干たじろぐ。尚もリディによる力説は続く

「……入学できたからと、勉強を怠るなんて。ロータス学院に入り、共に切磋琢磨し卒業したら国の、民の為に頑張ろうと励まし合っていたのにつ。専門的に魔法を学ぶ機会が与えられたと言いつのに、これでは何のために貴族として生まれてきたかわかりませんわ。貴族の役割を勘違いしている方も増えているようです。だからイアン・リザーズなどのような平民出身の学生が台頭してきてるのですわ」「リディー、おーい、大丈夫？ それに何でそこでイアンが出てくるの？」

自分の世界に入ってしまったているリディに私は声をかけて呼び戻す。イルも一緒になって声をかける。

多分リディが言っているご令嬢たちとは、試験の際にリディの周りにいた女の子たちだろう。前のことなので顔など、私の記憶には残ってはいないが想像はつく。試験までは互いを励まし合ったりしていたのではないだろうか？ しかし入学できたのを機に、リディと彼女たちは疎遠になってしまった、というところか。まあ、真面目なりディに対して年頃のご令嬢たちは勉強よりも違う方向に意識がむいているのかもしれない。ここで生活をしているといろいろな情報を得たり噂話を聞くことがある。その1つに、ロータス学院

の貴族の女子は結婚相手を探すために来ている、というものだ。

貴族の女性とはこんな若い時から結婚相手を探さないといけないのか、と初めて知った時にはとても驚いた。でも私には関係ないことだ、とリデイに声をかけながら考える。

「……できたわ！」

私、リデイ、イルの3人が話している間、1人で何かの作業をしていたシアが急に声をあげた。自分の世界に入っていたリデイも含めて、シアの言葉を聞いた私たちは一斉に顔を向ける。

「何？ シア、何作ったの？」

「ふふん、次の休日までもうすぐでしょ？ だから先日考えた計画に加えて他にも考えたのよ」

イルの質問に得意げに答えるシア。そんなシアに私たちは首を傾げる。

「それ僕達には見せてくれるの？」

「どうしようかしら。……まだ計画中だから、駄目ね」

少し考えた後に1回頷く。私たちは何を考えているのだろうと顔を見合わせる。

「それじゃあ計画が完成したら教えてね」

私がそう言うともみんな帰り支度を済ませ、教室を出ることにした。

+ + + +

「ヒナ達は何の話をしていたの？」

教室を出た私たちは校舎の外に出るため、外につながる廊下を歩いている。窓から傾き始めた陽の光が差し込み廊下を明るく照らす。辺りには私たちと同じように校舎外に出るため、同一方向に歩いて

いる人達がちらほらいた。

「何って……同じ1年生の女の子の話？ あの髪形はどうなっているんだろっ、みたいな」

「ええ、何それ。まあ知らないなら気になるわね」

私たちが話していた内容が意外だったのか、シアは笑いながら顔を振り向く。振り向いた先には教室にいた以外の女の子。その子たちの髪形も1人以外は先ほど話していたお嬢様たちと似ている。

「シアは知っているの？」

含みのある言い方に私は気になって尋ねる。何かを思い出したのか、シアは少しうんざりした顔だ。

「もちろんよ。というか、学院に入学する前に侍女たちが厳しく教え込んできたから。淑女のなんとやら、なんて言われたわ」

「うわあ。やっぱりお姫様なんだね。……で、どうするの？」

「やっぱりって……。あの髪は魔法よ。風と水の魔法ね。複雑なものは大変だろうけど彼女たちの髪形くらいなら比較的簡単じゃないかしら」

シアの言葉に私は口を開ける。だって髪をまとめるのにわざわざ魔法まで使うだなんて。

それでも納得はできた。彼女たちが1人で毎朝鏡を見ながら格闘していると言われるよりずっと信じられる。

「わたくしとしてはもっと違う方に魔法の力を使ってほしいですけど。髪なんて1つにまとめるだけで十分ですし。いっそのことヒナのように短くしようかしら」

自分の髪を摘まむリディに私はもったいないから、とあわてて止めた。

ようやく肩よりも下まで伸びた髪だけどリディにとったら短いのだろう。ふわふわとゆるく波打つ赤い髪を見ながら思う。

「せっかくなきれいなのに。私は何もせずに下ろしたままのリディの

髪、好きよ?」

まったくもってうらやましい限りだ。自分の髪色とは違うからか、この世界に来るまで見たことのなかった髪色に、憧れのまなざしを送ってしまう。

だから思ったままの気持ちを言ったのに、なぜか怒られた。

「気にしなくていいわよ、リディは照れてるだけだから。それにも素直なヒナが好きよ」

首を傾げる私に小さく笑っていたシアが私の肩に手を置く。

「え、うん? ありがと?」

励まされて、なぜかシアに好きだと言われてしまった。目を1度ぱちくりさせると、私はまたしても首を傾げた。

「……髪のことについては分かったんだけど、全員がそんな感じじゃないよね」

先ほどシアが見ていた先にいる女の子たちをイルが同じように眺めている。

「ああ、イザベラね。貴族の女性としては短めだし装いも清楚ね。あまり知った仲ではないけれど人当たりが良くて成績も優秀らしいわね」

シアの話しに私たち4人ともそのイザベラと言っらしい女子生徒を見た。数少ない同級生なので顔を見たことはあっても話したことはない人はいる。イザベラはその中の1人だ。イザベラは私たちの視線に気がついたのか、にこりと頬笑み、軽くお辞儀をした。

「良い人そうだね。かわいいし」

「確かに他のご令嬢方とは異なって常識はありそうですね。魔法の使い手としてもなかなかですし」

イザベラは友人であるう人たちと歩いている。リディがイザベラを常識がある、と言ったのは彼女の友人達の態度を見比べてだろう。静かに会釈するイザベラとは違ってその友人たちは高揚した顔に「

「きゃあ」と声をあげていたからだ。そのあとイザベラが彼女たちに何か小声で言うとはっと思い出したように頭を下げていた。

「可愛い子だったね」。成績も優秀でかわいいなんて羨ましい」

イルが外へ続く扉を開き、私はその扉をくぐりながら呟いた。

「あら、そうしたらヒナはわたくしのことも羨ましく思っているのかしら」

「え、リディを？　なんで？」

「先ほどヒナはわたくしをきれいだと言ったじゃない。加えて成績優秀ですし。もちろんシア様の方がより美しく、秀才ですけど」

きれいな、とはリディの髪のことを言っただけだっただけだ。

しかし自分で堂々と言いきることができるリディははつきりいってすごい。

横では少し引き気味の私を見てシアとイルが笑っていた。

朝日が昇り、しばらくして起きた私はまずベランダで顔を洗った。水道がないため、小さなたらいに水を注ぐ。残った水はベランダに置いてある鉢植えにかけた。

すっきりとした私は部屋に戻り、タオルで顔を拭きながら服をあさる。あさる、とはいってもそんなに服を持っていないわけではない。学費は学院の奨学金制度でなんとかなっているが、それ以外の生活費は自分持ちなのだ。リコット亭で働いたお給金でなんとかやりくりしている、という状況。

可愛い服とか靴、お化粧品にだって興味はある。でも今の私にそんな余裕はなかった。

「よし、これでいっか」

休日である今日は制服ではない。麻のワンピースに着替えた私は昨日の夜、食堂からくすねてきたパンを口に放り込んだ。少しばさついたパンが喉に張り付くのをなんとか唾液で飲み込む。

「今日は王都へ行くのか？」

立ったままパンをかじっていた私の足元にいつの間にかいたロウが話しかけてきた。手に持っているパンを小さくちぎり、ロウの口に向けて落としながら言葉を返す。

「そうだよ。で、そのあとシア達の家に泊りに行くの。そういえばロウはどうする？ シア達のことだからロウも一緒に大丈夫だと思っけど」

シア達と約束しているのは夕方から。昼間はリコット亭で働くのだ。

もちろんロウにも事前に話したが、一緒に行くのかは聞いていなかった。

「そうだな……、ヒナが行くなら私も行くか」

ロウはしつぽを左右に低く揺らしながら私を見上げる。

「それじゃ、リコット亭での仕事が終わったら一緒に行こう」

私は服に付いたパンの屑を払い落す。今着ている服は制服よりもいくぶんごわついた手触りがした。

女子寮から外へ出るために中央棟へと向かった。一応男女別となつている寮とは異なり、談話室などの役割となつている中央棟には性別や年齢関係なく、たくさんの人がいた。休日だからだろう、ほとんどの人は私服で行動している。もしかしたら私のように学院の外に行く人も多いのかもしれない。

授業があるときは別だが、休日は自由に学院の外に出ることができ。そのため、学生の多くは休日になると王都へ遊びに行ったり家に帰ったりする人がいる。また夏にある長期休暇、いわゆる夏休み、のようなものもあるらしい。

「あっちの学校と似ているところも結構あるよね」

授業がある普段よりも明るい表情に見えるのは見間違いではないだろう。つい数カ月前までいた学校を思い出した。

制服よりも華やかな服に多彩な装飾品、おしゃれをしている女の子たちをちらりと見る。そんな彼女たちと飾りつけのない地味なワンピース姿の自分とを見比べた私は自然と隅を歩いた。

リデイやシア達はまだ寮の部屋にいるかもしれない。お泊りの約束は夕方からなので王都へは1人で行く予定だ。

「わっ、何？ ……ね、猫？」

あと少しで扉の前、という所。そこに突然、猫が飛び出してきた。「なんだ、君。ご主人様は？」

見た目はごく普通の猫のようだが、長めのつややかな黒毛が一般的な飼い猫ではないことを感じさせる。見ただけで丁寧に手入れさ

れていることがわかる目の前の猫は、一度私を見上げて目線を足元にいたロウへと向けた。

「……あれ？」

猫と目が会った時、違和感を感じた私は小さく声をあげる。その異和感の理由が知りたくて猫に触ろうと手を伸ばした。

「アートフィレス、何をしているの」

腰を曲げ、手を伸ばしていた私は体の動きを止めた。そして私が手を伸ばしている間動かなかった猫が私とロウの間をすり抜けていった。私も猫を追うように体を後ろへと向ける。視線を追うとその猫は1人の少女の腕の中にいた。

「いつの間にこんな所まで来ていたの」

言い聞かせるように抱きしめながら話す彼女に見覚えがあった。シアヤリデイ、その他の女の子たちとは違い、比較的短い髪をした少女。透明感のある金髪を持つシアとイルとは異なる濃い金髪に、翡翠の瞳がとても似合っている。

同じ1年の名前は、……イザベラ、だったっけ。

先日、シア達との会話の中ででてきた名前を必死に思い出した。

「あら、あなたは確か……」

猫を抱いたままの私に、彼女が近寄ってくる。周りには彼女の友達らしき人はおらず、どうやらひとりで猫を探しに来たようだ。

「ヒナよ。ヒナ・フロリス。同じ1年の。この間、廊下で会ったの覚えてる？」

「ああ、覚えているわ。私はイザベラ・シスル・タイナートよ」

互いによくと言いつつ。入学して大分経つのにこうやって自己紹介しあうなんて少し変な気分だ。

イザベラが話している間、私はイザベラ自身ではなくてその腕の中にいる猫を見ていた。

「ふふ、この子はアートフィレスというの。あまり人が大勢いる所に来たがらないんだけど、こんなところにいて驚いちゃったわ。ヒナが気になって近づいたのかしら」

「どうだろ？ でも動物は好きよ」

言いながら猫の頭を撫でた。想像していたよりもやわらかい毛は少しひんやりとされていて気持ちがいい。

「でも本当に珍しいわ。普通は家族以外に撫でられそうになるとすぐ怒るのに。……あら、この子はヒナの……？」

そう言ったイザベラの視線はロウに向いていた。お座りしているロウは静かに私の隣にいる。

「そうよ。名前はロウというの」

「そう、……なんだか似ているわね。アートフィレスとこの子」

毛色とかね、と言うイザベラは猫を抱いたまま屈みこみ、ロウに触れた。

「そういえばヒナはこれからどこかへ行くの？」

立ちあがったイザベラが話しかけてきた。

私はそうだった、と口に手を当てる。久しぶりにシア達以外と普通に話したことであれしくなっていた私はすっかりとこれからのことを忘れていた。これからお世話になった人のお店を手伝いに行くの、という「頑張っつて」と応援してくれた。

シア達以外にこんな風に接してくれる人が少ないので新鮮だ。王族であるシアヤイルと一緒にいるからだとは分かっているけど、あまり実感のない私にとって困ったことだった。周りの人の態度やねたみを含んだ影口なんかは悲しくもあつたし、苛立ちも感じさせた。もちろんシア達は友達だし、大好きだ。シア達という私、ではなくて私個人を見ようとはしない周りに苛立っているのかもしれない。だからこうやって私自身と真っ直ぐに話してくれるイザベラに好感を持ったのだろう。

「そうしたら今日はこちらには帰ってこないの？」

「そう。あ、いや今日は」

「やあ、ヒナじゃないか」

イザベラと話していると私の名前を呼ぶ声が聞こえてきた。耳を頼りに声の主の方を向く。

「ランセル殿下っ？」

殿下の登場に驚いたのは私だけではなくイザベラもだったようだ。一步下がりの辞儀をしながらも目を見開くのが視界の隅から見えた。多分私の目も同じように大きくなっていくだろう。これまではシアヤイルがいるときに会うことはあったがそれ以外、ランセル殿下とは面識がなかったからだ。

「聞いたよ、イルに。今日、イル達の家泊るんだってね？」

「あ、はい」

それがどうしたのか、と問いかけようとしたけどなんとなく思いとどまる。なぜか私知っている普段よりも笑顔が眩しい気がする。

「そんなにイル達と仲良くなっているだなんて驚いたんだよね」

「……はあ」

隣では話の内容が掴めていないイザベラが首を傾げている。そんなイザベラの為に簡単に説明すると「そうなのですか」と頷いていた。

「うん。だからね、僕たちも行くのかなと思って」

「え……？」

「ええ？」

小さく驚く私と同じようにイザベラも驚きの声をあげた。笑顔を崩さないランセル殿下と比べて私たちはどんな顔をしているのだろうか。隣のイザベラは大きく開いた瞳に仄かに頬が上気している。考えなくても分かることだが、目の前にいる彼はこの国の王子様なのだ。憧れの、いや、それ以上の対象として見ている者も多いだろ

う。

その証拠にランセル殿下と話している私たちに向けての視線がものすごく感じる。それもあからさまな。特に同性、女子の視線が突き刺さる。隣にいるイザベラも感じているのだろう、すでに頬の赤みは消え、目で周りの気配を伺っているようだ。それにしても……。絶対に気がついていないはずなのにそれを表情におくびにも出さない殿下に対して私はひきつった笑みを見せた。

「そ、それじゃあイザベラまたね」

「え、ええ、また」

ぎこちなく手を振る私に、ぎこちなく手を振り返すイザベラ。イザベラに背を向け扉に向かう動きが鈍い。それはきつと女子たちの眼光のせいだろう。

「足元に気をつけて」

「は、はいっ」

扉を開け、先を促す殿下に戸惑いながらも足を踏み出した。

外へと出た私は安堵のため息を吐く。ただ数歩歩いただけで疲れたのは初めてだ……。

「それじゃあ行こうか」

肩を落とし、ぐったりしている私に声をかけてきたのは、私がこんな状態になった原因であるランセル殿下。太陽と同じくらいに眩しい笑顔が少し憎らしい。

「や、やっぱり遠慮し……」

「歩いて行くの？ 王都まで？」

「うう……」

有無を言わせない物言いに私は返す言葉がない。王都へ行く、と言う私の話を聞いた殿下が自分の乗る馬車で送ってくれると言っただ。周りにも聞こえたのだろう、背後でざわり、とするのが分かった。

それにしてもこの有無を言わせない感じ、もう一人の王子であるヴェルリル殿下に似ている。初めて魔法の授業を受けた時のヴェルリル殿下の物言いがそうだ。それは王子だからか兄弟だからか……うん、その両方だろう。

なんでこうなった？

たまたま私がシアヤイルの友人だから、というのは間違いない。

本来ならばこんな近くに寄ることさえできない人物を見上げながら思った。

道中

「どづいうことだ、これは」

ランセル殿下についてロータス学院の入り口まで来た私はある困難に直面していた。

「どづいうことって、見たら分かるだろう？」

学院から出てすぐの所で仁王立ちをしている人物に対し、ランセル殿下は先ほどから保ち続けている笑顔で返事をする。殿下の返事が気に食わなかったのか、私たちの前にいる人物は眉を寄せた。

周囲には休日を学院の外で過ごす学生や、そんな彼らを迎えにきたと思われる御者が馬車と共にいたが、眉を寄せているこの人物から少し離れた場所にいた。理由は身分、だけではなくきつと隠そうともしない不機嫌な雰囲気でも周りが怯えているからだろう……。

私も例外ではない。

ランセル殿下と会話をしている人物の注意を引かない様に、できるだけ体を小さくして殿下の背中に隠れた。

「今から行くのは王宮のはずだが、……なんでそいつがいる」

「……ひい！」

私は直接顔を合わせていないのに感じる視線に縮み上がった。体と一緒に思わず声も上がる。

「まったく。女の子をそういう風に睨みつけたらいけないと何度も言っているだろう？ それと、この子はそいつじゃなくてヒナだよ」

私や周りの人間とは違い、ランセル殿下は怯えの表情を一切見せない。逆に、殿下の言葉に対して目の前の人物が一瞬たじろいだ。

その様子を私は殿下の背中から顔だけを出して伺う。

「……それから、王都までヒナも一緒に行くから」

「は……？」

ランセル殿下はそう言うと、後ろにいた私の方に振り向く。肩に手を置かれ、横に並ぶように立つと前に進むよう促される。

「えっ、あの……？」

戸惑う私にランセル殿下は「だいじょうぶ」と繰り返す。だが前へと進む足は止まらない。目の前の人物が近付く私たちに向かって口を開いた。

「おいっ……！」

「女の子が1人で歩いて王都まで行くというのに、心が痛まないのか？ 我が弟ながら、情けないよ」

はぁ、と大きさにランセル殿下はため息をつく。

「ランセル殿下、あの、私やっぱり1人で行けます。ヴェ、ヴェルリル殿下も困ってるみたいだし……。心遣いだけで……」

私は肩に置かれてる手に少し意識しながら、ランセル殿下を見上げる。今まで兄や父以外の異性に肩を抱かれる経験がなく、慣れないそれに自然と心拍数があがる。そして、それ以上に美人でかっこいい人がこんなにも近くにいることに緊張したのか、出す言葉が震えた。

きつと迷惑だよね……。

私はランセル殿下から、そろりとヴェルリル殿下に目を向ける。

「あ……」

気付かれない様に見たはずなのに、ヴェルリル殿下と視線が重なる。気まずさですぐにでも逸らしたかったが、私はその瞳から視線を外すことはできなかった。

「馬車もちょうど来たみたいだ」

重なった視線はランセル殿下の声でようやく外すことができた。

うつ、さっきは女子たちに睨まれ、今度はヴェルリル殿下に睨まれ……。

今日という1日が始まったばかりなのに、と思わずにはいられない。

自分の世界に入ったまま歩いた私は、陽の光から私自身をすっぽりと隠す物に気がつかなかった。

隣にいるランセル殿下に「ほら、ヒナ」と呼びかけられるまで。

「うわ……！ 何これ？」

目の前にある「それ」に大きく瞬きを繰り返す。開いた口からは意味のない「ふわぁー」というような声流れ出た。

しばらくそのまま立ちつくした私は「ごくり」と息を飲み、横にいるであろうランセル殿下を振り仰ぐ。

「もしかして、これに、この馬車に乗るんですか？」

美しい装飾がほどこされた馬車についてうつとりしてしまふ。顔もだらしのないことになっているだろう。だからか、そんな私を見たランセル殿下はくすり、と笑い「そうだよ」と答えてくれた。

殿下の言葉を聞いた私は、改めて馬車を見る。装飾だけではなく、扉や窓もしっかりしているようだ。今いる場所からは中を確認することはできないが、内装も素晴らしいものだと思像できた。

「あの、触っても……？」

馬車の出入り口である後方にいた私は前方にいる馬の所へ行くと、殿下2人に許可を求めた。おそろおそろ聞いたので、おそらく私の声は2人に届いていなかったかもしれない。しかし私の様子から判断したのか、ランセル殿下が首を縦に振った。ヴェルリル殿下の反応はなかったが、私はランセル殿下の頷きから、馬を触ってもよいという解釈をした。

「とてもきれいだね、君たち」

馬に向き直った私は初めに指だけで触れた。元々賢いのか、調教

されているのか、……多分その両方だろう。2頭の馬は見知らぬ私が触れても暴れたりなんかしなかった。

「おい、そろそろ行くぞ」

長いまつげに縁取られた大きな瞳の馬達に話しかけながら触っていた私にヴェルリル殿下が声をかけてきた。少しばかりうんざりとした声は、私がどれだけ2人を待たせていたかを示している。

「ヒナは馬が好きなのかい？」

ヴェルリル殿下とは裏腹に、ランセル殿下は先ほどと変わらない口調で近づいてきた。

「あ、馬がというか。動物が好きなんです」

私は口元を緩めながら、先ほどから共にいる口ウに視線を送った。

どうやら私のせいで随分と待たせてしまったようだ。送ってもらった立場なのに、と私は「すいません」と何度も謝った。

「どうぞ」

御者だろう壮年の男性が扉を開く。先に乗ったランセル殿下が私に向かって中から腕を伸ばす。

「あ……、えと」

開かれた扉の中は想像通りに素晴らしかった。それまで乗った馬車とはまるで違う壮麗さ。それは「殿下」という2人の立場からいえばごく当たり前のこと。周りにも迎えの馬車があったが、そのどれよりも立派であったし、2人も十分すぎるほどに馴染んでいた。

私は自分自身の身なりを見降ろしてみる。ごわついた手触りの、しかし今の私にとって馴染んだ服に、擦り切れた靴。そんな姿の自分と馬車とを見比べた私は、もう触れそうなくらい近くにある馬車に乗ることをためらってしまった。

「どうしたんだいヒナ？」

開いた扉の前に立ち尽くす私にランセル殿下が訝しげに尋ねる。

殿下の声に対して目を泳がせる私はあるものが目に入った。

「馬に、馬に乗せてくださいー！」

「え？」

急に声をあげた私にランセル殿下は驚いた顔を見せる。殿下の返事を聞かず、私は扉を支えていた御者の男性に話しかけた。

「……御者の代わりでもして、お前が馬車を動かすのか？」

私の後ろに立っていたヴェルリル殿下は皮肉を込めた声を出す。わがままを言うな、とでも言いたいのだろう。「さっさと乗れ」と私の背中を押した。

「う、馬に乗りたいです！」

馬車の方へと押される体をなんとか足に力を入れて踏ん張る。2人にも御者の人にも迷惑をかけているが、それでもこの馬車に乗ることはためらってしまうのだ。

なかなか動こうとせず、「馬に乗りたい」とわがままを言い続ける私にあきれたのかヴェルリル殿下は「……はあ」と息を吐いた。殿下は私の背から手を下ろすと、私たちの攻防を見守っていたランセル殿下へ助言を仰ぐように、顔をあげる。

「ヒナはどうしても馬車に乗りたくないのかい？」

ヴェルリル殿下の視線を受けたランセル殿下は小さく頷くと、私に問いかける。

「や、乗りたくないわけではないんですけど……。豪華すぎる、っていうか」

はつきりとしらない物言いに、自分でもあきれてしまう。誰かに叱責してもらいたいくらいに。

それにしても、ランセル殿下が送ってくれる、といった時点で予測すべきだった。当たり前じゃないか。殿下、王子といわれる人が乗るものなんだから。私のような平民が乗るような馬車のはずがない。

もごもごとする私に、ランセル殿下は優しげな、しかし少し困った表情で何かを考えているようだ。

申し訳なさでいっばいの私は両手でワンピースの裾を握り締めた。

「……うん。それじゃあ馬で行こう。すまないけど、王宮へ先に行つてくれる？」

少しばかり間が空いたと思っていたら、ランセル殿下は突然そう言うなり、馬車の御者に命を出した。御者が「かしこまりました」という返事に頷くと、ランセル殿下は乗っていた馬車から下りる。

「ラ、ランセル殿下……？」

「王宮で何か聞かれたら『久しぶりに馬を走らせた』と言っていたと伝えて」

戸惑う私をよそに、殿下は御者と話す。ついには、馬車は殿下達を乗せずに走り去ってしまった。

「え……、え……？」

私はだんだんと小さくなる馬車を見つめる。そして事の重大さに気がつくと一瞬にして血の気が引いてしまった。

「も、申し訳ありません！ 私のわがままで！」

謝っても謝りきれない。こんなことになるなら私の気持ちなんか無視して、大人しく馬車に乗るべきだった。

「ん？ 大丈夫だよ。馬を走らせたかと思っていたのは本当だし。まあ本来なら護衛なんかをつけないといけないところだけど、たまにはいいかな」

「で、でも」

若干涙目になって私の肩を、優しくたたく。その慰めるような行為に涙がこぼれ落ちそうになった。

「あ、来たみたいだ」

ランセル殿下は学院の入口に視線を向ける。私もそれに倣うように見ると、2頭の馬を連れたヴェルリル殿下がいた。

いつの間になくなっていったのか。私が行く馬車に茫然としていたときなのか、それ以前なのかはわからないが、ヴェルリル殿下は

鞍などをつけた馬を慣れた手つきで引いている。

「どういうことなのか、と理解できていない私をよそに、ランセル殿下は馬の元へ近づく。」

「……本当に馬で行くんですか？」

「実を言うと、ヒナに少し感謝しているんだよ？ 理由はどうであれ、こつやつて馬に乗ることは本当に久しぶりだからね。ヴェルも口には出さないけれど、僕と同じ気持ちだと思う」

そう言うランセル殿下は普段よりもはにかんだ笑顔に感じた。その笑顔に、申し訳ないとばかり思っていた心の重みが少しだけ軽くなる。

「まあ、確かに馬車よりは馬に乗った方が気分はいい、ということ
は認める」

「ヴェル、まったく……」

これまでは殿下、という立場が先だつて近づきにくいという先入観を持っていた。だが、それは彼らの肩書きだけを見た結果だったのかもしれない。考えれば、2人は自分たちの身分を驕おごったことなどなかった。

色々と迷惑をかけたという実感はもちろんある。それでも、それを感じさせないようにする2人に対してじんわりと心が暖かくなつた。

「あの、……ありがとう！」

無意識に頬が緩む。そして同様に、無意識に言葉を紡いでいた。

自然と出た感謝の言葉に、殿下達の大きく見開く瞳。2人の瞳の異なる色彩は、どちらとも太陽の光を受けてキラキラと輝く。妖精のいたずらか、辺りを漂う風が私たちの髪や服をはためかせ、馬のたてがみが風に揺れる。

「それじゃあ、ヒナはヴェルと乗ってね」

「はい つて、え?!」

「おい、さつさと乗れ、ヒナ」

「ヴェルリル殿下と？　なんで！」

私の休日はまだ始まったばかり。

空は青く、照りつける日差しを見上げれば自然と目を細めてしま
う。強く輝く太陽の光は夏を感じさせるが、森の木々のおかげで直
には当たらない。太陽を求めるように枝葉は伸び、時折吹く風にま
じった風の妖精が気持ちよさそうに森を泳ぐ。程よい木漏れ日は私
たちや、私たちの前にのびている道、森の中に注いでいた。

カポツ、カポツ、カポツ……

上下に揺れ続ける動きに、私の体も同じように動く。お尻から感
じる温かさと不安定な私の体。目の前には自分の身長よりもかなり
高い所から見える道と、もう少し手前には風に揺れるたてがみに、
時折ピクリと動く縦長の耳があった。

「……っひよわ！」

少しは慣れたがそれでも不安定な動きに、たまにバランスを崩し
てしまう時がある。私にとっての命綱、手綱を握り締めて体のあり
とあらゆる筋肉を総動員し、姿勢を保とうと努力をする。

……が、

「おい、もう少し近づけ」

普通ならありえない位置にいる人が簡単に私を引き寄せ、ふらつ
く体を包み込んだ。

「で、殿下……?! あの、ヴェルリル殿下、ち、近いですっ」

背中にびつたりとくっつく殿下に、私は自然と体を丸めるように
小さくしてしまふ。

「下を見るな、前を見る」

「は、はい」

だって……、と口を開きそうになるものの、私は閉じた口のまま背筋を伸ばし前を見た。普段よりも速く動く心臓は慣れない馬に乗っているからか、それとも他のことが理由なのか……。

私はトクトクと刻み続ける心臓を馬のせいにし、ほんのりと火照った体を夏の太陽のせいにした。

「ヒナ、大丈夫？」

「は、はい。なん、とか」

「ごめんね、普段の移動より時間が掛かっていると思うし」

ランセル殿下の言葉に私は否定の意味で首を横に振った。

動く馬になかなか合わせることができず、言葉がうまく返せない。何も考えず口を開こうものなら何度舌を噛むことか。……すでにいくつか出来た口内の傷がそれを物語っている。

私に気遣いの声をかけてくれたランセル殿下は1頭の馬を2人で乗っている私とヴェルリル殿下とは違い、1人で乗っている。正確に言えば、胸の中にもぐりこんでいる口ウを入れれば2人と1匹で、だけでも。

「うっ……！」

時折起こる馬の予想外の動きに、またもや口内にじんわりと広がる鉄の味。しかし自ら馬に乗ることを申し出たために言いだすこともできない。数えることを止めてしまった傷に心の中でそつと息を吐いた。

森の中で緩やかに流れる小川。そう深くはない水の中では親指ほどの小さな魚が泳いでいる。目を凝らさなくても見えるくらいに透

明感がある小川の淵に私とロウは腰を下ろしていた。

「大丈夫か？」

「うん、思ったよりは平気。……ちょっとヒリヒリするけど」

心配するロウの横で口をゆすぐ。何度も噛んでしまった口内の傷は、実を言つと相当痛かった。

けれども水で洗い流せたおかげで心なしか、楽になった気がする。「まあ……、馬車はともかく、馬自体に乗ることなど初めてだったからな。あの王子の言うことを聞いて馬車に乗っておればこんなことにならずにすんだものを。……まったく」

あきれ口調のロウは私を見上げたかと思うと、はあ、とため息をついた。私は数度目になるうがいをしながら、水を含んだ状態で頬を膨らませた。

「らっひえ、……あんな豪華な馬車、乗ったら目立つもん！」

（だって、……あんな豪華な馬車、乗ったら目立つもん！）
がらがら、と水を喉で鳴らすと足元に勢いよく吐き出す。まだ血が止まっていないからか、私の周囲にある草はうっすらと赤色で濡れている。

「ヒナ……、言っていることは伝わるが、人間の言葉で話してくれ……」

「ははっ、ごめんごめん」

あきれ口調から残念そうな口調に変わったロウに、私は声をあげて笑つた。

最後に、と違って両手いっぱいにくっつけた水を口に入れ、草に付いた血を流すために「っぺ！」と、思いつきり吐き出した。

森中の小川の淵にいるのは私とロウだけ。殿下達は離れた小川沿にいて馬に水を飲ませている。

馬達に休憩させるため、ということとで私たちは進んでいた道を止まった。丁度、この小川があったことも理由だ。

……もしかしたら2人とも私の体調に気が付いているのかもしれない

ない。

馬から降りてすぐに、少し離れる、という私に何も聞かなかったからだ。

「もしかしなくとも、優しいんだよね。あの2人」

初めはシア達経由で知り合った仲。私自身はシアやクラスのみんなのように貴族ではなく、本来ならば話すことすらできない。それを言えばシアやリディ、イルもだけれど。普通、平民と貴族がどのような接し方をしているか私は知らない。それでも分け隔てなく話しかけてくれる彼らはきつと優しいのだろう。

「でもヴェルリル殿下は分からないなあ」

うーん、とうなりながらロウを胸に抱く。ふわふわとした毛並みが気持ちいい。

「分からない、というか分かりにくい……？ ランセル殿下の方が分かりやすいよね。話し方も柔らかいし」

兄弟である彼ら2人を思い出す。

クールで命令口調のヴェルリル殿下は少し近づきにくい感じ。一方の兄であるランセル殿下にはこやかな笑顔に口調もやわらかい。共通する部分は顔かたちや漂う気品もだが、性格も似ているところが多々ある。それは王子だからか、2人とも若干強引なところとか。

「ん……？ いや待て」

なぜ私がこの場所にいるのか……。今朝、ランセル殿下に出会ったためだ。

「よくよく考えるとランセル殿下の方がよく分からない気がする……」

個人的にそこまで親しいわけでもないのになぜ、一緒にいるのか？ そんな疑問が頭に浮かんだ。

「何を先ほどからぶつぶつ言っておる」

「んー？ いやあ、なんでこんな状況になっているのかとさ、改めて考えていたのよ」

無意識に撫でくりまわしていたのか、毛がぐしゃぐしゃとなったロウが私を見上げてきた。

「ああ、あの王子たちか」

「そうそう。なんか変なこと起こらなければいいけど……」
ふう、と目を閉じながらロウの毛並みを手でととのえる。

普段ならすでに王都へ到着しているのだ。馬よりも速く、走るといっても跳ぶという感覚に近いロウの背に乗り森を駆け抜けて。

通る所はもちろん森の中なので学院の生徒に見られた可能性は低い、……と思う。

「ヒナ……？」

「ま、王都までそんなに遠くないし大丈夫よね、ロウ」

「何が『大丈夫』なんだ？」

へ……？ と息を漏らす。聞こえてきた声はロウのものではなく離れた場所にいるはずの、殿下達のものだった。

「あ、……えっ？」

そろりと開けた瞳の前にはヴェルリル殿下とランセル殿下。馬はいないのでどこかの木に繋がっているのかもしれない。

「今、誰かと話してたよね？」

微笑みながら首を傾げるランセル殿下に私はぴくりと肩を揺らす。そして曖昧に「ああ、えと」と呟けばさらに深くなる笑み。

やっぱりランセル殿下って分かんない！

「やっ、独り言？」

えへ、と冗談のように言えば今度はヴェルリル殿下の眉間に皺が寄る。

さっきの却下！ 優しくないっ、この2人優しくない！

睨みつけるような視線にただ固まるしかない私はぎゅう、と口ウを抱きしめた。

ふっ、とランセル殿下が目を細める。

「いつまで経っても戻ってこないから声をかけたんだよ。離れた所から手を振ってみただけど、ヒナは目を閉じていたみたいで僕らにきづかなかったしね」

「そ、そうなんですか」

私か、私のせいなのか……。きっちりと目を見開いてさえすれば私の言葉も聞かれなかったはずなのに。自分自身のせいだと思うと余計に肩を落としてしまう。

「でもそのお陰で確信できた」

「え？」

見上げれば重なり合う視線。ランセル殿下は私と目を合わせたまま言った。

「ただの動物じゃないよね 意思を持った妖精だ」

「ただの動物じゃないよね　意思を持った妖精だ」

太陽のような輝きの瞳を細め、ランセル殿下はそう言つと私からロウへと目を向ける。言葉は発さないものの、同じようにヴェルリル殿下もロウを見ていた。

あえて隠していたわけではない。それでもロウが動物ではないと言つた事はなかった。

ランセル殿下の言つた言葉に私はごくり、と息を飲む。

抱きしめているロウからほんのりと熱が腕や胸に伝わる。トクトクトク、と感じるのは私自身の心臓。

どんなに強く抱きしめても、ロウの心音は伝わってこない。

それはロウが動物ではないからなのか、それとも違う理由があるのか。

「……何も言わない、ということとは否定しないと」

口をつぐんだままの私とロウにヴェルリル殿下が堅い口調で言う。その雰囲気や言い方に出るのは意味のなさない声だけ。

「あ、……え、と」

「だまってないではつきり言え」

言われて、逆に口をつぐんでしまった。

緊張か恐怖か動揺か、視線を逸らすことができない。私は何も悪いことなんてしていないはずなのに、なぜかすくんでしまう。

視線の端には肩をすくめるランセル殿下。

きっかけはランセル殿下のひと言だというのに、今はあきれ顔でヴェルリル殿下を見ている。しかし、呆れた顔とはいつてもヴェルリル殿下に口を挟もうとはしないようだ。

「おい、」

何も言わない私にヴェルリル殿下の声がしだいに陰しくなる。お

そらく、私が何かを言わなければこの状態が続くのかもしれない。

私は覚悟を決め、一度大きく深呼吸すると口を開いた。

「ロウは」

「うるさい奴らだな」

私の声に重なったのは聞きなれた声。

それまで黙っていたロウがけだるげに、しかしはっきりと言葉を発した。

「ロ、ロウ……?!」

「まったく、黙って聞いておれば」

ほとんど自ら人前で声を発したことのないロウのためらいもない様子にロウではなく、私があわてる。

「……やはりな」

ロウ自身が動物ではないという明らかな証明　話す、ということをしたため、手間が省けたと言わんばかりのヴェルリル殿下。ロウから視線を移すのにやり、と口角があがっていた。

「あんな風に、ヒナに問わずとも気づいていたのだろう？　私のことを」

「……そう、気づいていたんでしょ……って、え？」

「ああ。だが、確信をもったのはついさっき、だが」

「……『ああ』って、え……?!」

私を無視してのやりとりに、ただ困惑してしまう。だがその間にも話は進んでいく。

「国で地位のあるぬしらが1人の人間、しかも平民出の人間を気にかけるのは妙だからな」

もぞり、とロウは身じろぎをする。私の腕から離れ、地面に足をつけた。

「なるほど、な」

ロウの言葉にヴェルリル殿下が目を細める。気のせいかもしれないが、ロウを見下ろすその目は面白そうに笑っているように見える。

「確信をもったのはついさっき、ということとは前から感じていた
ということか」

「……さすがに賢いな」

笑みが深まる。顔の表情は大きく変わっていないはずなのに、声
やちよつとした顔の動きで伝わってくる。

ロウとヴェルリル殿下の話に耳を傾けていると、前からロウが妖
精だと気づいていたようだ。なぜ分かったのか、今の私には想像が
つかない。

授業で習った？ そう考えてみたが、自分とロウに関係する事柄
なのだから、そういつた授業があれば忘れるはずがない。もしまし
て、学年が上がれば勉強することがあるかもしれない。

まだまだ分からないことだらけだ。学院に入学してから少しは知
識をつけたはずなのに。

私にはまだ学ばなければならぬことがたくさんあるらしい。授
業で、自分で、図書館で。

無知のままでは分からないことも勉強すればきつと分かるように
なる。そしてそれがゆびわやおばあちゃんの家族につながるかもし
れない……。

「ごめんね？」

「え……？」

ひとりでふけていると、私と同様あまり口を開かなかったラン
セル殿下の声が降ってきた。いつの間にか隣に立っている殿下に驚
きながら傾げる。

「突然だったし、驚いたかもしれないと思ってね。ヴェルの言い方
も、怖かったでしょ？」

だからごめんね、と申し訳なさそうに詫びる殿下にあわてて首を
横に振る。

「い、いえ。私こそ隠したりして……。や、少しだけ、怖かった、ですけど……」

うるたえる私にランセル殿下は数度瞬きをしてくすり、と肩を揺らした。

「少しだけ、ね」

「ちょ、ちょびつと、……これくらいです」

親指と人差し指で隙間を作る。面白かったのか、言い繕うために言葉を言いかえるとさらに笑われてしまった。ランセル殿下の笑い声につられて、私も口を緩める。

「……多分、僕らは気にかけてと思うよ。妖精のことがなくても」

「はい……?」

少しの間の後、小声でつぶやかれた声。言葉は聞き取れても、どういふことなのか分からずにランセル殿下を見上げるようにして聞き返した。

「いいや」

そう言ったランセル殿下の返事に首をひねりつつも、私は笑い返した。見上げた先にあった優しいほほ笑みに。

「何を見惚れておる。行くぞ」

笑いながらランセル殿下を見上げる私をどう思ったのか、ロウが声をかけてきた。

「なっ、何言ってるのっ」

ロウに言われてランセル殿下から視線を外すと、ロウとヴェルリル殿下が視界に入った。表情では分からないが面白がっている口調のロウと、こちらと同じように見ただけでは分からないがなぜか険しい目つきのヴェルリル殿下が私たちを見ていた。

「そっちも終わったようだね」

言いながら、ランセル殿下が前にでる。ロウやヴェルリル殿下の視線に気が付いているはずなのにまったく動揺しないようだ。

「それじゃあ、行こうか」

ランセル殿下が振り返る。言葉と同時にぽん、と何かを頭を撫でた。

「あ……」

気づいた時には背を向けて、私の前を歩く殿下。

殿下の背を見ながら触られた場所にそっと手を当てる。とくとく、と心臓が跳ねた気がした。

森の中からひんやりとした心地の良い風が吹く。適度な木陰は夏の日差しから私たちを守っているみたいだ。

見上げれば木々の茂る葉の間から覗く空の色。私の肩まで伸びた髪が風に揺れ、首元をくすぐった。

「あともう少しで着くからね」

流れる景色をぼんやりと眺めていたら後ろから声が掛かった。そういえば休憩が終わり、再び馬に乗ってからずっと空に目を向けていた気がする。

「え……、あ、はい！」

もしかしたら、あえて何も言わなかったのかもしいない。ぼんやりしていた私を疲れている、と思って気をつかい、そっとしてくれたのだろう。囁くように聞こえてきた声がそれを裏付ける。

私は前を向いたまま、申し訳ない気持ちであわてて「すみません」と口にする。すると何が可笑しいのか、くすくすと笑われてしまった。

「動かないまま静かだったから、眠っているのかと思ったよ。僕の胸の中で」

「え？」

言われた言葉に私はきよとんと首をひねる。そしてその一瞬後、暖かな何かが私の体を包み込んだ。

「うん、ヒナって思ったよりも小さいね」

「うわぁ！」

ぎゅう、と体を締め付ける感覚に、その正体が分かると大声をあげた。

私の声に「ちょっと、うるさいよ」とでも言いたげな様子で、馬がちらりと視線を向ける。手で口を押さえて声は止めたが、まだ心臓がうるさく体を響かせる。

「で、殿下？ ランセル殿下っ」

本当はいけないことかも、と思いつながら私の腰にしっかりと回り込んだ殿下の腕をぺちぺちと叩く。変わらず馬は森の道沿いを走っているが、今の私に景色を見る余裕はない。ランセル殿下も疲れておかしくなってしまったのではないだろうか？ 私はそんな失礼なことを考えながら、そして殿下の正気を戻そうと腕を叩きながら必死に声をかける。

「あ、危ないですしっ。離れた、ほうが」

声をかけても動こうとしない殿下に視線をやれば、間近にある金色の髪。髪が風で顔にかかり、私は薄く目を細める。

「っいて」

動揺を抑えたままどうしたものか、と思案していると私の腰に回された腕がなくなり、同時に後ろから殿下の声が聞こえてきた。

「ど、どうしたんですか？」

「ちょっと、ね」

殿下は指を口に当てながら私に苦笑いを向ける。口元に視線をやると、少しばかり血のにじんだ指が見えた。

「血が……！ 大丈夫ですか？」

「んー？ 大丈夫だよ。……悪戯が過ぎた、かな」

肩をすくめる殿下はちらりともう一頭の馬、ヴェルリル殿下の方向に顔を向ける。つられて、私もヴェルリル殿下に視線を向けるとそこにはしかめっ面の殿下がいた。

「ひい」

不機嫌そうに眉を寄せるヴェルリル殿下と視線が合うと「っふん」

と顔を逸らされてしまった。そしてそれに対し、私は怯えた声を出してしまった。

気がつかない間にヴェルリル殿下に不快にさせる何かをしてしまったのだろうか？ 不思議に思いつつも、「っは！」という掛け声の後、私の乗る馬を追い越して前を進む殿下の背を見つめた。

「……おい、いつまでそうしているのだ」

前に行くヴェルリル殿下を見ていると不意に、お腹の辺りから声が聞こえてきた。

「ロウ？」

ロウは珍しく「ヴウ……」という唸り声を出したかと思えば、見せたのは小さくとも鋭くとがった2本の牙。少しばかり怒りを含んだ声を漏らしながら、私の腕の中にいたロウはもぞりと動いて這い出る。

その声は戸惑う私……ではなく、後ろにいるランセル殿下へ向けられていた。

顔だけを後ろにやると殿下がやれやれ、といった様子で肩をすくめる。

「悪かったよ、僕が」

「ランセル殿下？」

謝罪の言葉と共に腰にしっかりと回されていた腕が緩められる。

そして背中に感じていた体温が離れると、ロウもその小さな牙を口の中に仕舞い込んだ。

「悪ふざけ、のつもりだったんだけど。……そう思っていたのは僕だけだったみたいだ」

だからごめんね、と続ける殿下は言葉でこそ謝罪をしているが顔は、にやけたような、面白いものでも見つけた子供のような顔をしていた。

ぴたりと密着していた体が離れたためか、上がっていた体温が徐

々に下がる。それと合わせるように、強く脈打っていた心臓も落ち着いてきた。

私は離れていった体温にほっとしながら、でもほんの少しだけ寂しさを感じてしまった。しかしそれは勘違いだと自分自身に言い聞かせるようにふるふると首を左右に振る。

そして私は誤魔化すように、背中に視線を感じながらも未だランセル殿下にねめつけるような視線を送っているロウの体を撫でた。

「……ヴェルは、一体どこまで行ったんだ？」

ランセル殿下の言葉に、私も森の先まで視線を凝らす。しかし森は真っ直ぐ伸びた一直線ではなく、しかも木や草であり遠くまで見通せない。

「あの、もしかしたら私が殿下を怒らせてしまった、かもしれないです……」

つい先ほど、ヴェルリル殿下に睨まれたことを思い出す。今朝の学院入口でのやり取りか、小川でのやり取りか、それとも馬に乗せてもらっていた時か……。何か気分を害してしまったかもしれないと思いつながら私は体を小さくさせる。

「んー、違うとは思うけど……。まあ、僕としては面白いものを見られたから」

「面白いもの、ですか？」

私は前を向いたまま頭をひねる。後ろにいるランセル殿下の表情は見えないが、話し方から大丈夫なのだろうとほっと胸と撫でおろした。

「深く考えなくてもいいよ、今は。ヒナにはそのままでもいいから、たいしね」

「……はあ」

殿下の言葉の意図が分からず、弱弱しい声で返事を返す。すると突然馬がいなくなった。殿下の言った言葉の意味を考えながらも、少

しだけ呆けていた私はびくりと肩を揺らす。馬の鳴き声に驚いたのか、数羽の小鳥が空にはばたく。それから下を見ればまたもや、睨み上げるような視線のロウがいた。

「ヒナは、ロウとは長いの？」

ロウをなだめるように、つやつやとした毛を撫でてしていると質問が降ってきた。なぜかランセル殿下の馬に乗せてもらうようになったから機嫌が悪いらしい。

私は手を動かしたまま、視線だけを前に向ける。

「長い、かは分かりません。この姿のロウとはまだ時間はそんなに経っていないんです」

「この姿……？」

「指輪から出てきたんです。おばあちゃんの形見の指輪から。おばあちゃんがいつも嵌めていた指輪なので、その頃から数えるなら長いと言えますね」

話す前に一瞬、このことを言うか言わないか迷った。けどロウが妖精だと知っていた殿下だから、言わなくとも何か感じているのかもしれないと思い私は言葉を続ける。

「指輪、……ロウは魔石の中にいたのか」

「え、知っているんですか？ 魔石のこと」

久しぶりに、しかもロウ以外の間近な人間の言った単語を聞き逃しはしなかった。

勢いよく振り返れば目を見開き、驚いたような顔のランセル殿下。でもすぐにいつもの笑顔に戻っていた。

「知っている、と聞かれれば知っているかな。専門ではないから詳しくは分からないけれど」

「そうなんですか……。でも知っている人がいて良かったです！ 先生達はなぜか教えてくれないし……」

国内有数の魔法学校であるロータス学院。その教師ならば指輪のことももちろん知っているはずだと、入学当初に質問をしたこと

があつた。……しかし返つてきた答えは「分からない」ばかり。

口をそろえ、同じ返事をする先生達にいつしか指輪、魔石のことについて聞くことはなくなつた。

「……だろうね。もうずいぶん昔から授業でも取り扱わないということになつている。内容が高度すぎる、という理由らしいけれど。表向きはね」

学院や王都の図書館で調べることができなかつたはずだ。ロータス学院で教えない内容が学院や一般の図書館で調べられるはずがない。

それでも、学院の先生全員が「分からない」ということには疑問を感じるが。

「何か知りたいことでもあるの？」

いつの間にか口ウを撫でていた手は止まり、考え込むように口元に移動していた。

「あ、いえ。……指輪を、魔石を失くしてしまって。王都で何か分からないかと思って色々調べたんですけど」

「まったく情報がない、ということか」

「はい。……いえ、まったくではないんですが」

少しだけ、ほんの少しだけだが魔石についての手掛かりを手に入れていた。もちろん図書館ではない。

それはあまり信憑性のないものであつたが、情報が少ない現状では大切な情報源だ。

しばしの沈黙の後、殿下が言った。

「大切なものなんだろうけれど、あまり一人で抱え込まないように僕でなければいつでも相談に乗るよ。……こういつた身分だと難しいかもしれないけれど」

自嘲するようなランセル殿下の言い方に振り返れば、いつも同じ笑顔の殿下がいた。

「ありがとうございます」

その殿下の笑顔を見て私は顎を下げると顔を前に戻す。

ロータス学院には上流階級、いわゆる貴族が多く在籍している。私のように平民出身の人間にとっては過ごしにくい場所であるが、それは私たちだけではなかったみたいだ。

国で最も権力があるのであるう王族　王子という身分は意外に不便なのかもしれない。

……笑顔の中に寂しそうな瞳が見えた気がした。

空想

王都に近づくとつれて木々の間隔が広がっていく。日光が地面まで届いているので森の中まで明るい。太陽の眩しさに視線を下げれば、風で揺れる木陰が土の上でキラキラと輝いていた。

遠くまで見渡せるので、私たち人間にとっては動きやすいが動物たちにはそうではないようだ。王都の近くであるこの辺りはロータス学院を囲む森と比べ、木々の密集度が低い。

隠れる場所が少ないからか、いたるところにいた小動物たちはその影を潜め、聞こえていた鳥たちの鳴き声も小さい。

見えてきた街並みに、森ではよく見かけた妖精たちが人間から遠ざかるように姿を消していく。反対に、耳を澄ませば生き生きとした人々の声が聞こえてくるような、そんな気がする。私はにぎやかな街の音と匂いと様子を思い出すと、久しぶりの王都に瞳を輝かせた。

「わあ……見えてきた！ やつと帰ってきた！」

身乗り出すように少しだけ上半身を前に出せば、背後からくすくすと笑い声がした。

「そうだね、もうすぐ王都に着くよ。でも落ちると危ないから座っててね」

「あ、わっ！ すみませんっ」

ランセル殿下に言われて、私は子供のようにはしゃいでいた自分に気づく。きちんと座り直し、恥ずかしさに顔を下に向けると、殿下の腕が私の腰を支えるように回してあるのが見えた。

「この様子だともしかしたらヴェルは王都の近くに着いているかもしれない」

ランセル殿下の言葉を聞くと、私は顔をあげた。

街が見えてきたといってもそれはとても小さいもの。随分前に、まだおばあちゃんが生きているころに見た記憶のある西洋風の建物の描かれている絵画のような。

小さくてひしめき合うような屋根と、黒い煙を吐き出す煙突。この速度で進むならばまだ時間はかかるだろう。

ランセル殿下が言うには森と王都の境目で王宮の人間が待つているとのこと。本来なら学院から馬車で王宮へ行くはずであった2人が、その馬車に乗らず馬で移動しているのだから迎えに来ることは当たり前には違いない。それは2人の身の安全のため、ということろか。

私の小さなわがままは、知らない所でたくさん人間を動かしているのかもしれない。殿下たちの身分を考えたらすぐに分かる。

私は下を向いたまま唇をかんだ。

「そう、なんですか？ すみません、遅れてしまって」

馬に慣れない私の為にわざとゆっくり進んでくれているのは分かっていた。さりげない優しさに、感謝と申し訳なさでいっばいだ。

私はしゅん、とうなだれるように肩を小さくした。

「謝ってばかりだね、ヒナは。大丈夫、ヴェルなら少しくらい待たせても平気だから」

「すみませ、あ。……ええと、でもやっぱり急がないと。ヴェルリル殿下だけじゃなくて殿下たちを迎えに来ている人たちだって待たせているかもなので」

私が無理を言って馬に乗せてもらっているのだ。これ以上、忙しいであろう殿下たちの予定を乱すわけにはいかない。

少しでも早く到着するようにと、馬の速度を上げるようお願いした。

始めこそは「本当に大丈夫？」と私の顔を覗きこみ、確認するランセル殿下だったが首を縦に降り続ける私に、ほんの気持ちだけ速度が上がった気がした。

当たる風を直に感じながら大きく息を吸う。

普段、王都へ行く時には馬よりも速く駆けるロウに乗っていたので、ある程度のスピードには慣れているとは思う。ロウよりもだいぶゆっくり走る馬は、座ることに慣れさえすればとても快適だった。

ちなみに。

殿下たちにロウが妖精であることはばれてしまったのだから、堂々と巨大化できるロウの背に乗ることができたのではないかということも思いついたのはもう少し後のこと。

体全体に当たる風の気持ちよさに目をつぶっていると不意に、不機嫌な様子で馬を走らせていたヴェルリル殿下の顔が浮かんだ。殿下とは今までそんなに親しく接してきたわけではないのに、怒った顔がすんなりと想像できる。

小さく舌打ちをした後、馬を走らせていったヴェルリル殿下を思い浮かべて出てくるのは不機嫌な表情の殿下。馬で走り去るときはヴェルリル殿下の表情を思い出すと、ランセル殿下の言ってくれた大丈夫だという言葉は私を安心させるためであつたと想像するのは簡単だった。

考え事をしていたからか、口を閉ざしていた私は突然ランセル殿下に声をかけられ、はっと息を呑んだ。

「ヴェルはどんな顔で待ってるかな」

生まれ持ったものなのか、温かみのあるランセル殿下の声は人の

心を安心させる。

だが今の今まで考えていた内容が筒抜けであるような質問は、私を混乱させるのに十分だった。

「そりゃ、眉間にしわとか寄せて」

言った瞬間、自分の発した言葉に体を硬くした。

言葉遣いもだが、ある意味正直に答えてしまった内容に、言い訳が思いつかない。動揺する私を見てか、殿下がくすつとのを鳴らした。

「すごい顔で怒っているかもしれない？」

「や、その。そこまでは……」

内心はランセル殿下の言葉通りなのだが、ヴェルリル殿下の兄である彼にはつきりとそんなことを言えるはずがない。はつきり「いえ」と言い切れない私も私だけけれど。

でも顔にはでていたのだろう。困ったように眉を寄せる私が何を考えているのかなんて、ランセル殿下には簡単に分かってしまったみたいだ。

気まずさで口を閉ざせば背後でランセル殿下が静かに呟いた。

「怒ってはいるだろうね。しかも怖い顔で」

小声で言われたためにすぐには反応できなかった。それまで陽気だった殿下の口調が突然真面目なものに変わったから、というのもあるかもしれない。

「やっぱり、ですよ。馬、それともロウの……」

つい先ほどまで頭に浮かんでいたヴェルリル殿下の顔が再びよみがえる。

考えなくても今日の朝、校門でヴェルリル殿下と会った時点で機嫌が悪いのは分かっていた。

だからその時点で馬車や小川でのこと以前に、殿下は私に対して

あまり好意的に見られていなかったのだろう。

学年が違い、普段あまり話すこともないができれば仲良くしたい。それはしアやイルのいところであるからとか、イアンの友人だからというのはあるけれど。

でもそれを抜きにして、個人的に親しくしたいという気持ちはある。

「……ん？ 何で？」

シアたちがいなければヴェルリル殿下とは何のつながりもない。それに友達、というのもなんだかぴんとこない。

そういえばあまり殿下のことを知らなかったということに気づいてしまった。そのことに少しだけ寂しい気持ちになりながら、なぜそんな風に考えてしまうのかと、ひとりで首をかしげる。

私は未だ浮かんでいるヴェルリル殿下の残像を打ち消すかのようにふるふる頭を横に振った。

ただ、ひとつ浮かび上がったのはありえない答え。いや、空想。それでもその小さな空想は私の体中へいきわたり、もやもやとしたものが胸に巣食い始める。

「ヒナ？」

「いえ、……何でもないです」

ランセル殿下がうつむく私に気遣うような口調で名前を呼ぶ。だが今は、ランセル殿下に振り返ることはできず、前を向いたまま返事をするので精一杯だった。

安心を求めるように私は腕の中にいた口ウをぎゅう、と抱き寄せる。暖かくて柔らかな体に身を預けてもその残像はなかなか消える

ことはなかった。

道中5

「ヴェルは怒っているけど、怒っていることを自覚していないと思う」

「え？ それはどういう……」

うなだれていた私にランセル殿下が話しかけてきた。私は訝しげに殿下を見上げる。

「今はまだ、ね」

殿下の意味深な発言に首を傾げて顔を前に向ければ、道の終わり、王都の入り口が見えた。そしてそのずいぶん手前に、ヴェルリル殿下の姿があった。

「……あ」

馬から降り、殿下は木に凭れかかるように立っていた。そして、森の中よりも木や花といった自然の少ないこの場所で、小さな妖精たちが殿下の周りを取り囲むようにして飛んでいる。

腕と足を組み、なんとなく気だるげな様子は周囲にいる妖精たちの効果なのか、まるでそこだけが別空間のようだ。木漏れ日で殿下の周りはキラキラと輝き、一見だけでは殿下自体が妖精ではないかと間違えてしまいそう。

私たちに気が付いたのか、ヴェルリル殿下が私たちの方へ顔を向けた。

動いた拍子に殿下の髪がサラリと揺れる。知らない間に見つめてしまっていたのか、殿下と視線が重なった。

「わっ」

驚いた私はおもいつきり顔を逸らしてしまった。

わざとらしくたたるうか……。そんなことを考えても逸らした瞳は元に戻せない。

ドキドキと高鳴る鼓動は目が合ってしまったための動揺か、それ

ともその他の理由か。

そんなことを考えていると不意に馬が止まった。

「随分とばしたみたいだな。どうだった、久しぶりの馬は？」

「……特に変わりはない」

「なんだ？ そっけないな」

ふっ、とランセル殿下が笑った後に馬が軽く上下に揺れた。背後にあった温もりが消え、不思議に思っただけで視線をあげれば私よりも低い位置にランセル殿下がいた。

「あ、あの？」

どうすればいいのか分からない。ただ言えるのは「自力で馬から降りるのは勇気がいる」ということだ。

目の前に出された手はランセル殿下のもの。多分、私が馬から降りる時の支えとして出されているのだろう。それは紳士的な行為。きっと殿下はどの女性ひとに対してもこうやって手を差し出すに違いない。

殿下は下から見上げるように私の顔を覗き込んできた。前髪から覗いた黄金の瞳が私をとらえる。

「どうぞ、お嬢様」

おどけたように言われて、顔を赤くしてしまう。まだ殿下は青年というくらいだが精悍な顔や親しみやすい性格を抜きにしても様々な女性を虜に出来るのではないだろうか。多分、ではなく絶対に。

本来の身長差なら、私が殿下を見上げる側であるはずだ。それが今の状況はまるで物語に出てくるお姫様みたいだ。私は赤くなった顔を冷ますためにに頭をフルフルと振る。

その時、ちらりと横を向けばまたしてもヴェルリル殿下と目が合ってしまった。しかしそれは一瞬のこと、今度は殿下から視線を逸らされた。

「どうしたの？」

「あ、いえ。ありがとうございます」

今日はやけにヴェルリル殿下からの視線が気になる。

私は不思議に思いながらも差し出されていた手を支えに勢いよく馬から降りた。

「どうやらすでに御者が来ているみたいだ。この馬たちのこともあ
るし、少し話してくる。すまないけれど、ヒナももう少しここで待
っていてくれないか？」

無事に地面へ降り立った私に体調の不具合を確かめた後ランセル
殿下が言った。

「はい、分かりました」

返事をすれば、殿下はひとつ頷いて馬の背を撫でる。そして森の
終わりである王都の入り口へ向かっていった。

ロータス王国の王宮があるこの王都はとてつもなく長い城壁で囲
まれている。王宮の背後を守るかのようにある山脈から扇状に並ぶ
城壁は強固であり、外敵を寄せ付けない。そしてその城壁の中にも
また、簡易ではあるがいくつかの門と壁が並んでいるのだ。

そのひとつが今、私たちのいる場所にある門。森と王都を区切っ
ている。おかげで王都の人間がむやみに森に入り迷うことも、野生
の獣と出くわすことも少ない。

王都の中にも王宮、貴族の屋敷が多くある場所、平民の暮らす城
下、といった区別で壁ができています。平民は人口が最も多いため、
生活するための場所も王都の中では1番広いが、王宮もそれに負け
ないくらいの広さを誇っている、らしい。

幸運なことに、役所や図書館といった場所は平民側に建てられて
おり、誰でも利用可能であった。

「おい」

街の方へと歩くランセル殿下を見ていると、近くでヴェルリル殿下が声をかけてきた。

「あまり馬の背後へ行くな」

「あ、はい」

大人しそうな馬であっても、一蹴りで人間なんてあっという間に死んでしまう。そんなことをいつか聞いたことがあって、ヴェルリル殿下の言いたいことが分かった。

ロウは私の腕の中で寝息を立てている。ロウを抱えたまま馬を脅かさないように離れれば、馬の頭を撫でる殿下を見ることができた。しばらく互いに黙ったままでいるとヴェルリル殿下がポツリと呟いた。

「……ラン、と親しくなつたみたいだな」

「え……？」

唐突な話の始まりに数度、瞬きをして視線をあげる。殿下の目は私ではなく、馬の方へと向けられている。

そこからまた沈黙が始まる。

殿下の考えが分からなくて、私も口を閉ざしたままだった。

入学してからことあるごとに殿下たちと関わる機会があった。それは友人であるシアとイルが殿下たちの従兄弟であることが大きな理由であり、これまた偶然にも殿下たちがイアンの友人であったことも関係あるだろう。

上級生との合同授業で対面することもあれば、それ以外で、例えば夕食を共にしたことも何度かある。

でもそれだけ。

考えてみると私と殿下たちは奇妙な関係であるのだ。

はあ、と無意識にため息が漏れ出た。私はつい出てしまったため息を誤魔化すように「ごほん」と喉を鳴らす。

「……ラ、」

その際馬をなで続けるヴェルリル殿下が私のほうに顔を向け、何

か言いたげに口を開いた。

「ヴェル、ヒナ、すまない。ずいぶん待たせてしまったね」

聞こえてきたのはランセル殿下の声。

馬を中心にヴェルリル殿下と向い合せに立っていた私は聞こえてきた声の方向に顔を向けた。

「大丈夫です」

王都の門から歩いてくるランセル殿下へと声を張り上げる。

にこやかな殿下の背後、門の付近には先ほどまでいなかった騎士のような人たちが数人いた。

そらしていた顔を元に戻すと馬越しに、ヴェルリル殿下と視線がぶつかった。さきほどの何か言いたげな様子は変わらず、しかし少しだけ開いていた口はすでに閉ざされていた。

「あの、今なにか……」

言おうとしましたか？

そう聞きたくてヴェルリル殿下に話しかけたのに、殿下はそれを遮るように顔をそむけた。

「俺は……なにを」

吐き捨たように出された言葉。殿下の背後を眺めるように立っていた私には断片しか届いてこなかった。

「ここからは馬車で向かうんだろう？」

ヴェルリル殿下は言いながら森の終わり、王都の入口にある馬車をチラリと見やる。

王都の門は2台の馬車が余裕をもってすれ違えるほどの幅で、森の木と同等の高さもある。つまり大きいということだ。

装飾はきらびやかではないが、しっかりとした石造りで素人でも強固であることがわかる。

そして今、その門の王都側に1台の馬車があつた。

ランセル殿下はヴェルリル殿下の質問にもちろんだ、とでも言うかのように肩を上げてみせる。

「どうやら僕らの息抜きもここで終わりのようだ。……でも男2人、密室というのは息苦しい」

「気味の悪いことを言うな」

即答で、眉を寄せるヴェルリル殿下は至極真面目にランセル殿下を非難する。

「冗談だ。まあ僕もヴェルとは同意見だけれど」

話を聞きながら馬車内に殿下たちが2人きりである場面を想像してしまった。今までの様子から決して仲が悪いわけではないと思う。だがしかし、少なくとも密室といえるあの場所で横に並んで座りはしないだろう。

そう思えば笑いが、いや頬が緩む。

無意識のうちに考えていたことが顔に出ていたのだろう、ニヤニヤしている私はヴェルリル殿下に不審がられた視線を送られてしまった。

すっかり緩んでしまった顔を引き締めているとランセル殿下が私へと顔を向けた。

「華があれば馬車のなかでも楽しめるのだろうけどね」

次いで、殿下から言われた言葉を頭の中で反芻させる。数回、瞬きを繰り返しながらランセル殿下から遠くにある馬車に視線を移した。

あっ、と声を上げなかった自分をほめてあげたい。

本来ならばロータス学院からここに来るまでの間、殿下たちと共

にいないはずだった私。

まだ人気のない森だったからよかったものの、これから先は一緒に行動などは恐れ多いに違いない。

だからこそ、殿下たちと別れるならば今ここが最も最適のはずだ。言い出す瞬間を見計らうようにほんの数秒、間をおいて言った。

「私、ここからひとりで帰ります。短い間でしたが、色々とお世話になりました」

短く簡潔に、感謝の意を口にする。

それは長い時間、殿下たちを拘束してしまったという気持ちからでた言葉。殿下たちを迎えに来た人たちも、もしかしたら随分待っていたのかもしれない。そう思えば私はここから早く立ち去ったほうが、彼らも行動しやすいかもしれないという考えにいきついた。

殿下たちも突然の私の言葉に一瞬、驚いたような顔をしていたが言いたいことは伝わったようだ。

「送っていくよ？」

「いえ、ここからそんなに遠くないですし。それに驚くと思うので、どちらかといえば後方が本音。

平民の多くいる通りに殿下たちの乗る馬車が現れたらもの凄い騒ぎになるかもしれないから。

ロータス学院に通うようになって見慣れてしまった馬車。しかしそれらの馬車は一般の都民には珍しいものだ。馬車が、ではなくその豪華さが。

これ以上殿下たちに迷惑をかけたくないというのと、馬車のことがあつて王都から先へは自分の足で帰ることにした。

「そういうことなら無理にとはいわないけど」

「お気持ちだけいただきませうね」

ランセル殿下は本当に優しい。身長差で私を見下ろした格好で、申し訳なさそうに眉を下げている。

そんな殿下に私は大丈夫だというように笑顔を送った。

一步、後ろへ下がる。

身長、顔かたち、一目見ただけでは双子のようにもみえる2人に交互に顔を向けるとペコリと頭を下げた。

「馬に乗せてもらってありがとうございました。あの、また学院でこれからも学院内で会うことはあるだろうし。だから今日のお礼と合わせて「また」と言ったのだ。

「そうだね。また、ね」

そう返事をくれたランセル殿下に、はにかむと私は王都につながる門へと踏み出した。

ロウを胸に抱いたまま殿下たちの横を通り過ぎる。

「おい」

かすかに聞こえた声に、聞き間違いかと思いつつも立ち止まって後ろを振り向いた。

「気をつけるよ」

「あ、はい」

その声は聞き間違いなんかではなく、しかも投げかけられた言葉が意外すぎて頷くことしかできなかった。

私をまっすぐ見ているヴェルリル殿下の唇がまた開く。

「……またな」

呼びかけられたときよりもさらに小さい声。

でもはつきりと届いてきた声に私は無意識に頷いていた。

昼間の食堂は忙しい。

それが旅人や都民など多くの人間が行きかう王都の大通りに面した食堂ならばなおさら。

国内で最も活気付く王都では昼夜問わずさまざまな店がその扉を開いているが、一番の賑わいを見ることができるのは昼間の時間帯ではないだろうか。

人々の足である乗合馬車が通りを走り、その端では子供たちが遊びまわっている。

王都へとやってきた旅人や商団、そして朝から働いて腹をすかせた都民たちは人々のざわめきにも負けないほど大通りを漂うおいしいそんな食事のにおいにつられ、食堂へと足を向けるのだ

「ラネさんっ、これで全部ですか？」

私は両手で料理の入ったかごを持ったまま大声を張りあげた。大きく息を吸い込んで、お腹のそこから。

今朝、現在私が通っている学校　ロータス学院から休日を利用して、入学する前まで王都でお世話になっていたリコット亭へきていた。

リコット亭はおかみさんであるラネットさんとだんなさんであるウインズさん夫婦が営む食堂兼、宿屋。朝とお昼は人を雇って食堂をひらき、一度休憩を挟んだ後にまた夜の食堂をひらいている。

リコット亭は高級なレストランでもなければ、高級なホテルでもない。でも常に笑い声の耐えないここは私にとって最高の宿泊宿だ。

「ああ、そつだよ！　　そつだ、ヒナ。これも持つていきな！」
忘れるところだった、と言いなながらラネさんが片手をあげた。

昼を告げる鐘が少し前になり終わった時間、店内は多くの客でにぎわっている。出入り口前に立っている私とは反対方向の厨房側にラネさんはいた。

私とラネさんの距離はテーブルが3列ほど。

さして遠くないはずなのに周囲で飛び交っている、注文する声や客同士の雑談が自然と私たちの声を大きくさせていた。

ラネさんはスルスルスリと慣れた様子でテーブルの間を通り抜ける。

両手で数えられるほどのテーブル数に見知らぬ客同士が相席をしている店内は満席になったらならば、ひと一人が通れるほどの隙間しかできない。しかも自由に腰をかけている客たちの姿は礼儀正しいといえるものではなく、ダラリと座っているおかげで余計に通路を狭くしていた。

それでもラネさんにとっては慣れたもの。

長年、リコット亭を切り盛りしてきた経験でラネさんはあつという間に私の前にたどり着いた。決して細身だとはいえないラネさんの体が時折お客さんにぶつかるのは、まあご愛嬌だ。

「これも持つていくんですか？」

「いや、これはヒナにだよ。場所も近いわけじゃないし、頼まれついでにどこかで食べてきな」
渡されたのは布に包まれたお弁当。たぶん中身はパンと干し肉などだろう。

「わ、ありがとうございます」

手渡された包みはまだほんのりと暖かい。布越しにパンが薫った気がしたのは周りで食事をしているお客のことを考えると勘違いかもしれないが。

「悪いね、今ついたらばかりで遣いを頼んで。少しくらいゆっくりさせたかったんだけどねえ」

「大丈夫ですよ。手伝うために帰ってきたんだし」

「いつもはイアンに頼んでただけど、今回はまだ帰ってきてないみたいなんだよ。……まったく、どこで遊んでんだか」

「ですね」

すまなそうに眉を下げるラネさんに、私は笑顔で返事をする。受け取った包みを料理の入ったかこの隙間に入れて上から布をかぶせた。

ずっしりとした重さもなく、片手で持てるこれを届ける場所はたしか。

「場所は図書館だよ。図書館の人間に聞けば分かると思うけど、ひとりで平気かい？」

私の心を読んだように話し出したラネさんは心配そうな顔を向けてくる。まるで小さな子供をお使いに行かせる親のような表情で、つい私は「プツ」とふきだしてしまった。

「図書館は何度も行ったことありますし。それに私、そんなに『小さな』子供でもないですし」

小さな、という部分を少しだけ誇張させる。それに気づいたラネさんは数度、瞬きを繰り返した。

「あ……、そういえばそうだったね。ははは！ ヒナがイアンと同じ年っていうこと忘れてたよ！」

この世界にきてはつきりとした日付は分からないけど、おそらく誕生日を迎えているだろう私とイアンは同じ16歳。それでもはたから見たらそんな風には見えない。

この国の多くの人は日本人である私よりも西洋人に近い。中には黒髪の人や私と同じような顔つきの人もいるけれど、それほど多くはない。

瞳の色はそれぞれだが、茶色や青が多いようで、しかしこちらは私のような紫はほとんど見られないように感じた。

たとえば西洋人と比べると日本人、東洋人は若く見られるように、こちらでもこの国の人と比べると私は同年の人よりも若く思われがちなのだ。

ラネさんと旦那さんのウインスさんは学院の手続きの際、私の年齢を知ると大きく目を見開いていた。

それからなにか勘違いしたのか、同年代の少女たちなどに比べると幼く見えるのは栄養不足とかいった風に思ったようだった。言葉でははつきり言われなかったが食事の量がはつきりと増えていたことから想像はたやすい。

私が王都へ来る前にいた村のこと、ラネさんの両親夫婦にしばらくお世話になっていたことは話したがそれ以前のこととはほとんど話していない。

聞かれたら話すとは思う。いつかは言わないといけないかもしれないけど今の私にその勇氣はなかった。

ゆびわを探したりおばあちゃんの家族を探したいけどあまり大げさにはできない。

呪文を使わないこと、ロウのような妖精といること、学院で学んだことでわかったのはそれらが普通ではないということ、だ。

また通常ならば一般的な平民が入学することすらできないロータス学院の、しかも魔法科に在籍していることも、上流階級であるシアたちと友人であることも、普通ではないだろう。

しかし反対に、学院に入学して利益となった部分もたくさんある。たとえば文字や魔法、一般的な教養など学ぶことができる。この世界のことに対して無知といえるであろう私にとって大変ありがたい。

でも一番はシアたちと出会えたことだ。彼女たちがいなかったら今の私はいないだろう。

いやもしかしたら、ほかに友人と呼べる人がいたかもしれないが、

少なくとも私はそのほかの友人に思い当たるクラスメイトは残念ながら、思いつかない。

いつか、すべて終わったらシアたちを連れて私が初めて訪れた村へ一度帰ってみるのもいいかもしれない。

そしてあの村でお世話になったトリアおばあちゃんやこの世界にきて初めて友人になったリチエたちに紹介しよう。

絶対驚くと思う。

シアやリディはリチエたちとは違う意味で驚きそうだけれど。道路が整備され、建物も木造だけではなくレンガ造りなものも数多くある王都に比べると、あの村は不便すぎた。まして、きらびやかな中で生きてきた上流階級からすれば自然と共に生きているとも言えだるうあの村は衝撃的なものにちがいない。

でも驚くであろうシアたちの顔を想像してみると、それはそれで面白いけれど。

「ふふふふ……」

「……顔をしかめたりニヤニヤと笑ったり、ヒナは一人でいても面白いな」

「へ？」

王都にある、図書館へと続く道。考え事をしながら歩いていたら私は突然話しかけてきたロウによって現実に戻された。当たり前だが私以外の人間も周りに多く存在している。

「な、なによロウ。ってか外で、こんなに人がたくさんいる場所じゃべっていいの？」

手にはリコット亭でラネさんからお使いを頼まれた料理の入ったかご。そして足元には私の相棒であるロウがトコトコとついてきていた。

「……私のことよりも一人で百面相しているヒナのほうがよっぽど

注目を浴びると思うが」

決して大声ではないロウの声。

子犬ほどのロウと私とでは身長差はかなりのものだ。しかし私にはどんなに大きな周囲の音よりも鮮明に届いてくる。まるでロウとの間に何らかの繋がりがあるかのように。

歩きながら視線だけでちらりと周囲をうかがう。様々なざわめきのおかげか、それとも元から聞こえていなかったのか、どうやらロウの声は私以外に届いていないみたいだった。

キョロキョロと一通りあたりを見やっつて、「ほっ」と私は安心してように一息ついた。

王城を守る壁と連なるようにあるロータス王国の図書館。

私の背の何倍もあるであろうアーチ状の門戸は、訪れる人間を分け隔てることなく大きく、自由に開かれていた。

「ついたついた」

目的である図書館へ着いた私は扉をくぐらず、外側の入口の隅で立ち止まる。

出入りする人々を背景に、足元にいるロウに話しかけた。

「ロウ、それじゃあ……」

「待ってればいいんだろう？　ここで」

そう返事をするロウに私は口を閉じたままコクリと頷く。

「たぶん、そんなに遅くはならないと思うから」

そう言った私はロウの「わかった」という言葉を聞くと、小走りに図書館の扉をくぐった。

「　　リコット亭、ですか？」

「はい。今朝、店に注文があつて届けに来ました」

「そうですか。確認してまいりますのでお待ちください」

図書館の出入り口から数歩のところ。本を借りるためのカウンター部分に私はいた。

対応してくれたのは中年くらいの男性で、私が要件を伝えると確認をするために席を離れた。

立っているのはなんだからと、他にいた館員がカウンター横のソファを進めてくれた。特に断る理由もないのでお礼を言った私はソファまで移動すると、腰を下ろし料理の入ったかごを膝に乗せ、ぐるりとあたりを見回す。

「……それにしても」

静かだ。

図書館だから当たり前前といえそうなのだが。

室内を照らすのは窓から差し込む太陽の光。出入り口以外すべての窓は閉じられており風は入らず、本と埃っぽいにおいが図書館独特の空気を作り出している。

読む本もなく、かといってここでラネさんにもらったお弁当を食べ始めるわけにもいかない。暇を持て余した私の視線が数人の館員の働いているカウンターへ向けられるのは自然なことだった。

数人いる館員たちは揃いの服を着ていた。おそらく図書館利用者ととの区別をつけるためだろう。

以前何度か訪れたときの記憶でも、彼らと同じ格好をした人間を見ていたし、彼らが本を整理している場面や利用者に質問などさされているのも見たことがあるから、そうなんだろうとは思っていた。

年齢は見たところ様々なようだ。私と年が比較的近そうな女性もいて、つい彼女に視線を送ってしまう。20歳前後だと思われる彼女のことはもちろん何も知らないし、相手も私のことは知らないはずだ。

でもなぜか見てしまうのは近しいものを感じたからかもしれない。

朝までいたロータス学院魔法科には同年代である多くの学生がいた。しかし年は同じでもそのほとんどが上流階級の彼らとは一線をおいてしまっている。それは互いに。

歩み寄ればいいことだとは思うが、難しい。

周りのクラスメイトたちからもおそらく歩み寄ってはこないだろう、というのは日頃感じる刺さるような視線やこそそといわれる言葉から感じられる。

シアたちがいるからさみしくはないのだけれど、そのシアたちも上流階級で時折、入り込めないようなときがある。しょうがないことだし、別に気にするわけではないんだけど。

でもやはり、活気ある王都の通りを歩いたりリコット亭に帰ってきたときにほっとしてしまふのは、自分でも気が付かない間、友人であるシアたちにも気を張っているからなのかもしれない。

「疲れてるのかな」

自問自答するようにポツリと言え、それまでずっと見ていた館員の女性が私のほうに顔を向けた。

さっ、と一瞬で視線をそらすのは生まれ育った日本での経験からだろう。

ロータス王国の人は日本人よりもはっきりとした物言いをしてくる。身近だったらリディ、とか。

しかしそれでも見えず知らずの人を無遠慮にじろじろ見るのはさすがにいけないだろう。

私は気まずく手元にあるかごを握りしめながら、「しまった」と心の中で繰り返した。

「あろう……」

少し高めで消え入りそうな声がうつむいたままの私の耳に届いた。

外とは違い、静寂と言えるこの場所でさえ小さいと思える声がなぜ聞こえたかというところ、それは話し手が私のすぐ近くにいたからだ。

「あ、す、すみませんっ」

顔を上げた先にいたのはつい今まで私が見ていた彼女。やはり失礼だったかと、何か言いたそうに口を開きかける彼女を遮って謝罪を述べた。

「え？」

「え？」

ぽかん、とする彼女に私も数瞬後、同様にぽかんとした表情を見せた。

互いに困惑したまま黙っていると、先に話を切り出したのは私ではなく図書館員の彼女だった。

「えと、私、何かしました？」

「ああ、いえ！ 違います、勘違い、です」

言いつくろう私を不思議そうに見つめる彼女に、頬が熱くなるのを感じる。

「さつき……、私に声をかけたとき、なにか言おうとしてませんでしたか？」

話をそらすように言い出した私の顔はぎこちない笑顔だったかもしれない。しかし、私を見下ろすように立っていた彼女はどうかやら私の顔なんて目に入っておらず、反対に彼女の顔のほうが真っ赤に染まっていた。

「どうし……」

「今日はあの方、いらしてないんですか？」

今回、遮ったのは私ではなく目の前の彼女。

覗き込むように彼女を見ると、照れたように赤らめた顔で視線を左右に彷徨わせている。20歳前後だと思っていたけど、もしかす

ると私と同一年くらいかもしれない、なんてふと思ってしまった。

「あの方、ですか？」

あの方、だけでは申し訳ないがこの誰だかさっぱりわからない。そういう理由で彼女に尋ねたのだが、この質問は彼女の顔をさらに赤くしてしまったようだ。

「……その、今日は休日ですし、坊ちゃんもいらっしやるので、と思ひまして。いつもはあの方が届けに」

「いつも……」

彼女の話で彼女の言う「あの方」が誰だかわかった。彼女にもそれが伝わったのだらう、頬の赤みはついに耳まで達していた。

「イアンめ、と言ってやりたい。」

想像するに、彼女は休日の時にだけ使いとして訪れるイアンを待っていたに違いない。

休日ではなくても授業の後などに来ることはあるかもしれないが、それは「いつ」とはつきりしたものではない。どうして待っているのかなんてこと、彼女の顔をみれば考えなくてもわかる。

「あのやっぱり、今言ったこと忘れてください！」

両手で顔を覆う彼女は「恥ずかしい……」とつぶやきを漏らした。彼女の背後に視線をやりカウンターをちらりと見ると先ほどよりも館員の人数が減っており、残っている館員も気を使ってか、聞こえないふりをしているようだった。

「あの、今回は偶然私が届けに来ただけで、次からはまたイアンが持ってくると思います」

そう彼女に言えば目に見えるように笑顔が戻ってくる。

「名前……。あからさま、ですよ。恥ずかしい」

「いえ」

照れる彼女の顔はまさに恋する女の子の顔だった。つられるように私も笑って見せれば「あ」と彼女が声を上げる。

何を言うのかと、彼女を見上げていたけれどいつこうに話を切り

出さない。

代わりに不安そうな表情で私を見つめる彼女に今度は私が「あ」と声を上げる番だった。

「私、リコット亭でお世話になっていて、イアンとは友達というか兄弟みたいな感じなので」

私の言葉を聞いて今度こそほっとしたのか、彼女は胸をなでおろしていた。

「そういえば、いつもはイアンが届けにくるって……」

ソファに座る私の前に立って話していた彼女は今、私と並ぶようにソファに腰を掛けている。

時間も、少しの間だけなら大丈夫らしく、待ち人である私の話し相手になってくれていた。

「あ、はい。とはいっても休日、それに毎回ではないんですけど。でも坊ちゃん達と友人なようで、休日以外にも時々見かけるんです」
それは少し前に聞いた内容で、その中に少しだけ気になった言葉があった。

「あの、坊ちゃんって？」

イアンの友人の「坊ちゃん」と言われる人物はたぶん学院の生徒。学年が違うし、知らない可能性のほうが高いけどイアンの友人ということで、どんな人物か知りたくなったのだ。

「坊ちゃんは」

今から説明だということどころでなにかに気が付いたらしい彼女は言葉を止めた。傾げる私から顔を逸らすように横に向けた彼女は再び視線を私に戻すとニコリと笑顔を作る。

「坊ちゃんなら本人を見たほうが早いですよ」

「本人？」

ソファから立ち上がった彼女は背筋を伸ばすと浅く腰を曲げる。戸惑ったのは私。彼女が礼を向ける先から歩いてくる人を見ると

驚きで目を見開いてしまった。

「やあ、ヒナ。待ってたよ」

「え、ヒース……?!」

聞き覚えのある声と見覚えのある容姿。

彼女の言っていた「坊ちゃん」は颯爽と歩いてくる彼だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4832q/>

おばあちゃんの魔法のゆびわ

2011年12月9日01時46分発行